

蒼白コントラスト

猫パン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10年前。

『白騎士事件』が起ころい世界にISが、高性能な軍事兵器として認知される。

そこから始まる戦争。

各国が睨み合っていた時期に出来た、最強の兵器。

それを組み込んだ部隊。

そんな過去があつたからこそ今がある。

今更ですが、タグは順次増えていきます。

目次

設定集	1
第一章 クラス対抗戦編	
第一話	7
第二話	23
第三話	42
第四話	57
第二章 話題の転校生編	
第一話	87
第二話	106
第三話 改投	123
第四話	138

第五話	154
第六章	168
第三章 銀の福音編	
第一話	198
第二話	218
第三話	240
第四話	258
第五話	276
第四章 波乱の夏休み編	
第一話	286
第二話	307
第三話	327
ハロウィン記念 番外編。	341

第一話	490
第六章 ——そして始まる	
第六話	473
第五話	454
第四話	436
第三話	422
第二話	408
第一話	393
第五章 学園祭編	
第六話	382
第五話	371
超番外編	361
第四話	346

第三話	521
第二話	506

設定集

イギリス軍極秘作戦部隊

部隊名『Strayed』速い人

名前で判断し、舐めてかかると痛い目ではすまない程の部隊。

実力主義の実戦叩き上げの部隊で、相応しい実力を示せば入隊直後に隊長になれると謳われる程。

ISが世に出てきて戦争経済が動き出した直後に創設された。

イギリスが表立って出来ない暗いことを一手に引き受ける軍部、表の顔は一応正規軍扱いである。

構成員の少なさをゆえに解体された。

解体直前の最終構成員は8名。(内5名殉職、1名脊髄損傷)

2機のIS、2人の工兵、4人の歩兵と言うのが最後の構成。

セシリア・オルコツト

あだ名はセシル。

イギリス代表候補生。

コールサインは蒼眼。ブルーアイ

Strayed部隊元隊長の1人、遠距離狙撃型でありながら最前線に特攻する部下泣かせの人。

ライフルで殴り付けたり、CQCで無力化したりなどするために遠距離型には見えな
い。

因みに貴族の家柄だが、両親が事故で他界した後家を守るために軍に入隊する。

入隊後に代表候補生選抜試験を受け、トップで合格。現在の第三世代試作型の専用機である『ブルー・ティアーズ』を受領する。

同名装備ブルー・ティアーズについては、名前が長いのと被るといふ理由からティアアと呼んでいる。

あと、拡張領域バズロットは単なる保管庫らしい、茶器から銃器に至るまで色々と詰め込んで
る。

最終階級は中佐。

織斑一夏／サー・アインザック・リステンバーク

あだ名はアイン。

コールサインは白眼^{ホワイトアイ}

紛れもない織斑千冬の弟。

小3のとき姉の作り出す腐海（ゴミ屋敷）に嫌気が差し家出。そのまま国外逃亡した、何氣に行動力がある青年。

乗った飛行機がイギリス行きであったが、反政府ゲリラによって撃ち落とされる。

その後はStrayed部隊に助け出され、そのまま入隊。

訓練に打ち込むなか日本から束が襲来、状況を引つ掻き回し一夏がISを動かせることを伝えると持ってきていたISを押し付けて帰宅。

現在の専用機である『タイプ56百合』通称ユリを受領。

因みにそのとき千冬とは和解済みである。

Strayed部隊元隊長の1人で常に冷静な完全近距離格闘型。

メイン武装の刀と体術を織り混ぜた多彩な攻撃を得意とする。

銃も使えるが、あまり好んでいない。

部隊内に居るときのみ別の名を名乗っていた。

最終階級は同じく中佐。

無名

コールサイン パールアイ 紫眼

一切の経歴が不明。

作戦中脊髄を損傷し、下半身不随となる。

今はセシリアと一夏に装備を提供する何でも屋に近い事をしている。

最終階級は准将。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツ軍 黒 シュヴァルトエ・ハーゼ 隊 の隊長。

アド 遺伝子操作強化個体でありながら己の在り方を自力で見つける程の強人、自らをアド
ヴァ ヴァンスドと呼び胸を張ることもある。

Strayed 隊と共同戦線をした経験を持つ、原作とは違い人として落ちこぼれて
いない。

周囲を見て戦況全体を把握する事に長けていて、その様は指示を飛ばし己の意思で戦場を動かす軍師さながらである。

因みに常識には疎い。

というかズレてる。

織斑千冬

言わずと知れたモンド・グロツソ総合部門優勝者であり、ブリュンヒルデの名をもつ名実共に世界最強の人。

一夏が家出した時に色々とやる気を無くし、第一回以降のモンド・グロツソには出場はしていない。

その後は篠ノ之束の力により一夏と和解、気力を取り戻しIS学園へと教師として就職する。

家の片付けについては束が製作した執事ロボットにより維持されている。

篠ノ之箒

原作で言うところのファースト幼馴染み。

ここでは幼少の知り合いという認識（一夏のなかでは）

小2の時点で転校してしまった為、一夏とはそれっきりの関係。

ファン・リンイ
鳳鈴音

言わずと知れたセカンド幼馴染み。

ここではかなり早くからの知り合いで、一夏が家出する直前に転校していった。

第一章 クラス対抗戦編

第一話

今から10年前、日本に居る『篠ノ之束』という人物により外宇宙進出用パスワードスツ『インファイニット・ストラトス』が発表された。

発表されたインファイニット・ストラトス、以下ISは、『白騎士事件』により、現行全ての既存兵器を圧倒的に凌駕する性能を示し飛行パスワードスツとして軍事転用され、従来兵器に変わり各国の軍部の要がISに変わっていった。

一つの欠点として女性にしか動かすことが出来ない。

そしてそこから2年後には、各国の裏部隊による戦争経済が始まった。睨み合っていた国々が潰し合い、装備の需要と供給のバランスが保たれる。

表では競技用という名目でモンド・グロツソという大会で使われ、優勝者にはヴァルキリーという称号が与えられ、総合優勝者はブリュンヒルデと呼ばれる。

裏では各国の選ばれた特殊部隊がISを用いてテロ組織や、反政府ゲリラ、敵対国等との戦争に派遣される。

選ばれる人選は各国の国家代表候補、及び国家代表のごく一部が選ばれる。そんな戦争も今は過去のもの。

暗躍していた戦争経済も7年経ち終息を迎え、各特殊部隊も役目を終え解体されていった。

—————△—————

そして現在。

織斑一夏は自宅にて頭を抱えていた。

部隊所属中に渡され、篠ノ之東により世間に発表された事実。

世の中で唯一『ISが動かせる』男性という、世間を騒がすには十二分な情報による。よって一夏は3ヶ月後にはIS学園に通うことが決定付けられている。

近場に相談できる相手が居ない状況にて、頭を抱えるのはしょうがない事。

モンド・グロツソ総合優勝者であり、姉である千冬は不在。

誰に相談するべきか悩んだ一夏はかつての仲間を頼ることにした。

「もしもし、セシルか?」

『あら、アイン。久しぶりですわね。』

電話に出たのはセシルと呼ばれた少女。

フルネームは セシリア・オルコット。

イギリスの主席代表候補生にして、一夏がかつて居た部隊の隊員である。

「ああ、久しぶりだな。まあ……今日は聞きたい事があつてだな。」

『IS学園についてですわね、聞きたいのは。』

「そうだ、何をするべきか分からなくてな。」

速攻ぶっちゃけた一夏。

わからないところを聞き出し、次第に雑談へと会話が切り替わる。

何のために電話したのか。

『あ、ではそろそろ私はこれで。』

「おう、忙しいなか悪かったな。」

『いえいえ。あ、因みに私もIS学園に行きますのでよろしくお願いしますね?』

「ああ、了解だ。またな。」

そう言つて電話を切る一夏。

心なしか、電話する前よりもいい顔になっていた。

—————△—————

そして3か月後、一夏はIS学園に居た。

「新入生の皆さん、入学おめでとうございます。私はこの1年1組の副担任の山田真耶と言います。」

教卓に立ち、淡々と自己紹介をする。

別段慌てて失敗するようなこともなく、姿勢を整え一礼する。

「では担任の先生が来るまで自己紹介をお願いします。まず最初は出席番号1番から。」
そうして1人1人自己紹介が始まっていく。

この学園は女子にしか動かせないISを教わる学園であり、学園内は女子しかない。
い。

去年までは。

今年からは例外が入学しており、9^女9^男:1の比率になっている。

「次は織斑君、お願いします。」

「あ、はい。」

今まであまり呼ばれなかった名前を呼ばれ、若干戸惑いながらも立ち上がり教卓へと歩く。

「織斑一夏だ。日本とイギリス両方の国籍を持つていて一年前までイギリスに居たのでな、あまりこの名前は呼ばれていない。数年前からISを動かせたが、年齢の関係上今年からの入学になった。至らぬところもあると思うが以後よろしく。」

そう言つて席へと戻る一夏。

そして自己紹介が終わるタイミングで教室のドアが開き、1人の女性が入ってくる。

「山田先生、遅くなつてすまない。」

「いえ、大丈夫ですよ織斑先生。まだ自己紹介が終わつただけですから。」

入つてきた千冬は教卓へと立ち、自らの自己紹介をする。

「諸君、先ずは入学おめでとう。」

私がこのの担任、織斑千冬だ。君達新人を1年間で一定ラインの操縦者、及び整備課等の開発者に育て上げる。分からない者は理解するまで教えてやる。逆らつてもいいが時と場合は理解しろ。」

刹那、教室全体から響き渡る少女達の歓声。音響爆弾宜しく耳を潰さんと響く声に、

一夏は咄嗟に耳を塞いだ。

「はあ……毎年毎年、私が出るだけでこれだ。全く、煩くて敵わん。」
ほとほと呆れ果てたというような声を出しながら肩を竦める千冬。

「キャーお姉様!!」

「もつと罵って! そして叱ってください!!」

わいわいと少女達の歓声が鳴りやまない。

彼女達の憧れの存在である織斑千冬。

ブリュンヒルデの称号を得た彼女は『多く』のIS操縦者、ひいては女性達の憧れの的である。

「はあ、話が進まん。少し黙れ馬鹿者共。」

千冬の一喝、ただそれだけで騒がしかった教室は静まり返る。

「ではHRを終了する。今日から早速授業があるので各自気を引き締めて望むように。」

—————△—————

1時間目が終了し、現在は休み時間中。

一夏は自身の席に着き、本を読んでいた。

と言うのも一夏の周囲を少し離れて見てこそこそ話をしている少女達が居て、立つたイミングを逃しただけであるが。

そんな一夏に、金髪碧眼の如何にもなお嬢様が近付いてくる。

「会うのは一年ぶり位ですか？ 久し振りですわね、アイン。」

「そうだな、随分と印象が変わったじゃないか。セシル。」

彼女はセシリア・オルコット。

イギリス代表候補生。

そしてこの2人の会話により、周りの女子達が騒ぎ始める。

愛称で呼び合って居るのだから当たり前であろう。

「当たり前ですわ、今はもう所属していないのですから。そう言う貴方こそ、幾分か変わってますわね。」

「そりゃあな、この国に帰ってきててもあまりやることがないんだし。」

そう言う通りに、一夏は6年間もの間イギリスに居たのだ。

日本ですること等無いに等しい程である。

「そうですわね、なら久々にやりましょう？」

丁度良い感じにアリーナもあることですし。」

「そうだな。若干ブランクもあるし、錆び付いた腕を戻すのに丁度良いか。」

「ですわね、なら第一アリーナに放課後。」

許可は取っておきますので。」

「おう、任せた。」

セシリアが席へと戻っていく、そのタイミングでチャイムがなった。

そしてチャイムが鳴り終わると同時に千冬が教室へと入ってくる、入ってきたと同時に立っていた生徒は全員座った。

「それでは次の授業に入ると言いたいところだが、まず最初に再来週行われるクラス対抗戦にでる代表者を決めなければな。自薦他薦は問わん、但し自薦者はそれ相応の実力がある者だけだ。クラス代表はこのクラスの顔だからな。」

クラスが色めき立つ、何事もイベント好きな女子高生。

基本的にこういう場合は一番人気になりそうな奴が求められる。

この場合は

「はいはい！ 織斑君を推薦します！」

「あ、私も！」

このクラス唯一の男である一夏があがる。

「では候補者は織斑一夏だな。他には居るか？居ないようならこれで決めるぞ？それとも織斑、何か意見はあるか？」

「いや、特にはないが。推薦された以上勤めは果たすさ。だが……」

そこで言葉を切り立ち上がる一夏。

何をするのかという視線が集まりながら口を開く。

「やっぱここはイギリス代表候補生でもあるセシルも推薦しないとな。」

そう言いながら指を指した先に居たのはセシリアだった。

「本当、昔から悪戯好きで困りますわ……」

肩を竦めながら溜め息を吐くセシリア。

「すると織斑、候補者が2人だ。ここは公平にじゃんけんで決めるか？」

「却下（ですわ）だ」

一夏とセシリア、2人の声が重なり拒絶の意思を示す。

「ここはあれだろ、代表の座を掛けて戦うとかだろ。」

「そうですね、何故そんな平和的に解決しなければならぬのですか！」

そして提案されたのはISを用いて戦い、勝った方が代表になると言うもの。

その熱意かに負けたのか、千冬は両手をあげ。

「あー分かった分かった。期間は1週間後の月曜日だ。第三アリーナにて放課後に行う、両名準備しておくように。では授業を始める。」

—————△—————

2時間目が終わり、一夏はまたも本を読んでいた。

理由自体は大したことではない、やることがないからである。

そんな一夏に近づく人影。

「ちよつといいか?」

「んあ?」

一夏に話し掛けてきたのは、幼少のころ知り合いであつた篠ノ之箒だった。

「廊下でいいか?」

主語が足りず訳がわかっていない一夏。

それでも一応着いていこうと席を立つ。

「早くしろ。」

「はこよ。」

すたすたと廊下へと歩いていく箒、入り口近くで話していた女子は左右に道を開ける。

その後ろを着いていく一夏。

そして廊下に出ても包囲網が続く。

「ひ、久しぶりだな……一夏。」

「そうだな、7年位か？お前は変わらないな。」

一夏が当たり障りなく答える。

正直な話、一夏にとつて篠ノ之箒についてはあまり覚えていないのだ

「と、とこころでさっきの……」

箒が何かを言い掛けたところでチャイムが鳴る。

惜しいところで何も言えなくなる。

「さて、戻るぞ。」

ぞろぞろと回りの女子も戻るなか、一夏も教室へと戻っていった。



時刻は放課後、一夏は第一アリーナへと来ていた。
女子を沢山引き連れて。

「アイン……流石にこれは多すぎではありませんの?」

「いやな、セシル。教室の、しかもあんな目立つ形で言ったんだぜ?これはしょうがないとおもうが。」

一夏の意見はもつともであった。

しかも初日に唯一の男性操縦者とイギリスの代表候補生がアリーナで何かをやる。

そう聞けば誰しも興味を抱くだろう。

「まあ、良いだろうさ。離れていてくれれば問題ないだろう?」

「そうですわね、ではアイン。」

ヒュンツ

一夏に向け何かが投げられる。

それはナイフであった。

それを見て回りの女子は少し悲鳴をあげる。

そんな悲鳴を他所に、一夏は刃を持ち……曲げた。

「おいおい、軟質かよ。」

「当たり前ですわ、今のご時世刃がないナイフで硬質なんて売ってませんでしたわ。」
セシリアの言葉を聞き、安心した面々。

だがこれから何をするのかがわからず首を傾げる。

「さてアイン、行きますわよ?」

「ああ、何時でも。」

そしてどちらからともなく動き出した。

「シッ!」

「やあ!!」

繰り出されたナイフ、腕、足を。

かなりの速度で振るう2人。

腕が出されれば腕を出し、足が出されれば足を。

ナイフを振りかざせばナイフを出し、応戦していく。

途中投げ技もあったが、両者共空中で器用に体勢を変え着地する。

何が起きているのか状況が理解できない者が数名居る。

2人が行っているには寸止めのスパーリング。

あくまでもブランクを埋める為の軽い運動にすぎない。

ラリアットや回し蹴りなども使われ、白熱していく。

確実に当たる軌道で必ず止める、それほどの事をする2人の技量の高さが伺えた。

しかも寸止めの場合、お互い信頼していないと当たってしまう。

そして2人の動きが同時に切り替わり、互いの右腕……ナイフへと腕が動く。

「はあ!!」

「やあ!!」

完璧な同タイミングで吹き飛ばされるナイフ。

そしてどちらともなく終了する。

「腕が衰えてなくて安心したぜ、流石セシル。」

「アインこそ、良い腕のまま変わっていませんわね。」

その言葉によりドツと拍手が巻き起こった。

そのギャラリイの中には千冬や真耶の姿もあり、どれだけ注目されてたかが伺い知れる。

「さて、今日は終わりにしよう。」

ギャラリイもいるし、なによりそろそろ時間だしな。」

「では次は代表決めのあれですわね。今日はもうこんなですし。」
そう言つて辺りを指す。

人が集まりすぎて訓練すらも満足に出来ないようなアリーナを。
「そうだな。よし！ 解散だ！」

楽しかった見せ物もいつか終わりが来るもの。

集まっていたギャラリーは蜘蛛の子を散らすように帰っていく。

「私達も帰りましょうか。」

「だな。」

—————△—————

セシリアと別れた一夏は荷物を取りに教室へと歩いていた。

手ぶらでアリーナまで行つた訳だから、鞆やは全部教室に置いてあるのだ。

そこへ

「あ、織斑君。見つけました。」

「どうしました？山田先生。」

一夏に話し掛けてきたのは真耶だった。

片手に書類を持ち、大急ぎで来たのか若干息が上がってる。

「寮の部屋が決まったので、鍵を渡しに来ました。」

そう言つて手渡したのは鍵と、部屋番号が書かれた紙。

全寮制のこの学園では、入学したその日から寮に入ることが義務付けられている。

故に大急ぎで探しに来たのだろう。

「態々ありがとうございます。」

「いえ、政府特命もありまして3ヶ月も前から準備してましたので。とにかく、渡ししましたからね？無くした場合再発行の手間が掛かるので、気を付けてくださいね？」

そう言うときまだ仕事があるのだろう、早歩きで元来た道に戻って行った。

「1030……ね。」

番号を確認し、確かな足取りで歩いていった。

第二話

次の日の朝、食堂にて。

一夏はセシリアと軽い雑談をしながら朝食を食べている。

いや、食べていた。

過去形なのは、もう既に2人共食べ終わっていたからである。

「でき、セシル。」

「どうしましたの?」

雑談中に真剣な表情になった一夏に、セシリアは首を傾げる。

「いや、ぶつちやけどどうしようかなって。」

ほら、俺って I S をまともに使ったことがない初心者（つていう設定）じゃん?」

「そうでしたわね……まだその件が残ってましたわ……」

そう言うことになると、世間を欺いているのだ。かなり法に触れそうなギリギ

りのラインの話し合いになる。

「これから確実に、データ取りの為に専用機が送られてくると思うんだよ。俺としては。」

「それは確実ですわね。動かせること自体は数年前に発表されましたが、既に専用機を持つていて実戦経験すらあるなど。軍事機密でしたからね。」

「ああ、ただ動かせることが発覚しただけの一般人。っていう筋書きだからな。」

この2人は何て言うことを喋っているのか。

もう少し周囲に何もないと話せば良いのに。

「これからどうしよう、って事なんだが……」

そう言いながら、腰に差しているコンバットナイフ……『専用機の待機形態』を撫でる。

これが一夏が持つ専用機。タイプ56百合。

通称ユリである。

「専用機が送られてくるのは確定。なら受け取ってしましましょう？」

「それだと2機持つことになるし、要らん厄介事とか絶対舞い込んでくる。」

「(なんとかしてくれませすわよ、織斑先生が。」

なんとこのお嬢様、面倒事を全て教師に丸投げである。

そんな事されたら堪ったものではない。

「それは流石に……姉さんが過労死するだろ。」

「まあ、それもそうですわね。」

その言葉で会話が終了したらしい。

一夏とセシリアは各々の食器を持ち、立ち上がる。

「まあ、来たら来たで。」

姉さんに言ってみるわ。」

「それが良いですわね。」

そして各々の食器を片付けに行った。

（何故だ一夏！何故私を誘わずそのような女を！）

その幼稚な殺気に振り向くのは誰もいなかった。

—————△—————

「というわけで、ISは宇宙での作業を前提に作られているので、操縦者の全身を特殊な

バリアで包んでいます。これがシールドエネルギーです。

また、生体機能も補助する役割もあり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態に保ちます。

これは心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量。脳内エンドルフィンなどがあげられます。」
「先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体を弄られているみたいで怖いんですけど。」

疑問に思うのも無理はないだろう。

装着している間ずっと使用者の体を常に最高の状態で保つ、そう言っているのだから。

「そこまで難しく考える事はありませんよ。」

皆さん、サポーターを一度くらいはしたことがあるでしょう。それで人体に悪影響が出るわけではありませんが、人それぞれ合ったもの着けないといけない事と同じです。

あつそれと、もう一つ大事なことは、ISにも意識に似たような物があり、お互いの対話——つまり長く一緒に過ごすことで分かり合う様になるので、搭乗時間が長ければ長いほど、IS側も操縦者の特性を理解しようとしています。」

一夏はISを、かなり人間臭い機械だと判断する。

操縦者とわかり合うパスワードスーツなどこれだけだろう。

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるのです。ISは道具ではなくあくまでパートナーとして認識してください。」

パートナーと聞き、一夏の脳裏に浮かんだのはセシリアだった。

長年同じ部隊で戦ってきたから当たり前だろうが。

「では次の時間ではISの空中における基本制動をやります。皆さん、準備を忘れないでくださいね。」

チャイムが鳴り真耶が退出し、ここぞとばかりに一夏に群がる女子陣。

「ねえねえ織斑君さあ」

「はいはい、しつもん」

「ズバリ、オルコットさんとの関係はー」

かなり捲し立てて聞いてくる女子たちに、一夏も苦笑いを浮かべる。

等の本人、セシリアも苦笑いであった。

「別の事なら答えるが、それでも良いか？」

「あ、じゃあじゃあ。織斑先生って家ではどんな感じなの？」

そう言われて暫し考え込む一夏。

一夏の記憶のなかで、千冬と暮らして居たのは家出する直前まで。

つまりそれ以前の記憶しかないわけで。

「案外だ！」

スパッ！

咄嗟に避けた一夏の頭があつた場所を、出席簿対人宝具が通り過ぎる。

「余計なこととは言わなくて良い。」

それと休み時間は終わりだ。散れ。」

出席簿を投げてまで知られたくないことだつたらしく、若干冷や汗が出ていた。

しかもそれが原因で一夏が家出をしたという過去を知られれば、かなり不味いことになるだろう。

「ところでだ、織斑。お前に政府から専用機が支給されるようだ。」

「え、専用機?!」

この話題が出た途端、一夏とセシリアの目が光った。

事前に予想していた通り専用機が送られてくる。

「一年のこの時期に?!」

「良いなあ、専用機……」

一夏にとつてはただの厄介事以外の何物でもなく、欲しいなら持つていけ位の気持ちであつた。

「まあ、織斑の場合は状況が状況なのでな。」

「データ収集を目的としての専用機だ。」

完全な予想通りの答えが出てきて、一夏とセシリアは笑いたい気持ちであった。

「まあ、それは良いとして。織斑先生。」

「なんだ。」

一夏は早速この事を話すことにした。

「少し放課後に。報告と話したいことが。」

「? あ、ああ。わかった。」

さて、山田先生。授業を始めるぞ。」

「はい。」

—————△—————

そして時刻は放課後。

一夏はセシリアを連れて生徒指導室へと来ていた。

「でだ、用件を聞こうか。一夏。」

「そう、だな。ならこれを見た方が早いな。」

そうして出したのはコンバットの待機形態だ。

千冬は目を細め、そして驚愕する。

「専用機……で？　これを見せたこととオルコットがここに居ることと、何か関係でもあるのか？」

「そこで話したいことに繋がるわけだが。」

一夏は言葉を切り、朝セシリアと言っていた事を言う。

「朝、セシルと1つ予想をしたんだよ。確実に政府か企業のどちらか。両方でも良い、データ取りの為に専用機を送ってくるってな。」

「わかっていたのか……」

この返答は千冬にとって予想外だったらしく、少し驚いていた。

一夏が軍に居たことは秘匿されており、一介の人間。いくらブリュンヒルデだとしても、姉だとしても。その情報は掴むことが出来なかつた事実だ。故に一夏の経験から基づく推測すらも、千冬の知らぬところである。

「そしてこれはセシルとの会話で出た案なんだが。送られてくるもう1機も貰ってやろうかと思つてな。」

「……………な!？」

流石に千冬もこれには声をあげて驚いた。

個人が2機もISを、しかも専用機を所有する前例は過去1度もない。

それを実の弟がやろうとしているのだ。

「わかつているのか一夏、それがどういうことなのか……」

「ああ、百も承知だ。まあ、ぶつちやけ貰ったところで使わないだろうが……貰えると言うんだから貰ってにおいて損はないだろう?」

一夏は、貰ったところで使う気は更々無かった。

何年も稼働していて愛着のある自らの専用機と、ぽつと出の新しい専用機。

どちらを使うかと言えば誰しもが前者を選ぶであろう。

「はあ……面倒事を増やすな全く。」

「あら、生徒の解決出来ない問題は教師が解決するのでは無いのですか?」

ここままで口を閉ざしていたセシリアが口を開く。

朝言っていた通り丸投げするつもりらしい。

「グツ……あー分かった分かった。何とかしておく。」

正論を言われ論破された千冬は手を上げて肩を竦める。

「ところで、私も聞きたいのだが。お前たちの関係は何だ?愛称で呼び合って居る時点

で、ただの知り合いって訳では無さそうだが。」

「あー……何て言うかなあ。」

聞かれたことに答えようとした一夏だったが、軍事機密の塊である一夏の過去については早々喋れることではない。

しかもセシリアとの関係など、最重要機密事項であり言えない事であった。

「なあ、セシル。期限は何時までだっけか?」

「確か一年半。林間学校がある日までですわね。」

期限とはその日以降はその情報を一部の人間にのみ公開してもよい、というイギリスの意向だった。

「そう言うわけだ、姉さん。知りたいのならもう少し待ってくれ。」

「まあ、良いだろう。もしかして、その……付き合っていたりするの?」

ポフンツ

その瞬間、セシリアは顔を真っ赤にして生徒指導室を走って出ていった。

「まあ、今の反応で分かる通り。付き合っていないさ。今はまだ……な。」

「そうか……なに!?!」

かなり意味深な事を言いながら一夏は生徒指導室のドアを開けた。

「んじゃあ、織斑先生。専用機の件、頼みましたよ?」

「ま、待て！一夏！」

「アデュー」

後ろで叫んでいる千冬を置いて、一夏は自室へと向かった。

「ア、アインと……っ、付き合ってるだなんて／＼／＼そ、そんな風に見えるのかしら／＼」

セシリアは自室で顔を真っ赤にしながらぶつぶつと独り言を呟いていた。

————△————

そしてクラス代表決定戦の日となる。

「で、お前は どうするつもりだ？ 今から来る専用機を受領してから出るか、それとも出てから受けとるか？」

「待つのは面倒だ、俺は先に出る。」

それに、セシルは既に待ってるしな。」

そう言いながらピットへと歩いていく一夏。

歩きながら専用機を展開する。

「起きろユリ、仕事の時間だぞ。」

『Yes, master. It is one year the first time.』

一夏の専用機から響く声。

彼女は自律思考型AI ユリである。

「今日からまた毎日使うが……」

『To not be relied on care.』

「とか言つて、本当は嬉しいんだらう?」
 『Since I have been present for the master.』

そう言つて茶化す一夏。

いくらか自律思考のAIでもこれに対する返答は……

『Of course.』

I was tired of waiting how much,
 because I, me with barely.』

持っていた……

完全な自己進化型のAIであつた。

「ま、いい。相手はセシルだ、久々にな。」

『I think you go with full force?』

「ああ、1年ぶりだしな。派手に暴れるぞユリ!」

『Yes, master!』

—————△—————

「あら、本当にそちらで来たのですね。」

「当たり前だろう？俺の専用機は後にも先にも、こいつだけだしな。」

開口一番にそう言うセシリア。

事情を知らない人間からすれば何の事を言っているのかさっぱりであった。

「ユリ、今回は口出し無用だ。」

『Okay, the fortunes of war.』

向かい合う一夏とセシリア。

機体面では完全に真逆。

完全近距離型と完全遠距離型。

潜り込むか引き離すのかの勝負、と予想できる。

「では、行きますわよ？アイン。」

「ああ、今度こそ黒星を付けてやるよ。セシル。」

そう言つて武器を構える2人は最高速度で激突する。

ガキンツ！

周囲の予想を裏切り、一夏の刀とセシリアのライフル、『スターライトmarkⅢ』が
鏝迫り合いの形になる。

一夏の袈裟斬り、横風ぎ、上段切り。

全てに対応し、セシリアのライフルの砲身、若しくはストックの部分に当たり拮抗する。

「ああ、やっぱりお前とやると楽しい。なあセシル！」

「私もですわ！ アインとやると、心が踊りますわ！」

剣撃と砲身のぶつかり合いにより、火花を散らしながら飛び回る2人。

試合はまだ、始まったばかりだ。

—————△—————

それから約30分後。

観戦しているギャラリー全員は驚愕を露にし続けていた。

あのブリュンヒルデである千冬でさえも、啞然とした表情で画面を見ていた。

何故なら、

「オラア!!」

「やあー！」

接近格闘型と遠距離狙撃型が近接戦闘をしているのだから。

射撃攻撃が全く飛び交わないアリーナ内で、幾度となくぶつかり合う刀と砲身。

正直そんなことをすれば砲身が折れてしまう筈、なのだが。

シュンツ！

ギンツ！

折れる事なく撃ち合えている。

と、ここで場面が動いた。

「さて、時間も差し迫っていることだし。そろそろ決めるぞー！」

一夏はもう1振りの刀をだし二刀流で構え、

「そうですね、名残惜しいですが。そろそろフィナーレと参りましょう！」

セシリアは全B T兵器を射出する。

「行きなさいティアア！」

「行くぞユリ！」

2人同時に加速した。

今度は先程よりも更に速く。

イグニッション・ブースト
瞬時加速の発展系を。

—————△—————

「お、織斑先生。私は幻覚でも見てるんでしようか……オルコットさんがライフルで殴っているように見えるんですが。」

「安心しろ山田先生。私にも同じものが見えているので、それは幻覚ではない。」

ピットのリアルタイムモニターで見ていた教師2人は、あまりの驚きに驚愕を隠せな
いでいた。

まあ、当たり前的事だろう。

ライフルは殴るための物じゃない、撃つための物だ。

その常識を目の前で壊されたのだから動揺しても普通である。

「つていうか何ですかあの機動は！ 織斑君、とても初心者には見えませんよ！」

「そうだな、今の時点であのような機動などまず無理だろう。それに見てみる……」

そう言つて指を指した画面では、一夏とセシリアが丁度瞬時加速の発展系を使うところだった。

ダブル・イグニッションブースト
「二重瞬時加速！あんな高等技術を……」

「だから驚いているんだ。」

まあ……そろそろ終わりだな。」



「やっぱり楽しい時には終わりが来るもんだな。」

「そうですね……あつという間でしたわ。」

そう言う両者のSシールドエネルギー Eは50を切っていた。

恐らく一発当たれば勝負が決まるだろう。

「んじゃあ、次が最後の一撃だ。」

「ええ、終わりですわ。」

一夏が刀を構え、セシリアもライフルを構える。

そして……

「やあ!!!」

「イヤア!!!」

一瞬、交差して2人の立ち位置が入れ替わる。

その刹那、バチンツツという音と共に機体が下がっていく。

それは……

『勝者、織斑一夏!』

セシリアであった。

第三話

試合が終わり、一夏はピットへと戻ってきた。

出迎えたのは、何とも複雑な表情をした千冬だった。

「よくやったな織斑。色々聞きたいことはあるが、まあ良い。着いて来い。」

そして搬入口前で止まる。

ここに、一夏に対し支給された専用機が置いてあるらしい。

ガコンッ

鈍い音と共にハッチが開いていき、ゆっくりとその駆体を晒す。

それは白だった。

「いやいや、ねえよ。なんだこれは。」

機体を目にした途端、一夏は嫌悪感を露にした。

自身の機体の象徴でもある白色。

それを模倣したかのように同じ白。

「これは識別番号××―01と呼ばれている。

名前は白式だ。」

「ふーん……で装備は……ブレード一本だけ!? ふざけてんのか? この機体。」

なんとこの機体、接近ブレード一本のみという。何ともトチ狂った機体だった。

基本ブレードで戦う一夏の機体ですら、銃器の1つや2つ入っているというのに。

「しかも単一仕様能力のせいで拡張領域が食い潰されてる、欠陥機ときたもんだ。こん

なもん誰が好き好んで乗るんだよ……」

「いや、開発元によれば一次移行した直後から、単一仕様能力を使えるような機体という

コンセプトで作られたらしいが。」

「いやいや。こんなもん初心者のデータ取りに使うには、ちよつとぶつ飛びすぎだわ。

これは確実に熟練者の、それも一点特化型共が使うような機体だしな。」

一夏は苦笑いを浮かべながらも指摘する。

設定上は初心者という事になっている一夏にとって、こんな色物を初心者に渡すこと

が信じられなかった。

「そう、初心者だ。本来ならこれを受け取ってから戦う筈だった、しかも初心者にはあり得ない機動で動いていた。この辺の事は説明が付かないのだがそれは……」

「それは機密事項ですので、教えるわけにはいきませんわ。織斑先生。」

千冬が疑問に思っていた事を聞こうとしたタイミングで、「丁度」よくセシリアがピットに入ってきて遮った。

「セシル、もういいのかわ？」

「はい。それほど修理が必要な箇所はありませんでしたので、エネルギー補給だけで済みましたわ。」

補給を終えたセシリアが一夏と合流する。

本来なら、千冬は無断で入ってきたセシリアを追い出さねばいけない所なのだが。

全ての事情を、それも千冬ですら知り得ない事を知っているセシリアを追い出せなかった。

「それで織斑先生。先生の疑問に思っていることはもつともなのですが、やはり最重要機密事項ですので、そう簡単には話せませんわ。」

「……だが」

「ですので先日、アインが言った筈です。一年半後……つまり林間学校の日まで待つてほしいと。」

その事を指摘され、押し黙る千冬。

いくら教師でも、そこまで言われたら素直に引くしかなく。

「分かった。今後一夏がどんな状況を作り出そうとも、根掘り葉掘り聞くな。そう言うことだな？」

「ええ、分かってくれたようで何よりですわ。」

清々しいほど論破された千冬は素直に引き下がり、論破したセシリアは視線を白式に移し小さな舌打ちをした。

「では、アイン。さつさと受領して行きますわよ。」

「了解。では、織斑先生。言った通りこいつは貰っていきますよ。」

「ああ、分かった。処理は此方でやっておく。」

そそくさと立ち去ったセシリアの後ろを、一夏は無造作に引っ付かんだ白式を持って追いかけていった。

残された千冬は……

「はあ……仕事が増えた。帰りたい、ビール飲みたい……」

かなり頂垂れて、タレ千冬状態であった。



翌日の朝、SHRの時間。

「では、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がり縁起が良いですね。」

副担任である真耶が嬉々として報告していた。

クラス代表を賭けて戦ったセシリアとの熱いバトルは見事一夏が制し、クラス代表の座を勝ち取ったのだ。

「織斑、就任の挨拶でもしてやれ。」

「派手に？」

「ああ、派手にだ。」

そう言う和一夏は立ち上がり、教卓へと上がった。

そして周囲を見渡しながら口を開く。

「クラス代表になった織斑一夏だ。個人的私情により、セシルと戦った訳だが。それで俺の実力は把握できたと思う。故にだ、クラス対抗戦は俺が出る限り優勝は確実だ！必

ず、フリーパスを取ることを約束しよう！」

「ワァー……!!」

「あの実力なら優勝確実だよね！」

「やった！ これでデザート食べ放題だ!!」

ただの挨拶、それだけでクラス全員からの支持を得た一夏。

満足そうに席へと戻る。

「異存が無いようなので、クラス代表は織斑一夏に決定する。では決まった事だ、授業を始める。」

……△……

「では、これよりI Sの基本的な飛行実演をしてもらおう。織斑、オルコット。試しだ、飛んで見せろ。」

クラス代表決めの騒動から早数週間。

クラスに順応した一夏は現在、第一アリーナにて授業中である。

「はい！」

「了解。」

千冬に呼ばれた一夏とセシリアは、早急にISを展開する。

その間僅か0.5秒未満。

「よし。では2パターンの実演をしてみよう。」

オルコットは普通に、織斑は出来る高等技術だ。何がある。」

「むしろ何やれって……^{ダブル}二重で良い?」

「ああ、それで良い。」

言われた2人はそれぞれ準備する。

そして2人の周りが空いたのを確認した千冬は。

「よし、飛べー!」

ビュンッ

合図と同時に飛び出した。

そして一夏は、瞬時加速中に瞬時加速をする。

これが^{ダブル、イプシロン、ブースト}二重瞬時加速である。

かなりの速度を出し、セシリアを抜き去り止まる。

『オルコットが実演したのは瞬時加速だ、諸君にはこれを半年で物にしてもらう。そしてそれを昇華させれば、織斑のやった派生系も出来るようになるだろう。』

『はい』

『良い返事だ。さて織斑、オルコット。急降下からの完全停止をやってみせろ。地上100mmだ。』

「了解（ですわ）。」

言われて即実行。

しかも同タイミングで動き出すあたり、一夏とセシリアの相性が良いことが分かる。

2人同時にスラストを吹き、同じ様なタイミングで停止する。

「上手いものだ。諸君、急降下は出来なくても完全停止は物にしてみらうのでそのつもりでな。さて、次は武装の展開だ。織斑、やってみせろ。」

「了解。」

そう言って一夏は腰に手を当て、そして振り抜いた。

一切のタイムラグ無しに刀を展開、ご丁寧に鞘まで展開して。

「ふむ、指摘点無し。合格だ。次はオルコット、”接近用”装備を展開しろ」

「はい！」

次の瞬間には右腕が一瞬光り、戦闘準備モードのライフルが展開された。

「馬鹿者、接近用装備だ。お前がこれで接近戦をしているのは分かっているが、あくまでこれは遠距離用だ。」

「冗談ですわ。」

そう言いながら右手で掴んでいるグリップを放す、ただそれだけのことで右腕にナイフが展開された。

「インターセプター♪」

ナイフを展開した途端、セシリアの目が猫科の動物のようになりだす。

その様子を見た一夏は……

「セシル！」

「ハッ。あ、危ない所でしたわ……」

そう言ってセシリアはナイフの鞘を展開、刃に被せた。

「お前がライフフルで接近戦をしてる理由が分かった。我を見失うのか。」

「お恥ずかしながら、その通りです。このナイフだけはどうしても……治す努力はしているのですが……」

セシリアは接近装備。特にインターセプターだけは、装備すると我を見失ってしまう。
う。

むしろ刀身を見て惚けてしまうのだ。

「ま、良いだろう。時間だ、今日はここまで。各自体を休めておくよう。解散！」

—————△—————

時刻は夜、I S学園の正面ゲートにて。

「やっと着いたわね……I S学園。」

かなり体格に不釣り合いなポストンバックを持った小柄な少女が綺麗に結わえられたツインテールをなびかせ、右手に紙を持ち立っていた。

「本校舎一階事務受け付け……って！だからそれ何処にあるのよ！ 案内板位立てなさいよー！」

どうやら迷子で癩癩持ちらしい彼女は、グチグチ文句を言いながら手に持っていた紙を強引にポケットへと突っ込んだ。

それが彼女の性格を表していた。

「はあ……自分で探すしかないのね。」

若干気落ちした少女は足取り重く、トボトボと歩き出す。かなりの広さを誇るI S学

園内を、初めて来た人間が案内無しに歩くのは至難の技。

「もうこんな時間ではありませんか。アインのせいですわよ?」

ふと声が聞こえ、1人の女生徒が訓練施設から出てくる。

少女は閃いたのか、場所を聞こうと考える。

「だからな? 訓練に熱中し過ぎるセシルが悪いんだって。」

「いえ、そんなことありませんわ。アインだって、相当に楽しんでいたりありませんか。」

「だからと言ってだな……」

女生徒の後ろから続いて出てきた人物に戦慄を覚える少女。

「(だ、誰あの女の子!?)」

幼い頃別れたつきりの人物が、今日の前で見知らぬ女の子を引き連れている。それに愛称で呼び合っているという事実が、少女の心をキリキリ締め付ける。

そして程なく、事務受け付けは見つかつた。

「それでは、手続きは以上で終了です。I S学園へようこそ、ファン・リン・イン 鳳鈴音さん。」

手続きが完了した少女——鈴音は不機嫌ですと言わんばかりに顔に出ていた。

「織斑一夏って何組ですか？」

「ああ、彼？ 彼は1組よ。鳳さんは2組だからお隣ね。あ、そうそう。彼、クラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟なだけあるわね。」

一夏が聞けば憤慨しそうな台詞を吐く用務員を尻目に、鈴音は続ける。

「2組のクラス代表って決まっています？」

「えっと決まってるけど……聞いてどうするの？」

「お願いしようかと思つて……クラス代表変わつてつて。」

その時の良い笑顔を、用務員は忘れられないという。

—————△—————

「と言うわけで。 織斑君、クラス代表おめでとう!!」

「おめでとー」

時刻は夕食後の自由時間。

一組全員が、寮の食堂に集合していた。

壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が掛けられていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね!」

「それに、これなら優勝間違いなし。ラッキーだったよね、同じクラスになれて。」

「ほんとほんと。」

何時のまにか、一組以外の生徒もチラホラ混じっている。

明らかにクラスの集まりを越えてしまっている。

「はいはい、新聞部です。今話題の新生入、織斑一夏君に特別インタビューに来ました。」

そう言って入ってきたのは1人の女子生徒。

だがりボンの色からして2年生らしい。

「私は薫子、2年生。新聞部副部長をやってます、よろしくね。あ、はいこれ名刺。」

自己紹介をした薫子は一夏へと近付いていき、ズイツとマイクを押し付ける。

「では織斑君。ズバリクラス代表になった感想をどうぞ。」

ボイスレコーダーをグイグイ一夏に向け、無邪気な子供のような瞳で迫る。

「そうだな……俺が出る限りは優勝確実、フリーパスは俺がかっさらう。何か意見があるやつや、気に入らない事があるやつは何時でも掛かってこい。返り討ちにしてやる。」

「おー良いねえその強気な発言。じゃあじゃあ次はセシリアちゃん言ってみよう。」

一夏の一言で満足したのか、セシリアへと矛先が移る。

「そうですわね……アインが代表なら優勝は確実ですし、何を言えば良いのです?」
「なら、皆が一番聞きたがってる事にしよう!」

そう言いながらメモ帳を取りだし、数ページ捲る薫子。

あるページで止まり、口を開く。

「ええーつと……ズバリ織斑君とセシリアちゃんの関係について!」

ババンツと効果音が着きそうな言い方で詰め寄る。

2人にとって機密事項なため、どう言おうか迷う。下手に誤魔化しても、造語されたらそれはそれで終わりである。

「えーつと……そうですわね。昔からの知り合いと言えば良いでしょうか。アインとは本当に色々ありましたわ……」

そう言っと思い出に浸るセシリア。

実際は単なる知り合いではなく、軍隊での同期であるのだが知るところではない。

「じゃあ最後に写真を撮ろうか。折角の専用機持ちだし、目立たせないとね。はいはい、

2人とも並んで並んで。」

言われるままに横並びになる一夏とセシリア。

かなり慣れているのか、2人共堂々とした態度で臨む。

「じゃ、撮るよー。はいチーズ！」

パシャツとデジカメのシャッターが切られた。

そして気が付く。

「皆さん……どうして入っている何て野暮なことは聞きませんが……どうやって入ったんですの？」

シャッターが切られる寸前で全員入ったらしく、セシリアはその行動に驚愕していた。

「ま、良いじゃないか。折角の思い出だしな。」

さあ、残りの時間も少ない、派手に盛り上がるぜ！」

「おー」

さらに盛り上げる一夏が居たり、千冬が来て叱られたり。

そうして夜が更けていった。

第四話

「織斑君おはよー。ねえねえ、転校生の噂聞いた？」

翌日、一夏は教室に入るなりそう言われる。

噂好きの女子達は信憑性のあるものもないもの、関係なく大好物らしい。

「転校生？この時期にか？まだ4月だぞ。」

そう、まだ入学式から1ヶ月も経っていないのだ。そんななか転入というと、かなり難題である転入試験を受けたエリートという事になる。

だが1つ条件があり、それをパスすれば試験は免除となる。それは……

「なんでも、中国の代表候補生なんだってさ。」

「へえ、それは興味深い。」

そう、それは代表候補生であること。

代表候補生とは名の通り国家代表の候補。

厳しい試験等乗り越えた一部の人間がなれるものである。代表候補生であれば実

力も申し分無くそれ相應の経験を学園にも積ませる事ができる、故に小難しい転入試験はパスとなる。

代表候補生と言えば一夏の近くにセシリアが居るが、セシリアは別格である。

何しろイギリスの主席代表候補生、代表候補生の中で座学、実技、実力、全てに置いてトップにたつ人物だからだ。

それ故に国家代表が退いたとき、次に任命されるのはセシリアとなる。言わば次期国家代表なのだ。

「ですがアイン、代表候補生となると油断なりませんわよ？」

「そうだな。まあ油断せず頑張るさ。精々セシルの期待を裏切ら無いようにな。」

「そうですね。フリーパスも掛かっていますし、期待していますわ。」

一夏はクラス対抗戦に出る代表。

故にクラスからの期待も大きい、つまりは負けられないということ。

「まあ、クラス代表で尚且つ専用機持ちつて1組と4組だけだから余裕だよ。」

「その情報古いよー！」

入口から聞こえてくるその声に、クラス中が一斉に振り向いた。

そこに居たのは小柄で可憐な、ツインテールを揺らした少女が居た。

彼女は腰に手を当て、胸を張っていた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には優勝させないから。」

そう言い放った少女に目を見開いて驚く一同。

それもその筈、噂好きの彼女達が掴めなかつたのだ。

とそこに口を開く一夏。

「ほう……懐かしい顔だ。お前は……鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、フアン、リン、イン鳳鈴音。今日は宣戦布告に來た訳よ。久しぶりね、一夏。」

そう言った途端に教室中が騒ぎ出す。

噂の転校生が唯一の男性操縦者と知り合い、そうと知れば騒がないわけがない。今に

も聞きたくて一夏に特攻を咬まそうとする輩は居た。

居たのだが、全員がスツと席についた。

それは……

「……おい」

「何よ、今忙しいんだから後にして。それより一夏、元気してた？」

転校生……鈴の後ろに居る人物をみて、1組は全員顔を青くしてこう思った。

(こいつ終わった……)と。

そう、後ろに居る人物は1組なら誰しもが、そしてIS操縦者……ひいてはISに関

わる者なら誰しもが知っている人物。

その名は……

「教師に向かつてその態度とは恐れ入る。なあ、凰鈴音？」

冷や汗がダラダラと流れ始め、彼女は完全に棒立ちとなる。

そしてギチギチと震える首を何とか動かして後ろをみる。そこには米神をピクピク動かし、とてもイイ笑顔を浮かべている一人の女教師が居た。

「ち、千冬さん……」

ズゴンツ

出席簿が炸裂し、その場に踞る鈴。

今回の千冬は情け容赦を捨て、かなりキレていたらしい。

「教師を名前呼び、しかもさん付けとは……随分偉くなったものだな？小娘。」

「うぐうう……」

痛みで悶絶し、全く喋れない鈴。

だがそれがまた千冬が不機嫌となる事である。

いくら痛みで喋れないとはいえ、問い掛けに対し無視をする形になってしまった。

無視が一番嫌いな千冬は……

「まあ良い。山田先生、ショートホームルーム S H Rは任せる。私はこいつとおOHANASSI話してくるのでな。」

「は、はい。任せてください！」

そう言いながら鈴の首根っこを掴み、そのまま引き摺っていく千冬。

その去っていく背中をみて……（織斑先生だけは怒らせないようにしよう）と心に誓った1組生徒であった。

「ではHRを始めます。今日は—————」

（この状況で平常通り始められる山田先生、マジパネエ。）

後日、真耶の株価が鰻登りしたという。

—————△—————

「お前のせいだ！」

「何がだよ……」

時刻は昼休み、一夏は何故か箒に文句を言われていた。

というのもその行動によるところの自業自得のだが……午前中だけで真耶に5回

注意され、ボーっとしていたため3回千冬に叩かれてる。

その時に何があつたのか、一夏の知つたことではないのだが。

「あら篠ノ之さん。自分の不手際を人のせいにしては、成長できませんわよ?」

「だが!」

何かと一夏に絡んでくる箒の事は、セシリアにとつて非常に気にいらぬ事らしかつた。

入学当初とは違い、今では箒に対しての受け答えが辛辣になりつつあつた。

「言いたいことが有るのでしたら、学食で聞きますわよ? まあ…言えれば、ですけどね。」

「何だと!? ふん、それほど言うなら良いだろう。来い!」

セシリアの一言で憤慨した箒は、1人でそそくさと先に歩いていった。

それがセシリアの狙い通り、何て事は知るよしも無いだろう。

「さて、邪魔者は先に行きました。私達はゆっくり行きましょう? ねえ、アイン?」

「そうだな、どうせ急いでもあいつに会うし。何より、飯は逃げないしな。」

セシリアが狙つた通りに箒は先に行き、現在食堂への廊下には一夏とセシリアしか居なかつた。

時間は大丈夫なのか何て野暮なことを聞く人間も居らず、2人並んで歩く。

その後ろ姿は、さながらカップルのようだった。

「遅い!!」

食堂に着くなり、一夏とセシリアは洗礼を受けた。

一夏の顔は若干疲れきった魚のようになりかけ、セシリアは溜め息を吐きながらも一夏の分の食券も買う。

手軽に食べられるBLTサンドを。

セシリアとメニユーが同じなのはご愛敬。

「何してんだ? お前ら」

「何って、待ってたに決まってるでしょ!」

そういう鈴、そして箸の手には昼食が乗っていた。ご丁寧に着いてから今まで、ずっと待っていたらしい。

一夏もセシリアも、これにはビックリであった。

大抵の場合食わずに待つことはせず、食べてから待つのがこの2人である。

と言うのも……何時如何なる場合でも、何が起きようとも対応できるように。そんな

思考回路が故だ。

「まあ、良い。セシル、あそこへ。あそこなら座れそうだ。」

「はい、では行きましょうか。」

そうして、鈴と箒を引き連れた一夏とセシリアは空いてる席へと移動する。

「さて、いただきます。」

「ええ、いただきますでしょうか。」

一夏とセシリアは、早々に食べ始めた。

置いてきぼりになった鈴と箒は抗議しようとするが、みるみる減っていくBLTサンドを前に……これは早く食べないと置いていかれると思い、自身の昼食に手を付けた。

「所で一夏、元気してた？」

「ん、ああ。」

食べ終わった鈴が早速質問を投げ掛ける。

それに対し一夏の反応は、若干薄かった。

6年前に転校していった人物の事等、その後の6年間で激動なればあまり記憶に残らなくても仕方がない。

「アイン。やはりここは今一度、自己紹介をしたほうが良いんじゃないやありません？」
「そうだな。よし、そうしよう。」

セシリアの提案により、鈴と箒、セシリアの自己紹介をする事が決まる。

鈴は箒とセシリアの事を、箒とセシリアは鈴の事を知らないからだ。故に……
「ではまず私から。」

私はセシリア・オルコット。イギリス代表候補生です。アインとは、少々長い付き合い
いでしてよ。」

確信的な情報を一切開示せずに、無難な紹介で終わる。

そして続いて鈴が……

「じゃ、次はあたしね。」

あたしは風鈴ファン・リン音小3で引越すまでは、一夏と同じ地区でつるんでたわ。」

「次は私だ。」

私は篠ノ之箒。一夏とは小2まで学校が同じだった、幼馴染みだ。」

箒がそう言った途端、鈴と箒は睨み合う。

鋭い眼光がバチバチと火花を幻視し、お互い以外は一切見えなくなる。

そんななか一夏とセシリアは……

「幼馴染みは私だ！って、目で言ってますわね。」

「はあ、こいつら。勝手に決めんなよ……」

呆れていた。

むしろ一夏は疲れた顔を加速させて、まさに疲労度が上がっていく。

「で、どうするんですの？この2人。」

「面倒だし放置で良いだろ。それにそろそろ行かないと、授業に間に合わない。」

「そうですね。」

2人は自身の食べた食器を手に持ち、睨み合う2人を放置して帰って行った。

そしてチャイムが鳴った数分後、やって来た千冬により制裁が確定した。

—————△—————

放課後、第2視聴覚室にて。

一夏はセシリアを連れて来ていた。

そこで何をするかと言えば、情報収集に他ならない。

「中国代表候補生、風鈴音。専用機は甲龍シエンロン、機体の燃費と安全性を第1に考えられた機体。装備は2つか。」

「ええ、双天牙月と呼ばれる二振りの青龍刀。そしてもう一つは、龍咆と呼ばれる衝撃砲ですわね。」

新たに入学して、尚且つ専用機持ちだと言えば調べないわけにはいかない。

後々戦うことになるうとも、事前知識があれば案外楽に事を運べる。そういう理由があった。

「一番気を付けなければならぬのは龍咆ですわね。衝撃砲とも呼ばれているらしいですが、注意すべきはこの点ですわ。」

そう言いながらデイスブレイを指差す。

そこには、龍咆を撃っている甲龍が……鈴が居た。

そしてセシリアが指差すのは甲龍、その肩に浮いている非固定浮遊部位アンロックユニットだった。

「問題はこの龍咆、射角の制限がなく砲身が存在しない事ですわ。それに砲弾自体も空気に圧力をかけて打ち出す……威力が高くなつた空気砲ですわね。」

「割りと面倒な装備だな……鍵は打ち出す寸前のエネルギー集束の感知か。」

一夏をしても面倒と言わせる装備。

何しろ砲身も砲弾も目に見えず、射角の制限がない。そう来れば厄介極まりない装備

だと言える。

明。
目に見えないのだから弾道予測が出来ず、砲身も無いのだから何時撃つのかすら不明。

これなら普通の銃器の方がよっぽど良いものである。

そして何度も映像を見返しているうちに、セシリアが1つの発見をする。

「アイン、ここ。ここをよく見てくださいな。」

セシリアが指差したのは先程と変わらない、龍咆を撃つ場面。

だが少し違ったのは、非固定浮遊部位アンロックユニットではなく鈴の目を指していた。

「ここですわここ。彼女、龍咆を撃つときに対象物へと必ず視線を向けてますわ。視線の先が必ず着弾点になるように……ですから視線を見れば、自ずと射線もわかりますわ。」

「個人の癖か。ま、こりやありがたい。」

たった数度。

映像を見返しただけで弱点を見抜く、それだけでセシリアの技量の高さが伺える。

ISにはハイパーセンサーがあり、目で見なくても360度全体を見渡せる。その機能の他にもズームも存在しており、真後ろの標的を目で見ずズームして確認する事も出来るのだ。

つまりは銃器を撃つ時に見えるのだから、目を向けなくても良いということ。

「あ、そうでした。先程貼り出されていましたが、クラス対抗戦。アインは初戦で、相手は凰さんでしたわ。」

「……もう少し早く言おうな」

戦うつもりで調べていたが、こんなに早く機会が来るとは聞いていない一夏であった。

—————△—————

そして時間は飛んでクラス対抗戦当日。

第2アリーナにて一夏と鈴は向かい合い、試合開始のブザーを待っていた。

そしてその試合を見ようとアリーナの観客席は満員御礼、通路すら埋め尽くしていた。

『両者、規定の位置に移動してください。』

そのアナウンスにより距離を詰める。

その距離5メートル。

瞬時加速なら一瞬にして詰められる距離だ。

「ねえ一夏、一応言っておくけど……ISだつて完璧じゃない。絶対防御を……シールドエネルギーを突破する攻撃なら、簡単に操縦者にダメージを貫通させられるのよ。」

鈴の言うことは正論ではあるが、一夏が初心者と思つているが故の心配だった。

操縦者の安全の為に存在する絶対防御。

名前に絶対なんて付いてはいるが、衝撃は殺せない。

実体弾やレーザーも、喰らえばその衝撃をもろに受けることとなる。

その為だけに作られた装備も存在し、絶対防御の弱点を突くことは容易いのである。

『それでは両者、試合を開始してください。』

ブーと鳴り響くブザー、それが鳴りやんだ途端一夏と鈴は動いた。

ガキンツと一夏の刀と青龍刀が衝突し、鏝迫り合いになる。

バチバチと火花を散らすその重量に、一夏の刀は耐えられずに押しきられる。

「貰ったあ!!!」

刀を押しきり、後退した一夏に追撃を仕掛ける鈴。頭は初手の攻撃の事でいっぱい、他に視線は向いていない。だからだろう、一夏の口元が綻んだのを見逃すのだ。

「甘い!!」

「なっ!?!」

一夏がわざと作った隙に飛び込んできた鈴は、自身の脇から飛んできた一夏の左足に当たり吹き飛びアリーナのバリアーに激突する。

回し蹴り……何て事はない、ただの蹴りだ。

だがISを纏つての蹴りとなれば、それは十分に凶器となる。

「くっ……っう!!」

「焦るなよ、勝負はまだ始まったばかりだ。それにせつかくの初戦なんだしな。」

「……言ってくれるわね。」

体勢を整えた鈴だが、その表情には余裕は一切無かった。

というのも、隙を突いたと思いきや誘われたもので、反撃と言わんばかりの回し蹴りが正確無比に腹部へと直撃していたのだ。

「さて、今度はこっちの番だ。」

スラスタアの爆発音が2度響き、一夏が文字通り弾丸のごとき速度で鈴へと刀を振るう。

「なっ!?!」

キインツと、かなり甲高い音が響く。

速度に比例して威力が高い訳ではないらしい。

だが使われた鈴は目を丸くし、驚いていた。

「な、何なのよ今のは!?!」

「別に名前は無いが、俺は便宜上イグニッション・ブースト瞬時加速二式と呼んでいる。」

一夏が使った瞬時加速二式、仕組みは簡単だ。

まず瞬時加速とは、スラスタアからエネルギーを放出し、取り込み圧縮、そして放出のプロセス

で発動する。

だが二式はそのプロセスをもう一度繰り返すのだ。

ただでさえ瞬時加速で爆発的に加速をするのだ、そのエネルギーを取り込めばさらに速くなるのは必然だろう。

つまりは瞬時加速のエネルギーをそのまま取り込み、瞬時加速に使うのだ。

「さて行くぞ鈴。SEの貯蔵は十分か?」

「上等!」

—————△—————

「でえりやああ!!」

鈴は一夏の体を捉えようと、青龍刀を上段、横薙ぎ、下段と振り下ろす。

だがそのすべてを一夏が振るう刀によって軌道を逸らされる。

「くつちよこまかと……いい加減当たりなさいよ!」

「なら当ててみな、そのでかいのじゃ厳しいと思うがな。」

そう言う通り、鈴の青龍刀はかなり重量があり取り回しに難がある。反面一夏の刀は違う。

その事を理解していても言葉に出されると憤慨するのは性と言うもので、それが分かっているからこそ一夏はわざわざ言うのだ。

「言ってくれるじゃない。なら!!」

鈴の肩にある非固定浮遊部位アンロックユニットの中央部が開く。

そしてエネルギーを感じし、その地面を穿った。

「……………え？」

自身の最大の切り札でもある龍咆。

それが何故かすりもせず地面を抉っているだけなのか。それが疑問となり頭を駆け巡る。

「何故。そう思っているだろうな。」

「っ!？」

そこに一夏の声が響き、ハツとなり思考を止め一夏を見る。龍咆は砲弾も、ひいては砲身すらも見えない。だから避けられない筈なのに、弾が通った場所から左半身だけ下げて避けていた一夏。

「別に驚く事じゃないだろう。砲身も砲弾も見えないのなら、見えるものを見れば良い。」

そう言つて自身の目を指差し、ツーツと弾痕へと手を持っていく一夏。そしてその行為にハツとなり、驚いた顔で一夏を見る。

「ま、まさか……………私の視線だけで避けたの!？」

「その通り。お前が龍咆を使う場面は、データベースを探せばいくらでも出てきた。だ

がどの場面でも決まって、お前は標的を必ず目視で見ながら撃っていた。」

驚愕の事実には、鈴は開いた口が塞がらなかった。

確かにそう考えればどこにどう砲弾が飛んでくるか、ある程度予測は出来る。だがそれを聞いて、実際に出来るかといったらそうでもない。

それに、射撃から着弾まで1秒も無いのだ。

そうそうに出来ることじゃない。

「で、タネが割れた訳だが……どうする?」

「確かにそう、簡単に避けられた事実は変わらない。だけどね、効かないって決まった訳じゃない!!!」

そう言い放った鈴は龍咆へと、エネルギーを送り込む。尋常じゃない量を送り込んだところで……

ミシッ

ズドオオオオン!!!

アリーナのシールドを何か突き破り、ステージ中央へと衝突した。

『Master,』

was confirmed with the affiliation unknown
 No biological reaction, is a drone.
 「何!?!」

ユリのスキャニングによって送られてくる情報により驚愕する一夏。今までこの国も開発に成功した事の無い無人機、それが今目の前にあるのだから。

「鈴! 試合は中止だ! すぐにピットにつ!」

『Sensing a new heat source,
新 た な 熱 源 を 感 知

Confirmation unknown machine five aircraft.
不 明 な 機 体 未 知 機 五 架 機 確 認

鈴へオープンチャンネルをしようとした途端に、新たな敵影が一夏をロックする。その数は5機、いずれも一夏をロックしており逃げるに逃げれない状況となった。

「冗談きついぜ……」

『This is when it was a joke,
こ れ が 冗 談 で し た 冗 談

how much I would be happy.
ど っ ぱ り 嬉 しい で し ょ う ね。

「はは、だよな。ツチ、セシルに救援信号だ! すぐにアリーナに来るよう送れ!」

『Roger that!
了 解!

セシリアへの信号を送り、そのまま驚愕している鈴へと向かった。

———△———

その頃、アリーナのピットにある管制塔では……

「織斑君！ 鳳さん！ 聞こえますか！」

真耶が必死に呼び掛けている。

プライベートチャンネルは声に出す必要は無いのだが、声に出ているところを見るに相当焦っているらしい。

「ダメです織斑先生、通信繋がりません。」

多分ですが、乱入してきた機体によって妨害されているものだと思います。」

「ツチ、非常事態宣言を発令。至急教師部隊を送り込む準備をさせろ！」

「はい！」

教師2人が大慌てになりながらも指示を飛ばす、システムクラックがある程度進めば突入出来るであろう。

そこにセシリアの専用機、その緊急回線から通知が来る。

『……ザザー！白眼から蒼眼へ。救援信号、所属不明の無人機6機が襲来。直ちに援護に来られたし。』

それを聞いた途端、セシリアの顔が引き締まる。

セシリアの回線には重要度が設定されており、コールサインが使われるのは最重要度の回線ということ。そして送り主は一夏。

「織斑先生！私に出撃、及びピットまでの隔壁の破壊許可を！緊急です！」

その回線は千冬も聞いていたらしい。

秘匿回線とはいえオープンチャンネルなのだから聞こえるだろうが。

「オルコット……全責任は私が持つ。隔壁を破壊し、最短距離でアリーナ内へ潜入せよ！」

「了解！セシリア・オルコット、出撃します!!」

そう言い残し、セシリアは管制塔を後にする。

向かうはアリーナ。

「良いんですか？織斑先生。」

「構わんさ、始末書ごときで生徒が救えるのだ。安いものだろう。それに、あいつらなら最速で片付けられるさ。」

—————△—————

「くっ!!」

「だあ!!もう!!」

1対1での戦闘に長けている鈴も、1対多の戦闘に長けている一夏も、流石に6体のI Sの同時攻撃には、回避の一手しか選択肢が無かった。

それにアリーナのバリアーを破った事から、敵機の武器はS Eを貫通し絶対防御を強制発動させるに相応しい威力を持っている。故にそう簡単に近づく事も出来ずにいた。

だが避ける事も容易ではなく、こんな場面に遭遇したこと無い鈴は何発か被弾していた。傷は浅いが、攻撃を喰らった事と避ける事。2つの行動がS Eをかなり消費してい

た。

「一夏！そろそろあたし、SEが切れそうよ！」

「ツチ、持たないか……早くしてくれ、セシル！」

一夏も鈴を庇いながらの戦闘に苦戦し、当たってくれない敵機に苛ついていた。

無人機1機なら、速攻終わらせることができる。だが6機も居るのだ、避けるのをやめれば蜂の巣になるだろう。

その事実が一夏をなお苛立たせた。

そのとき……

『出力制限解除。お待ちせしました、アイン。』

その声と共にアリーナのバリアーを突き破りながらレーザーが、2機の無人機を巻き込む。

一夏にとって何とも頼もしく、ありがたいこの声を待っていたのだ。

「セシル！プランBだ！この邪魔物をぶち壊すぞ！」

「了解ですわ！」

途端一夏もセシリアも己の主力武器を投げた。

その行動に見ていた鈴、そして管制塔の千冬や真耶は驚愕するがどこ吹く風。

互いの武器を受け取り、背中合わせになった。

「久し振りだが合わせられるか？」

「当然！私を誰だと思ってますの？」

一夏はライフルを、セシリアは刀を持ち互いに構える。蒼と白の共闘、こんな時でなければ興奮物なのだろう。

「では早速始めるとしようか！」

「Let, s rock！」

そう言い放つと、トップスピードで飛翔する。

一夏は狙撃、セシリアは斬撃。

己の得物が変わってもなお、その攻撃は衰えない。

正確無比の援護射撃に、鋭い太刀筋。

「やあ!!!」

横一閃、上段切り。

セシリアの太刀筋は綺麗で、そして重い一撃だった。そこが一夏とは違う点。一夏は鞆ありきの剣技なのだ。

そして一夏も、かなりの腕前の狙撃技術だった。

人形の弱点の1つに関節がある、一夏はそこを正確無比に撃ち抜いていた。

片足、そして両腕を撃ち抜き隙が出来ればセシリアが仕留める。まさに連携の鏡で

あった。

「これでラストだ！あの世で懺悔でもしてな！」

そうして一夏が最後の1機を撃ち抜き、状況は終了する。

無事、6機の無人機が破壊され、アリーナ内のシステムロックも解除される。

それが油断を誘ったのだろう。

『Unknown machine restart,
不明機再起動
 it has been No way.
まさか……クセな……
 Subject, Blue Tears!
対象は、ブルー・テアーズ！
 lock!

左半身が無くなっていた無人機が動きだした。

刹那、一夏は瞬時加速二式を使用。最高速度でセシリアの元に向かう。

「セシル!!」

呼んだときにはもう遅い、不明機からレーザーが発射されており、着弾までは時間の問題だった。

幸いなことは、一発撃って不明機が沈黙した事だろう。

その時一夏は、セシリアを突き飛ばすのに一切迷わなかった。

「アイン!!!」

真つ白な光に包まれたアリーナでは、少女の悲鳴が木霊していた。

—————△—————

「うぐっ……」

保健室にて一夏は目を覚めますが、あまりの激痛に顔をしかめる。それもそうだろう、助ける為とはいえ捨て身の特攻を行い、あまつさえその身で高出力のレーザーを受けたのだから。

「あのあとどうなって……」

「アイン！気が付きましたのね！」

その声に振り向くと、ちょうど入室してきたであろうセシリアが居た。

一夏はセシリアが無事だということに安心する。

「心配掛けたな。」

「本当ですわ！生きていたから良いものを……死んでしまつたら……私は何の為に生きれば良いのですか。」

「……………ごめん」

かなり涙目のセシリア。

先程まで泣いていたのだが、また涙が出てきているようだ。

「だからもう……………私なんかの為に命を張るのはやめー」

その言葉は続かなかった。

何故なら……………一夏がセシリアの手を引き、そのまま抱き締めたからだ。

「そんなこと言うな。セシルだから命を賭けたんだ、そんなこと言われたら俺は何の為にこんな怪我を負ったんだ？」

「それは……………」

一夏の言葉によって、返答に詰まるセシリア。

「ここで一夏は、更なる言葉を口にする。」

「それに好きな女位、俺に守らせろよ。」

「……………え？」

若干顔を赤くしながら、照れ臭そうに言う一夏。

一方のセシリアは、混乱しすぎて未だに理解が追い付いていないようだ。

そして一夏は一旦セシリアを離し、対面する形をとる。

「じゃあ改めて。俺はお前の事が好きだ、セシリア。俺で良いと言うなら、俺とつ
kー」

一夏の紡いだその先は、セシリアの唇に塞がれ遮られた。そして長い、長い口付けが
終わるとセシリアが今度は口を開く。

「やつと、やつと言ってくれた。貴方が、アインザックを名乗ると決めたその日から、私
はアインの事が好きでした。」

「待たせて悪かったな。」

「その責任は、とつてもらいますわよ?」

そうして、返答の変わりのキスは先程よりも長く続いた。

「これじゃあ入れないじゃないの……」

保健室の外にはドアにもたれ掛かって涙を流す、1人の少女が居た。

トレードマークのツインテールをほどき、うつむいていた。
「ばいばい、あたしの初恋……」

その表情は、涙を流してもなお笑っていた。

第二章 話題の転校生編

第一話

無人機の件から1ヶ月経ち、学園もいくらか平穏が訪れた今日この頃。

クラス対抗戦については無人機の乱入によつて中止となり、フリーパスを楽しみにしていたであろうクラス全員意気消沈していた。

その為一夏は学園長へ掛け合い、商品となる筈だったフリーパスを買い取った。

――△――

「みんな、すまない。優勝すると豪語しておきながらこの様だ。いくら俺でも中止になつてしまった以上、この決定に従うしかないんだ。」

一夏は教卓へと上がり頭を下げ、腰を見事に90度曲げていた。

一夏が頭を下げている状況のなか、クラスはポツポツと一夏を弁護するような言葉が出てくる。

「いやあ、流石にあればしようがないよ。」

「だね。あ、それはそうと織斑君、格好よかったよねえ」

等々、この反応からして誰も一夏を責めていない事がわかる。だが、まだ一夏のターンは終わらない。更なる手札を切る。

「こんな不甲斐ない俺にそんな言葉を掛けてくれるとは。ありがたい限りだ。そこで、皆にお礼と言うかお詫びというか。用意したものがあゝる。」

そう言うで一夏はポケットに手を入れ、あるものを取り出した。

そのあるものを見た途端、クラス中が騒ぎ出す。

「静かに。」

これはクラス対抗戦の優勝商品だった物だ、故に本来なら俺が持っている筈がない物だ。それをなぜ持っているのか、疑問に思うだろう?」

うんうんと目を輝かせながらも、興味津々の一同。

何故? どうして? が飛び交うなか一夏は口を開く。

その一言でクラスが沸いた。

「学園長と交渉してな、適正価格で俺が買い取った。」

きゃー、と嬉しそうな顔をしながらも悲鳴が飛ぶ。当たり前であろう。悲願のフリー

パスが今日の前にあり、手にしているのは自らのクラス代表。優勝は出来なかったものの、必ず勝ち取ると言った通りにそれを握り締めているのだから。

「これの有効期限は明日まで。流石に一人じゃこの枚数は消費しきれんからな、最初の宣言通りにしようと思う。」

ごくくりつと誰かが唾を飲む音がした。

その音を皮切りに、各々が全力で悲鳴をあげる。

「きゃー、織斑君男前!!!」

「同じクラスになれて良かった!!!」

等々。

一夏にしてみれば嬉しい悲鳴というやつだった。

そうして一夏はフリーパスを教卓に置きながら……

「クラス全員分のフリーパス。」

優勝は出来なかったが、これをもってクラス代表としての期待に答えられたと思う。」

そう締め括った。

この一件以降、一夏の株価は右肩上がりだそうなの。

ー△ー

そんなこと等があり、現在は6月初頭の日曜日。

一夏は自室にて、とある書類とにらめっこしていた。
そこにはこう書いてある。

〔この書類は承認後、コピーされました。〕
転入届け。

シャルル・デュノア

性別 男

フランス代表候補生

専用IS Rーリヴァイヴ・カスタムⅡ

何故こんなものを持っているのか、疑問が浮かぶところだが。

一夏が気になったのが、添付されている顔写真。

そこに写っている金髪の美男子、それこそ一夏がわざわざこの書類を貰った理由である。

「男の操縦者……ねえ」

一夏がISを起動したのが4年程前。

そこから世界中で男性の起動実験等が始まったが、全て失敗。

男性操縦者は一夏のみだった。

それが今更出てくる、そこが不明な点。

そして顔写真、一夏がどこをどうみても女なのである。

それに一番怪しいのが代表候補生という地位に、専用機持ちという事実。最近見つかつたとしても、明らかに可笑しいのだ。

ずぶの素人だったとしても、数カ月で国が制定する代表候補生の基準に達するとは到底ありえない。

「まあ、これもまた面白い。」

もし一夏の推測通りだとすれば、転入してくるのは女。そしてこの格好からして男子としての転入だ。

だとすれば解は1つ、一夏に近付くため。

そしてあわよくば専用機のデータ、もしくは機体毎強奪する為だろう。

「なら対策は1つだろうな。」

そう言つて一夏が手に取つたのは、フィッティング パーツナライズ初期化も最適化も何1つとして行われていない一夏のもう1つの専用機。白式だった。

一夏の専用機……ユリの待機形態を見たことがあるのは千冬とセシリアのみ。

つまり、白式を腕にしていれば待機形態の隠蔽ができる。盗られても全く問題ない白式を表に出すことで、自身の専用機を隠す魂胆だ。

盗つたところで所有者のデータはおろか、稼働率のデータすらない。そんな機体を大事にする人間がいるだろうか。

「ま、これからよろしく頼むよ?白式。」

そう言つて白式を撫でる一夏。

言葉とは裏腹に、とても黒い笑顔を浮かべていた。

—————△—————

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？そう？ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見て如月のがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あれモノはいいんだけど……ちよつと手が出せないよね。」

月曜日の朝、クラスではカタログを手にわいわいと雑談をする女子たちでいっぱいであつた。

カタログはISスーツについての物であり、何処の会社が良い等の会話であつた。

「そういえば織斑君のISスーツって何処のやつなの？見たこともない型だけど……」

「あー、これは特注品だ。確か……そう、確かムラクモのアームモデルが元になつていて
そうだ。」

ムラクモ。正式名称はムラクモ・ミレニアム。

女尊男卑が激しいこの世の中、世界で唯一と言つていい男女平等を唱っている企業。

ロボットに対するロマンを捨てきれず、何時かは男でもISに乗れると信じすぎるあまり、男性用ISスーツを作り出した。世界で唯一の会社だ。

「ISスーツは体表面の微弱な電位差を感知、増幅させてISの各部位にダイレクトに送っています。また、このスーツは一般的な小口径の拳銃程度の弾丸なら容易に防ぐこ

とができます。あ、でも衝撃は逃がせませんので直接人体に伝わります。」
説明をしながら入ってきた真耶。

クラス中から数々の愛称で呼ばれる、その数8。

当の真耶は、先生と呼ばれない事に若干顔をしかめる。が、慕われているとわかると途端に笑顔となる。渾名で呼ばれても、悪い気はしないらしい。

「諸君、おはよう。」

「おはようございますー！」

それまでざわついていたクラスが、千冬が入って来た途端に静かになり元気よく挨拶をする。

「今日からは本格的な実践訓練を開始する。訓練機を使用しての授業となるが、各人気を引き締めて怪我の無いよう。」

各々のISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないように、忘れた者は変わりに学校指定の水着で受けてもらう。

それも忘れた者は……まあ、後はわかるな？」

ギラツとした眼光で見渡す千冬。

この場合ISスーツも水着も無ければ、確実に下着でやることとなるだろう。

そうなれば唯一の男子である一夏に晒す事になる。

「では山田先生、ホームルームをお願いする。」

「はい。」

連絡事項を言い終えた千冬が真耶に交代する。

「嬉しいお知らせが1つ、今日はなんと転校生を紹介します！しかも2人ですよ！」

「え……」

『えええええつ!?!』

いきなりの転校生紹介にクラス中が一気にざわつく。鈴の時は事前情報を仕入れられたのに、今回は全く無かった。故に情報網を掻い潜った事実には、驚愕を隠せない。

だが、入学してから半年足らずで転入生が3人。

その内2人は同じクラスという、普通なら分散させるものではないのか。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがピタリと止まる。その理由は見ればわかるだろう。

片方が男子なのだから。

「フランスから来ました、シャルル・デュノアです。この国では不慣れな事も多いかと思
いますが、皆さんよろしくお願いします。」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼した。

「お、男……?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

人なつっこそうな顔。礼儀の正しい立ち振舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い
金髪で首の後ろに丁寧に束ねている。印象は、『貴公子』という感じだ。

一人セシリアが怪訝な表情を浮かべ、シャルルを注視する。だが…

「きゃ……」

「はい?」

「きゃああああ——っ!」

教室中に響き渡る歓喜の叫びに、咄嗟に耳を塞いで顔を青くしていた。

一夏も塞いでいたが、直で喰らったらしい。

顔が若干震えていた。

「男子!二人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~~！」

ときやいきやいはしゃぐクラス。

もう既に、一夏はダウンしていた。

音響爆弾よろしくな悲鳴が自身の後ろから、最前列の一夏は限界であった。

「あー、あまり騒ぐな。」

一言、たった一言言っただけで静まり返るクラス。この結果には一夏も、千冬自身も驚愕した。

千冬の、この調教結果に脱帽のセシリアも居た。

「ではもう一人にも自己紹介をしてもらいましょう。」

その声にバツと視線が向く。

もう一人の転校生はかなり異端だ。

輝くような銀髪を腰近くまで長くおろしてあり、綺麗に整えられている。そして左目にされた眼帯は医療用ではなく、黒い兎のエンブレムが入っていた。そんな彼女は腕組をして目を閉じていた。

「では、お願いします。」

真耶のその声が掛かった途端、閉じていた目を開いた。そして今の今まで結んでいた口を開く。

「ドイツ軍黒兎隊隊長、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。軍の意向により、本日付けでこの学園に通うこととなった。今まで軍部の外に出たことがなく世間知らずだが、これからクラスメイトとして色々教えてもらえると助かる。」

掴みは上々と言った感じのラウラ。

満足そうに頷き、満面の笑みを浮かべる。

不意に一夏と目が合う。

「むっ」

確かな足取りで一夏の席へと近付いていく、周りは何をするのか怪訝な表情を浮かべる。

そんななかラウラは全く気にしない態度で口を開いた。

「Nach einer langen Zeit Bacherregal, Ain Zack
Es scheint, schwarzes Kaninchen zu tun。」

突然の他国の言語に驚愕し、一夏がそれを使ったことにも驚愕するクラス。

理解していたのは、ため息を吐いていたセシリアだけだろう。

「Hier nennt er sich einen Kfig Chika Murai。」

「ああ、わかった。」

そう言うのと、ラウラは教卓のところまで戻った。

「終始頭に？が浮かんでいたクラスだが、そこはそこだ。瞬時に切り替わった。」

「ではこれから1年間、よろしく頼む。」

「よろしくー!!」

このクラスの順応性は高く評価できる点だろう。

もう既に転入生と打ち解けている当たり、相当なものだ。

「よろしい。では自己紹介も終わった事だ、HRを終了する。早速授業だが、今日は2組と合同で模擬戦闘を行う。各々準備をし、第2グラウンドに集合だ。では解散！」

一夏は早速外へと出ていった、伝言を残して。

そもそもこの学園は元々女子高だったのだ、故に女子更衣室なんて存在しない。

つまり女子は全員教室で着替えるのだ。

「おい織斑……織斑はどうした。」

「あ、えっと。面倒事はパスなって言って、えっと……先に外へ行きました。」

その言葉に、千冬は持っていた鉛筆をへし折った。

額に青筋を浮かべていた為、周りの生徒は若干怯えていた。

「ツチ、あいつめ。逃げたか。まあ、良い。デユノア。」

「は、はい！」

「そんなに固くならなくても良い。男子更衣室まで案内してやる、着いて来い。」

そう言つて千冬は歩き出した。

その後ろを少し遅れながらも着いていくシャルル。その顔は、若干の不安が浮かんでいた。



「では本日より、格闘及び射撃を含む実践的な訓練を開始する。」

「はい！」

合同授業では生徒数は何時もの倍。

故に何時もよりも気合が入った返事だった。

「今日は戦闘の実演をしてもらおう。ちょうど専用機持ちが居ることだしな。鳳！それと……オルコット！前へ出ろ。」

「はい！」

千冬に指名された2人は、人波を掻き分け前へと躍り出た。

「それでお相手はどちらに？この流れからして鳳さんという事は無いでしょうけど。」

「ふふん、あたしとしてはそれでも良いけど？」

「慌てるな、時期に来る。」

そう千冬が言った途端、センサーが何かを拾う。

それは人形で、何やら高速落下しているようだった。

『Master, you have fallen something.』

It falls with it as it is to master.』

「ははっ、面白いジョークだユリ。」

そう言いながら一夏は1歩後ろに下がる。

ドカーン!!

その刹那、一夏が立っていた場所にその人形がぶつかる。

「ほら、ぶつからないだろ？」

『It is a devil, master.』

落ちてきたのはISを装着し、目を回している真耶だった。

これが分かっていったからこそ、一夏は避けたのだろう。

「さあ、山田先生呆けてる暇はないぞ。」

「は、はい!」

千冬にそう言われ、慌ただしく佇まいを直す真耶。そのキリツとした表情は、先程まで目を回していた人と同一人物とは思えない。

「では始めるぞ。」

「え、2対1ですか。流石にそれは……」

鈴が反論をしようとするが、それを遮るように千冬が口を開く。

「安心しろ、今のお前ならすぐ負ける。」

「(ですわね)」

千冬に便乗するように、だがかなり小声で呟くセシリア。

だが鈴は、負けると言われ癩に触つたらしい。

闘志をたぎらせて、今にも飛び出さんばかりの気迫だ。

「手加減はしない。全力で叩き潰すわよ!!」

「まあ、それは良いですけど……はあ。」

「行きますよ2人共!」

闘志が溢れる鈴、対称的に気落ちしているセシリア。そして何時も以上に冷静な真耶。

反応は様々だった。

「では、始め!!」

号令と同時にセシリアと鈴が飛翔する。それを目視確認してから、真耶も空中へと躍り出た。

そしてそのまま鈴は真耶へと突っ込んでいった。

「はあ……やはりこうなりましたか。まあ、負けたくは無いのでお覚悟を。」

そう言うのとセシリアはライフルを構え、狙撃モードへ移行した。

「さて今のうちに……そうだな、デュノア。山田先生の使っているISの解説をしてみせろ」

「は、はい。山田先生が乗っている機体はデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』で、第二世代開発最後の機体でありながら、その汎用性の高さから第三世代にも劣らないスペックを持っています。」

現在配備されてる量産型ISの中でも世界第三位で、使い手を選ばず、各種戦闘スタ

イルに合わせて装備の換装が可能です。また……」

「ああ、その辺で良い。そろそろ終わるぞ。」

シャルルの解説を他所に、空中での試合は決着がついた。真耶の投擲したグレネードに落とされた鈴によって。

「はあ……降参ですわ。」

そして上空では、鈴が落ちていくのを見たセシリアが両手を上げていた。

「良いんですか？オルコットさん。まだ戦える筈ですが。」

「いえ、山田先生。これはあくまでもペアの模擬戦闘です。凰さんが落ちた時点で、私の負けですわ。」

落ちた鈴とは違う、流石主席代表候補生。

降参したとはいえ、まだ8割もSEを残していた。

鈴も決して弱いわけではないのだが、セシリアと比べてしまうと見劣りしてしまう。

「さて、これでIS学園の教員……そしてイギリスの主席代表候補生の實力はわかっただろう。以降は敬意持って接するように。」

鈴の傷口に泥と塩を混ぜて塗る行為を平然と行う千冬。流石に弁明の余地もない以上、鈴の弁護は2人共に出来なかったが。

「専用機持ちは……織斑、オルコット、風、デュノア、ボーデヴィツヒの5人だな。

よし、では8人グループになって実習を行う。織斑から各々出席番号順に別れて並べ
！」

その後は専用機持ち達が指導を行い、基本的な歩行をした。

途中立たせたまま降りてしまった事案が発生した。一夏がよじ登り稼働させ、屈ませ
たうえで乗らせていた。

流石にふざけようものなら出席簿が飛んでくる為、真面目にやることとなる。

第二話

そして時刻は昼休み。

何かと付けてシャルルから逃げていた一夏はセシリアを連れ、人気のない屋上の隅の方に居た。

疚しいことをするわけではなく、今から話す事を人に聞かれたくはない故にだ。

「呼び立てて悪いな、ちよつとあの転入生シャル・デュノアについて不審な点が2、3あつたからな。」

「それで理由付けしてデュノアさんから逃げていたんですね、不安そうな顔でしたわよ?。」

授業が終わり次第、無駄に洗練された技量でシャルルの視界から消える。そんなことをしながら、一夏は結局昼休みになつても未だにシャルルと話していない。

「で、今日はデュノアさんの事ですわね?。」

「ああ、お前なら確信しているだろうからな。」

「あいつが男装女子だと。」

一夏もセシリアも、シャルル・デュノアという人物を間近で見たときから違和感を感じていた。

故に一夏は気配を消し、シャルルを遠目から観察していた。そこで分かったことは、明らかに男を演じている感が滲み出ていた事だ。

「取り敢えずは泳がせて見ようかと思う、あいつが行動を起こしたら現行犯で取り押さえれば良いからな。今日からは一応普通に接してみるか。」

「ですわね、ではアイン？」

納得したのかしていないのか、そんなことはどうでも良いと言わんばかりのセシリア。

そのままの流れで一夏の腕へと抱き付く。

その事に若干戸惑う一夏だが、満足そうに笑みを浮かべる。

「では、戻りましょう？ 私達、お昼がまだですし。」

「そうだな、先ずは腹ごしらえといこうか。」

そう言うのと歩き出した。

因みに後日新聞部副部長により、写真が撮られていたり。それを一夏が奪取したり等が起きたそう。

—————△—————

その夜、一夏は自室に居た。

ベットが2つあり、現在までは一夏が1人部屋を謳歌していた場所だ。何故過去形なのかと言えば、一夏が部屋に戻ってくる道中まで遡る。

「あ、織斑君！見つけました！」

「ん？山田先生、どうしたんですか？」

真耶に呼び止められた一夏。

そしてその手に持つ書類をチラッと見る。それは……

「はい、えつとですね。今日転入生のデュノア君が来ましたが、部屋が足りないんですよ。」

今日入ってきたデュノア君の為に1人部屋を用意するのは、時間も足りなくてですね。織斑君の部屋に相部屋という形になりますが、良いですかね？」

「まあそう言うことなら、良いですよ。俺もちょうど話し相手が欲しかったところですし。」

思っている事とは裏腹に、誰が聞いても納得するような事を言う。実際のところ、事実探しののだが。

「ありがとうございます。では夕食後に連れていきますね。」

「はい、了解です。」

そんなこんなで現在は夕食後。

つまり指定された時間なのだ。

コンコンツ

ノックが響く。

つまりはちょうどやってきたのだろう。

ドアが開き、件の転入生、シャルル・デュノアが入ってくる。

そうして入ってくるなり、

「ようこそ！S学園へ、シャルル・デュノア君。歓迎しよう、盛大にな！」

「あ、うん。」

両腕を広げとてもイイ笑顔の一夏を見て、物凄く反応に困ったシャルルだった。



「改めて、俺の名は織斑一夏だ。一夏と呼んでくれれば幸いだ。同居人として、よろしくな。」

「あ、えっと。僕はシャルル・デュノア。シャルルで良いよ。改めてよろしく、一夏。」
ぎこちない雰囲気から一転、一夏が自己紹介をした為にそれに合わせるシャルル。

一夏のなかでは先程の事は無かったことにしており、少々固くなるシャルルに対して苦笑いが浮かんでいた。

そんな緊張を解す為か、一夏は紅茶を入れる。

その仕草は洗練され、宮廷御抱えの執事だと言われても遜色はない位。

近くで見えていたシャルルも、若干顔を赤らめていた。

「お待たせ。若干緊張しているようだからな、ダーズリンを淹れてみた。」

「ありがとう……あ、美味しい。」

リラックス効果のあるダージリンを飲んだ為か、徐々に緊張も解れていくシャルル。だが同時に何故、という疑問が浮かんでくる。

シャルルから見ても一夏は、どう見ても日本人。

そこまで紅茶文化が浸透していない国だ。

にも関わらず、一夏が紅茶を淹れるのに使った茶器は明らかに本場のもの。

それに仕草も日本では習わないような、本格的なものだった。

「ねえ一夏、一夏って日本人だよね？ どうしてこんなに紅茶を淹れるのが上手なの？」

「あー……6年位イギリスに居たからな、その時に習った。」

実際はセシリアの為と言っても過言ではない。

主席代表候補なんて呼ばれてはいるが、セシリアは貴族の令嬢なのだ。常に側に居た

一夏は執事の真似事もしたことがある、その時に作法が出来なければ恥をかくと思いい習得したのだ。

と言っても紅茶自体はセシリア直伝なのだが。

「そう言えば一夏。一夏って放課後に訓練しているって聞いたけど本当？」

「なんだ藪から棒に。まあ、毎日やらなきや鈍るからな。一応やってるが。」

訓練と銘を打っているが、実際のところはISを使わない組み手に近い。

ISは1種のパワードスーツであり、本人の技量に左右される。故に生身でもある程

度戦えるようになれば、ISに乗ったときでも技術向上が見込めるのだ。生身で出来ないことがISに乗った途端に出来るかと言われても、出来る人は少ないだろう。

「僕も参加して良いかな？一応代表候補生だし、少し位は役に立てると思うんだ。」

「大歓迎だ。最近マンネリ化してきたからな、新たな風が吹けばそれも変わるだろう。」

一夏の言う通り、訓練とは名ばかりのセシリアと一夏の組み手である。だがそろそろネタ切れに近いのだ。スパージング、CQC、剣術など、出来そうなものは一通りやったが2度目以降は飽いて来るものだ。

「うん、任せてよ。」

「ああ、よろしく。」

—————△—————

「えつとね、少し整理させて？一夏は初心者何だよね？」

「ああ、（書類上は）初心者だな。」

シャルルが転校してきてから5日が経ち、今日は土曜日。土曜日はアリーナが全開放されほとんどの生徒が実習に使う。一夏もそれは同じこと。

今日はシャルルと、ISを使った肩慣らし程度の軽い手合わせをしていた。

そんななかシャルルは一夏へと視線を向け……

「一夏がここまで強いなんて、僕聞いてないんだけど。ていうか何あの軌道!?!何で瞬時^{瞬間的}加速中に曲がれるの!?!普通は無理だよ!!あんな軌道したら内臓逝っちゃうからね!?!」

叫ぶシャルル、無理もない。

戦闘中に一夏は、シャルルの射程圏外からスタートした。そこまでは普通なのだが、そこから一夏は瞬時加速をし、その最中に軌道を曲げたのだ。何て事はないと思うだろうが、本来瞬時加速は直線的にしか進めない。それは使用中の空気抵抗や圧力等が原因で、無理に曲がろうとすれば内臓や骨にダメージを負う。

「地面に剣でも刺せば、それを支点に回れると思うぞ?」

「そんな事してなかったよね!?!それに一夏はずっと空中に居たじゃん!?!何言ってるの!?!」

実際のところ一夏は、瞬時加速中に別方向へと瞬時加速をする事で曲がっていた。二重瞬時加速の応用だ。これも判断を誤れば同じことになるのだが、割愛しよう。

判断力を欠いたシャルルに対し、最高速度を保った一夏が接近し即効落とされたのだ。

「デュノアさん……そんなに叫んで疲れませんか？ 私にその元気を分けてもらいたい程なのですが。」

「疲れるよ?!むしろ僕の方が元気を分けてほしいよ!というかもう疲れすぎて訓練できないよ!」

疲れきったシャルルに口撃するセシリア。

それに対して反撃するも、それ以上何もできずにへたり混むシャルル。

するとそこに……

「ねえ、ちよつとアレ……」

「ウソつ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いてたけど……」

急にアリーナ内がざわつき始める。

そこにいたのは、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒだった。転校初日以来クラスに馴染み、以来マスコットの存在になりつつある。若干天然が入ったその性格に、心惹かれる人が多いとか。そんな件の彼女ラウラは、徐々に一夏達へと近付いていく。

「むっ……セシリアに用があったのだが、他にも居たのか……」

「あら、久し振りですわね。ボーデヴィツヒ少尉。」

ラウラの探し人はセシリアのようで、来て早々に他にも居て戸惑ったようだ。

だが物腰の柔らかさに近くに居た人全員、ほんわかしていた。

「ああ、久し振りだなオルコット中佐。だが私は今は少佐だ。」

「なら私も訂正を、今はもう中佐ではありませんわ。我が部隊は解体されましたし。」

「ならアインザックもか？」

「ええ、アインも既に軍属ではありません。」

そう聞くと少々落胆したかのような表情を浮かべるラウラ。彼女にとっても、Strayed部隊は思い入れがあつたらしい。

「とても残念だ。また合同作戦でも、と思っていたのだが。」

「そう言つてくださるだけで、部下も喜ぶ筈ですわ。」

そう言つたセシリアの目には、悲壮感が込められていた。

それを感じ取つたのか、一夏も近付いてくる。

「大丈夫だセシル。悔いは無いと、あいつらは言つていただろう？」

「……はい」

そんな2人を見て、ラウラは悟つた。

部下の死、そして己の失言を。

「すまない、軽率な発言だった。」

「いや、良いんだ。そう言ってくれる程、あいつらは優秀だったんだ。それを俺らは誇りに思う、それが手向けだ。」

先程とは打って変わって暗い雰囲気の流れる。

そして置いてかれてるシャルルは、何の事だかさっぱりな為首を傾げていた。

「さて、暗くなってもしょうがない。ところでラウラ、何か用事でもあったんじゃないのか？」

「おお、そうだった。セシリアに1戦申し込もうと思つてな。」

「私に……ですか？」

その一言によりセシリアは首を傾げる。

戦いを挑まれる理由が見つからないからだ。

一夏程戦闘凶という訳では無いので、争わないならそれで良いと考えるセシリア。

だが……

「ああ、純粹に今の技量で何処まで通じるか試してみたくなつてな。世界で有数の実力者で、尚且つ次期国家代表とも言われる程だ。挑みたくもなるだろう？」

「ふむ、わからなくはないな。」

「アイン!？」

予想外の切り返しに声をあげて驚くセシリア。

唯一の味方の裏切りに会い、仕方ないと言わんばかりに溜め息を吐く。

「わかりましたわ……！戦だけですからね？」

「感謝する。既に根回しは終わっているから、管制室に一声掛けるだけで良い。」

「拒否するだけ無駄と言う奴ですわね。知ってますか？ラウラさん。そういうのを事後承諾と言うのですよ？」

「そうなのか？」

ラウラの返答に落胆するセシリアを他所に、一夏は早速管制室へと連絡を入れる。

するとすぐに電光掲示板が切り替わり、セシリアとラウラの戦いが準備された。表示され、すぐに一夏はシャルルを引き摺る勢いでアリーナの隅に運ぶ。ここなら攻撃は届かないと思う場所へ。念のためISは纏ったままだが。

「それではラウラさん、行きますわよ。覚悟は宜しいですね？」

「ああ。私が勝てるとは微塵も思っていないが、胸を借りるつもりで行かせてもらう。」

そう言う両者共に飛翔し、戦闘準備を開始する。

セシリアはライフルを構え、ラウラはプラズマ手刀を展開する。

『それでは両者、試合を開始してください。』

ブーツとブザーが鳴る。

その音と同時に両者は飛び出し、そして案の定……

「やあっ!!!」

「はあっ!!!」

ギンツ!!

バチバチ

セシリアのライフルとラウラの手刀はぶつかり、激しいスパークを散らす。

一夏の刀とぶつかった時以上の激しさに、思わず顔をしかめるセシリア。

それもそのはず、ラウラの手刀は名前の通りプラズマを含む。放出される高出力のプラズマによって手刀は数万℃にも及ぶガスを噴出するのだ、如何に砲身が堅くとも金属である限り容易に溶断される。

それを瞬時に判断したセシリアは即座に距離を放し、切り札を切る。

「ツチ、そんな厄介なものを積んでいるなんて。でも、これで関係ないですわね。行きなさいティア!!」

「早速お出ましか、これで私の勝率は無くなったな。だが、最後まで足掻く!」

ラウラがそう言う。

それもその筈、セシリアが固有武装を展開したときの勝率は99%である。一夏と

戦った時以外は一切負けていないのだ、それに勝ち辛い戦法もある。

それは……

「4方向同時の偏向射撃。貴女に避けられますか?」

ラウラの四方を菱形状に陣取ったBTから、マシンガンのごとく放たれるレーザー。その全てが自在軌道を描き、ラウラの周囲逃げ道を守る様に展開される。

そこから飛び出るように、レーザーはラウラに向け飛んでいく。

セシリアが一夏以外に常勝無敗な訳。

接近戦が効かないと判断した途端に、BT4機をフル稼働した偏向射撃によって完封するからである。

それ以外にも、

「くっ!!」

「ほらほら、背中ががら空きですわよ?」

偏向射撃によって混乱している相手の周囲を旋回し、隙を見つけてはそこをピンポイント射撃もしてくるのである。

全方位から迫るレーザーを避けるのに必死になれば、セシリア自身のライフルから放たれるレーザーに撃たれる。

その他大勢の代表候補生の追従を許さない程の技量と実力、しかも試作機の専用機で

それを成しているのだ。これこそ、セシリアが主席代表候補生と呼ばれる由縁だ。そうこうしているうちに、試合は終了する。

『シユヴァルツェア・レーゲンSEエンプティ、勝者セシリア・オルコット。』

完封勝利を果たしたセシリアは、優雅に降りてくる。反対にラウラは優雅さには欠けるが、その顔は負けたにも関わらず良い顔であった。

「やはり負けたか。いい線行っていると思っただが、悔しいな。」

「アイン以外に負けるつもりはありませんわよ？もしそんなことがあれば、私は主席代表候補生ではなくなりますし。」

4方向同時の偏向射撃、対象の周囲をレーザーが球体の様に多い尽くす技。

正式名称はB T フル・ティアースクアルテット 四重奏という。

これを唯一、一夏だけは攻略したのだ。

接近戦で拮抗する一夏に対しセシリアが使用したが、迫るレーザーを悉く切り裂き、無理矢理周囲のレーザー毎巻き込み瞬時加速二式で出てくるという荒業で。

因みにセシリアはイギリス政府から、一夏以外には負けるなど言われる程。それほどに一夏とセシリアの実力は拮抗しているのだ。

「まあ、良い。後はもう少し喰らい付けるようにしなくては。では、邪魔をした。セシリア、付き合ってもらつて悪かった。」

「いえいえ、こちらも良い経験になりましたわ。」

そう言うトラウラは元来た道を引き返していった。その顔は来たときよりも嬉しうだった。

そして……

「ハッ！なんか今、物凄い光景を見ていた気が！」

「事実だから受け入れろシャルル、これから先やつていけないぞ？」

啞然として今の今まで呆けていたシャルルが目を覚ます。

夢であつてほしいと願うシャルルに、無情にも現実を突き付けられる。

主席代表候補生は強いから挑んでも返り討ちだ。

そう呟かれる人物がいったいどれ程のものか、自分も挑んでみたいという気持ちがあつたシャルル。だが目の前の光景を目の当たりにして思った、次元が違ふと。

「まあいいか。ところでシャルル、俺は先に戻るがお前は どうする？」

「あ、うん。もう少ししてから行くよ。」

「了解だ。んじゃあセシルもまたあとでな。」

「ええ、また。」

そう言つて一夏はアリーナを後にし、自室へと戻つていった。

その足取りは軽く、そして……

「さあて、出番だぜ。白式。」

第三話 改投

「動くなよ？手前の頭がザクロになりたくなければな。」

「……っ！」

IS学園の学生寮の一室、シャルルが入ってくるまでは一人用として謳歌していた一夏の部屋では物々しい空気が満ちていた。

部屋自体は他と何ら変わることはない。総じて、同じ設計での建築構成となつていゝる。なればそこに満ちる空気、それに色を付けるのはそこに居る人間だ。つまり、この物々しい空気は今この部屋に居る者によつて作り上げられているということに他ならない。

確かに部屋の空気は物々しい。だが、誰かが今の一夏の部屋を見れば、その空気を感じるよりも早くただならぬ事態を察するだろう。

やや青ざめた表情で微動だにせず、立ちつくすシャルル。

そしてその後頭部へとホルスターより抜き放た銃を、その砲身を突き付ける一夏。誰がどう見ても通報もの、そんな光景が広がっていた。

時は少し遡り。

部屋へと帰ってきた一夏は自身のベットの上に、わざとらしく白式を置いた。

そして近くに置いてあるPCと繋ぎやすいよう、これまたわざとらしくケーブルを置く。

念を押したこの6日間、シャルルが来る前から腕に白式を着けていたのだ。つまりシャルルは一夏の専用機を、白式だと思い込んでいる筈である。

この行動からわかる通り、一夏は実験をすることにした。何も無ければ御の字、もしあれば実験は成功する。

つまりはシャルルが男装した上で、一夏の専用機の情報、または機体を盗みに来たと確定してしまうのだ。

「じゃあ後は奴さん次第かねえ。本当、こんなものにどんな価値があるんだか。」

そう言う一夏だが、IS関連。ひいては開発企業にとっては、世界で唯一の男性操縦者。

織斑一夏の専用機、そのデータを欲しがる人間はイギリスを除き世界中に居る。

イギリスはその保有する専用機、ブルー・ティアーズが一夏と戦闘行為をするだけでデータが集まるのだ。

イギリス、ドイツ、イタリアと言ったEU圏内における有力3カ国、それに加えアメリカや日本などの技術進歩した強国が第三世代機を試作機ながらも作り上げたという事実が世界中を震撼させたのだ。それに遅れながらも中国、ロシアも第三世代機を作り出したという。それによりその他の国々では躍起になって開発が始まった。

第三世代機、未だに開発が進んでいない国では机上の空論でそれが何たるかが一切実現していない。

そもそも第三世代型というのは操縦者の意志の力によって稼働する武器、及び装備を搭載した機体である。

操縦者の意志イメンジ・インターフェイスによる操作装置は燃費が悪いらしく、未だに実験の域をでないが……I S コアに眠る単一仕様能力ワンオフ・アビリティ、その力を誰でも自在に使用できるようにするという構想の元開発された。純粹な単一仕様能力ではない為に誰にでも使えるが、その稼働が操縦者

の意志頼りな点が今後の課題として挙げられている。

そんな第三世代機の開発に躍起になっている時に世界で唯一の男性操縦者が現れたのだ。

しかも専用機が支給され、その機体は日本の第三世代と来た。

技術的にはほぼ最先端を行く日本の第三世代型のデータ、それも唯一の男性操縦者が乗った未知のフラグメントマップを回収出来れば、開発は飛躍的に進展する。そう考えるから、織斑一夏の機体データ及び機体自体は相当貴重なのだ。

何なら本人でも良いのだ。

モルモットにして使い潰せば、今よりも確実に技術改革が起きるのだから。

『アイン。対象はアリーナを出てそちらへ向かいました、準備はよろしいですね?』

「ああ、セシル。これより作戦を決定する。出来れば失敗してほしいがな。」

『それはデュノアさん次第でしょう。』

一夏へと通信が入り、件の実験が始まった。

シャルルがアリーナを出て部屋へと帰るまで、セシリアは背後を位置取り一切の気配

無く尾行。

その行動を逐一、一夏へと報告していた。

その報告を聞きながら、一夏は行動を起こす。

箆笥の隙間へとその身を滑らせ、一切の気配を消して待機する。

「さて、藪をつついて何が出るかな。出来ることなら、こいつを撃ちたくはないんだよな。」

そう言つて左側胸を叩く。

そこにはホルスターに入った、サイレンサー一体型の銃。Maxim 9があつた。

—————△—————

着々と準備が進む頃、件のシャルルはちょうどアリーナを出たところだつた。

自分から言い出した事とは言え、イギリスの主席代表候補生のレベルの高さを間近で見えてしまい、呆けてしまつていた自分。

そしてこの学園に居る以上、いずれは戦わなければいけないときが来る。そう思うと

気分が沈んでいく。

その気持ちを振り払うかのように首を振り、シャワーでも浴びようとその足を急がせる。

そして、自身がここに来た経緯を思いだし気を落とす。

シャルル・デュノア……否、シャルロット・デュノアがこのIS学園に来たのは『データ』が目的である。

彼女の祖国であるフランス、そこに存在する企業『デュノア社』は、世界でも1、2を争う程に優秀な機体『ラファール・リヴァイヴ』を世に生み出した。

だが、そんな名機を生み出したという国家の威信を掛けた栄光を脅かしつつあったのが、自国も加盟するEU。欧州連合に加盟する内の3国、イギリス、ドイツ、イタリアが、次々に第三世代機の開発に成功し、『イグニッション・プラン』を発足したことだ。フランスのラファール・リヴァイヴは確かに優秀だったが、第二世代型なのだ。

元々リヴァイヴ自体も最後継機なので、第三世代機開発に遅れを取る事となる。

第三世代機開発が遅れば遅れるほどに、欧州連合のイグニッション・プランからは除名。

そして開発資金援助も少なくなり、結果開発が遅れる。負のスパイラルが出来上がる。

援助が無くなり、IS開発が出来なくなれば会社は当然経営危機に陥る。

そんななか世界を揺るがせる一報が駆け巡った

世界初の男性操縦者の発覚である。

その情報にいの一番に食いついたのはフランス政府だった。

男性操縦者のフラグメントパターン、及び機体の入手。それと引き換えにデユノア社へと援助を申し立てたのである。

そこでデユノア社は体よく使えるであろうシャルロット・デユノアをIS学園へと送り込んだ。

広告塔となるよう男装させて。

それがシャルロット……シャルル・デユノアとしての役割だった。

「はあ……」

若干重い足取りで部屋に戻ってきたシャルルは、自身のベットに腰掛ける。

これからしなければならぬ事を考えると乗り気はしなかった。

ふと、一夏のベットを見ると無防備に置かれた一夏の専用機があった。

あまりにも無防備なので思考が止まる、だがこれ幸いと早速行動することにした。

近場にあるPCに自分の端末を差し、一夏の専用機……『白式』をPCへと接続する。

そして……

「え、何で!?あれだけ動いてるのに!?何処にもデータが存在しない!?!」

「当たり前だろう?白式それには乗ったことすらないんだ、初期化フオートリセットも最適化フェッティングもしていないんだぜ。データなんて入ってる筈がないだろう?」

この学園において聞き間違える筈のない声が、シャルルの真後ろ、驚く程近くから聞こえる。

声の主は他でもない、この学園唯一の男子。

織斑一夏だ。

その声を聞いたとたんに、シャルルは反射的に逃げようとした。人間としての防衛本能が鳴らす、アラートにしたがったのだろう。

だが、

ガチャ!

「動くなよ?手前の頭がザクロになりたくなければな。」

突き付けられた銃により、動けなくなった。



「なんで……何時からそこに……」

「最初から居たさ。もつとも、気配は消してたがな。」

「ど、どうして……」

「そのベット上のあからさまに広げられた物を見て気付かないか？ どうして最初から置いてあったのかな。」

そう言われてシャルルは気付いたのだろう。

最初から疑われていた事を。

そうして一夏は罫を仕掛け、シャルルは見事に引つ掛かったのである。

「何時から疑ってたの？」

「最初から……いや、正確に言えばお前の転入届けを見たときからだな。」

そう言って一夏は懐から、畳まれた一枚の紙を取り出す。

そこには、シャルル・デュノアとしての全てが書かれていたが……

「かなり不自然だったからな。」

ネットにも新聞にも世間で新たに、男性操縦者発見のニュースは発表されていない。それに男性操縦者が代表候補生で、専用機持ちつてのが可笑しいんだよ。

俺みたいなデータ取りならまだしも、最初から持つて入つてくる時点で怪しさ満点だったさ。

それと後は、お前の骨格が明らかに女のそれだったしな。」

「バレバレだった……つてことか。」

シャルルは観念したのか両手を挙げる。

そうなれば一夏は銃を突き付ける理由もなくなる訳だが、用心の为一夏は突き付けたままだった。

「僕を突き出すの、少し待つてくれると嬉しいんだけど。良い？」

「何だ？何か言い残す事でもあるのか？」

「うん。」

実はね……

僕の父の会社……デユノア社なんだけど……最近経営が上手くいつて無いらしいんだ。欧州連合で第三世代型I S開発を行う「イグニツションプラン」からも除名されているし、元々第三世代型の開発が遅れてしまっているからね。

そんなとき都合よく現れたのが君。

世界初の男性操縦者としてデユノア社も注目していたよ。

そこで選ばれたのが、引き取られてテストパイロットをやっていた僕。

そして下された命令が君のデータ取りと広告塔、あわよくば君の専用機の入手だったんだね。

それで2人目の男性操縦者としてここに来たんだ。

まあ失敗したし、僕は牢屋行きになるんだらうけど。ぶっちゃけどうでも良いんだよね。あつちに居ても僕は腫れ物扱い。まあ愛人の娘なんてそんなものだけどさ。ある日突然社長の使いがやって来て、来いだよ？やんなっちゃうよね。

元々お母さんが死んだ時点で日本に亡命しようと思ってたから、会社の為に動くのはこれで最後。動いた事実があればいいし。

手続きも、向こうでやってきたからね。」

そう満面の笑顔で言うシャルル。

まるで私には全く関係ないと言わんばかりに。

そんな彼女を見て、一夏は溜息を吐いた。

「はあ……シャルル。お前、よく凶々しいって言われないか？」

銃を突き付けられているこの状況。

そんななか己の言いたい放題のシャルルにそう言う、が…

「え？ごめん、もう一度言ってもらえない？よく聞こえなかったんだ。」

その切り返しは流石に予想していなかったのだろう、一夏は固まっていた。何とか持ち直し、もう一度言う訳だが…

「お前凶々しいって言われるだろ、絶対。」

「え？ごめん、もう一度言ってもらえない？よく聞こえなかったんだ。」

2度目も同じような返答で返される。

流石にこれには返さなかった。

そして、若干投げやりになりながら…

「あーもういい。お前の返答で充分わかった。取り敢えず、そこに居ろ。」

一夏は米神を押さえながら無線機を取り、現状を報告した。

その相手とは……

「セシル、作戦を放棄。そのまま俺の部屋へ来てくれ。」

『了解ですわ。ですが、説明はしてもらいますわよ?』

「ああ、必ずな。では、なるべく急いでくれ。」

『はい、すぐに行きますわ。』

そう言うのと無線をベットへと投げた。そしてシャルルに向き合うと、一夏は……

「さて、お前の状況を全部説明してもらおうか。」

—————△—————

「なるほど、何とも迷惑で頭の痛い話ですわね。」

「そうだろうか? 全くこの女は……」

一夏は新たに部屋へと入ってきたセシリアに、先程のシャルルとの会話、その全てを伝えた。

その時にチラツとシャルルを見たが：

「ん？どしたの、一夏。」

「…いや、何でもないぞ。」

すぐくマイペース、尚且つ緊張感の欠片も無い態度だった。

つい先程まで、銃を突き付けられていた人間の反応とは思えないものだ。

「ところで、この後お前は どうするつもり何だ？日本に亡命するとして、こちら側でも色々手続きがあるはずだが。」

「ああその事。それなら大丈夫。」

そう言つてシャルルは、己の鞆から紙束を取り出した。

「申請書類も全部パス済み。だから問題なしだね！」

根回しの早さに一夏もセシリアも開いた口が塞がらなかつた。

というのも申請書類全てをパス済みにする為には、1週間く3週間程前から申請する必要がある。その後、受理されるまでに最低1週間は掛かる。

それをもう既に全て終わっているとなると、かなり前から計画していた事がわかる。

「こいつがデータを盗もうとしていた事実は変わらない訳なんだが、如何せん調子狂うな。」

「ですわね……私も、このタイプの人間に出会ったのは初めてですわ。」

シャルルの性格を知り、もう既に関わりたく無くなってきた一夏。

己の専用機を狙っていたスパイの筈なのに、そんな事どうでも良いと言われた訳だ。

処遇を決めなければいけないのだが、決めかねているという状況になった。

「処分は面倒だし追々で良いか？スパイってのは事実なんだし。」

「まあ、そうですわね。このまま害が無いのならそうしましょうか。」

一夏もセシリアも、面倒になりながらもそう締め括った。

第四話

次の日の日曜、一夏は頭を抱え悩んでいた。

それは…

「いっしょどうしよう…」

一夏の専用機はユリだけ、力を引き出せるのもそれだけである。

訓練機も含め他の機体では、一夏が行使する技の数々に耐えきれず、機体が耐用限界に達するのだ。他の専用機でも同様だ。

通常、機体側はスラスターの耐久力の関係上、精々が瞬間^{イグニッション・ブースト}加速、もしくは

ダブルイグニッション・ブースト
二重瞬時加速を連続1回までしか耐えられない。

一夏みたいに瞬時加速二式を使ったり、二重瞬時加速を乱用したりなど想定していないのだ。

操縦者の保護機能にも限界があり、いくら耐G性能があるとはいえ、乱用されれば許容限界を優に超えてしまう。

その為、この白式をどうするか悩んでいた。

カタログ上スラスタが2機あったが、その耐久力等はユリと比べるのも烏澁がましい程低かった。

倉持技研きつての最高傑作である白式。

現行のI Sを追い抜く加速を実現させ、唯一第一形態時から単一仕様能力を^{ワンオフ・アビリティ}発現する事が出来るよう作られた機体。

それでも、一夏の加速技術を使う上では枷にしかない。

白式のスペックとしては確かに、現行稼働しうる第三世代機の中では抜きん出て高い。

2つあるスラスタの耐用限界も、他の機体と比べれば確かに高水準に仕上がって

る。

装備の方もブレオンではあるものの、それを使った単一仕様能力『零落白夜』れいらくびやくやは全ての装備の中で最大の攻撃力を誇る。

エネルギー消費という問題に目を瞑れば、良い機体ではある。

だがあくまでそれは他人からの評価だ。

一夏から見れば、この機体は単なる欠陥機に過ぎない。

スペック上ユリと比べてしまえば、何とも遅く、脆く、そして弱いのだ。

確かに現行トップの性能なのだろう。

ティアーズ、甲龍、リヴァイヴ、レーゲンを上回る加速性能と攻撃力を持っているのだ。

だからこそ一夏は思うのだ、何せ…

「その機体ユリちゃんを作ったのは束さんだもん、そんな欠陥機白式如きには負けないよ。」

咄嗟に一夏は銃を抜き放ち、後ろを振り向いた。だがそこには居るはずの人影すらも見つけることが出来なかった。何故なら…

「いやあ、流石いっくん。でも惜しい。もうちよつとで束さん撃たれる所だったよ。」

一夏が振り返った方向の後ろ、つまり一夏の真後ろにその人物は居た。

その人物はウサ耳カチューシャを付け、胸元が若干開いたエプロンドレスのような物を着た女性。

「何のようですか？束さん。」

そこに居たのは大天才、天災科学者とも呼ばれる『篠ノ之束』だった。

「のんのん、その紹介はちよつと違うよ。自他共に認める天災科学者だよ。あ、でもでもマッドサイエンティストじゃないからね？」

束はそう言うところちらを見ながら笑いかけてくる。

違いがあつたようだ。

そこに居たのは自他共に認める世紀の天災科学者、『篠ノ之束』だった。

「誰に言ってるんですか…？」

「ん？ちよつと画面作の前の人者にね。まあ、気にしないで良いよ。ところでいっくんは、それをどうにかしたいんだよね？」

束が指を指すその先、そこには一夏の手握られた白式があつた。

「貰つたは良いが、俺には合わないからな。」

「そりやあそうだよ、データ取り用の試作機だし。」

まあ前回の話で罨に使ったけど、それ以降使い道無くなったのが大きいけどね。」

東の最もな意見に黙り込む一夏。

白式はそもそも、一夏の稼働データを取る為の専用機として支給されたものだ。

「…？まあこいつがユリに追い付けないってのが、そもそも理由なんだがな。」

「ユリちゃんは東さんの最高傑作だもん、そんなガラクタ程度が追い付ける筈が無いんだよ。追い付けるとしても、精々ブルー・ティアーズじゃないと。」

そう言う通り『タイプ56百合』は、東が一夏の為に手掛けた唯一無二の機体。

白式以上に現行全てのISを凌駕する機動性能、防御性能、そして何より抜群の耐久性と耐G性を誇る。一夏が無茶出来るのもこのおかげだったりする。

そしてブルー・ティアーズも特殊な改装を施されており、ユリに追従出来るほどの性能を誇る。

「じゃあ白式は東さんが回収してあげよう。」

「まあ、手元から離れるのならちようど良い。お願いしよう。」

そう言うのと、一夏は手に持っていた白式を渡した。

それを受け取った東は、白式を無造作にポケットへと突っ込んだ。

そして手を抜く拍子に、思い出したかのように口を開いた。

「あ、そうだいっくん。セシリん元気？もう4年も会ってないから気になっちゃって。」
「元気だが、そこまで気になるのなら会っていくか？呼べばすぐ来るぞ？」
そう言つて一夏は携帯を開き、電話を掛けようとするが…東の手により携帯が閉じられた。

「いいや。近々林間学校があるよね？その時に行くからそこで会えるし。」

そう言いながら東は立ち上がり、窓へと手を掛けた。

「じゃあねいっくん。セシリんの事、大切にするんだよ？」

「ああ、言われなくても。」

そのまま東は窓から飛び降り、人參に乗って飛び去つていった。



時は少し遡る。

学年別個人トーナメントについて御触れが出され、各クラスが話題で持ちきりになっているとき。

その日の夜、一夏は部屋で横になっていた。

動けるまでに回復したとはいえ、まだ無人機に受けた傷が治りきっていないのだ。なのでこのまま寝ようか、と考えていた所で。

コンコン

ノック音が響く。今日までの間、一夏が重症を負ったのは周知の事実。ましてまだ治りきっていない事など誰もが知っていた。

故に一夏が部屋に帰って休息を取るという事も噂に広まっており、部屋に突撃しようとする者は誰一人居なかった。

ただ一人を除き。

ドンドン！

流石に拳の音が響いては、一夏も無視は決め込めない。ベッドから飛び起きてドアへ

と向かう。そして…

「誰だ？」

「…私だ。」

一夏がドアを開けると

そこには若干顔を赤くして立っている篠ノ之箒の姿があった。

「何のようだ？」

「……………」

一夏はそう聞くが箒は答えない。その事が一夏を不快にさせるのだが、グツと堪える。

そして用件を答えない為に無言になる。

どちらも黙ったままの為、お互いに沈黙したまま時間が過ぎていく。

「用がないなら俺はもう寝るぞ、これでも怪我人なんぞな。」

「よ、用ならある！」

部屋に戻ろうとした一夏を、慌てて引き留める箒。

その切迫した表情から、重要な用事なのだろうと推測するが。

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが……」

「ああ、あるな。それで？」

「わ、私が優勝したらー」

頬を紅潮させ、箒は言葉を続ける。

その時点で一夏はいやな予感を感じ、お引き取り願おうと考えた。そしてそのままドアを閉めた。

「つ、付き合ってもrーおい！まだ言い終わってないぞー！」

「その話なら却下だ！却下！」

「な、何故だ！私が勇気を振り絞って言っているのだぞ！考慮してくれても良いじゃないかー！」

「考慮セシルが居るからした結果、無理と判断した。じゃ、おやすみ。」
うろたえる箒を無視し、一夏はベットへと潜った。

ドンドン！

「おい！一夏！まだ話は終わっていないぞー！」

ドアを拳で叩き、部屋の前で叫ぶ箒。

その騒ぎを聞き付け、千冬がやってくるのも時間の問題だろう。

「もういい！トーナメントで私が優勝したら絶対付き合ってもらわうからな！」

そう叫び、去っていった。

この事が、一夏を悩ませる噂になったのだ。

———△———

「それ本当!？」

「嘘じゃないでしょうね?」

月曜の朝、教室に向かっている一夏の耳にも届く声。
それに対し、一夏は疑問を浮かべた。

「何だ?何かあったのか?」

「さあ?」

一夏の隣にいるのはシャルル。

正体がバレていない為、未だに同室である。

故に一緒に部屋を出て、そのまま来たのだ。

「本当だつてば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝できたら織斑君と交際でき——」

「俺がどうしたつて？」

「「きゃああっ!!」」

一夏は自身の名が出たために会話に割って入ったが、返ってきたのは取り乱した悲鳴だった。

「で、何の話だ？俺の名前が出ていたみたいだが。」

その事を聞こうとしたとき、まるで思い出したかのように話を止めクラスへと戻っていった。

「じゃあ私も自分のクラスに戻るから！」

「そうだね！私達も席につかないとね！」

パタパタとよそよそしい様子で女子達は自分のクラス・席へと戻っていった。

ふと顔を上げた一夏はある一点を見た。

そこには…

「……何の話何だろうね」

「さあ…な。」

アイコンタクトした
セシリアと目が合った一夏だった。

——△——

(な、何故このようなことに……)

教室の窓側列で箒は表面上平静を装いつつも、心の中では頭を抱えていた。近頃なにか月末の学年別トーナメントに関する噂が流れていることは箒自身知っていた。

しかし、問題はその内容で。

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際出来る』。

(それは私と一夏だけの話の筈だ！)

一夏が言いふらしたとは考えられない、となればどこからか情報が漏れたと考える。

今にして見れば、少々声が大きかったかもしれないと思う。だがふたりだけの秘密、そう思い安心していた為わからないことであつた。

「……………」

しかし、現実にはもうほとんどの女子が知ることとなつてゐるらしい、先程も教室にやつてきた上級生が『学年が違う優勝者はどうするのか』『授賞式での発表は可能か』などとクラスの情報通に訊きに來ていた。

(まずいな、これは非常にまずい……)

自分以外が一夏と付き合うことに激しい抵抗感を覚える、それは言うまでもないだろう。そう言う箒自身、一夏に恋人がいる事はまだ知らない。それ故の花盛りの十代乙女、溢れる情動の暴走を止められる者など居る訳がない。

(と、とにかく、優勝だ。優勝すれば問題ない)

そう決意する箒。だが箒の実力は他のクラス女子と同じくらいであり、優勝には程遠い。

何故ならトーナメントには一夏は勿論、セシリアも出るのだから。

他の代表候補生であるシャルル、鈴、ラウラを3人同時に瞬殺出来るのであれば、僅かに勝機はあるだろうが。

—————△—————

「はあ!?!なんだそれ。」

その日の昼休み、一夏はセシリアと情報漏えい防止のためシャルルを連れて屋上へと来ていた。

そして教室での噂話、その事の顛末を聞き驚愕した。

「その反応、聞いたときの私と同じですわね。」

「反応まで同じなんて、本当にお似合いだねえ」

シャルルにより弄られた2人だが、彼らは全く動じなかった。むしろ……

「アイン、お似合いですって私達。」

「ああ、ありがたい事だ。だが、話がズレてるんだが。」

シャルルの目なんか無視するようにいちやつく2人だが当初の予定通り、噂話について話を戻す一夏。

「全く……で、僕が聞いたのと相違無い?」

「ああ、違いはない。」

シャルルの聞いたもの、一夏の聞いたもの。

違いはなく

学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際出来る。と言うものだった。

「出所を探る？僕は動けるけど……」

「いや、心当たりはあるからそれはいい。」

「何か知っていますの？」

先日起きた出来事。

篠ノ之箒が一夏の部屋の前で叫んでいた事。

それを報告する一夏。

そうなれば……

「はあ……またあの人ですか？いい加減、面倒になってきましたわ……」

「あはは……何もフォロー出来ないよ、篠ノ之さん。」

箒のその行動にセシリアは呆れ、シャルルは苦笑いするしかない。

迷惑を考えずに大声で叫ぶなど、ましてそれが噂としてここまで広がっているのだ。

仕方がないものだろう。

「でもそれなら、2人が付き合ってる事言えば何とか出来ない？」

「いや、無理だろうな。あいつは俺に執着している。言ったところで認めないとか言い出して、実力行使に出るだけだ。」

一夏が言ったところで、箒は変な解釈をする。

一夏が小さいときからそうであつた為に、既に一夏は諦めていた。だからこそ一夏は、そう言い切れるのだ。

「随分確信的ですわね……そこまで酷いんですの？」

「ああ。あいつの執着は相当なものだ、生まれ持つての才能だと思つて。」

そんな才能有つてもどうしようもないのだが、一夏はその部分だけ箒を称賛した。

哀れ箒。

「まあ優勝者だけつてのがあるがたい事だ、俺かセシリアが優勝すれば問題ないしな。」
「はー！」

そう言つてセシリアは抱き付き、一夏はそれを受け入れる。

2人の桃色空間が展開される、それを見てシャルルは……

「頑張つてねえ……はあ暑い暑い。」

ただただ砂糖を吐きたくて仕方がなかつた。

第五話

「ねえセシリア。」

「どうしたんですの?」

噂話について一段落。

一夏とセシリアが出張つて噂を止めるため、どちらかが優勝するという事で片がついた。

そして一夏は、用事があるため先に行き、残ったのはシャルルとセシリアだった。

「放課後にね、第三アリーナで訓練を予定してるんだ。」

「はい…それで?」

突然の話題でついて行けず、曖昧な返事を返すセシリア。

何故自分にこの話題を振ったのか、未だに理解できなかった。

「それでね、僕と鈴、ラウラを入れてやるんだけど……教官役が誰も居なくて、セシリアなら強いから……お願い出来ないかなって。」

「はあ……私に、ですか。」

そこでようやく理解したセシリア。

シャルル、鈴、ラウラの3名で行う訓練。

そこでシャルルはセシリアに対し、訓練を行う上での教官役をお願いしてきたのだ。

「まあ、良いですけど。私の指導は厳しいですわよ?」

特に断る理由もないセシリアは、この話を即決した。だがその前に予定していた用事があることを思い出す。

「ですが少々遅れます。それでもよろしいのであれば、引き受けますわ。」

「全然!むしろありがとう!これで僕達もうまくなれるはず。」

少々涙目ながらも、声を荒げて喜ぶシャルル。

泣く程嬉しかったらしい。

「では放課後に。ちようどチャイムが鳴りましたし、戻りましょうか。」

「そうだね。次は織斑先生の授業だし。」

そう言うと、2人は歩き出した。

—————△—————

時刻は放課後、第三アリーナにて。

件の3人は何やら口論していた。

喧嘩では無いらしいが、それは白熱していた。

アリーナのど真ん中でやっていたので、かなり目立っていた。

目立っていたのだが、3人共熱くなると周りが見えなくなるようだ。

「だあかあらー！何度も言ってるじゃない！あたしはセシリアが来るまで自主練でもしようって！」

と、鈴は声を荒げながら言う。

だが、鈴の意見は他の2人には届いていないようだ。

「だから違うよ！セシリアが来るまで待機してるのが良いんだって！なんで僕の言うこととわからないかなあ！」

「2人共違うぞ、セシリアが来るまで無難に準備しておくのだ。」

シャルルはセシリアが来るまで何もせず、待機の意見を。

ラウラは訓練の準備をするという意見を。

3人の意見が一致する事無く、平行線を行く。

「ふーん……どうあつても譲る気は無いのね。なら！」

そう言つて鈴は、自身のI S『甲龍』を展開する。

そしてこう口を開いた。

「模擬戦で決着を付けましょう？勝った人の意見になるの、簡単でしょ？」

「良いねえ、その提案乗った！」

「面白そうだ、私も乗つてやろう。」

そう言い、シャルルもラウラも『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』と『シユヴァルツェア・レーゲン』をそれぞれ展開する。

「始めるわよっ？」

「ああ。」

「何時でもいいよ。」

バシユツと、音を残し上へと飛翔した3人であった。

未だアリーナに人が居る状態で。

—————△—————

「ほう。それで引き受けた訳か。」

「はい、特に断る理由も無かったですし。」

セシリアは用事を済ませ、一夏と合流して第三アリーナに向かっていた。

「あの3人ですから心配はありますけど…静かに待っていてくれると良いのですが。」

「さあどうだか。ま、その答えはもう目の前だ。」

そう言う和一夏は第三アリーナ、その入口を開ける。

そこには何人か震える生徒、それを介抱する生徒。そして、アリーナで戦っている3人の専用機持ちの姿だった。

「これはまた…別の意味で刺激的だなあおい。如何にしてこんな状況に…」

そう呟く一夏。

そしてセシリアは、近場の生徒へと駆け寄った。

「何がありましたの?」

「えっと…あそこで戦っている3人、最初は口論していたの。だけど突然専用機を展開して、模擬戦を始めたみたいで。まだアリーナの中に居た人は、急いで逃げたの。」

ブチッ

鳴つてはいけないような音がして、セシリアがふらふらと立ち上がる。

彼女の代表候補生としての誇り、そして彼女が掲げる高貴なる貴族の努めソブレス・オブリージュの琴線に触れた気がした。

そう、一夏は感じたのである。

「アイン…どうやらあそこの愚か者共に、物理的調教説教と教育が必要なようです。叩き潰す許可、

頂きますね?」

「まあ、程々にな。再起不能とかになったら洒落にならんからな。」

「善処します。では。」

そう言うのとセシリアはピットへと向かつて行った。そして残された一夏は…

「怪我人は保健室に、1人で歩けない人も同様だ。無理しないよう、付き添いながらで良い。あと手が空いてる人は織斑先生を呼んで来てくれ。」

的確な指示で混乱した客席内をまとめ始めた。

———△———

「だいたいあんたはいつもそうなのよ！あたしに突っ掛かって来て、何？喧嘩売ってんの？なら買うわよ、つらぁ！」

そう言つて双天牙月を振り下ろす。

重量を伴うその一撃、その軌道上にはシャルルが居た。

「別に僕は喧嘩したいわけじゃない！でも意見が食い違うのはしょうが無いじゃないか！」

その攻撃を受け流し、その勢いそのままにラウラへと投げる。

「生憎と私達は人間だ。なら、多少意見が違いくらい目を瞑るべきだろう？」

吹き飛んでいながらも武器を振りかぶっていた鈴を、その手刀で受け止めるラウラ。

3人の主義主張は異なる意見だ。

故に争うのは必然であつた。

いくら同じ目的で集つてるとはいえ、他人同士なのだ。

だがそこに、一丁の蒼で塗られたライフルが飛んできて3人共一斉に動作が止まる。

そのライフルの持ち主とは：

『随分と盛り上がっているじゃない、無断で模擬戦なんかして。ねえ、私も混ぜてくれな
い?』

この学園に居れば必ず一度は耳にする人物。

イギリスの主席代表候補生、セシリア・オルコットだつた。

「せ、セシリア……、口調が。」

「ふーん、自分の事より私の口調が気になるんだあ。それは随分とおめでたい頭だよねえ。」

がらりと性格が変わっているセシリアに、驚愕する3人。

それはそうだろう。今までどんな戦いでも優雅な喋り方だつたのだ。

それが突然変われば誰だつて驚くだろう、だが原因は自分たちだと言うことを彼女達

はまだ知らない。

そしてセシリアはBT兵器を展開する。だが問題なのはBT兵器の数であった。

「な?! 12機同時操作だ?!」

そう、12機だ。

今までのセシリアの操作していた数は4機、3倍なのだ驚かない筈が無い。

この3人の中でいち早く、これから行われるであろう事に気付いたのはラウラだった。

何せ1度体験しているのだから。

「あのね? セシリア、なんでか知らないけどちよつと落ち着こう?」

「そうだよセシリア。」

鈴とシャルルの余計な一言により、セシリアの纏う雰囲気益々変わった。

それにより、ラウラの顔色が青くなっていく。

「この期に及んでまだ知らないとはざくとほ、呆れを通り越して尊敬するよ本当に。」

その言葉の直後、空中で待機していたBT兵器は3人へと射出された。

ブルー・ティアースクアルレット
BT 四重奏だがこの場合は厳密には違う。

12機のBTが4機毎に別れ、1人に4機付く。

セシリアが予備のBTすらも動員した最強の布陣。1対3の状況を一方的に覆すことが出来るそれは、ブルー・ティアーズクワイアBT十二重奏。

3人同時に相手取る為の戦法。

「ふふ、避けられるものなら避けてみなさい。出来るものならね。」

そして12機から一斉に発射されるレーザー。

それを避けようとしたところで意味がない、何せ：

「偏向射撃!?しかもこれ全部!？」

何故なら全てのレーザーは自在軌道を描き、己の逃げ道を全て塞ぎながらもこちらに向かってくるのだから。

「己の行動を悔い改めなさい。」

その言葉、そして3人が落ちてくる、それは同じタイミングだった。

—————△—————

「さて、何か申し開きはあるかしら？3人共。」

鈴、シャルル、ラウラの3人は、頭のたんこぶを揃って押さえている。

そして専用機を一時的に没収のうえ正座していた。

それもアリーナのご真ん中で。

そしてセシリア、千冬、一夏が3人の前に立っていた。一夏は3機の待機形態で遊んでいたのだが。

「別に私は模擬戦の事を咎めている訳でも、まして私を待っていないかった事を怒っている訳でも無いわよ？」

勘違いしていいそうなる3人を前に、早々に正すセシリア。

そのまま…

「いい？私は模擬戦を始める前に安全確認を怠った事を怒ってるの。貴女達、アリーナに他の生徒が居たの気付いてた？その様子だと気付いてないみたいね。そもそも貴女達は代表候補生でしょう？もう少し冷静に、周りを見る力を鍛えなさい。いい？反省した？」

ブンブンと首を縦に振る3人。

「しつかり反省したならよろしい。あと一時間は付き合つて貰うわよ？」
上げて落とされる。

この程度で開放される訳が無いのだ。

「あ、あと専用機は明日まで没収です。異論反論受け付けないからね？自業自得だし。」

ガーンツと燃え尽きたように真っ白になる。

専用機の没収はそれほど痛手なのだ。

だがそれ程の事をしでかす方が悪いのだ。

「なあ一夏…オルコットは何時もこうなのか？」

「いや、こうなるのはブチ切れた時だけだよ。そう何度も見られるもんじゃない。」

こう、とはこの人格が変わったと思えない喋り方と雰囲気だろう。

何時もなら『ですわ』等の如何にもなお嬢様（実際お嬢様なのだ）の言葉遣いを使っていた。だが、ブチ切れた時にはそう言うものが一切無かった。

「ま、この問題児共の処分はセシルが下したし…俺は戻るわ。」

「あ、ああ。わかった。」

余談だがセシリアが鈴達を帰したのは、一時間後…

では無く、三時間後に帰した。

—————△—————

「全く、あの3人にも困ったものですわ。」

「1人1人の時は何ともないし、多分だが3人集まったときだけだろう。」

セシリアは一夏の部屋へと来ていた。

久方振りにブチ切れたセシリアは、その心を癒やして貰おうと思ったのだ。

「あの調子じゃ、この先不安ですわ…」

「だがあいつらの間に誰かが居れば、案外どうにかなりそうだぞ?」

一夏の言う通りだった。

3人が同じ様な性格で馬が合わないとき、その間に調和が取れる別の人格者が割って

入ればいいのだ。

「まあそれはいいのです、アイン！」

そのまま一夏へと抱き着くセシリア。

一夏はそんなセシリアの頭を優しく撫でる。

「お疲れさま、よく頑張ったな。」

幸せそうな表情を浮かべ、笑顔のセシリアは満足そうにそのまま寝てしまう。

他ならぬ一夏の手によつて、寝かし付けられてしまった。

「今日は頑張っていたからな、これ位良いだろう。」

そう呟く一夏の顔もまた、幸せそうだった。

第六話

「あ、そうでした。アイン、今度の学年別トーナメントですがタツグマツチに変更になったそうですわ。」

唐突に、思い出したかのように言うセシリア。

「ふむ。理由としては、クラス対抗戦で無人機が乱入してきたからか？あれだけの数が来たんだ、集団戦を学ぶため。その名目なら変更されても不思議では無いな。」

そう一夏は考える。

クラス対抗戦では無人機が乱入した。

1機なら2，3人で纏まれば倒せる。だが乱入してきたのは6機なのだ。

今後は同数かそれ以上で来る可能性がある。

だからこそタツグマツチにしたのだろう。

タツグであれば乱入してきても、計4人で戦えるのだ。例え倒せなくとも、増援が来るまでの時間稼ぎ位は出来る。

「それですね、こんなプリントを貰ってきたのですが…」

「どれ…」

一夏はセシリアの持っていた用紙を見る。

そこにはこう書かれていた。

『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行う為、2人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかつた者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。』

そしてそのまま下へと目を移す、そこには2人分の名前を書く欄が存在していた。その内の片方は埋まっていた、他ならぬセシリアの名前で。

そう、それは申込用紙というものだ。

「アインと…ペアを組んで頂きたいと思ひまして。」

「…全く。素直じゃないなあ。」

セシリアの頭を撫で、顔を綻ばせながらも、一夏は空いている欄へと自身の名前を書いていく。

これでトーナメントのペア、最初の一組目が決まった。

「もう／＼。分かってて言ってますわね？」

「まあ…な。」

一夏の部屋では、甘々な雰囲気は漂っていた。

その一方で、部屋の外では…

「ねえこれ、僕は何時になったら部屋に入れるのかな。」

ドアの前では、項垂れるシャルルの姿がそこにはあった。

一夏と同室という弊害。

一夏が自室でセシリアとイチチャラブしているということは、シャルルは部屋へと帰れないのだ。

「はあ、まだかなあ…」

ついにシャルルはドアの前に座り込み、床にのの字を書き始めたのだった。その際誰も通らなかつたのが救いだろう。



6月も半ばに入り、IS学園は学年別トーナメント一色に染まっていた。

各国の首脳、企業の社長等。

様々なトップが見に来る。

3年にはスカウトするか否かの話しが、2年には今までの成果の確認など、注目されている。

今のところは大半の1年生には関係ないところだが、今年是世界唯一の男性操縦者である『織斑一夏』が居るのだ。

他にも主席代表候補生と呼ばれている『セシリア・オルコット』も居る。

世界唯一の男性操縦者と世界有数の実力者である主席代表候補生。

この2人は特に注目されていた。

そんな中でも件の2人は、対戦表の発表をピットで待っていた。

「いよいよ初戦ですけれども…誰になるんでしょう。楽しみですね、アイン。」

「まあそうだな。誰が相手になるのか、楽しみで仕方が無い。」

純粹に楽しみなセシリアと、早く戦いたくてうずうずしている一夏。戦鬪狂である。

今にも飛び出していきそうな程、気持ちが高ぶっている。

目を見れば分かる通り、ギラついているため知らない人が見れば恐怖を覚えるだろう。

「あ、対戦表が決まったみたいですよ。」

広告が表示されていたモニターが切り替わり、トーナメント表が表示される。

そしてそこに出てきたのは、シャルル・デュノア&ラウラ・ボーデヴィツヒペアVS 織斑一夏&セシリア・オルコットペアの文字。

万能型&汎用型VS試作型&接近特化型。

面白い組み合わせの第1回戦のシードだ。

その対戦表を見た一夏は

「おいセシル、ラウラの相手は俺に任せろ。ここに来てから、あいつとは1度も殺り合つて無いからな。」

「まあ良いですけど…手加減してあげてくださいいね？」

一夏の目を見たセシリアは、苦笑いを浮かべながらそう言う。
件の一夏はというと……

「まあ、相手さん次第だな。」

確実に手加減しない顔だった。

――△――

一方その頃。

一夏達とは別のピットにて。

件のラウラとシャルルは、対戦表を見て顔を青くしていた。

それもその筈、第一回戦の相手は一夏とセシリアなのだ。

一夏はこのI S学園に来てから今まで、誰一人として負けたことは無い。名実共に1

年最強と呼べる。

セシリアは一夏以外には負けたことが無い。

そして世界有数の実力者であり、ラウラも勝てなかった相手だ。シャルルも、ラウラ&鈴&シャルルVSセシリア3対1の数の差で挑んだがあつさりと敗北している。それも一方的に。

唯一この学園でセシリアに勝てる一夏が敵に回っている、それもセシリアとペアを組んで。

本気を出したセシリアの前では、生半可な策略は撃ち抜かれる。

そして気を張り詰めすぎても、一夏に斬られる。

この2人のコンビネーションは抜群なのだ。

「ねえラウラ。最初からこの組み合わせは、僕達を全力で殺しに来てるよね。」

「ああ。嘘だと言いたいし、幻だと信じたいが。真実だ。明らかに全力だな、全力で潰しに来ている。」

シャルルもラウラも、1度も勝てたことが無い相手。それが2人ペアになり更に勝率が下がったのだ。

2人共、遠い目をして燃え尽きていた。

「そうだよラウラ。いくら試合とは言え、あの2人も本気で潰しに来るわけじゃ無いと思うんだ。だからほら、強大な壁だと思えばね？」

「セシリアの場合はそれで良いだろう。問題は…」

そう言つてラウラは、対戦表にある一夏の名前を見る。

一夏は1度も戦つた事が無い相手と試合が組まれた場合に限るが、ある程度の実力者を前にすると闘志を露わにする程の戦闘狂なのだ。

そして専用機持ちの中では唯一、ラウラとは戦つていない。

故にラウラは、いやな予感がしていた。

一夏は自身を、確実に狙つて来ると。

「まあうじうじしてても仕方が無いね。頑張るよ、ラウラ？」

「ああ、そうだな。後ろは任せただぞ？」

そう意気込んだ事が無駄になるとは、この時の2人はまだ知らない

———△—————

「まさか第一回戦目で当たるとはな、正直気乗りしないがな。」

「そうか？俺は楽しみで仕方なかったぜ？」

試合開始の合図、それが鳴る直前。

ギラついた目をした一夏は、若干溜息を吐いているラウラと相對していた。

ラウラの脇にはシャルルが、そして同じようにセシリアと相對している。

「では、精々胸を貸して貰うぞ！」

「ハッ！良いぜ、来な！」

試合開始のブザー、それが鳴ったとたんは一夏とラウラは衝突した。

———△—————

「さてシャルル・デュノアさん。やりましょうか。」

その頃、シャルルとセシリアは互いのペアの援護に行かず向かい合っていた。

正確に言えば援護に“行けず”が正しい。

試合開始直後、シャルルは真つ先にラウラの援護に向かおうとした。

その場で反転し離脱しようとしたところで、自身を取り囲んでいるBTが見えたのだ。

白熱する一夏とラウラ。

その援護に行こうとするシャルルの周囲には、セシリアのBTがある。

その数は8機。

その名は ブルー・テイアーズオクテット BT八重奏

牢獄は完成していたのだ。

「アインはラウラさんとの1対1をワンオンワンご所望ですわ。なら、一番の障害である貴女は私がお相手になりますわ。」

シャルルとセシリアを取り囲むように展開されたBTは、レーザーを放ち鳥籠を作り出した。

それにより、完全に一夏とラウラから隔離されてしまう。

「ツーンこれは相当に不味い状況だね！」

自身の技量は確かな物だと認識しているシャルルだが、自身が勝てるかどうか位は見分けが付く。

それに加えて3対1の状況で1度負けている相手なのだ、シャルル自身勝てると思っていない。

故にこの状況を抜け出すことは、まさに不可能であった。

「ああ、そうでしたデュノアさん。抜け出そうとしなければ我がBT兵器は牙を剥きませんので、安心してくださいな。」

「全然安心出来ないよー！」

そう言いながらも自身のライフル、その砲身をシャルルへと向けるセシリア。そして若干涙目になりながらも、シャルルはセシリアと激突した。

—————△—————

「ハハハッ うらあー！どうしたどうした！腰が退けてるぞおい！」

「クツ！速い。」

ラウラは一夏に翻弄されていた。

ラウラが繰り出す攻撃は悉くに躲され、斬られ、そして鞘で殴られていた。

それに加えて常時二重ダブルイグニッションブースト瞬時加速をしていて、ハイパーセンサーで追えてもラウラの

動体視力が追い付かなかった。

唯一の救いは速さ故に攻撃が軽く、ダメージが少量しか入らないことだろう。

唯一の攻撃が通るのであろう。プラズマ手刀、だが一夏の速度が速すぎて空振りしていた。

シユバルツエアレーゲンに積んでいるレールカノンアクティブ・イナージェル・キャンセラーは速すぎて当たらない。

特殊兵装『A I C』は、そもそも一夏を捉える事が出来無い故に使えない。

多大な集中力を必要とする上に、高速で飛行する物体を捉えるなど不可能に近い。

故にラウラが切れる手札は、必然的にプラズマ手刀とワイヤーブレードの2つのみだ。

だが一夏は違った。

持ち前の速度を最大限使い、ラウラを翻弄、そして離れる。

ヒット&アウェイの戦法だった。

だがラウラも攻撃自体は捌ききれる程に慣れてくる。

そのタイミングで一夏は、自身の切り札。その1つを切る。

「絶技『疾走居合』」

持ち前の身体能力を使った技、それをブースターを使い更に加速させている。

そしてそのままラウラの後方へと瞬間的に移動し、時間差でラウラの機体表面を10の斬撃が襲った。

「なっ!?何だ!?何が起きた!?!」

ラウラは何が起きたか、全く理解できなかつた。一夏が目の前で消え、その数秒後に自身の機体が衝撃を受けたのだ。

なんてことはない、一夏は急接近し斬撃をラウラへと置いて後方へと移動したのだ。だがラウラにとっては見失って、気が付いたら斬られていた。そういう認識だ。

それに先程の速さだけの斬撃よりも強力で、1撃でラウラの専用機『シユバルツェアレーゲン』のSEは4割りを切った。

そしてそのタイミングで：

D e t e c t t h e h a c k i n g .

S y s t e m o v e r l o a d .

V a l k y r i e t r a c e s y s t e m , f o r c i n g t r i g g e r
e d .

「ぐああああ!!」

「ラウラ!!」

ラウラのISから：シユバルツエアレーゲンから紫色の電撃が走った。

そして徐々にISが溶けていき、ラウラを包み込もうとする。

だが…

「何でも貴様らの思い通りになると思うなよ!!」

ラウラは最後の抵抗としてコンソールを呼び出し、とあるボタンを押した。

それにより…

『命令ー認。何かーーまで待機ーす。』

無差別攻撃を行わないよう、下された命令。

不完全ながらも、干渉されるまで動かないようにするものだ。

そして…

「ツチ、もはーこまでー。後は頼んー、アイーック。」

その言葉を最後に、ラウラは完全に『それ』の素体として呑み込まれた。

そしてできあがった物は黒い全身装甲。

誰もが1度は必ず見たことのあるそれは…

「暮桜……」

世界最強にのし上がった織斑千冬の愛機、今は無き『暮桜』がそこに君臨していた。

—————△—————

Side??

ラウラ・ボーデヴィツヒ、それが私の名前だ。識別上の記号……一番最初につけられた記号は——遺伝子強化試験体C——〇〇三七。人口合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれたクローン人間。

ただ戦いの為だけに作られ、生まれ、育てられ、鍛えられた。知っているのはいかにして人体を攻撃するかという知識。わかっているのはどうすれば敵軍に打撃を与えられるかという戦略。格闘を覚え、銃を習い、各種兵器の操縦方法を体得した。私は優秀であった。性能面において、最高レベルの記録を出し続けた。

しかし、ISが現れその適合性向上の為に行われた『越界の瞳』の処置に失敗し、『出来損ない』の烙印を押されるまでに転げ落ちていった。あの時まで……

「貴様のような奴が出来損ないなぞと呼ばれるとはな、何心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へのし上げてやろう。俺と共に来い。」

その言葉に偽りはなかった。しばしば私を部隊から連れ出し、色々な事を教えてくれた。

人の殺し方、人の脆さ、人の温かみ。人との関わり方、その全てをIから教えてくれた。

日常生活に必要な知恵や、息抜きのためのサブカルチャーまで。

男の癖にI Sについての指導までも：

その時から遺伝子強化試験体C—〇〇三七はラウラボードヴィツヒ私になった。

彼の教えを忠実に実行するだけで、私はI S専門へと変わった部隊の中で再び最強の座に君臨し、信頼できる仲間や別部隊に友達という者も出来た。

そして私は彼の強さに。自身の確固たる道を歩くその堂々とした様に。自らを信じ
る姿に、憧れた。

——ああ、こうなりたい。この人の様に、皆を引つ張れる様になりたい。

そう思つて私はある日訊いてみた。

「どうしてそこまで強いのですか？その確固たる意思是：…どうしたら強くなれますか？」

その答えは今でも心に残っている。

その言葉を信じて、今日まで生きて行けたのだから。

「守るためだ。」

俺は彼女を守るために力を手に入れた。いいか？ラウラ。強いから誰にも負けない訳では無い。自身が持つ意思の大ききで勝ち負けが決まると言ってもいい。意思無き力なぞ、単なるケダモノだ。

だからこそ…強くなりたいなら守るべき人と、強い意志の力が大切だ。」

そう。だからこそ…ラウラはこの状況が許せ無かった。

自身の専用機をハッキングし、あまつさえ無差別攻撃をするようにプログラムされたVTSを発動させられたのだから。

それ故に、ラウラの心憎悪の炎は大きくなっていく。

かの組織…

『ファントムタスク』
『亡国機業』に対しての。

—————△—————

『非常事態発令！トーナメントの全試合は中止！状況をレベルDと認定、鎮圧の為教師部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返す！』

ラウラのI Sが異変を起こし、姿を変え、黒い全身装甲を身に纏った状態に手には雪片を握っている事態を危険と判断したのかアナウンスで避難指示とアラームが鳴り響いていた。

「セシル！試合は中止だ。不味いことになった、シャルルを連れてー」

「もう来てますわ。」

一夏が言おうした言葉は続かない。

それは意思が、正確に伝わっているからだ。

『織斑、何があつた。』

突然、一夏のプライベートチャンネルに通信が入る。発信者は織斑千冬。

「ラウラのISがハッキングを受けた。それによりVTSが送り込まれ、強制的に発動させられたらしい。最後のラウラの行動であそこから動く事は無いが、同時にラウラを助け出せないな。」

『そうか…』

千冬は、待機させてある教師部隊に命令を飛ばそうとした。

だが1つの事実により、それは困難になる。

アリーナへと続く通路、その全ての隔壁が下りているのだ。

故に…

『頼めるか？一夏。』

「当然。姉さんが言わなかったとしても、俺が言ったさ。」

『そうか…頼んだ。』

千冬の頼みを聞き入れた一夏は、通信を終了しシャルル、そしてセシリアへと向き直る。

「セシルはあれを使ってくれ、あの装甲を削

りとする。シャルルはちよいと時間稼ぎを、あれを使う。」

「了解ですわ。」

「わかったよ、任せて。」

そう言うと2人は『(偽)暮桜』に向かい走り出す。

そして…

「ラウラさんを返して貰いますわ！」

セシリアが唯一持っている実体弾兵装。

ミサイル型のBTから4発のミサイルが発射される。

そしてそれは、120発の子機を分裂し、着弾。

範囲爆撃を引き起こす。

対インフィニットストロストラス用面制圧クラスターミサイル。

A I S 特殊弾を搭載したそれは、容易に装甲を削り取る。

だが纏わり付く泥のような物により、容易く復元されてしまう。

「そうはさせないよー！」

その復元を妨げるかのように、シャルルが放ったグレネードが着弾。

泥を一部分引き剥がした。

だが…

「これでも再生するんですの!?!」

「さすがにこうなると打つ手なしだよ…」

引き剥がされた側から再生していく装甲に、最早何も出来なくなる。

それは強力な武器を一度に使いすぎると、泥を貫通しラウラに届いてしまう事を危惧していたからだ。

そこに、

『2人とも離れろ!』

一夏の声が響き渡り、全てが終わる。

――△――

「2人とも離れろ!」

そう言った一夏は限界を超えてスラストターを吹かす。

稼働限界等優に超え、所々に火花が上がりながら。

それでも一夏は、技を出すための『四重瞬時二式』クアッドイグニッションを繰り出す。

「頼む! 持ってくれ!」

『Forced to anyone. For you.』

同時翻訳機能といった、ユリの補助機能が全てダウンするなか…一夏は全エネルギーをスラストターへと集中させる。

そしてその場で膨大な上昇気流が生み出され：

「秘技『絶刀』！」

ハイパーセンサーですらも認識出来ない加速。

それ程までに暴力的な速度により一夏の姿がブレ、まるで分身しているかのように見える。

その全てが『暮桜』を切り刻む。

そして空間は死に、ラウラに纏わり付いていた泥を文字通り消し飛ばした。

そしてそのまま外へ放り出されるラウラを、一夏は咄嗟に抱き抱える。

そこにあっただのは停止したシユバルツェアレーゲン。そして全身血だらけでラウラを抱える一夏の姿だった。

—————△—————

「うっ…ぐっ…」

体に走る激痛を感じ、意識を取り戻すラウラ。

そして動かすのすらも辛い首ではなく、目だけで状況把握を試みる。

「ここは…そうだ！私は——くっ！」

「無理に動かない方が良い。医者が言うには全治2週間だったらしいが…体内のナノマシンが治すだろう。」

その声の方向へとラウラが振り向くと、ベットに横になり全身包帯と言ってもいいほど痛々しい一夏が居た。

「俺の方が酷い物か。笑える事に右腕の骨折と筋肉剥離、それに内蔵損傷と肋骨骨折等々。」

全治2ヶ月らしい。まあ、ユリのお陰でもう少し速く治るが。」

「だが、私のせいだ…」

ラウラの言葉を、一夏は手で制した。

その先は言うなと言わんばかりに。

「それ以上は無しだ。確かに俺は大怪我を負ったが、別にお前のせいじゃない。お前は

VTSに乗っ取られたんだからな。」

「だが私は、お前との真剣勝負に水を差してしまった形になる。」

その返答に、一夏は溜息を吐きながら口を開く。

「俺との勝負は何時でも出来る。だから気にする必要は無い。ではな、俺は食堂に行つて来る。」

そのまま一夏は保健室を出て行つた。

そして残されたラウラは：

「全く、自由なやつだ。」

そう呟いて目を閉じた。



『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係

する為、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上——」
ピ、と誰かが学食のテレビを消す。一夏はそもそもあまり聞いていなかったの、気に止めていなかった。

「ふむ。中止になったな」

「ですわね。」

「そうだねえ。あ、七味切れてる。」

当事者なのにのんびりとしたものだど何処から批判が来そうだが、ついさつきまで一夏以外は教師陣から事情聴取されていたのだ。やっと開放された時には時刻は食堂終了ギリギリの時間。一夏は待たせていたセシリア、シャルルと一緒に食堂へ行くと、話を聞きたかったのかかなりの女子が食堂で待つていた。

とりあえず晩飯を食べてからと言う事で、一夏達は夕食優先でテーブルに着いたのだが、何やら重大な告知があると言う事でテレビに帯が入り、そしてさっきの内容となる訳である。

「ごちそうさま。学食、寮食。この学園は本当に料理が美味しい。……ん？」

一夏達の食事が終わるのを今か今かと心待ちにしていた女子一同がひどく落胆していた。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわあああんっ！」

バタバタバターつと数十名が泣きながら走り去っていった。

「……どうしたんだらうね？」

「さあな……」

「よく分かりませんわね……」

3人共に理由を知っていた為、言葉を濁す事しか出来なかった。



翌日、シャルルの姿がなかった。一夏は大体の理由はわかっていゝし、そんなに気にする必要もなくブーツとしていた。教室を見回すとラウラも同様に一夏と同じ包帯等をしていた。昨日の今日では流石に無理であろう。負傷しているし、事実聴取もある。

「み、皆さん、おはようございます……」

教室に入ってきた真耶はフラフラしている。おそろくだがその理由、大体お察しだ。

「今日は、ですね……皆さんに転校生を紹介します。転校生と言いますか、すでに紹介は済んでいるといいますが、ええと……」

真耶の説明はよくわからない。正直どう説明すればいいかわからないのだろう。

クラスは転校生に反応したらしく一斉に騒がしくなった。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します。——シャルロット・デュノアです。この度日本に帰化することになりました。皆さん、改めてよろしく願います」

ペコリと、スカート姿のシャルル：否、シャルロットが礼をする。一夏とセシリアを除いたクラス全員がポカンとしたままだ。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。と言う事です。はああ……」

疲労感たっぷりのため息を吐く真耶。男子生徒の為に頑張つてたら実は女子生徒でしたというオチだ、シヨックも一塩だろう。

「え？デユノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわね」

「つて、織斑君、同室だから知らないって事は——」

「ちよつと待つて！昨日って確か、男子が大浴場を使う日だったわよね!？」

ザワザワザワツ！

教室が一齐に喧噪に包まれ、それはあつという間に溢れかえる。

情報に敏感な女子達は既に掴んでいた。

だが…

「いや、そう言うのは無いぞ？俺はこんな傷だし、昨日はシャワーで済ませたよ。」

その一言で静まり返る。

女子達の気を引くネタは挙がらなかったようだ。

—————△—————

「…むーん」

そこは奇妙な部屋だった。

部屋の中央、そこに立つ塔のようにそびえ立つそれは、『篠ノ之東』のラボ。そこにあ
るメインサーバーであった。

「んー。暇だなあ…」

と、そこに着信音が鳴り響く。

ゆつくりと携帯を耳に当てる。

「やあやあ、そろそろ掛けてく頃だと思ったよ。ところで何のようかな？」
『姉さん… 実は…』

その返答を聞いた束は、顔を歪ませたのだった

第三章 銀の福音編

第一話

『私に専用機をくれませんか。』

「…箒ちゃん。それがどういふことか、分かつてる？」

『はい。』

その言葉を聞き、束は一層顔を歪めてしまう。

その表情は狂気に狂った笑みでは無く、悲しみに満ちた顔だった。

「専用機を持つその意味…その責務、その覚悟、本当に全部分かつてるんだね？」

専用機。

国、または企業に所属する者が与えられる物。

正確に言えば代表候補生適応試験を受けた者、その約半数が選定され、その中から技能、実力、判断力等々で選ばれた人間に専用機が与えられるのだ。

代表候補生になったからと言って、必ず専用機が貰える訳では無い。

それに代表候補生以上の身分になれば、有事の際の義務も発生する。国、もしくは企業から強制される義務だ。

そして国家代表候補生はその名の通り、国の代表。候補生とはいえその事実が変わらない。

故に行動一つで国を脅かし、専用機と地位を剥奪。という可能性もあるのだ。だがこの場合：『篠ノ之箒』はどうだろう。

国や企業に所属している訳でも、ましてや代表候補生という訳でも無い。

ISの開発者であり、自身の姉：『篠ノ之束』へと直接頼み込んだのだ。その意味はとても重い。

世界に現存するISコアは467、その全てを1人で作り出したのが束だ。

ISの製作者が機体を作るのに、既存のコアを使うはずが無い。そう世間は思うだろう。

それに代表候補生でも無いのに専用機を持つという事、これが大きな問題である。国にも企業にも所属していない一般人が、専用機を所持する。

これは国でも企業の物でもなく、『篠ノ之箒』個人の所有物として所持するという事に他ならない。

つまり箒がそれで何をしようとも、国、そして企業が専用機の剥奪は出来ないという

事だ。

個人所有の専用機と言えば、一夏の専用機もそれに当たる。東製作の唯一無二の、一夏専用。

だが一夏は元々所属はイギリスだ。

今もそのつながりはある。故に問題は地位だけだった。

『ええ、理解しています。私には力が足りない、だからその為の専用機が欲しいのです。』
「…じゃあ、臨海学校の時にね。その時に詳しく聞かせて貰うよ。」

返答を聞かず、そのまま束は電話を切った。

そしてそれを床へと落とす…

「…何も分かっていなかった!」

そして、一切の容赦なく『それ』を踏み砕いた。

「結局は自分のため!」

何度も…

「自分がいつくんに近付きたいから!」

床が陥没してもなお踏み付ける。

基盤がはみ出し、配線もグチャグチャ。

もう既に、それは携帯としての存在は無かった。

「自分が邪魔だと思った人間に思い知らせる為、その為のISじゃないのに!!」

視線は格納スペースに飾られた1つのISに向きながらも、その声は震え、目からは涙がこぼれ落ちていた。

ISは東の夢の結晶。

いつか大空を…宇宙を羽ばたく為の大きな翼だ。

戦争に使われていた時期もあったが、それでもと信じていた。

戦争自体、東は否定できない。

人類は戦争を繰り返す事で進化し、それを悔いて来ているのだ。

だからISには翼以外に、武力という側面を持たせた。抑止力となるように。

だがそれと同時に、戦争にISを使われるのは否定的だった。

宇宙を飛ぶための翼…あくまでもISは東の夢である、

INFINITE^無STRATOS^限なのだ。

そしてそれを実の妹である箒が、他者に見せ付ける為だけの専用機を…ISを力の側

面だけしか見ないことに嘆いていた。

「今の箒ちゃんには、やっぱり…」

「ああ、何を言っても無駄だろうな。恐らく。」

束とは別の声がラボに響く。

声と共に姿を現したのは、1人の男性だった。

「りゆうくん…」

「束、人間は誰しも間違いを犯す。戦争の歴史がそうだ、大小は違えどな。」

りゆうくん、と呼ばれた男性は喋りながらもそつと束の隣に寄り添う。

「だが、間違いを正してきたのも同じ人間だ。なら、まだ可能性は0では無い。後はあいつの返答次第だ。」

「…うん。そう…だね。」

その涙を隠すよう、束は胸に飛び込んだ。

声押し殺して泣いている、という事実を隠すように。

「束様……」

部屋の外では昼食であろうサンドイッチを乗せたお盆を持ち、ドアの前で立ち竦んで居る銀髪の少女が居た。

心が荒み、自身の本音を曝け出した姿を見てしまった。

だが、自身には何も出来ない……そう思ってしまったのである。

—————△—————

7月某日。

日曜日。

窓から差し込む朝日を浴びて、一夏は大きく伸びをするように目覚める。

軍に居た頃の一夏であれば周囲の警戒により熟睡等とは無縁であったが、ここはIS

学園。

無法地帯と化した戦場での野営では無いのだ、故に熟睡しきっていた体を起こすために体を伸ばす。

そして…

そそくさと身支度をし始める。

枕元に置いてある拳銃：『Maxim 9』をホルスターへと仕舞い、ホルスターを装着する。

そして腰にはユリの待機形態コンバットナイフを差す。

そして、その物々しい装備の上から制服に袖を通す。

ここまで準備するには理由がある。

織斑一夏は世間一般的に言えば、『世界で唯一の男性操縦者』という肩書きが付く。

そして情報操作の結果、一夏は単なる一般人という事になっているのだ。

一夏の存在を羨む人間も居れば、排除しようとする人間も居るのだ。

ISは、一夏の存在が出て来るまで女性しか乗れなかった。故に世間は女尊男卑が広がり、それが当たり前となっていた。

無論それをよく思わない人間も居るが、強く出れないで居た。

そんな中出て来た一夏の存在は、世の男性達にとつては希望であり、科学者にとつては未知の研究対象なのである。

それと同時に I S をいけば神聖化している女性権利団体にとつてみれば、一夏は異物でしか無い。

外へ出れば暗殺等や研究材料^{モルモット}として、狙われる事となる。

それ故一夏は、例え近場でも外出するときは銃を携帯するのだ。

銃を嫌う一夏だが、自身の命を狙ってくるのだ。つまり実戦という事、四の五の言つてられない。

「さて、行くか。」

そう呟き、一夏は部屋を後にした。



「お待たせしました、アイン。」

「いや、気にすることは無いさセシル。俺も先程来たばかりだ。」

一夏はモノレール駅の側、複合型ショッピングモール『レゾナンス』に来ていた。ただ、1人では無い。

制服姿のセシリアがそこに居た。

「では行きましょうか、アイン。」

「そうだな。」

そうして2人は歩き出した。

手を…世間一般的に言う恋人つなぎと呼ばれる、指を絡ませるようなつなぎ方で。

「先ずは何処へ行きましょうか。何気に私、ここには初めて来ますわ。以前から来てみたいと思ってたんですの、楽しみですわ。」

「それは何より。前に1度来たが、案外色々売っていて楽しめたぞ。」

この2人の周囲だけ、何やらピンク色の空間を幻視する。そして周囲の人目を引く。

それもそのはず、セシリアは10人に聞けば10人が同じ答えを出すほどの美少女である。

そして一夏も、イケメンと言えるルックスである。

この2人がIS学園の制服姿でレゾナンスを歩いているのだ、注目されない筈が無い。

だがその雰囲気から、近寄る人物は居なかった。

「そうだ。前に見たとき、銃器専門店なんて店があつたな。」

「良いですわね、そこに行きましよう?」

なんとも物騒なカップルである。

そのまま一夏達2人は、目当ての店がある7階へと上がるためエレベーターへ乗って行った。



「…」

「…」

「…」

2人が目当ての店に入る。

その後ろ姿を、物陰から覗き見る3人の姿があつた。

1人は金髪でもう1人は銀髪ロング。

そして躍動的なツインテール。

シャルロット、ラウラ、鈴の3人だった。

「あのさ…あの店って、私の見間違ひじゃなければ…」

「ああ。このレゾナンスで唯一、銃器を取り扱っている専門店だ。」

「そもそも、何でそんな店があるの?」

シャルロットの疑問は最もだが、あるものは仕方が無い。

何故、ここに居るのかと言えば。

この3人は、どこから掴んだのか…一夏とセシリアが今日この時間にレゾナンスへと行くことを把握していた。

そして面白そう、という理由で後を着けてきたのだ。

近々臨海学校があり、自身の水着を買うのにもちようど良い。そして、偶然を装って接触しておちよくつてやろうというのが鈴の魂胆だった。

シャルロットについては自身の水着の購入と、完全なる興味本位。あるとすれば、今までイチヤイチャを見せ付けられていたための気晴らし程度。

ラウラについては、偶然シャルロットと鈴に出会い着いてきただけだ。

そんな3人がまず最初に予想したのは水着売り場。

臨海学校間近の為、一番最初はここに行く。

そう予想を立てたのだったが。

物の見事に外れたわけだ。

その為ラウラ以外は、一夏達が何故ここに来たのか検討も付かなかった。だがラウラがそれを言うはずが無い。

よって：

「あつ、出て来た。」

店の中で何をしていたのか分からないまま、一夏達を追うことを再開した。

そしてそのまま進んでいく先にあるのは…

「俺の心にトウヘア？　え？　これなんの店なの？」

店の名前から、何を売っているのか分からない。そんな店を計5件回った一夏達、そしてそれを尾行していた3人は謎が深まるばかりだった。

—————△—————

「ふむ、ここが水着売り場か。売り場が別々なのが気に入らないが…」

「仕方が無いですわ、今のこのご時世では。」

一通り見て回った一夏とセシリアは、最初の目的通り水着売り場へとやって来た。た。

女性用水着売り場はここ2階そして、男性用水着売り場が何故か1階なのである。

「ではアイン。これとかどうですか？」

そう言つてセシリアが手に取つたのは、ただの紐だった。

「却下だ。布が無い時点で無しだろ。」

「では…これは如何です?」

続いて手に取つたのは、蒼のビキニ。

だが、ビキニはビキニでも布面積が最低限のマイクロビキニだった。

「いや、刺激が強すぎる。却下だ。」

「ならアインが選んでくださいな。」

「んー。そうだな…これはどうだ?」

そう言つて一夏が選んだのは蒼色のビキニ。

同色のパレオが付いた、ごく普通のビキニだ。

「やっぱり、セシルには蒼が似合うと思つてな。」

「相変わらず、センスが良いですわね。」

そのままセシリアは、一夏の選んだ水着を自身の体に当てる。

そして、

「これに決まりですわね。感謝致しますわ、アイン。」

「気にするな、これ位当たり前だ。じゃ、買ってくる。」

一夏が選んだ水着を持ち、会計に並ぼうとしたところで…

「じゃあ貴方、これも買いなさい。」

後ろから近付いてきた見知らぬ女性がやって来て、水着を付きだしてきていた。

ISによつて世の中に浸透している『女尊男卑』。

女性優遇も行き過ぎて、男が冷遇されすぎているのだ。

故にこうなる。

だが…

「何で俺がお前の水着を買わなければいけない？」

「そうですわね。どうかそんなことをして、恥ずかしく無いのですか？」

一夏とセシリアの口撃。

それが始まった。

「そもそも俺に命令する権利が、お前にはあるのか？」

「初対面の筈ですし…ただの妄言としか聞こえませんか。」

同じ女性であるセシリアからも言われた為、逃げていった。

セシリアの、汚物を見つめるような視線を浴びながら。

「やはり、I Sが出て来た弊害というものは何処にでもあるものですね。」
「そうだな、こればかりは今のところ何も出来ないし。」
「はあ…嫌になりますわね。」

気分が沈みながらも、2人はその場を後にした。

そして一夏は、とある3人へとメールを飛ばしたのだった。

《尾行は楽しかったか?》



「海いつ！見えたあつ!!」

今は臨海学校の宿泊先へと移動中。クラスの女子は窓際から見える海を見てはしゃいでいた。

一夏とセシリアは静かに海を横目で見ていた。

別段騒ぐほどのことでも無いからだ。

一夏もセシリアも、祖国は島国だ。

故に海など見慣れた光景である。

それに今更、この年ではしゃぐほど子供では無いのだ。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ。」

千冬の言葉で、席交換や大富豪等をしていた全員がさっとそれに従う。

指導能力抜群であった。

言葉通り程なくして、バスは目的地の旅館前に到着。四台のバスからIS学園の一年生、全員が出てきて整列した。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさ

ないよう注意しながら寛ぐように。」

「よろしくお願いしま—す。」

千冬の言葉の後、全員で挨拶する。

この旅館はIS学園が、毎年利用しているらしく、着物姿の女将さんも手慣れた感じで迎えていた。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね。」

歳は三十代くらいだろう、しっかりとした大人の雰囲気を漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆に凄く若々しく見える。

「あら、こちらが噂の……？」

ふと、一夏と目が合った女将が千冬にそう尋ねる。

「ええ。今年は一人男子がいるせいで、浴場分けが難しくなっちゃってしまつて申し訳ありません。」

「いえいえ。」

それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりとそんな感じを受けますよ。「案外しっかりしてますね。ほら、挨拶をしる。」

千冬に促されるまま一夏は前に出た。

そのまま癖のように染み付いた体が、勝手に動いた。

背筋を伸ばし、ピンツとした姿勢になる。

「織斑一夏です。3日間お願いします。」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

そう言つて女将は丁寧なお辞儀をする。その動きは先程と同じく気品のあるもので、大人な女性と言う物を醸し出す。

「それじゃあ皆さん、お部屋の方どうぞ。」

海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に訊いてくださいまし。」

女子一同、はーいと返事をする。と直ぐ様旅館の中へと向かう。

初日は終日自由時間であり、ビーチが解放されているのだから。

因みに食事は、旅館の食堂にて各自とる事になっている。

「そうだ織斑。お前の部屋は私と同室だ。変に1人部屋にしては、女子の突撃に合いかねんからな。」

「了解だ。では部屋に荷物でも置いてくる。」

そう言つて、一夏は歩き出した。

第二話

一夏が別館一番奥の更衣室に向かう途中、中からはきやいきやいとされた黄色い声が漏れ、一夏は気まずさを感じながら男子更衣室へ向かった。

「わ、ミカてつば胸おつきー。また育ったんじゃないの〜?」

「きやあつ!も、揉まないでよ!」

「ティナつて水着だったーん。すつごいね〜」

「そう?アメリカでは普通の事だと思っけど。」

男子更衣室と隣り合うように女子更衣室があるため、一夏はその漏れ出る会話を聴くまいと早々に着替えた。

そして早足気味で更衣室を後にする。

コンバットナイフを太股に装着した状態で。

「あ、織斑君だ!」

「う、うそっ！わ、私の水着変じやないよね!?大丈夫だよね!」

「わ、わく。体かっこいい。見てよ、腹筋凄い、鍛えてるね」

「織斑くん、後でビーチバレーしようよ」

「ああ、時間があればな。」

一夏が更衣室から浜辺に出てすぐ、ちょうど隣の更衣室から出てきた女子数人と会う。

簡単に会釈した一夏は、そのまま浜辺へと出る。

「よっ、と……」

そして柔軟運動を始める。何事にも準備というのは大切だ。柔軟運動をしながら一夏はいやな予感を感じ、咄嗟にしゃがんだ。そして

「い、ち、か〜〜〜う〜ぐほっ!」

しゃがんだ一夏の上を、ル〇ンダイブのごとく通り過ぎる鈴。そしてそのまま砂に落ちる。

飛び掛かってきた鈴のその手には、水風船が握られていた。どうやら飛び掛かると同時に投げ付けるつもりだったらしい。

だが悲しきかな鈴。鈴の持っていた水風船は砂浜へと落下した衝撃で破裂し、顔面から水がかかる。

だがよく思い出して欲しい、ここは『砂浜』だと言うことを。

濡れた肌には砂が張り付く、つまり…

鈴の顔は砂だらけ、と言うことだ。

「何で！避けるのよ!?!」

「いや、避けるだろ普通。」

ガバツと起き上がり一夏に詰め寄る鈴。誰であろうと飛び掛かってくると分かっていたら、必ず避けるものである。因みに鈴の水着はスポーティーなタンキニタイプ、口リコン歓喜不可避である。

「何をしていますの？ 嵐さんは。」

そこに一部始終を見ていたセシリアが、苦笑しながら近付いてくる。

手にビーチパラソルとシート、それに小さめの小箱を手に持っている。

「嵐さん…色々と言いたいことはありますが、飛び付くのは止めた方が良いでしょうよ？
はしたないですし。」

「何よ！あたしは一夏に水風船をぶつけようとしただけよ!」

そう言つて鈴は、手に持っていた水風船だったものを突き出す。割れて水が無くなっているそれは、ただのゴミにしか見えない。

そして若干濡れて砂が着いている鈴を見て、セシリアはこう言った。

「だからそんな格好なのですね、納得しました。」

割れた水風船、そして顔面から砂に突っ込んだ事実。水をかぶった顔が砂で汚れているのをみて、容易に想像出来た。

だがセシリアには関係ない事。

「それよりアイン。これは如何です?」

そう言つて荷物をその場に置き、1回転するセシリア。

セシリアの着ている水着は鮮やかなブルーのピキニ。腰に巻かれたパレオが優雅さを醸し出している。モデルをしたら人気に火が着きそうな程である。

そしてパレオからチラツと覗くホルスター、それが印象的だ。

「ああ、似合つてるよ。やはり蒼を選んで正解だったな。」

「ふふ、ありがとうございますわ。」

そのまま2人は見つめ合い……なんてことは起きなかった、何故なら。

「はあ暑い暑い、イチヤイチャするなら余所でどうぞつて感じよね。」

近くに鈴が居るからである。

顔を仰ぐような仕草をする鈴だが、生憎と2人には見えていなかった。

それを察した鈴は、そのまま海へ入って行った。

そして…

「あ、一夏。ここに居たんだ。」

「ん？ああ、シャルルか。」

声を掛けられた方向へと、一夏が視線を向けると、黄色いビキニを着たシャルロットが軽く手を振りながら歩いて来ていた。

未だに一夏はシャルルと呼んでいるが、本人曰く慣れたそうさ。

シャルロット自身は不満らしいが、それでも良いかと樂觀的に考えている。

「ところで2人共、ラウラ見てない？先行ってるって言ってたから、そんなに遠くへは行つてない筈なんだけど…」

「ん？ラウラなら…」

そう言つて一夏は、シャルロットが来た方向と反対側を指差す。そこには…

「もつとだ！もつと掘るのだ！そんなんじや何も捕まえることなど出来ないぞ！」

「あいあいささ」

ラウラと本音が砂浜に、大穴と言っても差し支えない程のものを掘っていた。

その穴の大きさからして、一人人は余裕で入ることが出来る。縦の長さはラウラの身長を優に超えていた。そんな穴を掘る理由とは…

「速くシャルロットが来るまでに完成させなければ…」

「ふーん、僕が来たらそんなに不味いんだ。」

「当たり前だ。シャルロットを落とすための落とし穴なのだから、来てしまつては意味が…」

無いとは言えなかつた。

ラウラは今、自身が誰と会話をしているのか察してしまつたからである。

「ラウラ…覚悟は良い？」

「ま、待てシャルロット！これはその…誤解なんだ！」

必死に弁明するラウラ。

だが無常にも、シャルロットは近付いて行く。

その手を動かしながら。

それが意味する行動、それは…

「…言い残すことはそれでいい？」

「くすぐりはいやだ！」

「ラウラー！」

そう言つてラウラーは走り去つた。

ラウラーはくすぐりにめっぽう弱いのだ、シャルロットはそれを心得ている。

林間学校が始まる前、月初めには部屋替えが完了して、シャルロットはラウラーと同室になったのだから。

「ほへ？ らうらうどこく」

無常にも取り残された本音が、穴の中で慌てていた。

後ほどやって来た紅い瞳の眼鏡っ娘に救出された模様。



時間は過ぎ、現在七時半。大広間三つを繋げた大宴会場で、一夏達は夕食を取っていた。

「…美味しい。昼も夜も刺身が出るなんてな、豪勢な旅館だ。」

「そうですね。特にこのトロ、最高ですわ。」

「ん…くっ、山葵が鼻に！」

一夏の隣にはセシリアが、そして少々間を開けてシャルロットが座っている。右にセシリア、左にシャルロットといった感じだ。その膝の上にはラウラが居て、たんこぶを押さえていた。

シャルロットの膝の上で大人しくなっているとところを見るに、完全に上下関係が構築されている。

そして今は、全員が浴衣姿である。この旅館の決まりらしく、『お食事は浴衣着用』だ

そうだ。

因みにチャレンジジャーナシャルロットは別にして、セシリアが普通に生魚を食べていること。

一夏が日本人という事に起因する。

セシリアは一夏と6年もの間食を共にしていたのだ、互いの好きな物は大抵食べられる。

「ところで、アイン。どうしますの?」

セシリアは手に持っていた小箱を置きながら、そう口にする。

どう、とは一夏やセシリアの身の上を語ることだ。今日は林間学校、つまりちようど1年半なのだから。

「さつき姉さんが召集してたる? 専用機持ち全員を。俺とセシル、後はシャルルと鈴、ラウラな。それとあと箒もだが。」

「なるほど、場所は織斑先生の部屋ですわね?」

「ああ、そうだ。」

そう言いながらも、一夏もセシリアも箒が止まらなかつた。

——△——

「……………」

「……………」

「ん？」

部屋の前、その入り口のドアに張り付いている女子が二名。

「嵐？それに篠ノ之まで。一体何を——」

「シッ!!」

鈴がそう言うなりラウラの口を塞ぐ。状況がわからずにもがくラウラだが、ふとドアの向こうから声が聞こえた。

『アイン、くうつ。——んっ！もう少し優しく……』

『優しくしたら意味ないだろう。んじゃあ、ここはっど』

『くあつ！そ、そこは……つうつ!!』

『すぐ良くなるぞ。だいぶ溜まっていたみたいだが、一夏のは効くからな。』

『くつあああ!』

ドアの向こう側から、喘ぎ声にも似た声が響いてくる。その声の主は一夏とセシリアであった

そして千冬の声も聞こえてくる。

「一体、何が？」

ドアからの声に首を傾げるラウラ。

「……………」

「……………」

鈴と箒は、ズーンと沈んだ表情をしている。その様子はまるでお通夜さながらだった。

鈴は、何故こんな所にまで来て。というような顔だった。

「ボーデヴィツヒです。入ってもよろしいですか？」

ラウラは二人を気にせず、ドアをノックして向こうの千冬達に声を掛ける。

「来たな、ボーデヴィツヒ………何だ、コイツらは？」

「さあ？ 私にはわかりません。」

ドアを開けて千冬が出迎えたが、向こうで沈んでいる箒と鈴に首を傾げた。

「まあ、いい。お前達も入ってこい、つとその前にデュノアを呼んでこい」

「は、はいっ！」

「わ、分かりました！」

鈴と箒は駆け足で二人を呼びに行った。

「ラウラ、来たか。いらっしやい。」

「一夏……それにセシリアまで？」

ラウラは部屋の中に一夏達がいた事が気になったらしい。

「ああ、俺の部屋はここだ。それにセシルがいる理由は、これから言う大事な話に関係する。」

「大事な話？」

「ああ。」

そう言つて頷く一夏を見て、ラウラは何かあるのだろうと考えた。

それから暫くして3人がやってきて、千冬に言われた通りにそれぞれ好きな場所にと座つた。

『……………』

新たに入つてきたラウラ達4人は、座つたまま止まつてしまつてゐる。一夏の隣にはセシリア。向かい合うようにに箒、鈴、シャルロット、ラウラが。そしてその間に千冬が座る形になつた。

「おいおい、葬式か通夜か？いつもなら話くらいは出るだろ？」

「い、いえ、その……………」

「緊張してしまいました……………」

「まったく、しょうがない。私が飲み物を奢つてやろう。篠ノ之、何がいい？」

千冬からいきなり呼ばれ、箒はビクツと肩をすくませた。何を言つていいかわからな
いようだ。

「ほれ。レモンスカツシユラムネとイチゴオレンジ。それに抹茶サイダーにイチゴおでん、あとはコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各々で交換しろ」

そう言い、一夏達各員は、それぞれ飲み物を手に取る。

「い、いただきます」

一夏とセシリア以外全員が、同じ言葉を言い、飲み物を口にした。飲んだ者全員の喉がごくりと動いたのを見て、千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりや、飲みましたけど……」

その顔によって、少々疑心暗鬼になる面々。

だが次の千冬の行動に啞然とする。

「バカ者共め、そんなに不安になるな。何、ちよつとした口封じだ。」

そう言って千冬が新たに冷蔵庫から取り出したのは、星のマークがキラリと光る缶

ビールだった。クリーサーヒが家で冷えてる、でお馴染みのアレである。プシュツ！と景気のいい音を立てて飛沫と泡が飛び出す。それを唇で受けとって、そのまま千冬はビールを飲んでいく。

「織斑先生、仕事中ですわよ……」

一夏は非難気味の視線をぶつけながら、セシリアは苦笑いしながらも一応注意した。これから大事な話をするというにに酒を飲まれては…

「堅い事を言うな。それに今日の分は終わったから大丈夫だ。」

「山田先生に怒られても、私は知りませんわよ？」

「だからこの口封じだろう。」

そう言いながら、渡したジュース類を指差す千冬。既に飲んでしまっている以上、千冬を咎める事が出来ないのだ。一夏とセシリア以外。

「さて、そろそろ本題に入るとしようか。」

千冬は一夏とセシリアに向き直る。

そして…

「話して貰うとしよう、期限は過ぎただろう？」
「そう口を開いたのである。」

—————△—————

『これからお世話になる、織斑一夏だ。』

『お前みたいな餓鬼が、本当に使えるのか？』

『それはこれから証明するさ。』

『オルコット家当主、セシリア・オルコットですわ。』

『我が隊はどんな奴でも歓迎しよう。』

『隊長！今日の夕飯、楽しみにしています。』

『まあまあお前ら、急がなくても飯は逃げないぞ。』

『そうですわね、もう少し慎みをですわね。』

『こちら白眼、目標を制圧。』

『生存者はどうだ？』

『生体反応はない、作戦終了だ。』

『今日から俺は織斑一夏ではない！サー・アインザック・リステンバーグと名乗る！』
『一生着いていきます、隊長！』

『にやはは、やっと見つけたよーいっくん。』

『束さん！何故ここに』

『いっくん専用のIS、ユリちゃんを届けに来ちゃった。』

『セシりんのも見てあげるね。』

『えっ、篠ノ之博士！』

『のんのん、そんなに堅苦しく無くて良いよ。』

『今日より合同作戦に参加するドイツ軍シユヴァルツエ・ハーゼだ。よろしく頼む。』
『ああ、よろしく。Strayed隊長の一角、アインザック・リステンバーグだ。』

『同じく隊長の一角、セシリア・オルコットですわ。』

『特殊作戦を開始する！』

『蒼眼ブルーアイから全員に通達、必ず生きて帰って来ること…良いですわね！』

『了解！』

『待て！死ぬなお前ら！』

『隊長達は生きて！これは俺らの責務だ！』

『部下が全員居なくなったら、俺達はどうする！』

『イギリス政府より通達ですわ…極秘部隊 *Strayed* は本日を持って解散だそうです。』

『だろ？…今や全盛期のような活躍も無いし、戦力も無い。』

『仕方が無い事ですわね…』

『何時の日か、また会おう。』

『ええ、必ず。』



「と言うのが、俺とセシルが経験した全てだが……」

「……」

真相を話し終わった一夏、ふと見渡すと千冬も、箒も、鈴も、ポカーンと口を開けていた。

「ああ、理解した。お前が居なかった6年間、そんなことがあったのだな。」

いち早く復活した千冬が、そう口にする。

だが、その言葉に引っかけかりを覚えるのが約2名居た。

「ちよつと待つてください、6年間つて…」

「今までずつとつてこと？」

鈴と箒だ。

6年前、それぞれ転校して一夏から離れた2人は、その後に一夏がそんなことをしていたなどどうてい信じられなかった。

「お前達2人はちよつと入れ違いか…」

6年前、一夏は家出をした。そしてそのまま帰つてこなかったんだが、まさか軍属になつてるとはな。」

そう言う千冬に2人は絶句する。

今でこそ千冬も笑い話みたいに語れるが、当時は荒れに荒れた。

それでも壊れなかったのは、親友である束の存在が大きい。

一夏が家出した数年後には、場所を掴んだ束が話す機会を作つたのだ。一夏の身の上や所在、現状等を秘匿して。

「さて、暗い話しは終わりだ。ほら部屋に戻

れ、教員の数少ない自由時間を満喫させろ。」

その場に居る面々を追い出すように、千冬は手を振る。

それに応じるまま、一夏とセシリア以外全員が部屋を後にした。

――△――

月明かりの見える砂浜、箒は一人佇んでいた。

「はあ……」

衝撃の事実により、箒は頭を抱える。

剣道を、一緒に切磋琢磨した幼馴染みが、まさか自身が居ない間に軍属になっている等夢にも思わなかったからだ。

自分が居ない間も剣道を続けてあれ程強くなった。そう思っていたから、自身は一夏に構おうとしていたのかもしれない。

そう思考が巡る。

「ほう。悩め悩め、悩むのは10代の特権だ。」

「誰だ!？」

突如響いた声に、箒は瞬時に顔を後ろへと向ける。そこに居たのは…

「おっと失礼、名乗りがまだだったな。」

俺の名は篠ノ之龍之介、よろしく頼むぜ義妹よ。」

篠ノ之、そう名乗る男性が居た。

だがその名乗りに眉をひそめる箒。

「あ、まだ早かった。悪いな、改めて泉童子龍之介だ。以後よろしく、お嬢ちゃん。」

そういう彼は、詫び入れる様子も無く堂々とそう言ったのだった。

第三話

臨海学校二日目。

この日は海辺でI Sを用いた実習訓練となっている。

主だった訓練メニューは砂浜での歩行、そして海面擦れ擦れでの飛行訓練である。

だがこの訓練はあくまでも訓練機を利用する一般生徒の訓練メニューであり、専用機を持つ生徒は少し離れた場所での独自の訓練となっている。

そして一夏達専用機持ちは、千冬の召集により離れた場所へと集まった。

全員の前に千冬が立ち、何かを話し始めようとしたところでセシリアが代弁するよう
に手を挙げた。

「なんだオルコット?」

「その、何故篠ノ之さんがここに? 彼女は専用機持ちではありませんが……」

そう言うセシリアを始めとする、その場の全員の視線が箒に集中する。

この場にいるのは専用機持ちの生徒のみ。そうなるも箒がここにいるのは不自然なのだ。

箒は決して一夏のように特殊なケースというわけではない、ましてこの場にいるセシリア達のように代表候補生というわけではない。ただ、姉がI Sの生みの親というだけなのだ。

「それはな、篠ノ之が今日これから起こることに関係しているからだ。」

「それは何を……」

千冬の言葉の意味を理解しきれず、思わずセシリアは首を傾げる。だがとある気配を察知し、嫌でも納得してしまう。

「ああ。さて……出て来い！どこに居るか知らんが、今回は普通にな。」

千冬は視線を近くの岩影に向ける。だがそこに姿は無く、かわりに……

『ちiiiiiiiiiiiiいやああああああん!!』

岸壁から拡声器を使ったと錯覚する程の音量で、土埃を上げながら何かが来る。

そしてその何かが千冬に迫るが、千冬は慌てること無く何かを掴むが……

自身の足元が迫り出し、慌ててその場を退いた。

「やあやあ！ちーちゃん！会いたかったよ、さあハグしよう！愛を——フゲツ」

地面の中から千冬に向かい跳んで、千冬に飛び掛かったが……敢え無く千冬のアイア
ンクローに捕まり失敗に終わった。しかも掴んでいるその指は束の頭に食い込んでい
た……手加減などしていないようだ

「コイツは篠ノ之束。お前たちも名前くらいは知っているだろう？」

千冬の言葉にその場にいた数名は驚き目を見開いた。目の前にあの篠ノ之束が……I
Sの生みの親がいるのだから。

「ち、ちーちゃん……さ、さすがにもう無理……コレ以上は流石に束さんでも、頭が水風
船を握りつぶした時みたいに破裂する……」

束は頭を持ち上げられ宙ぶらりんになりながらもそう言った。

要約すると『もう限界だからやめてください』となる。

千冬はそれを聞くと手を放す、流石の束も生身で空中にいる技術は無い。

それはつまり……

「いったあ……ちーちゃんひどいよ……いきなり手を放すなんてさ……」

束は着地できず、尻もちをついた。

先程まで死にかけていたのに、全く痛がっている様子は無い。

そしてそのまま跳ね起きると、一夏の元へと駆けだした。

だが予先は一夏では無かった。

「セシリーん！」

「きやあ?！」

飛び掛かって来た束を避ける術等、セシリアには無い。故に甘んじて、束の抱擁を受けるしか無いのだ。

「4年振りだねえ、大きくなったね…色々とーフゲッ！」

「何をしているのかな?束さん。」

セシリアに抱き着く束を、千冬譲りのアイアンクローで締め上げる一夏。

「ぐぬぬぬ…相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ、いっくん。」

そしてその拘束を抜け出して着地する束、今度は箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも。」

素っ気ない返事などものともせず、束は箒に話し掛ける。

「久しぶりだねえ、こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。特におつぱいが。」

「がんっ！」

箒が何時の間にか持っていた木刀が振り抜かれる。本来なら当たること等無いそれは、何故か容易に束の頭、そこに乗っていたうさ耳を打った。そうなれば壊れるのは必然。

「……殴りますよ。」

「殴つてから言つたあ、しかも木刀で！ひどい！ひどいよ箒ちゃん！壊れちゃつたじゃない！」

うさ耳を押さえながら涙目になって訴える束。だが痛いとは一言も言っていない。唯一言つたのは、尻もちを着いたときだけだ。うさ耳と同時に頭にも、振動が来た筈なのである。

そんな一連のやり取りを、一同はポカンとして眺めていた。

「おい束。自己紹介位しろ。私から言つたとはいえ、それ位は礼儀だ。」

「えー。まあいいや。私が世紀の大天災、篠ノ之束だよ、はろー。」

そう言ってくるりとその場で回る束。

だがここで、箒が前へと躍り出る。

「それよりも、姉さん。頼んでいた物は？」

「……確かに創つてあるし、持つてきてもいる。だけど箒ちゃん、1つだけ教えて。」

言葉を途切り、真剣な顔になった束。

そして改めて箒に向き直り、口を開いた。

「何で今になって専用機が欲しいの？専用機なんて国か企業に所属すれば……それこそ代表候補生にでもなれば、いくらでもチャンスはあるのに。」

そう、束の言う通りなのだ。

専用機……企業や国家等に所属する代表候補生の一部に、国や企業から貸し与えられるものだ。

それは同時に、貸し与えられるチャンスを掴む為に代表候補生になるということ。

だが……箒はそれが気に入らなかつたらしい。

箒は元々ISにいい感情は持っていない。その理由は束が、箒の姉である彼女がISを造ったことで彼女の人生が狂ったからだ。

ISが世界に知れ渡り、気が付いた頃には篠ノ之箒という何処にでも居る少女の立ち位置は『ISの生みの親、篠ノ之束の妹』という特別な少女になっていた。

やがて箒は政府の要人保護プログラム、それによつて離れ離れにさせられたのだ。

両親と一夏に。

そんなことがあつて箒がISに良い感情を持つはずが無い。そもそも学園の入学も、政府による強制入学だったのだ。そんな人生を送つていれば、良い感情など持ちようが無い。

だが、そんなIS学園への強制入学も一夏が入学する事になつたと知ると、良いものへと変わった。

幼馴染が、しかも昔から想いを寄せていた相手が同じ学園にいるのだ。

これで離れ離れだった日々を埋められる。そう考えていた。だが箒の思い通りに事は運ばなかつた。

自身が話し掛ける前から、親しそうに話す女子が居たのだ。

愛称で呼び合う2人。

基本的に常に一緒に居るため、箒の付け入る隙は一切無かつた。

そしてタッグマッチトーナメントでは、そもそも1回戦で試合中止になっており出ることが叶わなかった。

そして一夏との関係性を暴露され、尚更焦った。

だからこそ、箒は束に連絡を取った。

自身の姉であり専用機を……ISを作る唯一の人物に。

「それじゃあ私は強くなれない。邪魔な奴を倒すためにも、私には力が必要なんです！」

大層な思いに一応は関心する束だったが、その心は悲しんでいた。

「その答えじゃ、専用機なんて渡せないね。」

その返答に絶句する箒、だがそんなものはお構い無しに話し続ける束。

「そんな巫山戯た答えじゃ、専用機は渡せない。力が欲しいのなら、訓練をすれば良いだ

け。ISは、強くなるための道具じゃ無いの。

ましてこの場の誰よりも覚悟が、信念が、実力が、技量が…この場の誰よりも弱い箒ちゃんには、専用機を持つ資格なんて無いよ。」

「っー！」

『弱い』

その言葉が我慢ならなかったのか、箒は先程取り出した木刀を片手に、目の前の束にその木刀を振り下ろした。

脳天へ目掛け。

その結果がどうなるのかなど考えもせず、ただ自分の思い通りにならない事に苛立ちを覚え、痙攣を起こした子供のように。

だが、その木刀が束の脳天をがち割る事は無かった。

束に届く筈だった木刀、その切っ先は束の額10cmのところまで止まっていた。

そう、束は振り抜かれる木刀を掴んでいた。

そして束が少し力を入れると、掴まれていた木刀は…無残にも碎け散った。

「なっ!?!」

「箒ちゃんはいつまで、子供みたいな痙攣を起こして暴力を振るう真似を続ける気？」

確かに、原因の一端は私にあるかもしれないし、それは反省もしてる。

だけどね？これは私が関わる以前の問題だよ？

箒ちゃんは専用機を勝ち取る努力なんて欠片もしてないでしょ？

ただ私に電話を掛けてきた、その意味すら理解しないままね。

ISの事だって、ただ嫌いだからというだけで全く知りもしようとしない。

その性格だって、改善する努力すらしらない……性格の事だけじゃない、あらゆる事で努力をしているように見えないよ。」

彼女はISが嫌いだからと学園に入学するまでISの勉強などして来なかった。

入学してからも、操縦を上手くなろうという努力をした事も無い。抗いもせずただ流されるまま。

言葉では姉を嫌っている癖に、篠ノ之束の妹だという立場に甘えているのだ。それで専用機を渡すほど、束は甘くは無いのだ。

「箒ちゃん。」

「っ！」

砕かれた木刀……その破片を喉元に突きつけられ、箒は身動きが取れなくなった。

「だから箒ちゃんには専用機なんて渡せない。今の箒ちゃんに、私が持ってきた機体は

…絶対十全には動かせない。精々稼働率100%行けば良い方だと考えてるよ。じゃあ、『また』ね。機会があれば、次はもう少しまともな答えを期待しているよ。」

そう言いきると、束は文字通り消える程の速度で何処かへ去った。残されたのは顔を青くした筈と、ただただ啞然とする面々だった。

「お、織斑先生！」

一般生徒達を見ていた筈の真耶が、タブレット片手に慌てた様子でこちらに走り寄ってくる。

「た、大変です!! 今、学園上層部から通達があつたんですが、非常事態特例が発令されました!!」

そう言う真耶の手の中にあるタブレット。その中の情報を見て千冬は眉をひそめる。

「特務任務レベルA……」

「は、ハワイで運用試験——」

「機密事項だ、うかつに喋るな。」

テストは一時中止！ 一般生徒は旅館の自室にて別働あるまで待機！ 織斑、オルコット、鳳、デュノア、それからボーデヴィツヒは私と共に来い！」
楽しい海は、終わりを迎える。

—————△—————

旅館の一室。

作戦会議室に様変わりした大部屋に集められた専用機持ち、一夏、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの5人。

部屋の中央に設置された空中投影ディスプレイを囲む形で座り、投影機の隣に立つ千冬が概要説明を始める。

「では、ブリーフィングを始める。今から2時間前、ハワイ沖にて試験稼働中だったアメリカ・イスラエル共同開発の第3世代型の軍用IS、シルバリオ・ゴスペル銀の福音が突如暴走を始め、試験

場を爆破して逃亡した。

その後は米軍の追撃を振り切って領海から離脱したとの事だ。そして現在、衛星からの映像によると…この旅館の沖合い、20 kmの地点を通過すると予測された。」

その話を聞き、シャルロットや鈴は疑問を浮かべる。

ISの軍事転用は、アラスカ条約で世界的に禁止されているからである。

軍事用に開発する事も、利用する事も出来ないのだ。

だが、この『アラスカ条約』を律儀に守っている国等…世界を探しても日本位しか無い。

それほどまでにあつて無いような物なのだ。

現にラウラの機体『シユバルツエア・レーゲン』等は、ドイツ軍が開発した第3世代型の軍用ISなのだから。

「学園上層部は、本件を専用機持ちが対応する事を決定した。海域封鎖に割ける人員で手一杯でな、お前達5人に出て貰う。ここまでで何か質問のある者は居るか？」

「目標の詳細を…」

「わかった。だがこれは機密データという事を忘れるな。万が一外に流出させた場合、諸君には査問委員会による裁判に掛けられる。最低でも2年は監視が付く事を頭に入

れておけ。」

皆が頷いた所で空中投影ディスプレイに目標である銀の福音の全体像、そして武装や機体スペックなどが詳細に書かれたデータが映し出される。

高機動型の広域殲滅を可能とする、特殊射撃を得意とした全身装甲タイプフルスキーンのIS。高い機動性と広域殲滅に特化した射撃武装は厄介の代物であり、全身装甲という事は防御力も並のISとは比べ物にならないものになる。

「オールレンジが可能な射撃型……私とは違い、こちらは弾幕型ですわね。」

「速度は……あたしの甲龍じゃ追いつけないわね。」

それぞれ意見を出し合う、まさに作戦会議だ。

「俺の機体キュリなら追い付けるが……俺だけじゃ流石にどうしようも無い。」

「この特殊武装も厄介だよ、連続しての防御は難しくなるし。」

「データ上では近接武装は無いが、データに無いだけで搭載されている可能性もある。」

残された時間も限られている中、出撃できる人員も限られている。

全員慎重にならざるを得なかった。

「織斑先生、具体的な作戦は……」

「ワンヒット・ワンダウン」
「一撃必殺しかなからう。だがそれは厳しいだろうな…」

そう言つて、千冬は5人全員を見渡す。

そして口を開いた。

「この中に、銀の福音を一撃で落とせる武器を持っている者が居るか？」

「……」

誰も答えられない。

誰も条件に合う武器など持っていないのだから。

「だから全員で当たる他ない。速度で勝る織斑を筆頭にな。作戦は——」

「待った待——」
その作戦はちよつと待ったなんだよ——」

声が天井から聞こえ、全員が天井を見る。

だがそこにあつたのは、うさ耳だけだった。

ではどこに居るのか…

セシリアの真横。そこへと律儀に正座していた。

「全員で扇状攻撃するんでしょ？ だったら私が持ってきた高機動パッケージを使ってよ

！」

「…何?」

「はいはい、これスペックね。」

東が新たに空中投影ディスプレイに情報を展開する、そこには…

「VOB?」

「ちよ、ちよつとまって!これ速度おかしいでしょ!?時速2000km!」

あり得ない物を見るかのように、見ている全員の目の色が変わる。

VOB。

正式名称は『ヴァンガード・オーバードブースト』。

大型のメインブースター1機、中型のメインブースター4機、小型のサブブースター8機で構成された規格外装備。

推進剤を搭載している為、本体からのエネルギー供給は無し。その為再使用は端から想定しておらず、1度使用したら使い捨てる他は無い。

だがそのハイコストに見合うほどの速度を誇る。

最高時速2000kmに達するスピードで飛行することが出来る。

だがそんな速度で飛ばば、操縦者は襲い来るGに耐えきる事が出来ない。一瞬でシエイクされるだろう。だが、東が対策をしていないはずが無い。

「むふふ、それと同時にこれもね！」

そして次に展開された情報は、保護装置だった。

「疑似プライマルアーマー発生装置？」

「なにそれ……」

聞いたこともない言葉に首を傾げる一同、それを待つてましたと言わんばかりに東は口を開く。

「まあ一種のバリア装置だね。流石にISを装着してても時速2000kmは無理だからね、Gを軽減するためのこの装置なんだよ。」

一応、納得したようだ。

一同顔を引き締める。

「では作戦の概要を説明する。」

ターゲットは銀の福音だ。

V O Bを使用して一気に対象へと接近、包囲すること。ターゲットには銀の福音の操縦者である『ナターシャ・ファイルス』が乗っている。暴走しているため、恐らく気絶しているだろう。無傷……とはいかないだろうが、無事に回収してこい。

ミッションの概要は以上だ。

作戦開始は10分後。
期待しているぞ。」

「はい！」

「了解！」

返事をする、全員部屋の外へと駆けだした。
作戦開始までに、高機動パッケージを取り付けるために。

第四話

専用機持ち5人全員が外へと出ると、見慣れないカタパルトと、自身の機体の倍以上のサイズがありそうなブースターが5機鎮座していた。

専用カタパルトにドッキングされたそれは、各専用機毎の色に染色されており、一目で誰の機体に合わせてあるのか分かるものになっていた。

VOBは、その特異な性質上1度きりの加速装置である。

その為、作戦領域まで運ぶ役目を終えた時にパーズが容易となるよう、非固定浮遊部位アンロックユニットとして装着するように制作されていた。

故に、操縦者側からでも外部からの遠隔操作でも容易に切り離せる。

「さて、今一度確認をする。今回のターゲットは銀の福音。目標は操縦者の確保と銀の福音の機能停止だ。無論お前達、1人でも欠けて帰ってくるなど許さん。」

追加の情報だが、この旅館の沖合い20km地点を通過するまでまだ1時間はある。なら、少しでも被害を抑える為こちらから出向く。」

そう言つて千冬は、周囲を見渡す。

「本来なら私が行くべきなのだろうな……」

「姉さん……指揮官は現場に出るもんじゃ無いぜ。」

一夏は励ますつもりであったのだろうが、千冬はそう捉えてはいない。

「……うるさい馬鹿者、口より手を動かせ。」

「はいはい。」

意図が伝わったのか、千冬の顔が若干紅くなる。

軽口を叩ける位の余裕がある一夏に、千冬は櫂を飛ばす。

「こんな物が5機も並ぶとは、凄い光景だな。」

そこに、男の声が響く。全員が、声の主へと視線を向ける。

そこに居たのは、兎印の荷車を引きながら出て来た：1人の男だった。

「あ。りゆうくん、ありがとね。」

「これくらいお安いご用さ。で、PC2台とサーバー代わりにISコア：で良かったんだよな?」

「うん、バッチリだよ!」

りゆうくんと呼ばれた男性：『泉童子龍之介』がその姿を表す。

「!?!?!し、師匠!?!」

「ん??:おお、ラウラじゃないか。元気だったようだな。」

「はい、師匠もお変わりないようで何よりです!」

その声を聞いたラウラが作業を止め、龍之介の前へと躍り出る。

だが今は作戦開始まで時間が無いのだ、ラウラは挨拶をしてそそくさと戻っていく。

「おっと、今はこんなことしている暇は無かったな。おい、あんたが織斑千冬で良いのか

?」

「ああそうだが、お前は？」

話し掛けられた千冬は、そう聞き返す。

束の私物を持ってきている事から、無関係では無いと察した為追い出す選択肢は無かったからだ。

「俺の名は泉童子龍之介、今回はオペレーターを務める。つても、必要事項程度の連絡位だがな。」

「ああ、よろしく頼む。だが、戦況は逐一報告してくれ。」

簡単な会釈をしてそれぞれの分担へと戻っていく

龍之介は、束の手伝いだ。

「こことここを繋げて……よし行けた。」

PC に表示されたのは、専用機5機。シールドエネルギー残量や、破損部位の有無だった。

PC に接続されたISコア。そのコアネットワークを介して機体の情報、そして各機体への通信を行う。

「オペレーターの準備出来たよ！」

「了解だ。織斑、そっちはどうだ！」

千冬は無線にて、進捗状況を尋ねる。

一夏達5人全員が作戦の要、故に1つの不備も許されないからだ。

『異常は無い、全員VOBとの接続は終了した。』

「そうか……では始めるとしよう。」

そんな千冬の言葉を聞き、束は1つのボタンを押す。

VOBはその特性上、ブースターの点火は完全に外部任せだ。

故に外部からの入力が無ければ発射しない、ロケットと同じなのだ。

「作戦開始!!」

その言葉と共に、轟音が響き5機のVOBは起動する。そしてカタパルトから射出され、時速2000km…マッハ1.6を超える速度で消え去った。

—————△—————

『あー、テスト。聞こえるかな?』

「ああ、感度は良好だ。」

無線から聞こえてくる龍之介の声に、代表して一夏が答える。

『それは何より。さて、会敵まで秒読み段階だ。標的目前の50m地点到達時に、予定通りVOBはパージされる。何か質問は?』

「パージしたVOBはどうするのですか? 作戦終了後に回収しに戻ってきたりとかは…」

『しない、そのまま投棄する。そういう仕様なんでな、納得してくれ。さて、残り50秒…総員戦闘態勢。』

全員が臨戦態勢へと移行する。

物が物だけに速度があり、漫談は早々に終了する。

そして全員のハイパーセンサーが、銀の福音の存在をキャッチする。

その距離80。

そして…

『VOB パージ。 行け、お前ら!』

一斉にパージされるVOB。そして先頭に居た一夏は、そのままの勢いで銀の福音に突撃する。

「ツッらあ!!」

時速2000kmまで加速した機体から繰り出される斬撃。銀の福音も一夏の存在をキヤツチし、敵対行動として対処しようとするが…

「遅い!」

銀の福音の反応速度を上回り、一夏の袈裟切りがその表面装甲を削りとり、体当たりをする。

『削った』だけなのだ、それはつまり銀の福音の健在を意味する。

そして一夏は銀の福音と対峙していて、次の攻撃が出せない。

今一夏の手にあるのは銃では無く刀、つまり振るう空間が無ければならない。

次の一手が出せない状況だが…

「ツチ！ 浅いか…セシル！」

「了解ですわ！」

銀の福音を蹴って距離を取った一夏、その直後に銀の福音は爆発する。セシリアが撃つたのは、面制圧用のクラスターミサイル。

対IS特殊弾だ。

それが2発。計60発の子機に分裂し、銀の福音に襲い掛かる。

AIS弾だけあって、威力は絶大。

膨大なSEを削り取る。

「嵐さん！」

「おーけえー！」

突如銀の福音が横に吹き飛んだ。

鈴の武装、『龍砲』。それが火を噴いたのだ。

龍砲はその衝撃は凄まじく、機体が吹き飛ぶ程。だが、そこまでダメージは高くない。だからこそその波状攻撃。

相手に休む暇など与えず、攻撃を加え続けると言う物。

「はあああつ!!」

間髪入れずにシャルロットの盾殺シールド・ピアースしが炸裂する。

盾殺シールド・ピアースし：パイルバンカーと呼ばれるそれは、鉄杭を炸薬させた火薬の力で射出し対称をぶち抜くと言う物。

当たれば大ダメージが期待できるが：装甲部に当たった場合、対してダメージが入らない欠点がある。

銀の福音は全身装甲だ。

一夏やシャルロット達のように、生身の部分が露出している訳では無い。

故に：

「浅い、ラウラー！」

「任せろ！」

瞬時に飛び退いたシャルロットの真横を通り過ぎるように、ラウラーが放ったレールカノンアハトアハト：88mm砲の砲弾が銀の福音に直撃する。そしてそれは、容易に銀の福音の装甲を

破壊する。

ラウラーが無駄に蓄えた日本知識、そこから得た物で：拡張領域パスロットに何時もお守り代わり

に入れている物だ。

^{アハト・アハト}88mm砲：第二次世界大戦中ドイツ軍が開発、使用していた対空砲だ。

1. 5km先の1000mmの装甲をぶち抜く威力がある。当時のドイツ軍はその対空砲を、戦車に乗せて運用していた。

そしてラウラが持っている^{アハト・アハト}88mm砲は改良型だ。

本来であれば、一発撃つ毎に手で砲弾を再装填する必要がある。

だがラウラのモノは、リボルバー型の弾倉が付いており連発可能だった。

だがそれだけではない。

なんとラウラは両肩に^{アハト・アハト}88mm砲を乗せている。

完全な遠距離砲撃型の追加パッケージ『パンツァーカノニア』、それを改造したものだ。だつた。

計2門、12発の砲弾が撃てるのだ。

それにより、銀の福音はラウラを：『シユヴァルトエア・レーゲン』を最大の障害と判断する。

そして…

「来るぞ！データにあった銀の鈴だ！」シルバール

一夏の声が響くと同時に、銀の福音の主武装…36門の砲口から縦横無尽に放たれるエネルギー弾。

広域撲滅武装であるそれは、容易に一夏達全員の退路を塞ぐ。
だが、

「こんな物!!」

「セシリアの牢獄に比べたら!!」

「甘い!!」

鈴とシャルロットが同時に言う。

セシリアのエネルギー弾は、通常時の攻撃も、包囲攻撃時も、全て追尾弾ホーミングなのだ。避けても隠れても、何かに当たるまで常に自身を後ろから追尾してくる。

それに比べれば、ただの弾幕等恐るるに足らない物であった。

「はああつ!!」

「せつや!!」

鈴が振り抜く青龍刀の一撃。シャルロットが繰り出す盾殺シールド・ヒアースしの一撃。

その2つが正確に、ラウラが破壊した装甲…その下にある生身の部分、そこへとぶち当たり絶対防御を強制発動させる。

絶対防御が働くと、ISはSシールドエネルギーEを極度に消耗する。

生身の部分にはバリアーがあるとはいえ、パイルバンカーなんて喰らえば致命傷は免れないのだ。

その致命傷を防ぐ為に、絶対防御が発動する仕組みだ。

つまりどう言う事かと言うと…

エネルギー切れで強制解除される。

「はあ…いくら同性とはいえ、女性に対して手荒すぎませんか？」

落下していく銀の福音の操縦者。

そこを下から掬い上げるように抱き上げるセシリア。

「まあ、一応無事に確保出来たんだしー」

『織斑一夏、領海に侵入者だ。』

突然、一夏に向けて無線が鳴る。

相手は龍之介。

緊迫したその内容に、一同警戒を強める。

そして辺りに響く、スラスターの音。

その機影が確認できる距離まで近づくと、機体と機体名がハイパーセンサーに表示される。

『侵入した機体はー』

「ああ、こつちでも確認した。」

その機体は濃蒼をしており、手には長大なライフルを持つている。

背面に生えた翼状の武装が存在して、外見は…さながら蝶に見えるその機体の名は…

『「サイレント・ゼフィルス」』

僅か1年前。

イギリスから強奪されたBT兵器搭載型IS、『ティアーズ』型2号機。

1号機の『ブルー・ティアーズ』から得たBT兵器の稼働データを基に制作された、まさに上位互換とも言えるIS…『サイレント・ゼフィルス』がそこに居た。

——△——

S i d e ? ?

「織斑一夏…私が私であるために貴様を…」

『M、忘れてないでしょうね？ 貴女の任務は銀の福音の確保。それが相手に取られた
シルバリオ・ゴスベル

今——』

「ああ、分かっている。」

エムと呼ばれた少女は、我前に居る一夏達を見下ろしながらそう言った。

今回エムに課せられた任務は銀の福音の確保、そこに操縦者は含まれていない。

専用機さえ確保できればそれでいいのだ。

だが一夏達がそれら全てを確保している状況、専用機を確保するためには一夏達5人
 全員を倒さなければならない。

いくら『—————』の実働部隊、その中でも上位の実力を持つエムであつても、5人全員を相手取るには些か不利な状況だった。

『ならいいわ。無駄なことしないで、さっさと戻ってきなさい。』

「分かっている!!」

苛立ちながら、エムは通信を終了させた。

そして荒れる心を強引に抑えつけ、機体を反転。

「ツチ、精々首を洗って待っているんだな。」

そう呟くと、スラスターを吹かし領域を離脱した。

――△――

『領海の離脱を確認。ステルスモードかナニカだろうな、もう追跡出来ねえわ。』

「そうか…」

そう返事をする一夏。

だが心は穏やかでは無かった。

一夏がちょうど一年半前まで居た第2の祖国とも言えるイギリス、そこから盗まれた機体なのだ。しかもティアーズ型2号機という、セシリアのブルー・ティアーズから取

られた様々なデータを基に作られた上位互換であり傑作機。

そして、穏やかではないのはセシリアも同じであつた。

「大丈夫？ セシリア。」

「…ええ、大丈夫ですわ。」

自身の姉妹機でもあるサイレント・ゼファイルス。それが盗まれたのは知っていたが、こう間近で見えてしまうとは思っていなかった為にショックも大きい。

自国がサイレント・ゼファイルスを…ティアーズ型2号機を完成させるために、セシリアは様々な協力をした。

元々ブルー・ティアーズはデータ取り用のテスト機、BT兵器搭載型ISを完成させる為の足掛かりでしか無い。

2号機が完成しても尚搭乗出来ていたのは、セシリアの技量、その高さ故だ。

BT適正がずば抜けて高く、他の候補者が出来なかつた事を次々こなしていったセシリアだ。

国側としても、有能すぎる操縦者のデータは欲しいのだ。

故に降ろすこと無く1号機パイロットを続けさせた。

国の予想通りにセシリアは誰にも為し得なかった事を成し遂げた。

自身が機動戦闘中にも関わらず、予備BTを含め計12機を導入した1対4の立体機動戦闘。

しかも全BTでの偏向射撃まで行っている。

ただBTを動かすだけでも、並の人間では1機が限界なのだ。

それを自身が動きながら、しかも12機も動かすというのがどれだけの事か分かるだろう。

そんなことをすれば、希少価値の高いデータは次々手に入る。

そのデータは、少々スペックダウンされたもののサイレント・ゼフィルスに継承されている。

セシリアが居たからこそ、国が威信をかけた機体…完成形のティアーズ型が出来たのだ。

だからこそ、セシリアのショックはかなり大きかった。

『ま、これで作戦終了だ。お疲れさん、帰投してくれ。』

「了解、ベッドを用意しておいてくれ。」

『分かった。』

そう言つて無線を切る。

一夏はそのまま振り返り：

「取り敢えず考察は後だ、今は帰るぞ。」

「了解。」

各々自然と陣形を組み、旅館へと飛びたつた。

来たときは一瞬に近い速度だったが、帰る時は結構時間が掛かる。

1時間近く、飛び続けるのであつた。

第五話

旅館へと戻ってきた一夏達を出迎えたのは、千冬と束、そして真耶と龍之介だった。そして報告の為、ブリーフィングを行った作戦会議室へと足を運ぶ。

「ご苦労。色々と疑問が残る結末ではあるが、ひとまず報告して貰う。」
「了解。」

立ち上がった一夏がまず銀シルバリオの福音ゴスペルとの戦いについての報告を行う。
目立ったミスも無く作戦通りに事が進み、無事に銀の福音を無力化。
操縦者であるアメリカ国家代表、ナターシャ・ファイルスも意識不明ではあるが、目立った外傷も無く気を失っているだけで命に別状は無い旨を伝えた。
そして入れ替わるようにセシリアが立ち上がる。

「サイレント・ゼフィルスについてですが…完成直後に研究室から強奪されておりまして、ティアーズ型2号機、3、5世代とも言えるイギリスの完成形ISです。そしてそれを強奪したのが…」

フアンテムタスク
「亡国機業と言う訳か…」

亡国機業

裏世界を暗躍する秘密結社で、第二次世界大戦中に生まれたいらしい。

正確な概要や目的も、構成員の人数や組織の本部等…正確な情報が何一つ分かっていない謎の組織。

束ですら、全容が分かっていない程だ。

「まあ良い。ともかくご苦労だった、温泉にでも浸かってゆっくりしてこい。」

「はー！」

分からないことを出掛け先で考える、そんなことをしたくない千冬は早々に解散させる。

本当の理由としては、終わったのだからビールが飲みたいだけなのだが。

「ちーちゃんちーちゃん、こんなのがあるんだけど一緒にどう？」

そう言つて束が取り出したのは、恵ー寿のビール。喉越しが最高なちよい高級品だ。

「つまみは？」

「鮭トバなんかあるけど。」

「パーフェクトだ、束。」

「感謝の極み。」

ひとしきりネタを繰り出した後は、束の謎技術によつて出てきたビールと鮭トバを片手に：プチ宴会が始まった。

――△――

「ねえねえ、結局なんだったの？教えてよ」

「……………ダメだよ、機密事項だからね。」

お膳を挟んで向かい側、夕食を食べるシャルロットに一年女子が数名群がってあれやこれやと訊いている。一番取っ付きやすいと判断されたシャルロットになら訊けると思ったのだろうが、それは判断ミスだ。シャルロットは専用機持ちの中で比較的責任感が強い。それに安々と機密事項を話すほど、軽くは無いのだ。

「デュノアさんに聞いてもムダでしょうに……………」

「まあ、好奇心には逆らえないわよね。まあ、聞いたら言った方も聞いた方も大変なことになるけどね。」

鈴とセシリアは、詰め寄られるシャルロットを横目に苦笑いを浮かべていた。

「ところでアイン……本当であれば使い捨てで良いのでしょうか？領海内に置いてきてしまいましたけど。」

「まあ、東さんが開発した物だし……そこら辺は考えられているとは思うぞ。」

そうは言った一夏だが、実際の所何も考えられてはいない。

VOBは本当に使い捨て、一度きりの装備だ。

故に回収機構も無ければ、回収する為の装置も無い。

東自身もそもそも回収するつもりも無く、海の藻屑と化すのをただ待つだけである。

「そうですわね、気にするだけ無駄な気がしてきましたわ。」

「あたしは元々気にしてないけどね。」

そう言いながら、2人は割と仲良く夕食を取っていた。

――△――

「ふう……」

海の音が響く中、一夏は近くの岩場に腰を下ろした。

食事の後、一夏は軽い休憩を取り、夜風に当たる為に旅館の外……夜の海へと繰り出した。

満月である今日は、真夜中であつても明るい。一夏は穏やかな波の音を聞きながらぼんやりと空の月を見上げた。

「……はあ。こんなにも月は綺麗だ……だからこそ思いだしてしまう。」

月明かりに照らされながら、一夏は項垂れていた。

今日のような満月の日、一夏にとって分岐点とも言える出来事だった。

隊長である一夏とセシリア以外の隊員全員の死傷である。

Strayed 隊は全盛期から最後の時まで、構成員は 8 人だった。

隊長である一夏とセシリアを除けば、計 6 人の隊員が居た。

Strayed 隊は少数精鋭の、実戦叩き上げをしてきた部隊故に生半可な別部隊とは練度が違う。

少なさ故の精密さがあり、絆があつた。

たつた 8 人の、家族同然の特殊部隊。

少数でありながらもイギリス随一の特殊工作部隊であり続けられたのは、一夏とセシリアの指揮能力の高さがある。

そしてもう 1 つは士気の高揚の他、部隊員の練度の高さだ。

部隊内で 2 人はほぼ全ての時間で一緒に居た。

恋愛に疎い人間でも分かってしまう程に。

だからこそ隊員達は、2 人を全面的に支えていた。それは一夏もセシリアも気付いて

いた事だが。

だが、それは部隊内での話し。

一度戦場へと赴けば、2人は別行動を取る。

隊員も半々に分かれ、着いていく。

そして、その少ない人数ながら必ず部隊を勝利に導くのだ。

そして何時しか隊員達にとって隊長以上の存在になった。

2人が居たからこそ、壊滅寸前の部隊がイギリスでトップクラスの部隊になれたのだ。

そんな2人を隊員達は隊長としてでは無く、完全に仲間と認識していった。

そうさせたのは2人の態度もあつた。

作戦中以外は隊長として振る舞わず、隊員達全員を自身と同じ目線で見る。

決して見下さず、決して偉ぶらない。同じ食卓を全員で囲み、和気藹々とした雰囲気があつた。

それが当たり前かのように。

それは信頼へと変わり、部隊内は家族と言えるものになっていく。

だからこそ、それを失った喪失感が消えず、一夏の心にはほっかりと穴が空いた気になつていったのだ。

「まあ過ぎたことだ、気にしても仕方が無い。と、割り切れたらどれだけ楽だろうな。」

一夏はその記憶に悩まされ続けているのだ。

満月になる周期は短い。短い故に、何度も思いだしてしまふ。

そして思い出すたび気が沈み、月を見上げるのだから：

—————△—————

「VOBの稼働率は、まあこれでもリミッターが掛かっているしこんな物かな。銀シルバリオ・ゴスベルの福音福音に対しては、目立った損害は無いし。はあ、本当にいつくんもセシりんも強いよねえ。」
空中投影される情報をつまみに、束は左手に持ったビールを飲む。

もう既に飲み始めてから3時間は経っており、つまみ用にと出した鮭トバは無くなっていた。

そして隣で飲んでいた千冬も、酔いつぶれて眠っている。

そして別のウインドウを呼び出す。そこには、今回対G軽減用にと使った疑似プライマルアーマーのデータがあつた。

「稼働率82%かあ。何でかなあ、こっちはリミッターなんて掛けて無いんだけどなあ。」

本来であれば、90%以上のGを軽減する仕様であった。だが今回は72%近くに低減していた。

操縦者に出来るだけ負荷を掛けないようにしていたにも関わらず、今回軽減していたのは操縦者に掛かるGの70%近く。

束にとっては、到底満足できる結果ではなかった。何事も完璧に、十全にこなさなければ気が済まないのだ。

「んー…やっぱり展開出力をもうちょつと上げた方が良いのかな。でもそれだと維持に掛かるエネルギーが、内蔵式で保たなくなるしなあ。」

3時間以上飲んでいたにも関わらず、束の思考は正常状態であった。頬は若干紅くなつてはいたが、概ね問題なし。

「ま、今は良いか。ラボに行つてから考えよう。今は…」

そう言つて束は上を見上げる。

天井に取り付けられた窓…天窓から差し込む月明かり。
そしてその月。

それを見ながら…

「この月見酒を楽しまないかね。」

第四章 波乱の夏休み編

第一話

8月某日。

現在は夏休み。

IS学園の一年生寮、その一室のベッドでシャルロットはぼんやりと目を開けた。

そのまま起き上がりながらベッドの隅に置いてある目覚まし時計を見る、それは朝の8時40分を指していた。

ある意味衝撃だった臨海学校を終えた、最初の日曜日。特に宿題も無く、平穏な休日となれば彼女の朝は遅い。

所属している部活も料理部であり、運動部なら練習があつたりするがそんな物は無い。

偶に熱心な生徒が調理実習室で試作を作ることはあるが、基本的に土日は休みである。

「ふあ……」

軽く欠伸をして再び寝返りを打つ。シャルロットは基本的に、休みの日は寝ていたいのだ。

ふとベッドの外に視線を向けると、同じ部屋に住人であるラウラが熱心にテレビを見ている。内容はテレビアニメのようだが、やたらカトリックやプロテスタント等の単語が聞こえた。

「(あれ、確か……:HEEーSINGだったかな?でもこの時間だったかなあ。)」

この時間だと朝のスーパーヒーロータイムの筈である。シャルロットは毎回見る訳ではなく、まして彼女はアニメをそこまで熱心に見るほうでもない。

ラウラが毎週日曜に必ず見ているので、漠然とながら放送時間を理解していた。

「(確かいつもならプリキュアの筈なんだけどなあ)」

いつも通りなら掛かっている筈のアニメの内容を思い起こし、視線をラウラの見ているテレビに向ける。そこには平和を愛する少女達の活躍ではなく――

『往生際が悪いお嬢さんだ、いくらあがいても無駄だ。この倫敦に、この死都にお前達が

逃げる所も隠れる所も存在しない。あきらめろ人間!!」

『あきらめろ? あきらめろだと。成程、お前達らしい言いぐさだ。』

「人間でいる事」に耐えられなかったお前達のな。人間をなめるな化物け物め。来い、闘つてやる。』

『くっくくっ。上等じゃないか女!!』

『お前は…ッ。ヴァチカン イスカリオテ第13課…!!』

『「殺し屋」「首斬判事」リジエネイター「再生者」エンジェルダスト「天使の塵」パヨネット「銃剣」

神父 アレクサンド・アンデルセン!!』

『ゲアハハハハハッ!! 鼻血を出しながら雲霞うんかのような化物共の軍兵を前にして、

かかってこい? 戦つてやる? 聞いたかハインケル。聞いたか由美江。』

『貴様はイスカリオテ!! 邪魔立てするか貴様!!』

『五月蠅やかましいい!! 死人が喋るな!! この私の眼前がぜんで死人が歩き、不死者アンデッド が軍団を成し、戦

列を組み前進をする。』

唯一の理法を外れ、外道の法理をもつて通過を企てるものを、ヴァチカンが。第13課が。この私が許しておけるものか。貴様らは震えながらではなく、藁わらのように死ぬの

だ。』

『我らは己らに問う。汝らは何ぞや!!』

『我らは熱心党イスカリオテ！熱心党イスカリオテのユダなり!!』

『ならばイスカリオテよ。汝らに問う、右手に持つ物は何ぞや!!』

『短刀と毒薬なり!!』

『ならばイスカリオテよ。汝らに問う、左手に持つ物は何ぞや!!』

『銀貨三十と荒縄なり!!』

『ならば!! ならばイスカリオテよ。汝らは何ぞや!!』

我ら使徒にして使徒にあらず。信徒にして信徒にあらず。

教徒にして教徒にあらず。逆徒にして逆徒にあらず!!

我らはただひたすら主しゅに従う者。ただ伏して 御主おんしゅに許しを請い、

ただ伏して御主おんしゅの敵を打ち倒す!!

闇夜で短刀を振るい、夕餉ゆうげに毒を盛る死の一兵卒。

我ら死徒なり。死徒の群れなり。我ら刺客イスカリオテなり。刺客イスカリオテのユダなり!!

時到らば我ら銀貨三十神所しんじよに投げ込み、荒縄をもって己の素つ首吊り下げるなり。』

『されば我ら徒党を組んで地獄へと下り、隊伍を組み立て方陣を布き、

七百四十万五千九百二十六の地獄の悪鬼と合戦所望するなり。』

フリックス
化け物との闘争が描かれたいた。

「おお、これが第13課。イスカリオテ熱心党か、格好いいなこの有様は。」

「(ラウラ！ 見ちゃダメ!! これ死が溢れてるよ！というかなんで今これがやってるの!?!これは確か、深夜枠だった筈だよ!?!)」

ラウラが見るようなものではないと、シャルロットは心の中で叫ぶ。このアニメは確かに深夜枠だった筈、なのに何故今やっているのか疑問に思う。そこでラウラはシャルロットに気が付いたのか彼女の方を向いた。

「む、シャルロット。すまない、起こしてしまったか?」

そこでラウラはリモコンの停止ボタンを押した。すると映像が切り替わり、平和を愛する少女達のアニメ：プリキュアが映り出す。

シャルロットの疑問はこれで解決される、録画だったのだ。

「う、ううん。大丈夫、今起きたところだったから。」

後ろからまじまじ見ていた事を誤魔化しながら、シャルロットは起き上がる。

「あ、そうだらウラ。今日は何か用事はある？」

「特には無いが、なにかあるのか？」

「うん。あのね…」



「買い物？」

「うん、そう」

寮の食堂、そこで2人は朝食を取りながら話していた。2人以外は部活の朝練をしている面々がちらほらと居る程度で、驚くほどすいていた。

そして2人が食べているのはマカロニサラダにトースト、そしてヨーグルトである。それに加えてラウラは：

「あ、朝からステーキって胃がもたれない？」

そうステーキなのだ。

如何にも『肉』なメニューに、シャルロットは若干胸焼けを覚える。

「何を言うか。朝に沢山食べる方がエネルギー消費的に考えて、体にも良いのだぞ。あとは寝るだけの夕食で食べるのは、エネルギーの消費先が無いのだ。そのエネルギーは全て脂肪になるんだぞ？」

確かにその通りなのだが、シャルロットは頭痛を覚えた。1ヶ月近くラウラを見てきたシャルロットだったが、明らかにラウラは他人の言動や、アニメなどにすぐ影響される。

「――誰から聞いたの、その情報。」

「師匠からだが。」

「ああやっぱり。」

シャルロットは溜息を吐きながら、フォークでマカロニを刺す。その際フォークの先端を、マカロニの穴に通す。

「む。なんだそれは。」

「え、何ってマカロニだけど。」

「それは分かっている。私は何故フォークに通したかを聞きたいのだ。」

そうシャルロットに聞いてくるラウラは真剣そのもの、おかげでシャルロットはフォークに通したマカロニを口に持っていく。その途中で止まっていた。

「何故って…なんとなく?」

「ふむ…なんとなくか。」

「ラウラもやってみたら? 案外楽しいよ。」

そう言ってから気付いた。

何を子供っぽい事を薦めているんだと。

だがシャルロットの懸念は、憂鬱のものとなる。

「シャルロット、確かにこれは面白いな。折角だ、全ての穴に通すでしょう。いくぞマカ

ロニ、穴の貯蔵は十分か。」

そう言つてラウラは本格的にマカロニの穴と格闘し始める。

そして…

「出来た。私に掛ければこれくらい造作もない。」

「おー。」

先端、その4本全てにマカロニを通したフオークを軽々と持ち上げるラウラ。

それに対し小さく拍手を贈るシャルロット。

「それで、買い物には何時行くんだ？」

「えっと、10時位には出ようかなって思うんだけど…1時間位街を見て回って、良さそうなお店でお昼にしようよ。」

「……ラウラ。私服は無いの?」

「ああ。私がつ持っているのは軍服と、今着ている学園の制服だけだ。」

「……………」

流星に頭を抱えるシャルロット。

そういえば、と思い出す。

同じ部屋でも、ラウラは女の子らしい格好をしているところを見たことが無かった。

「ラウラ。服、買いに行くよー」

「あ、ああ。わかった。」

そのまま学園を出て、バス停に行く。

丁度バスが来て、2人はそのまま乗る。

夏休み。それも10時過ぎとあって、車内はすごく空いている。

制服のラウラと違い、シャルロットは私服だ。

白を基調としたワンピース、それに淡い水色が加わった如何にも夏らしく、涼しげで軽快さを醸し出している。

都市バスにしては珍しく、冷房では無く窓からの風のみで涼を得ていた。

そしてシャルロットもラウラも、窓から見える景色を眺めていた。ただ両者共に、考えてることは違ったが。

「(そういえば街の方つてあんまり見る機会無かったなあ。良い機会だし、今日は色々見ておこう。)」

「(…あの建物はアウトブレイクが起きた際の絶好な狙撃ポイントに使えそうだな。あそここのスーパーは、ライフラインが安定的に使えそうだから立て籠もるには最適だ。いざというときの為の脱出手段に下水道や地下鉄側道等、地図の確保と同時に独立した発電施設の場所も確認しなくては。)」

金と銀の髪が風によりなびく、それが正しく幻想的な雰囲気醸し出している。

「ねえねえ、あそこ。見てあの2人。」

「うわあ、凄い綺麗。」

「隣の子も凄い可愛いよねえ、モデルかしら。」

ラウラとシャルロットの容姿により、バス内の女子高生が騒ぎ出す。2人共に美少女と言っても過言ではなく、容姿、雰囲気共に優れている。

「あれ…銀髪の子が着てるのって、制服？見たこと無い形だけど。」

「バカっ、あれはIS学園の制服よ。カスタム自由の。」

「えっ?!確かIS学園って、倍率が1万超えてるんだっけ?」

「そう、入れるのは国家を代表するエリートクラスだけ。」

シャルロット、ラウラに注目している女子グループは声のボリユームを抑えること無く話している。

そんな風に盛り上がってれば、当然2人の耳にも届く。

だがそんな事はどこ吹く風、2人共全く気にも止めていなかった。

ラウラはそのまま、アウトブレイク発生後の展開を妄想し続ける。

「(確実にアウトブレイクが発生したらISは無力だ。確かに現状世界最強の兵器に君臨している。だが、それは補給が出来たらの話し。補給が出来なければエネルギーも弾薬も、直ぐに尽きる。尽きればISなんぞただの鉄で出来た拘束具と大して変わらん。なら普通にナイフと銃が何丁かあった方が、確実に生存できる。それに……)」

「……ラウラ、ラウラ。」

「……なんだ?」

「ほら、駅前に着いたよ。考え事は中断して降りないと。」

「ああ、分かった。」

2人は数名の乗客と共にバスを降り、そしてそのまま駅前のデパートへ入る。

「うん、こう回れば無駄が無いかな。最初は服から見ていって、途中でランチ。次に生活雑貨とか小物を見ていく感じで良いかな？」

「ああ、任せる。」

「じゃあ、まずは7階に行こうか。上から行った方が色々都合も良いし。」

そう言つて、2人は歩き出した。

だがシャルロットは、7階と言つて目が光つたラウラを見ては居なかつた。

——△——

「ねえラウラ。僕は先に服を買うつて言つてたよね？」

「あ、ああ。そ、そうだな、最初に言つていた。」

現在ラウラは、シャルロットに詰め寄られてガラスのショーウィンドウを背に冷や汗

を流していた。

「じゃあ、ラウラ。ここは何処かな？」

「何処ってそれは…」

ラウラが居る店先、それはコアなファンなら誰しも一度は来てみたいと憧れる店であり、結構お高めの商品が数多く揃っている所。

それは…

「HELLーING、フィギュア専門店だが。」

「何そのどや顔!?!」

深夜枠で放送して作者からブライイングを受け、作者自身がOVAを制作した話題のアニメ。

曰く「アニメ本編よりOVAの方が面白い」と言われている。

そのフィギュアを数多く取りそろえているのがこの店である。

「おお、これは！アンデルセン神父12分の1フィギュア！こっちはアーカード等身大

フィギュア！おお、どれも素晴らしい。」

「…ラウラエ。」

半ば無視するような形で自身の趣味を突っ走るラウラに、シャルロットは完全に遠い目をしていた。

だが今日の予定は既に立ててある、そうならば必然的に…

「はい、ラウラ。こっちに行くよ。」

「ま、待て！まだだ！まだ私の戦いはー」

「また後で来るから、今はこっちに来ようねえ。」

そのままラウラは、シャルロットに首根っこを掴まれて引き摺られて行った。



「『サード・サーフィス』…変わった名前の店だな。」

「結構人気のあるお店みたいだよ。ほら、女の子もいっぱい居るし。」

シャルロットに手を引かれながら、ラウラは店内へと入っていく。

その店内には、女子高生、女子中学生が多く、賑わっていた。

セール中である店内の接客は、基本的に客が多くなるほどおざなりになりやすい。

「……」

ばさりと、客に手渡す筈の紙袋が店長の手からこぼれ落ちる。本来であれば、この行為は恥ずべき事で誰しもが注意する筈なのだが…

「…金髪ブロンドに銀髪プラチナ。」

「お人形さんみたい…」

店長の異変に気が付いた他の店員、客も含め全員がその視線を釘付けにしていた。

「…お客さんお願い。」

そして店長は視線を2人に向けながらも、フラフラと歩み寄ってくる。紙袋を受け取

るはずだった客も、文句を忘れてシャルロットとラウラに見とれていた。

「ど、どんな服をお探しで？」

若干うわずつた声で言う店長、サマースーツを着こなし見事に接客していた威厳はもう何処へやら。

そこで注目を浴びていると気付いたシャルロット、もう既に店を出たかった。

注目されることに慣れていないのだが、今回はラウラの私服を買うために来たのだ。帰るわけにはいかない。

「取り敢えずこの子に合う服を探しているのですが、良いのありますか？」

「こ、こちらの銀髪の方ですね、今すぐ見立てましょう。はい！」

そのまま店長は、マネキンに飾っていたセールス対象外の服を手取る。

夏物であろうと、売れる商品は店頭飾り集客に使うのだ。

基本的に『それ』はもちろん売るための商品ではあるが、あくまでとっておきと言う物。

初来店の客のために態々脱がしてくるといふのは普通はあり得ない。

普通ならば。

「ど、どうでしょう？ お客様の綺麗な銀髪に合わせて、白のサマーシャツは。」

「薄手でインナーが透けて見えるんですね。ラウラはどう？…あれ、ラウラ？」

手を繋いでいた筈のラウラが、何時の間にかシャルロットの手から消えていた。

「あれ？ 何処行つたのかなあ。」

「お連れ様でしたら…あちらに。」

その指差す先には、赤いコートを見て目を輝かせるラウラが居た。

「ラウラ！」

「っ!? あ、ああ。出来ればもう少し暗い色が良いな。」

突然呼ばれて、ラウラは肩がビクツと震える。

だが話しは聞いていたみたいで、的確に意見を言う。

「じゃあ、ストレッチデニムのハーフパンツに…」

「インナーにはVネックのコットンシャツなんてどうでしょうか。」

「あ、良いですねそれ。色は同系色が相対色か…」

あれやこれやと、店長とシャルロットは楽しそうに服を選んでいく。その服を着るラウラは、少し距離を取った場所でそれを眺めていた。ラウラは実際の所、服選びのセンスが無い。つまりは自分で選んでも意味が無いのだ

：

「さ、ラウラ。これに着替えてきて。」

「ああ、分かった。」

「試着室はこちらになります。」

そのまま連れられて、ラウラは試着室に入る。

シャルロットから手渡された服は、『クール系』と言えるもの。

それをラウラは着ていく。

自身が憧れる、格好いいと呼ばれるものである。

「どう？ラウラ。着替えた？」

「ああ、着替えたぞ。」

そのままラウラは、試着室のドアを開ける。

「どうだ？格好いいだろう。」

「うんうん。似合ってるよ。じゃあ次はこれだね。」

新たな服を手渡され、ラウラは再度強引に試着室に押し込まれた。

そして20分後、着替え終わったラウラが試着室を出ると、店内全員が息を呑んだ。

「うあ…凄い綺麗。」

「妖精さんみたい。」

店内の視線を一同に受けて、流石のラウラも照れてしまう。

ラウラが着ているのは、肩を露出させた黒のワンピース。部分部分にフリルのあしらいがあり、可愛さを演出している。

ややミニよりの裾が、さらに妖精のような雰囲気醸し出している。

「シャルロット…く、靴まで用意したのか、驚いたぞ。」

「せっかくだもん、ミュールも履かないとね。」

普段はブーツを履いているラウラにとって、ヒールのある靴は始めて履くのだ。故に履き慣れないヒール付きの靴に、ラウラは体勢を崩してしまう。

全員があつと思つた瞬間に、ラウラのその体をシャルロットはすぐさま支えた。

「すまないな」

「ううん、どういたしまして。」

ラウラの手を取り、お辞儀をするシャルロット。その様は、貴公子とプリンセスと
いった感じで、まるで物語のワンシーンのようだった。

「写真撮って良いかしら!!」

「私も!!」

一瞬で囲まれて、当たりは騒然となる。

2人は顔を見合わせ、苦笑いを浮かべるのだった。

第二話

「ふう、疲れたな。」

「まさか最初のお店に行く前にラウラが先走るとは思ってたからね、かなり時間を使った気がするのには気のせいかな？」

ちようど時間は12時を過ぎ、2人はオープンカフェのテラスで昼食を取っている。

ラウラは日替わりパスタ。

シャルロットはラザニアをそれぞれ注文していた。

「それは…まあ。…しかし良い買い物が出来たな。」

「あ。誤魔化した。」

と言いつつも、シャルロットもラウラも楽しんでいた。

「午後はどうする?」

「生活雑貨を見て回ろうよ、僕は腕時計が欲しいんだ。日本製の腕時計って、ちよつと憧れだったし。」

そう言うシャルロットの目は、純粹に輝いていた。

「腕時計か…」

「ラウラはそういうの無いの? 日本製の欲しいものとか。」

そう言われて、ラウラは暫し考え込む。

だが既に答え等決まっている。それは…

「フィギュアだ。」

「フィギュアってアレでしょ? もう少し女の子的な物は無いの?」

「無い。フィギュアは私の人生で3番目に大切な物だ。」

即答。

分かっていた事とは言え、シャルロットはガクツと肩を落とした。

ふと、シャルロットは隣のテーブルに座っている女性を見る。

「はあ…どうすれば良いのよ。」

外見だけでも20台後半に見え、その堅そうなスーツがさらに大人な雰囲気を出す。何らかに悩み事があるらしく、テーブルの上に置いてあるペロンチーノは冷め切つてしまい、それでもなお手を付けて無かつた。

そんな光景を、お人好しなシャルロットが見逃す筈が無く…

「ねえラウラ。」

「お節介は程々にな。」

シャルロットの思考をぶつた切るように、ラウラの言葉が先回りする。

その言葉にビクツとなるシャルロットだったが、直ぐにその顔は嬉しそうな顔になる。

「僕のこと分かってくれてるんだね。」

「たまたまだ。で、どうするつもりだ？」

「そうだね、取り敢えず話だけでも聞いてみるよ。」

そう言つて、シャルロットは席を立つ。

そして件の女性の元に歩いて行き…

「あの、どうかされましたか？」

「え？ー！？」

ガタンツと、2人を見るなり席を立つその女性は…

「あなたたち！」

「は、はい。」

「バイトしない？」

「Was？」

「Quoi？」

突然の話に思考停止した2人は、日本語を忘れ母国語が出て来てしまった。

――△――

「と言うわけでね、いきなり2人辞めちゃったのよ。まあ辞めたというか、駆け落ちした

んだけどね。ハハハ…」

「はあ。」

「でもね、今日は大事な日なのよ！本社から視察も来るし、だからお願い。今日だけで良
いから、あなたたち2人にアルバイトをして欲しいの！」

「ふむ…」

その女性のお店と言うのが、これまた特異な喫茶店だった。女は使用人、男は執事の
格好をして接客をすると言う。

所謂メイド喫茶だ。

「それは良いのですが…」

着替え終わったシャルロットがおずおずという風に聞く。

「何故僕は執事の格好なのでしょうか？」

「だって、ほら！似合うもの！そこいらの男なんかより、ずっと綺麗で格好いいもの！」

「…そ、そうですか。」

褒められたのだが、そうじゃないと言わんばかりの顔をするシャルロット。

自分が着ているものが、執事服というのが気に入らないのだ。そんな彼女を見て、自身もメイド服に着替えた店長はガシツと手を掴み：

「大丈夫！ 凄く似合ってるから！」

「そ、そうですね…」

シャルロットの心中は複雑であつた。

少し離れた場所で、言われたとおりの仕事をこなすラウラの姿。

その姿と自身を見比べる。

細身で有りながらも、強靱さを秘めた肉体。

その体に纏う飾りつきの多いメイド服に、それを彩るかのような長い銀髪。そして強烈なアクセントになる眼帯。ミステリアスなそれは、クールなメイドといった感じだった。

対してシャルロットは執事服。

自身の中性的な顔立ちによって、それは『可愛い顔立ちの男子』に見えるのだ。

「店長！ 早くお店手伝ってください！」

フロアリーダーの声に、店長は最後の身だしなみを整えバックヤードの出口に向かう。

「あの、最後に1つだけ。このお店、なんて言う名前なんですか？」

その言葉に店長は笑みを浮かべ、容姿に似合わない可愛らしいお辞儀で返した。

「お客様、@クルーズへようこそ。」

――△――

「デュノア君、4番テーブルに紅茶とコーヒーお願い。」

「わかりました。」

カウンターから飲み物を受け取り、@クルーズと刻印の入った銀のトレーへと乗せ

る。

ただそれだけの事なのに、その動作は至極洗練されていた。

それを見た臨時の同僚達は、ホッと息を吐いた。

初めてのバイトだというのにその立ち振る舞いは気品に溢れ、客の…特に女性客から視線を集めていた。

「お待ちせ致しました、紅茶のお客様はどちらですか？」

「は、はい。」

自身の方が年上だというのに、その洗練された立ち振る舞いに、女性は緊張して答える。

カップを差し出す前に、シャルロットは『とあるサービス』を不要か否か尋ねた。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？よろしければこちらで入れて差し上げますが。」

「お、お願いします！えっと、砂糖とミルクましましで！」

「あ、私もそれでお願います！」

砂糖もミルクも入れない客は大勢居たのだが、目の前の美形執事のご奉仕されたいが

為何時も飲まないものを頼みだす。

そんなことを思われてる等知らないシャルロットは、柔らかな笑みを浮かべて頷く。

「かしこまりました、それでは失礼致します。」

シャルロットの手が、新たに砂糖とミルクを入れたカップを静かにかき混ぜる。

本来素人がいくら気を付けても鳴ってしまうカチャカチャと言う音でさえ、シャルロットは鳴らさなかった。それは正に、洗練された本職の仕草。

「お待ちせ致しました。どうぞ、お召し上がりください。」

「あ、ありがとう。」

スツと、シャルロットがテーブルの上に置いたカップを手に取り、どぎまぎしながらも口を付ける。同じようにコーヒーを混ぜて貰った女性客も、緊張できこちない動作で一口飲んだ。

「では。また何かありましたら何なりとお申し付けください、お嬢様方。」

そう言つてトレーを右手で抱え、左手を胸に当てながらお辞儀をするシャルロット。

そのレベルの高すぎる仕草に、女性客はポカンと口を開け頷くしかなかった。

一方のラウラは…

「ねえねえ、君可愛いね。名前教えてよ。」

「申し訳ありませんが、当店ではそのようなサービスは行っておりません。」

「そんなこと言わずにさあ。あ、お店何時に終わるの？良かつたら一緒に遊びに行かない？」

ナンパされていた。

本来であれば、有無を言わさず追い返したりするのだが、今はバイト中である。

店の評判を落とさないよう、猫を被っていたのだが。

物事には何事も限度がある。

ダンツと、テーブルへと叩き付けられたコップが大きな音と共に滴を散らす。面を喰らっている男達へと、ラウラは冷たい声で告げた。

「水だ、飲め。」

「えつと…俺達コーヒーを頼んだ筈なんだけどなあ。」

ラウラの雰囲気の変わりように、男達は萎縮してしまう。好印象を持たれたいが為に話し掛けていたのだろうが、生憎と逆効果になってしまった。何故なら…

「注文してもなお店員を引き止め、剩え口説き落とそうとする。そんな輩にだすコーヒーなどあると思うか？」

「は、はい。その…すみません。」

ラウラの絶対零度の視線と嘲笑いに折れ、男達は小さくなりながら水を啜った。

「飲んだら帰れ。邪魔だ。」

「はい…」

学校内でのマスコットとは一変、完全に威圧するその態度。だがその態度すらも、美少女の外見が伴えばかなりの魅力になるらしい。

店内に居る男性客の殆どが、自分にも同じように接客して欲しい。そんな熱い視線を送り続けた。

「いい。あの子ちよういい！」

「罵りたい、見下されたい。ああ、踏み付けられたい。」

「ロリ子メイド…」

約1名変態が混じっているそのテーブルは、他の客は勿論のことスタッフまでもがガ

ン無視していた。

「あ、あの！執事さん、追加の注文良いですか？」

「メイドさん！コーヒーをください！」

「美少年執事さん、こっちにも！」

「美少女メイドさん！こっちにも是非！」

一気に店内は騒然とし、全域から注文が殺到する。通常時の2倍以上のオーダー数に、店員はてんやわんや。だがそこは店長の手腕。上手いこと2人を、滞りなく全てのテーブルに回れるようにした。流石本業、あつと言う間に8割近くのオーダーを捌ききってしまった。

その時：

「全員動くんじゃねえ!!」

一瞬何が起きたか分からなかった全員だが、次に発せられた銃声により事態を把握してしまい悲鳴が上がる。

「きやあああ!?!」

「騒ぐんじやねえ!!ぶち殺されてえのか!!」

入って来た男達は3人。

その3人共が、ジャンパーにジーンズ。黒い覆面に所々紙幣が飛び出したバックを肩から提げ、手には銃…外見から見ると1人は拳銃を持っていた。

誰がどう見ても強盗である。それも銀行を襲撃した後の逃亡犯。

「あー犯人一味に告ぐ。君達は既に我々が包囲した、大人しく投降しなさい。繰り返すー」

犯人達が入ってきて1分弱。

流石首都圏の警察、仕事が早い。店外にはパトカーによる道路封鎖と、ライオットシールドを構えた対銃撃戦装備の警官が包囲していた。

確かに仕事は早いのだが…

「なんか…警察の対応…」

「古すぎでしょ。何時の時代よ。」

人質、に一応なっている店員達がボソボソと呟いた。

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ俺達全員ー！ー」

「狼狽えるな！焦ることはねえ、こっちには人質が居るんだ。強引な真似はしてこねえさ。」

リーダー格と思われる一際体格が良い男がそう告げると、他の2人は明らかに自信を取り戻す。

「そうですね。俺達には高い金払って買ったこいつがあるしー」

ジャコンツと、硬い金属音を鳴らし弾丸を薬室に送るためにポンプアクションを行う。

そしてそのまま天井：蛍光灯に向けて撃った。

弾の無駄である。

「ぎゃあああ!?!」

蛍光灯が割れ、パニックになった女性客が耳をつんざく悲鳴を上げる。だが今度はリーダー格の男が自身の持つハンドガンを撃って黙らせた。

「大人しくしてな！俺達の言うことを聞いていれば殺しはしねえよ。わかったか？」
女性は顔面蒼白になりながら何度も頷くと、声が漏れないように口を紡ぐ。

「おい聞こえるか警官共！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！勿論追跡車や発信機なんて付けるんじゃないやねえぞ！」

威勢良く割った窓からそう叫ぶと、宣言が本当だと証明するようにパトカーに向け発砲する。

幸いなことに車に当たっただけで済み、死傷者は出なかった。だがそれでも、周囲の野次馬をパニック状態にさせるには十分だった。

「へへ、奴ら大混乱してますね。」

「平和な国程犯罪はしやすい、ホントだったつすね。」
「だな。」

暴力的な笑みを浮かべる犯人達を、冷ややかな目で見つめる影が…

店内で唯一犯人達以外で立っている存在。

それは銀髪のメイド。

ラウラだった。

一方のシャルロットは、騒ぎに乗じて倒れたテーブルに身を潜めている。

「……」

一目見て美少女だと分かるラウラが立っただけは、否応なく目立つ。

故に…

「なんだお前、大人しくしていろと言ったのが聞こえなかったのか？」

案の定、ずかずかとリーダーがラウラの眼前で止まる。その手に握った銃をチラつかせるリーダーを尻目に、銃の種別を読み取る。

「(ベレッタM92Fか。安定性と整備の手軽さに重きを置いた銃。ならやりようはいくらでもある。)」

「おい、聞こえないのか!!それとも日本語が通じないのか!!」

「残念なことに聞こえている。それよりーっ良いか？」

「な、なんだ。」

見るからに外人のラウラが日本語で話し掛けて来て、しかも今の今まで日本語が喋れないと思っていた為に思考が少し遅れる。

その遅れた思考が、決定的な隙を生んだ。

一瞬の隙を突き、ラウラはリーダーへと疾走。

そして銃身を掴み、スライドを外した。

ハンドガンは、整備性を重きに置いて作られている物が殆どで、手順を最低でも2回踏めば簡単にスライドを外せるのだ。

そしてそれを不自然な程に倒れたテーブルへと投げ：

「接近戦では銃よりナイフの方が早い、覚えておくと良い。」

「なっ……ツぐ!?!」

間合いを許したリーダーはそのまま床に組み伏せられ、首筋にナイフが当てられていた。

思考が遅れていた他の2人も、自分達のリーダーが組み伏せられたのを目撃して、銃を構えようとする。が…

「おっと、動かないでね。動かれちゃうと、誤って僕の指が引き金を引いちゃうかもしれないよ?。」

そのうちの1人の後ろに回り込んだシャルロットが、米神に銃を突き付けていた。ご

丁寧にシヨットガンを取り上げて。

シャルロットが持っているのは先程リーダーが持っていた『M92F』、ラウラがスライドを外してテーブルへと投げた物。

テーブルの裏にはシャルロットが居て、それを組み立てて瞬時に後ろを取ったのだ。

「くっ！この！」

残された一人は、自身の持つ銃を：サブマシンガンをほぼ無防備なラウラへと向ける。だが…

「セーフティが掛かっているぞ？素人丸出しだな。」

「な、何?！」

ラウラのその台詞により、一瞬だが銃を見てしまう。ブラフだとは気が付かない為に、それが隙となった。

バンッ。

一発、銃声が響く。

それは男が持つサブマシンガンからでも、ラウラからでも無い。

「動かないでって、僕は言ったはずだよ?！」

奪い取ったショットガンを代わりに突き付け、右手に持つM92Fから煙が出ていた。

着弾地点はそう、男が持つサブマシンガン。

銃は弾丸を撃ち出す道具だが、受ける物では無い。それはつまり、サブマシンガンは使えなくなる。

「お前達の言うことを借りるのであれば、私達の言うことを聞いていれば殺しはしない。大人しくしろ。」

犯人達は自身が入ってきたときとは完全に逆の立場となった。

銃を突き付けられた2人と、首筋にナイフを突き付けられたリーダー。犯人達は誰一人として抵抗できる者は居なかった。

ラウラはそのままナイフを突き付けながら、自身のメイド服、そのそのスカート内に付けている小さなポーチから3本の細長い物を取り出した。それは細い物同士を繋ぐのに重宝される物：結束バンドだった。

それを片手で器用にリーダーの両手首を拘束すると、用心の為かナイフの柄で頭を殴った。

容赦が無い事この上ない。

「リーダー!!」

「安心しろ、気絶させたただけだ。さて…次はお前達2人だ。」

じわりじわりと近寄ってくるラウラに対し、もう2度と犯罪はしないと誓った2人だった。

因みに、例のごとく結束バンドで縛られたらナイフの柄で例外なく殴られていた。

第三話

「もう夕方になつちやつたねえ。」

「ああ、思わぬ強盗犯厄介事と遭遇に遭つたしたからな。要らぬ時間を喰つた。」

強盗犯と遭遇してから2時間後、2人は買い物物を済ませて駅前に戻つてきていた。

強盗犯を制圧したとはいえ、シャルロットは銃を一発撃つている。事情聴取が長引いて余計な時間を使いたくなかつた2人は、裏口から早々に退散することにしたのだ。

とはいえ、一時程働いた2人を店長は黙つて見逃す訳も無く、働いた時間に見合つた分と迷惑料：色々と色を付けて貰つた給料を退散する前に貰つていた。

そして何気に接客の楽しさを覚えた2人は、ちよくちよくバイトしに来る事を約束していた。

「買い物はこれで全部か？」

「うん。ていうかラウラ、本当にそれだけで良かったの?」
そう。

ラウラが買ったのは自身の趣味であるフィギュア以外には1つだけ。
シャルロットとお揃いの猫パジャマである。

「何を言うか。シャルロットを選んでくれたんだ、不満など無いぞ。」

「う、うん。それなら良かった。」

何の躊躇も無く照れ臭い台詞を言うラウラに対し、シャルロットは頬を染める。

「そ、それにしても結構買ったね。店長さんがお給料入れてくれたから、予定より
沢山買えて助かったよ。」

「む、金か。確か口座に2千万ユーロ程あるはずだが…」

「え!? そんなに持つてるの?」

想像を超えた金額に、シャルロットは驚愕を隠せない。

2千万ユーロ、日本円にして22億円。

明らかに1学生が持っている金額では無いのだ。本来であれば…

「ああ。私は生まれたときから軍属だからな、その分の給料と言った所だ。それに、代表

候補生になってからは、その分も上乘せされている。」

シャルロットも代表候補生になってからそれなりには貰っているのだが、ラウラのそれは文字通り桁違いだった。

「だがまあ、この学園に来るまではそんな金等……使い道が全く無かったがな。」

そう言う通り、ラウラはお金の使い道とは無縁の生活だった。

軍の施設内で生活していたし、日用品も軍からの支給品で事足りた。

趣味の物。所謂グッズ類などは、今持っている物は全てラウラが師匠に買って貰った物である。

故に今日初めて、ラウラは自分の物を自分で買ったのである。

「あ、そうだ。ラウラ、この先の公園に行ってみようよ。」

「公園……この先と言えば城址公園だが……」

「うん。日本のお城跡。んー何のお城だったかなあ。」

「ほう、それは興味深い。日本の城は守りやすく攻め難いと聞く、跡地とは言え一見の価値がありそうだ。」

相変わらずの着眼点に、シャルロットは苦笑いを隠せない。だがそれについてはシャ

ルロツトも口を挟まない。個人の意見や感想は、決して押しつける物では無いからだ。

「ここだね。ここに来たらクレープ屋さんを探すんだ。」

「クレープ屋？何故だ、何かあるのか？そのクレープ屋とやらに。」

そう言つてラウラは首をかしげる。

クレープ屋等、今まで居た駅前のデパートに何件か入っているからだ。ここまで来て今更クレープ屋に行く理由が分からなかった。

「休憩中にお店の人に聞いたんだけど……この公園のクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれる、ていうおまじないがあるんだつて。」

「『おまじない』……と言うと日本のオカルトか何かか？」

「あー……えつと、ジンクスだよ。」

「ああ、なるほど。験担ぎか。」

ガクツと、シャルロツトは駆けそうになる。

確かに合っているのだが、シャルロツトは違ふと叫びたかつた。もう少し女の子らしい言い方で言つて、と。

とは言えシャルロツトは、今日一日ラウラを付き合わせている。その為のお礼も兼ね

て、クレープ屋を探す。

幸い人気の店らしく、部活帰りらしき女子高生が列を作っていたためすぐに見つけられた。

「じゃあ早速頼んでみようよ。」

ラウラの手を両手で引きながら、シャルロットはバンを改造した移動式クレープ屋へとその足を運ぶ。

「すみませーん。クレープ2つください、ミックスベリーで。」

その言葉に、無精髭を生やしバンドナを巻いた男性が出てくる。

「あー。ごめんねえ、ミックスベリーは今日もう終わっちゃったんですよ。」

「あ、そうなんですか…残念。ラウラどうする?」

望む物が無いと知り、シャルロットは肩を落とす。そしてどうするかを聞くのだが…
対するラウラは、何とも含みのある笑みを浮かべ…

「ふむ、そうだな。イチゴとブドウを一つずつ頼む。」

「…フツ、はいよー！」

クレープ屋の店主も、ラウラと同様に含みのある笑みを浮かべる。そのまま、注文通りイチゴとブドウのクレープがラウラに手渡される。

そのままラウラは、シャルロットの分の料金をも全額支払ってしまおう。

「いいよラウラ、ここは僕が出すつて。付き合つて貰つているんだからさ。」

「なに、気にするな。」

そのまま2人は、近くのベンチに腰掛ける。

今度はラウラが先導していた。

「ふむ、どちらが良い？」

「んー。じゃあ、僕はイチゴ。」

「では、私はブドウを頂こうか。」

そう言つて各々のクレープにかじり付く。

かじり付いた時に、溢れてきたクリームが頬に付くのはご愛嬌。

「んむ、これ美味しいね！」

「そうだな。クレープ等実物は始めて食べたが…存外美味しいものだな。」

噂のミックスベリーを食べられず、気落ちしていたシャルロット。だが、出来たてのクレープを食べてその気持ちも何処へやら。既に声も弾んで、上機嫌であった。

「おいしー。ねえラウラ、また来ようよ。」

「そうだな、また…買い物にでも。」

気分上々のシャルロットは、クレープを食べるペースが少し早い。そうならば唇付近にクリームが付くのは必然。

それを見て、ラウラは少し微笑み…

「シャルロット。」

「ん？何？ラウラー！？」

ぺろッと、ラウラはシャルロットの唇を舐めた。その行為と共に、シャルロットの顔は瞬時に紅くなる。

「なつななな、何をー」

「ふっ、ソースが付いていたからな。それとも…。」

期待したのか？

とラウラはシャルロットの耳元で囁く。

その甘い声、そして妖艶なその表情にシャルロットは更に顔を紅くする。

「おっと。」

ペろツと、今度は自身の手の甲に落ちたソースを舐め取る。

その姿は、さながら猫が毛繕いをしているようだった。

「つ~~~~?!」

ラウラのその突飛な行動に、シャルロットは胸の鼓動が収まらない。同性だなんだと
言う前に、先程の妖艶な表情が未だに頭から離れないのだ。

「そうむくれるな。ほら、私のクレープを一口やろう。」

「いい、いただきます。」

その紅い顔を隠すかのように、シャルロットはラウラの持つクレープにかじり付く。
だが自身の行動を思い返し、またもや紅くなる。

これは俗に言う、間接キスなのだから。

「ああ、そうだ。あのクレープ屋だがな、ミックスベリーはそもそも無いぞ。」

「え、そうなの？」

「ああ、メニユーに無かったからな。それに厨房にも、それらしきソースは何処にも無かった。」

「そ、そうなんだ…。」

シャルロットは残念そうに肩を落とす。

噂のミックスベリーと言う物が、そもそも存在していないと言う事を知ってしまったが故。

「だがミックスベリーは食べられただろう？」

「え？」

「これと、そのクレープは何味だ？」

その言葉に、シャルロットは頭を捻る。

ラウラが手に持っているのはブドウ、そして自分の物はイチゴ。

そしてその2つの英語で言うと…

「あ、ストロベリーとブルーベリー！」

「ゴ名答。」

とても楽しげに、ラウラはクレープを頬張る。

「ーってラウラ、ブドウはブルーベリーじゃないよ！」

「同じような物だろう。それにあそこでブルーベリー等と言えば、シャルロットが気付いてしまうではないか。」

そう言えばと、シャルロットは思い出す。

ラウラがイチゴとブドウと言ったとき、店主が含みのある笑みを浮かべたのを見た気がしたのだ。

「そっかあ。『何時も売り切れのミックスベリー』ってそう言うことだったんだ。」

なるほどと思いつつも、先ほどのラウラの行動を思い返して顔が紅くなる。

自身の唇を、クリームが付いているとは言え舐められ、剩え間接キスマでもしてしまっただから。

「それにしても、そろそろ夏も終わりだな。」

「そうだねえ。」

ベンチに座りながら、2人は沈む夕陽を眺める。

この夏は…2人にとって忘れられない日になるであろう。

—————△—————

「ね、ねえラウラ。本当にこれやるの?」

「ああ、当たり前だろう。何を今更躊躇う必要がある、言い出したのはシャルロットだぞ。」

「そ、そうだけどさあ…」

ラウラ・シャルロットの自室。

夕飯後特にすることも無くゴロゴロしていた2人は、シャルロットの提案で早速今日買ったパジャマを着てみようと言うことになったのである。

そしてそれに便乗するかのよう、ラウラも猫にまつわることを言い出したのだ。

そう…

「ほら、言うだけだぞ？『お帰りにやさいませ、ご主人様。』ほら、言ってみるにやあ。」
「うー…だつてえ」

悪乗りし出したラウラを止める者は、この部屋には居ない。

それ故にシャルロットは顔を紅くしていた。

着てみようと言ったのはシャルロットで、にやーんと言わせるつもりではあつた。だがラウラがその更上のことをしてくるとは、到底思つていなかったのである。

そして尚且つシャルロットの後ろから、絡み付くかのようにラウラが抱き着いているのだ。そのままラウラはシャルロットの耳元で、妖艶な笑みで囁いているのだ。シャルロットはその時点で、顔がどんどん紅くなる。

「ほらシャルロット、にやーん。」

「うう…：本当に言わなきやダメ？」

「ああ、もう逃げ場等無いぞ。」

シャルロットはラウラに後ろから抱き着かれて

シャルロットがラウラから離れるには、選択肢は1つしかないのだ。

「…お、お帰りにやさいませ…ご主人様。」

ピッ

「良いぞシャルロット。凄く可愛いぞ。」

「ま、待つてラウラ。今の音は？」

そう言いながら、シャルロットはラウラの手に注目する。そこにあつたのは、今ではお手軽な値段で誰でも買うことが出来る『ボイスレコーダー』だ。だがラウラのは一味違つた。

軍からの支給品であり、かなり高性能な物。

普通に買うとなれば、20万はくだらない程の物だ。クリアな音声が直ぐに録れ、容量もかなり大きい。

「ん？こんな可愛いもの、記録に残さねば損であろう？」

「な?! 待つてラウラ、後生だから! それだけは勘弁してくれない?」

かなりの必死さでラウラに頼み込むシャルロット。だが、そう簡単にラウラが渡すはずも無く。

「ふむ、無理だ。私には家も家族も無いが、これは家宝にする。そして師匠に自慢するん

だ。」

「それだけは絶対にだめえ!!」

シャルロットはそのままラウラを組み伏せようとするのだが、位置的にかなり不利。そして体勢は、未だにシャルロットがラウラに後ろから抱き着かれているのだ。

ラウラのやりたい放題出来る。

「返して欲しいのならば…」

チュツと、ラウラの唇がシャルロットの耳に触れる。

顔が紅くなり、シャルロットはヘナヘナと体の力が抜けてしまう。

「…少々ジツとしていることだ。」

「ま、待つてラウラー…!?!」

声にならない悲鳴が、その部屋を満たした。

果たして部屋の中では何が起きたのか、知る者は居ない。

ハロウィン記念 番外編。

ハロウィン特別編。

「ハロウィン……」

休み時間中、誰かがそう呟いた。

この学園では、イベント事といえば今まで予想外の出来事で潰れてきた『クラス対抗戦』や『学年別トーナメント』、『林間学校』、そしてまだ先の事だが『学園祭』等。

大規模なイベント事が多数を占める。

だがこれの内、生徒主導で行うイベントは一つも無い。

流行事やイベント事に目が無い花の女子高生がその単語を聞き逃す筈が無かった。

「そうよそれよ！ハロウィンだわ！」

「もうちょっとで当日じゃない！あーなんでもう少し早く気が付かなかったのよ私は

！」

そう。

現在の日時は10月20日。

ハロウインは31日の行事であり、残された猶予は11日。

どう考えてもぎりぎりであった。

「織斑君織斑君、さあさあ教卓に立つて。そしてこれを読んで。」

「おっおう。えー…なるほど。」

半ば無理矢理教卓へと立たされ、紙を渡された一夏。だがそこに書いてあった内容を見て、ニヤリと笑みを浮かべたのだ。

一夏が教卓に立たされた理由は、クラスの纏め役『クラス代表』として意見を纏めて貰う為であった。

「ではこれより、俺達生徒主導の行事『ハロウインイベント』の企画決議を行う。司会進行は、この織斑一夏が努めさせて頂く。」

「…では書記は私が。」

セシリアが立ち上がり、電子黒板へと向かう。

誰に言われるでも無く、自分達が楽しむ行事を自分達で作る。そう言う雰囲気であった。

「まず第1に決めたい事だが…このイベントの名前だ。何か意見はあるか？」
「はいはい！ハロウィンといえば収穫祭！」

日頃の感謝を込めて、『ハロウィン大感謝祭！』とかどう？」

ひねりが無いそんなアイデア。

だが日数もそんなに無いため、反対する人は居なかつた。

「よし、では次に1番重要なことを決める。当日、何をやるかだ。」

「無難にお菓子配りとかじゃ無いの？」

「それも行うが、もう1つ重要なことがある。」

そこで一夏とぎり、こう続けた。

「日本のハロウィンと言えばこれ、『コスプレ』だ！」

バンツと、効果音付きで電子黒板に表示されるその文字。それを見たクラスメイトは、皆一同にテンションが上がっていた。

その時点で黒板にはお菓子配りとコスプレの両方が書かれていた。

そこに…

「何の騒ぎだ…」

「お、織斑先生…」

このクラスの担任。絶対に認めてくれなそうな人がそこに居た。

千冬はそのまま黒板を一瞥すると、セシリアからペンを受け取り、徐に何かを書き始めた。

ハロウィン大感謝祭と書かれた左側に小さく『提供 織斑千冬』と。

「諸君、この時間は自習とする。私は学園長に許可を取ってくる。」

そう言って、千冬は教室を出て行った。

担任が賛同し、学園長に許可まで取ってくれる。こうなれば、学園公認の大イベント

となる。

一夏達はノリノリで残りを決めだした。

第四話

「一夏！私がその舐めた根性を叩き直してやる！」

その言葉を聞き、一夏は何故こうなったかを自問自答していた。答えが出るはずが無いのに。

少し時間は巻き戻り。

一夏は第2アリーナを貸切状態で訓練中であつた。

現在は夏休み中であり、一般生徒は帰省したり買い物に出掛けたりと、訓練をしている生徒はごく少数であつた。今日はセシリアも、自宅の用事により数日、学園を空けていた。

故に一夏が出した第2アリーナの申請は、他に誰も居なかつたために貸切状態な訳だ。

そしてそのアリーナの中心にて、刀を振り続けているのが一夏だ。

このアリーナを使う者なら誰しもが使えるが、そもそも使う者が居なく誰も知らない設定。

アリーナの中央。そこに書いてある円に向かつて、全方位から射出される硬質テニスボール。

それを全て回避、又は撃ち落とす為の物だ。

今回一夏は、後者の方。つまり手に持つ刀で、全方位から迫るテニスボールを斬り伏せていた。

「チツ、少し遅いな。」

明らかに可笑しい速度。ハイパーセンサーを使わなければ見ることさえ叶わない程のテニスボール、それを生身で斬り伏せているにも関わらずそれを遅いと言う。

一夏の規格外さがよく分かる。

アリーナとは言っても、必ずしもISを展開しなければいけないわけでは無い。

それぞれ用途に合わせた訓練方法がある為に、展開しなくてもいいのだ。勿論 I S を用いて訓練している人が居ない前提だが。

「さて…終わるか。」

そう言うのと一夏は刀で斬り伏せながらも、腰に差していた物を投げた。

『それ』は付近に置いてあったスイッチに命中すると、役目を終え地面に落ちた。

「ふう。さて何をやるかな…料理の試作…食べ歩き…あ、茶葉が確か切れていたな。買出しも候補だな。」

そう言いながらも、一夏は片付けを始める。

今後の予定を立てようとしているわけで、正直暇な一夏だ。今日1日、最悪3日間程予定が無いのだから。

「一夏!!」

アリーナから撤収しようとしていた一夏に、突然後ろから声が掛かる。現在時刻は朝7時半。

こんな時間に大声で自分の名前を呼び、声を掛けてくる人物等、一夏は1人しか知ら

ない。

一夏と同様夏休み中に用事が無く、学園に残った『篠ノ之箒』だ。

「はあ……何のようだ篠ノ之箒。」

溜息を吐きながらも、一夏は後ろを向く。

すると案の定、そこには箒が居た。

何故か剣道着に着替え、竹刀を持っていたが。

「何だその曲芸染みた動きは！来い、その軟弱な腕を鍛えてやる！」

そのまま一夏の腕を掴み、引きずりだす箒。

確かに一夏の剣技は曲芸染みた行動が多い。

相手を翻弄し、隙を突いて攻撃を叩き込む。そんなことは、回りから見れば大道芸にも見えるだろう。

だが実際の所、一夏の剣技は戦場で磨かれた実戦的な我流の剣術。明確に流派も無いし、師事した人物も居ない。

それでも的確に相手の急所のみを狙う剣は、邪道とも言えるし王道でもある。一夏の剣は、如何に相手を効率良く斬り殺すか。そして如何に最速で敵を斬るか、その2つの

みに主眼を置いてゐる。

魅せる為の劍舞や劍道とは違ふのだ。

相手を斬り殺す為だけの劍と、己と相手を律する劍。どちらが強いかなど、明白である。

劍道のみ。劍術から始まり、CQC、棒術、銃術等に精通している一夏。結果は言わずもがな。

わかりきっているが、一夏は仕方なく道場へと向かった。

――△――

劍道場へと辿り着いた一夏は、取り敢えずで防具を着けに行つた箒を待つていた。そして戻つて来た箒は…

「いくぞ一夏！曲芸紛い等、忘れさせてやる！」

「へいへい。ま、頑張れ。出来るものならな。」

そう言いながら、一夏は適当に竹刀を引つ張り出す。そして、振り上げからの袈裟切り、薙ぎ払い、そして牙突。その一連の動作をする。

だが…

「軽すぎるな。」

普段一夏が振るう得物は、竹で出来た竹刀とは比べ物にならない程に重い。

何をどうしてそうなったか謂われは分からず仕舞いだが、一夏の得物：刀は5kgあるのだ。

それに対し、竹刀は3尺8寸^{サブハチ}で400g程しか無い、良くて500gだ。重さの桁が違うのだ。

そしてそのまま、一夏は竹刀を構える。

だがそれは、構えていない様に見えた。

何故ならそれは、居合の構えだからだ。

「なんだその構えは！それと胴着と防具を着けろ！」

「必要無い、これが俺の剣だからな。」

一夏の態度が気に入らなかつたのか、齒軋りして激昂した筈が竹刀を振り上げる。

しかし、一夏にとって全て見える太刀筋だった。剣道の有効打は面、小手、胴。その3カ所である限り振り方で容易に予測出来る。

一振り一振りを的確に見極め避けていく。

「貴様！ さつきから避けてばかり……男なら正面から掛かってこい!!」

「はあ……仕方ない。この技を使うには少し役不足だが……」

一夏は竹刀を握る左腕を少し上げ、後ろに引いて低く身を屈めた。

「剣道をしろと……言っているだろう!!」

竹刀を振り上げて、馬鹿正直に真正面から突っ込んでくる筈。それに対し、一夏は焦ること無く対処する。

「絶技……」

そして決着は一瞬だった。筈の視界から一夏が消えて、胴に衝撃がはしる。その数は10。そしてゆっくりと倒れる筈の後ろには、いつの間にか竹刀を納刀する格好にしている一夏がいた。

「疾走居合。」

「な……に……」

体のあちこちに打撃を受け、意識が朦朧としている筈。既に立ち上がる気力も体力も残されていない。それでも意識を失わないのは、執念か或いは意志の強さか。どちらにしても一夏には関係なかった。既に朦朧として何も聞こえていない筈等、もはや一夏の眼中には無い。

そのまま流れるかのように、一夏は竹刀をあるべき場所へ戻す。そして…

「じゃあな、篠ノ之箒。俺はお前のことが、昔から大嫌いだったよ。」

「ま……まで……」

聞こえていないが故にそう言い残して、一夏は剣道場を後にする。その後、この日の箒がどうなったのか一夏が知ることは無かった。



「ふむ、この時間帯なら喫茶店も空いているのか。」

現在、一夏はレゾナンスにて喫茶店巡りならぬ食歩きをしていた。朝9時。朝食には少し遅く、昼食には少し早い時間。一夏は自身が作れるスイーツ、そのレパートリーを増やすためこうして食べていた。

そして入った1件目の喫茶店。

この店は独特で、客1人1人に店員が専属で1人付くという何とも異質な店だ。

「すみません、この店長のオススメを1つ。」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください。」

食べなければなんとやら。

朝食がまだな一夏は、1件目では普通に食べることにした。朝早くから様ノ之帯の我が儘運動に付き合わされた一夏は、これを食べることで忘れようとしていたのだ。

「お待たせ致しました、この度の店長のオススメ『店員のまかない飯』でございますが…

宜しいでしょうか？」

「ああ、問題ない。こういう物ほど美味いと、よく言うだろう？」

「恐縮です、ではごゆっくりお召し上がりください。」

そう言つて下がる店員を横目に、一夏は早速スプーンを付ける。

目の前にあるのは、見た目からしてリゾットだ。見るからに庶民的だが、それ故不味い等とは限らない。

そのままスプーンで掬い、口に運び：

「ーッ!? おいおい、これがまかない飯? 冗談だろ。」

一口食べただけで、一夏は驚愕を露わにする。

見ただけではわからない、明らかにあり合わせで作つたとは思えない料理に舌鼓を打ちつ。

「一発目から当たりを引いたな、これは最高だ。」

「お気に召して頂けたようで、何よりです。」

何時の間にか、先程の店員が一夏の元へと戻つてきていた。基本的に接客を掛け持ちする店員だが、1人の客専属なのだ。

それに対し一夏は、早速感想を言う。

「ああ。これほどの物がただのまかないとはな、メニューに載せても売れるぞこれは。」
「ありがとうございます、ですが…あくまでもこれは『まかない』です。」

「そうか…美味いんだがな。」

今後同じ物が食べられるとは限らない為、一夏はメニューに載せる事を薦めるのだが、店員としてはメニューに載せるつもりは生憎と無いらしい。若干気落ちしながらも、一夏は食べた分の代金を取り出す。

「この店は気に入った。また来るとしよう。」

「恐縮です。その時は是非、私をお呼びください。」

そう言いながら、店員は名刺と会員証を一夏へと差し出す。それを一夏は受け取りながら…

「ではまたお越しくださいます、『織斑一夏』様。」

「ー!?あ、ああ。」

名乗ったはずが無いにも関わらず、自身の名を言われる。驚くなど言う方が無理と言

う物だろう。

「ありがとうございます、またのお越しをお待ちしております。」

その言葉を背に、一夏は喫茶店を後にした。

――△――

喫茶店を出た一夏は、今人氣急上昇中の喫茶店『@クルーズ』へと向かっていた。

ケーキやパフェなど、スイーツが有名となっている店だ。

間近に迫った頃、一夏は異様な人集りを見つける。

「あー犯人一味に告ぐ。君達は既に我々が包囲した、大人しく投降しなさい。繰り返す――」

警察、野次馬。

その他大勢が、@クルーズへと視線を向けていたのだ。

@クルーズを囲むように配備された警察の部隊、そして窓から除く犯人らしき人影。

「はあ、なんだか今日は厄日だな。」

そう一夏は眩く。

朝は箒に絡まれ、次は行きたかった喫茶店が犯人の立て籠もりに使われている。

流石の一夏も溜息を零さずにはいられなかった。

『おい聞こえるか警官共！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！勿論追跡車や発信機なんて付けるんじゃないやねえぞ！』

威勢良く割られた窓からそう叫ぶ犯人の1人が、宣言が本当だと証明するようにパトカーに向け発砲する。

幸いなことに車に当たっただけで済み、死傷者は出なかった。だがそれでも、周囲の野次馬はパニック状態に陥ってしまう。

そんな中一夏は、その喧騒を鎮める為に野次馬へと向かったのだった。

—————△—————

「はあ…結局何も出来ずこんな時間だ…」

現在は17時、夕方である。

一夏は@クルーズの騒動の鎮圧、そして何故だか長い事情聴取に付き合わされ気落ちしていた。

「あー止めだ止めだ。こんな事考えていても仕方が無い、取り敢えず……」

ふと、一夏が視線を上げる。

そこには、

『おいしー。ねえラウラ、また来ようよ。』

『そうだな、また…買い物にでも。』

城址公園。

その中央のベンチに、端から見たらカップルにしか見えない2人組を見つける。

結わえた金髪の少女と、ストレー^銀ト^髪な銀^髪の少女が2人仲良く並んでクレー^プを食べ
ている。

片方は制服の為、容易に判断出来た。
シャルロットとラウラである。

「ふっ、随分仲良くなったようだな。」

その光景を微笑ましく眺めると、今度こそ一夏は目的を持ってレゾナンスへと向かった。

超番外編

IS世界のゾンビアウトブレイク
もしかしたら続ける。

今から20年前、世界を揺るがす事件『白騎士事件』が起き、世にIS：『インフィニットストラトス』が世界最強の兵器として登場した。

その兵器が戦場に実戦配備されてから時は経ち10年、世界で初めての男性操縦者が現れる。彼はIS学園で様々な事件に巻き込まれ、様々な人物と出会う。

そんな彼も、7年前にIS学園を卒業した。

そして現在から2週間前、IS学園のある人工島と本島を繋ぐ唯一のモノレール。その駅があるショッピングセンター街：レゾナンスにて、1つの事件が起こる。

顔を真っ青に染め、目が赤く血走り体の至る所を欠損させた人物が何処からともなく現れ、1人の通行人の喉笛を噛み千切ったのだ。

当然辺りはパニックに陥る。

警察の鎮圧部隊は、流石に突発的に発生した事件に対して直ぐ駆けつけられる機動性は持っていない。

故に1人、また1人と犠牲者が増えていく。

そして嘔まれた人は漏れなく、死した後起き上がり生者の血肉を食むかのように歩き出したのだ。

これが後に生物災害：BioHazardが起きた瞬間だと、生存者達は口を揃えて言うのだ。

—————△—————

バンツバンツ。

この日本において、普段ではあり得ない音が周囲に響き渡る。なんてことはない、拳銃だ。

その音により、やつらが寄ってくるのだが件の少女は気にしていなかった。

「ふう、結局ここも駄目か。駅まで残り2km…弾薬が保つかどうか。ああ、そもそも今はモノレールが動いていなかったな。」

『ええ、だから言ったじゃ無いですか隊長。もう少し降下ポイントを慎重に選ぶべきだと。』

「それは悪かったと、何度も言っているだろうクラリッサ。」

先程から足を止めずに、無線と言いつけているのは銀髪の少女。その出で立ちは黒で統一され、右肩に黒兔のエンブレムが入った戦闘服を着ている。その上からコンバットベルトやマガジンポーチ等、物々しい装備をしていた。

左眼には眼帯を付けており、それによる死角をカバーするため常に体の右側を前に出している。

IS学園を卒業して7年、ドイツ国家代表となりドイツ随一の特殊部隊の隊長を務めている、24歳となった『ラウラ・ボーデヴィツヒ』であった。

『そのルートを左です。』

「ああ。所でクラリツサ、未だにこの事態の原因は掴めていないのか？」

『次は右です。…はい、この事態を引き起こしたのがウイルスだということは判明しましたが、出所は不明です。』

会話をしながらも、ラウラは確実に駅へと近づいていく。彼女の足取りは迷い無く、障害となる『やつら』が居ても転倒させその場を後にする。銃を使わないのは弾の消費を考へての事と、音でやつらが寄ってくるからだ。

やつらとは、蔓延したウイルスに感染した死者の事を差す。やつらは聴覚が異様に敏感で、音を立てるとそこへ集まってくる。

そして生者を見付けると、血肉を求め襲い掛かってくるのだ。
感染経路は、解っているだけで嘯まれる事。

首筋を嘯まれた場合即死してしまうため不明だが、嘯まれてから最短で数分、最長でも5日後には感染する。驚異的な感染力を持つこのウイルスだが、弱点が存在する。

感染者の頭部を破壊すると活動停止する点、そして極低温下では宿主が居なければ存在できない点。

「はあ、流石に嫌になるなこの状況は…」

『頑張ってください隊長。先程連絡がありました。学園には懐かしい顔ぶれが居るそうです。こんな状況ですが、同窓会みたいなものですね。』

「こんな状況じゃなければ、素直に喜べたんだがな。」

そう悪態を付くラウラは、狂気的な笑みを浮かべていた。そして自身の持つ拳銃：グロッグ17のスライドを少し動かしてチャンバー内を確認すると、駅までの残りの道を走り出した。

――△――

そこから30分、ラウラは現在モノレールの駅に居た。モノレールは運行しておらず、電気も要所にしか通っていない。故に真っ暗な構内を、ライトの灯り1つだけで進んでいた。

顔を向けている方向だけ明るいいため、左右と後方は視界確保が出来ていない。

故に暗闇から、何時襲い掛かってくるのか分からない恐怖があるのだ。

「クラリツサ、線路内に出るまで後どれくらいだ？」

『直進してあと80m、ですが…』

「ああ、ヤバい状況だ。」

そう呟くラウラの周囲から、全方位取り囲むように聞こえてくる唸り声。闇に包まれているこの状況下は、とてもじゃないがラウラ1人で切り抜けられるものじゃない。

今の所は大きな物音を立ててない為気が付かれていないが、線路内に出る為の通路を開けるには気を付けないと大きな音が出てしまう。

その為ラウラは、足音1つ立てないように慎重に移動していく。

そして件の通路に差し掛かったところで、ドアが開かない事に気が付く。

「クラリツサ。遠隔でロックを解除できるか？」

『可能ですが、少々時間が掛かります。120秒時間をください。』

そう言って待機するラウラだが、何事も無くドアが開くわけが無い。

このドアは2段階の電子ロックで開く。

ロックを解除するには、ドアの横にある端末を使う。だが今回は、外部からのハッ

キング任せである。ハッキングされたときはロック解除と同時に、あるものが鳴る。

《unlock》

『なっ!?』

侵入者の事を知らせるアラーム代わり、だが今回はそれが厄介を引き起こす。

『隊長! 急いで、早く!』

「ああ、わかつている!」

後ろを見ず、そのまま開いたドアに駆け込み全速力で駆けるラウラ。先程のアラートにより、駅構内にいた全ての感染者がラウラの存在に気付いたのだ。後ろからワラワラと感染者の群れがラウラへと迫ってくる。幸いな事は、感染者は今発見されている種は走れない事だろう。

故に彼女は逃げ切れる。線路内に出て真っ先に、唯一通じる通路の扉を閉めた。

「はあ…はあ…。流石に、肝が冷えたぞ。」

『はい、久し振りに私も冷や汗をかきました』

閉めた扉に背中を預け、ラウラは乱れた呼吸を整える。夥しい数の感染者、それに追われてしまった為この道は次から使えなくなる。

故にレゾナンス方面に戻るには内部を一掃するか、別の道を探す必要があるのだ。

「さて、残りはこの線路を歩くのか…」

『人工島まで伸びてますからね、本島からこの距離を歩くとなると…20 kmやそこらでは足りませんね。』

「はあ…今日は線路上で野宿確定じゃないか。」

IS学園のある人工島、それがあるのは本島から200 km地点にある。この距離を体力を温存しながら歩くとなると、1日で着けるような距離では無い。故に線路の上で夜を明かす事が確定するわけだが、今日のラウラの装備に野営用の道具は殆ど無い。携帯用コンロと簡易鍋、そして着火用のライターと3日分の携帯食料のみである。寝袋の類は持っていない為、寝る場所はそのまま地面に雑魚寝となる。

しかも線路上にやつらが居ないとは限らない、その為熟睡等出来ないだろう。

「クラリツサ…話し相手になつてくれるか?」

『ええ、喜んで。』

ある程度進んだ場所で座り込み、周囲に気を張り巡らせながらも会話をし始めた。

こんな状況故に、人が恋しくなるラウラだった。

—————△—————

2日後、ラウラは漸くI S学園の正門に立っていた。だがその荒れ模様には、ラウラは驚愕を隠せない。7年前ラウラが卒業した時、I S学園は生徒で溢れていた。

だが現在、人の気配を殆ど感じないのだ。

懐かしい顔ぶれと言っていた面子以外には、正に誰も居ない、ほぼ無人のI S学園等見たことが無かったのだから。

「クラリツサ…ルート検索、あいつらの場所まで頼めるか?」

『ええ、彼等はあの場所に…始まりの場所、1年1組の教室です。』

「そうか…フツやはりな。全員居るのか?」

『欠員は大多数を占めますが、隊長と深く関わりがあった人は居ますね。』

顔をにやけさせながら、ラウラは一歩ずつ確実にその足を進めていく。

彼等に会うために。

大惨事の中行われる同窓会、集まった人数はかなり少ないが、それでもラウラの楽しみであった。

第五話

数日後。

家の用事を片づけ学園へと帰ってきたセシリアと共に、一夏はとあるスーパーへ来ていた。

というのも一夏は、夏休みに全員が集まれる日も限られるという事でちよつとしたパーティーを開催するつもりだった。

という訳で、一夏はセシリアを連れて食材や諸々必要になる物の買い出しに来ていた。

「夏休み…皆で食べれるもの…鍋…」

「ちよつと待とう、何故そうなる。」

2人で仲良くカートを押しながら、時折はつちやけるセシリアにツツコミを入れる一夏。

そんなことを言いながらも、食材からお菓子類までもカートに入れていく。カートを少し覗き込めば、そこにある物はキャベツや人参や大根、パスタからうどんや豚肉等々。カートの中を見た限りだと、何を作るのか皆目検討も付かないものばかりだ。

「こうして食材の買い物をするのも久し振りですわね…」

「そうだな…ざつと2年ぶりと言った所か」

というのも2人は、部隊に居る頃は自分を含めた隊員達の方まで買い出しに行っていた。

それ以来、食材の買い出し等来ていないのだ。

「さて、こんなもんか？」

「はい。これだけあれば十分に足りると思いますわ。」

そう言いながら、一夏とセシリアはカートを押してレジの列へと並んだのだった。

————△————

「……………」

ドキドキとしながらも、それを見つめるシャルロット・デユノア。と言うのもシャルロット自身異性の家に来ること等一度も無かったからだ。

『織斑』と書かれた表札をマジマジと見つめ、その荒い呼吸を正しながら伸ばした指は…インターコムボタンまで距離数cmを維持しながらプルプルと震えていた。

「ねえ…あの状態のまま、かれこれ30分は経つただけ…」

「放っておけ。心の整理がつかんのだろう。」

そんなシャルロットの様子を、正に勇気を出そうとしてる我が子を見守るが如く後ろから見ている鈴とラウラ。

シャルロットを含めたこの3人が織斑家に集合していた。集まった理由としては専用機持ち達の親睦会、等の上等な理由ではなく単なる馬鹿騒ぎが出来るのが夏休み中で数少ない為である。

「あれ？お前らどうした。まだ時間には早いぞ？」

「ふえ!？」

突然後ろから声を掛けられたシャルロットが、戸惑い混じりの奇声を上げながら後ろを向く。

そこにはさも当たり前のように恋人つなぎをしているセシリアと一夏が居た。

まさか後ろから来るとは思いもしなかったシャルロットは、パニック状態に陥っていた。

「えつと…シャルルはどうした？声かけてはいけなかったか？」

「いや、これで良いぞ。どっちにしろこのままじゃ進まなかったしな。」

「そうか。まあ良い、上がっていけ。まだ準備出来てないがな。」

そう言いながら一夏は家の門を開ける。

そとごく自然にセシリアが家の鍵を開けていた。

「ではアイン、私は準備してきますわ。」

「ああ、すぐ行く。では少し座って待っていてくれ、今お茶でも出すから。」

3人は言われるがままソファへと座り、リビングを見渡す。

3人共に一夏と交友はあるが、家に来たのは初めてである。故に気になってしまふのは仕方が無いのだ。

「ほれ、紅茶だ。生憎とこの家には日本茶や麦茶は無くてな。」

「ああ、大丈夫だ。この面子なら、紅茶も合うだろう。」

「そうよねえ。私も日本茶より……こんなところ紅茶ばかり飲んでたし。」

そう言つて割と優雅に茶器を持ち、少しずつ飲むラウラと鈴。対するシャルロットは緊張でガクブルだった。

いくらクラスメイトで友達とは言え、一夏は男なのだ。そんななか家にお邪魔するところがシャルロットにとつてどれだけ緊張することか、想像に難くない。

「…アイン！ちよつと手伝つてくれませんか？これ、思いのほか硬く…クツ、南瓜とか書く癖に硬いですわねこのカボチャ。」

「ああ、すぐ行く。ーじゃあちよつと待つてくれ、少し席を外す。」

「ああ、わかつた。」

セシリアの呼び声に応えながら、一夏はキッチンへと走つて行つた。

そのすぐ後、鈍く重い音が響いたが知らぬ存ぜぬで突き通したラウラ達だった。

「ちよつとシャルロット、あんた何してるのよ。」

「ほえ?ぼ…僕?」

一夏が居なくなつたのを見計らい、鈴はシャルロットへと話し掛ける。

「せつかくのパーティーなのよ?それをこんなに緊張してどうするのよ。」

「だ、だって…」

鈴が指摘する通り、シャルロットは緊張のしすぎで現在まともに会話が成り立たない。
い。

名の通りパーティーなのだ、会話が無ければ成立しない。集まったのは5人、その内1人が喋らなければ雰囲気も悪くなってしまふだろう。

「うん…そうだよね。よし、頑張るぞ!」

「何を頑張るのか知らんが…まあその息だ。」

右腕を上には振り上げ意気込んだシャルロット、それを若干生温かい目で見るとラウラであった。

—————△—————

「それじゃあ、乾杯!!」

「乾杯!!」

カチンとコップがぶつかり合い、甲高い音を響かせる。

そのコップの下には、何とも豪勢な料理が数多く並んでいた。

今日の集まりの為事前に仕込んでいた物もあれば、今日作った物もある。どちらにしろ、一夏とセシリアの手の込んだ料理であった。

セシリアが苦戦していたカボチャも並んでおり、カボチャの甘煮として皿に盛られていた。

ただその大半をセシリアが食べており、自身の好物の為に作ったと見え見えだった。

「そう言えば一夏……モグモグ……この後ってどうするの?……モグモグ。」

「それは私も知りたくないな。パーティーと銘を打つてはいるが、このままではただ食べるだけだしな。」

今後の予定に疑問を持った鈴が、はしたなくも食べながら聞く。それに便乗するようにラウラも口を開いた。

「食べながら喋るなつての、たく。で、今後の予定ね。こんなのがあるんだが…興味はあるか？」

そうやって一夏が取り出したのは端子の差し込み口が付いた硝子キューブ、そして人の頭程の大きさのある媒体だった。

「っ!! それは…まさかこんな所でお目にかかれるとは。」

「ん、ラウラなんか知ってるの?」

「ああ。構造までは詳しくは知らんが、あれはイギリス軍が開発し世を騒がせたフルダイブ型のVR訓練デバイスだ。確か名前は:『Brain divider』だった筈だ。」
驚愕したラウラが口にした通り、イギリス軍が開発した最先端のもの。この機械はキューブと媒体2つセットのデバイス。

ただ1つ欠点を上げるとすれば、これらだけではフルダイブ出来ないと言う点。

媒体もキューブも、それら単体でも同時使用でも人間を電脳世界へダイブさせる事は出来ない。

そのためにイギリス軍は技術を結集し、極秘裏に『篠ノ之束』の力を借りて制作したのだ。

構造は案外簡単で、キューブに専用端子でISを接続するだけ。というシンプルなものだ。

ISは未だブラックボックスであり、解明されている部分が少ない。だが史上には、IS間を介して操縦者同士が一時的な仮想ダイブを実現させた事例がある。

イギリス軍はそこに着目したのだ。

偶発的に起きた事象を意図的に引き起こし、活用できないかと。

それは束の力により解決し、使用者側が訓練機……ないしは専用機を接続する事でコアネットワークを使用して電脳ダイブを実現させた。

その技術は確かに世を震撼させたが、それが世に出回ることには無かった。

理由は単純である、高いのだ。

対のデバイス一つ作るだけでも、IS1機を制作するのと同じだけの金額が掛かるのだ。

それほどのコストであれば、ISを1機作った方が現実的である為に制作されたのは

たったの1つ。そう、一夏が持つ物だけである。

半分ほど伝説になっていたそれを見て、ラウラはかなりテンションが上がっていた。

「これは俺が軍部に居た頃にあつた量産計画、その試作品でな。量産化に向けたデータ集めの為に貰い受けたのさ。ま、今じゃそんな計画は白紙に戻って忘れ去られているだろうけどな。」

「そうですねえ。懐かしいですね、毎日やってはバグ探しの連続でしたから。」

一夏もセシリアも、その時のことを思い浮かべて感慨深い表情だった。

「さて……これは1機の同時接続数が5人。全員で出来るが……どうする?」

「「やる!!」」

鈴、シャルロット。そしてラウラは同時に声を張り上げた。

完全なフルダイブ型等滅多に体験できない。まして今逃したら次は無いであろう。故に全員が食いついた。

「了解。んじゃあ食べたらずるか。」

「そうだな。まずは目先のご馳走だ!」

早くやりたいがために、若干急いで食べ始めた3人。それを見た一夏とセシリアは、同時に顔を見合わせると苦笑いを浮かべたのだった。

第六話

ご馳走を食べ終えた5人は、片付けられたリビングにてキューブを囲んで座っていた。た。

キューブからはケーブルが伸び、それぞれの専用機を繋いでいる。

待機形態を体に付けたままでは厄介なことに接続できない為、全員手に持った状態である。

「じゃ、準備は良いか？」

「ああ、バッチリだ。不備は無い。」

「何時でも来いって感じね。」

それぞれが全員準備完了の旨を伝え、一夏は満足げに頷く。

そして、キューブのとある場所へと手を掛けた。

「じゃあ行くぞ?」

そう言いながら、起動スイッチが押される。

そして意識が薄れていくなか、全員が形式美的にこう呟いたのだ。

『リンクスタート!!』

—————△—————

幾重にも広がる真っ白い空間、そしてそこに鎮座する5機のI.S。

5人が放り出されたのは、そんな空間だった。

そして何時の間にもやら手に資料を持ち、何処からか取り出した眼鏡を掛けた一夏が口

を開いた。

「さて、全員意識の混濁は無いな？ 無いことを前提に話すぞ。ここはVR空間内で、見ての通り何も無い。だが設定次第では何でもありに出来る。」

そう言いながら、一夏は手元を少しスライドする。

すると半透明状のキーボードが出現する。

それを一夏は軽快に叩く、すると周囲の景色が一変した。

この装置、この空間、内部外部問わずマスター権限を持つ一夏は空間内の造形を自由に変更できる。

「こんな感じに、洋上、市街地、密林、洞窟等々、色々なシチュエーションを体験出来る。そしてIS乗りなら誰でも憧れる専用機：他人のだろうが自分のだろうが、この空間内でなら乗りこなすこともできるだろう。」

一夏のその言葉に、セシリア以外の3人は驚愕を露わにする。

それもその筈専用機とは、一個人専用チューンアップされた特別仕様の機体である。

乗り手は1人しか考えられておらず、設定から何から所有者独自の物となる。

それをいくらVRとは言え他人の機体を乗りこなすことも出来る等と言われれば驚

くのも無理は無いのだ。

だがここはあくまでもVR空間である、謂わば仮想現実と言ったところだ。

専用機の外装から内装、設定から何から全てをコピーしてこの空間内に投影しており、誰が乗ったところで大元は変更されない。

故に他人の専用機を、この空間では自分が操れるのだ。

「さて、以下のことを踏まえて…乗ってみたい機体はあるか？」

「はいはい、あたしは一夏の機体に乗ってみたい！」

さっそく鈴がいの一夏と言った感じで手を上げる、そして希望したのは一夏の専用機『ユリ』だ。

この空間はVRであるため、一夏専用のサポートAIユリは居ない。

あくまでも外装と内装と設定などをコピーしただけなのだ、システムに潜む電子生命体であるAIは対象外なのだ。

とは言え設定は一夏が普段使っているものとなんら変わらない為、いくら代表候補生といえど厳しいものがあるはずである。

「まあ、乗るのは構わないが…甲龍とはだいぶ違うぞ？」

「大丈夫よ、あたしこれでも耐G訓練はかなりやってるのよ。」

そう言いながら、鈴はそそくさとユリに乗り込んで初期設定を始める。

そして、あろう事かフルロットルで急上昇を試みる。

しかし…

「え？ちよつと待つて!?速すぎ!!イヤァー!!」

そのあまりにも速い加速性能にバランスを崩し、数メートルも浮かないまま1回転して地面へと激突した。

「はあ…全く言わんこつちや無い。」

「あはは…あれだよ、嬉しすぎて舞い上がってたんだと思うよ?」

「舞い上がって地面と抱擁しては、意味が無いと思いますけどね。」

シャルロットの弁護を、バツサリと両断するセシリア。自分の技量を弁えず、初めて乗る機体で急加速等やったのだから当然だろう。

「ところで…私も乗って良いのか?」

「あ、僕も良いかな?」

ラウラとシャルロットも乗ることを希望した。

2人共に純粋な興味が大きいようだ。

その足取りは確固たるものがあり、ラウラは『ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ』へ、シャルロットは『ブルー・ティアーズ』へそれぞれ向かった。

普段自身が乗る機体とはほぼ完全に真逆である、故にこんな機会でも無ければ2度と乗ることは無いだろう。

「ほう、面白い組み合わせだな。」

「そうですね。特にデュノアさん、我がティアーズをどういう風に扱うか楽しみですわ。」

そう言う一夏とセシリアの視線の先では、機体に慣れようと四苦八苦している2人が写っている。

ラウラはその積まれた多種多様な武器の多さに慌て、シャルロットはブルー・ティアーズの扱い辛さに翻弄されている。

だが、流石と言うべきか代表候補生。

自身の機体とはコンセプトが真逆とはいえ、ものの数分で自由に動かせるまでになった。だが特殊兵装と多彩な武器までは使いこなせていない、そのため：

「行くよラウラ！」

「ああ、来いシャルロット！」

模擬戦をして、習うより慣れるを実践していた。

ラウラがオレンジ色、シャルロットが蒼色と普段と違うため少しシユールだ。

そんなシユールな光景も、本人達は必死である。ラウラはその多彩な武器の扱いには慣れないため取りこぼしたり、ラビッド・スイッチ高速切替等出来ないためにかなりの隙が存在する。

一方のシャルロットも飛びながらのブルー・ティアーズの扱いに四苦八苦している。

普段から多彩な武器を取つかえ引つかえ使うシャルロットにとつて、マルチ・タスク分割思考は苦も無く出来た。だがその分割思考を持ってしても操れる数は2機と少なかった。

その2機もスピードはかなり遅く、攻撃する時は自身が止まらなければ集中出来なかった。

そのために如何にセシリアが規格外の分割思考をしているのか実感できたのだ。

「クツ！まさか武器が多いとこれ程に面倒だとはな！」

「こつちもだよ！」ブルー・ティアーズ B Tが動かすだけでこんなに大変だとは思わなかったよ！」

そう言いながらも、2人は直接的な攻撃はしていない。否、機体操縦に手一杯で出来

ないと言った方が正しいだろう。

その光景を尻目に一夏とセシリアはというと…

「さて、俺らもやるか。残ってるのは甲龍とレーゲンか…」

「あ、じゃあ私は甲龍に乗らせて貰いますわ。」

「ああ、じゃあ俺はレーゲンか…」

そう言いながら機体の元へ向かう2人。

そして乗り込み最初に行うのは武装の確認、セシリアは青龍刀を取り出し振り回す。

そして一夏は、重苦しいレールカノンを外すと身軽になり、プラズマ手刀とワイヤーブレードを展開する。

「ちよつと重いですが、まあ問題はありませんわね。」

「微妙にあれだな、俺には大型砲撃は合いそうに無い。」

そう言いながら、2人は構える。

セシリアは普段慣れない大型二刀流、そして一夏は滅多に使わない素手の構え。

そして、限界速度ギリギリで衝突し2本共に鏝迫り合いに持ち込む。

「クッ！やはり重いですわね、それに2本等性に合いませんわ！」

「全くだ。手刀等ほぼ使わないからな、重さが攻撃に乗らん！」

初めて乗る機体、そして自身とは全く違うコンセプトな為四苦八苦する一夏とセシリア。
ア。

そんな状態にもかかわらず剣撃が衰えていないところを見るに、2人の技量の高さが窺える。

大型の青龍刀2振りと手刀が火花を散らし、その刀身を削る。

「しかし、慣れない機体つてのも楽しいな！」

「そうですね、慣れないからこそ楽しいですよ！」

そう言うセシリアは、威力を絞った龍砲を発射する。だがその数は多く、チャージ時間を減らした結果かなりの連射速度を誇っている。

鈴が所属する国家：中国の技術者が見たら驚愕ものだろう、一撃の威力を求めた龍砲を手数の為に使っているのだから。

「さて、時間いっぱいやろうじゃないか！他人の機体でやれる、こんな機会滅多に無いからな！」

「ええ、こんなに楽しいことは楽しまなきゃ損ですよ！」

そう言つて2人は更に激突した。
戦闘狂にも程がある。

この後更に5人でローテーションしながら模擬戦を楽しんだ一夏達であつた。

—————△—————

「さて、楽しめたか？」

「うん！今までに無いくらい貴重な体験だつたわ。」

VR空間から帰つてきて、鈴は興奮冷めやらぬ感じでかなりテンションが上がつてい
る。

ラウラもシャルロットも、普段出来ない経験をしてテンションは上がっているようだが
鈴みたくあからさまでは無い。

「楽しかったね？ラウラ。」

「ああ、こんな経験2度と出来ないだろう。良い経験だった。」

「喜んで貰えたなら何よりだ、使わなきゃ壊れてしまうし意味が無いからな。」

そう締めくくる一夏。

「あと数時間は時間があるな：何かするか？」

「ならドンチャン騒ぎでもしましょうよ！あたしはまだまだ騒ぎ足りないわ！」

そう鈴が切り出す。

散々騒いだのにも関わらず、未だ物足りないようだ。

「はあ、仕方ないか。」

「全く、まあ今日は宴にでもしましょうか。」

「賛成!!」

結局解散したのは10時過ぎだった。

それ程までに充実した、夏休みとなった。

第五章 学園祭編

第一話

「ハッ！」

ガキンツと一夏の刀が振り抜かれ、鈴の青龍刀へと当たる。

現在は9月3日。

2学期初の実践訓練は2組と合同で行われた。

「…クッ！」

「逃がすかよ！」

クラス代表同士で始まったバトルは、終始一夏が押している。それもその筈鈴は、一夏が舞うその速度に着いて来れてないのだ。

故に翻弄され、攻撃を防ぐので手一杯なのだ。

龍砲を打ち込もうと、チャージに時間がかかる事と弾速が遅いために当たらない。逆に一夏は常に鈴の周囲を飛び続け、ヒット&アウェイを繰り返している。

中距離型にロックさせず、常に自分の間合いで戦い続ける。極めて模範的で確実な勝
利手段だ。

そうこうしている間にブザーがなり、一夏の勝利で終わった。

—————△—————

「うがぁー!また負けた!!!これで2連敗じゃないのよ!」

「お前は分かり易すぎる、取り敢えずは目に頼らずに龍砲を使い熟さないとな。」

前後半戦、どちらとも一夏の勝利で幕を閉じた実践訓練。その片付けが終わり、何時もの面子で学食へと来ていた。

因みにだが、一夏が頼んだメニューはイングリッシュブレックファーストと言う物。

薄くスライスされたトーストと卵はスクランブル。そして輪切りにしたトマトを軽く焼いたものとマッシュルーム、白いんげん豆をトマトで煮込んだもの。そしてベーコ

ンまたはソーセージ、ハッシュポテトなどが添えられたイギリスの料理。

「あ、ラウラ。それ美味しい?」

「ああ。本国以外でここまで美味しいシュニツツエルが食べられるとは思っていなかったが。」

シャルロットと相席しているラウラは、シュニツツエル（仔牛のカツ）をまた一口食べる。

その最中、物欲しそうなシャルロットを見て…

「食べるか?」

「わあ、良いの? やったあ、一度食べてみたかったんだあ。えへへ。」

そういうとラウラは切り分け出す、隣でウキウキ気味のシャルロットの為に。

そしてフォークに一切れ突き刺すと、徐にシャルロットの口元に運ぶ。

「えつと…」

「シャルロット、あーんだ。」

その瞬間、シャルロットの顔がボフンツと紅く染まった。俗に言う『はい、あーん』と

言う奴をラウラからされ、先日のことも思い出したシャルロットの顔はそれはもう紅い。

「どうした？要らないのか？」

「えつとね、ラウラ。欲しいけど…皆が居るんだよ？」

「ん？それがどうかしたのか？」

さも当然のように言うラウラに対して、シャルロットは頭を抱える。

理由としてはただ単純、恥ずかしいのだ。

だがラウラにそんなことは通じない。

シャルロットが食べるまで、口元に置いておくだろう。故に…

「あ、あーん。…お、美味しいね。」

顔がもう既に紅く染まりすぎている、それくらいシャルロットにとって恥ずかしい事なのだ。

周囲にはクラスメイトも多々居るのだ、シャルロットの顔は既に火を噴くかの如く真つ赤である。

周りで『百合展開よ』等と小声で呟くのが、更にシャルロットの顔を紅くするのを助

長した。

「あー…こういう場合はあれだな。」

「そうですね。」

その一部始終を見ていた一夏とセシリアは、顔を見合わせ頷き合うとシャルロットに對して同時に口を開いた。

「「ごちそうさま。」」

「もうやだあ!!」

—————△—————

「…本当、無駄に広いな。」

もはや一夏専用になってきている男子更衣室のロッカールーム。

一夏はISスーツのままユリのコンソールを呼び出すと、簡易的なメンテナンスを始める。

『Master, damage rate 2%.』

It is within the error range.』

「そうか、そんなに壊れて無くて安心だ。」

ユリの自己診断機能と修復機能があるためメンテナンスフリーだが、時々メンテナンスしなければならぬ。故に空いた時間でやっているのだ。

そんな会話の最中、一夏は気配を感じ入り口へと振り返った。

「誰だ!!」

一夏が声を掛けると、ロッカーの影からふらっと1人の女生徒が現れた。

青い髪を揺らし、その妖艶な紅い眼で一夏を見る。首に着いてるリボンから2年生だと分かる、そしてここまでの情報で一夏が知っているのはただ1人。

「生徒会長…2年の更識楯無か。」

「あらびつくり、まさか知っているなんてね。」

その件の少女…楯無は何時の間にやら取り出した扇子を口元に当て、クスクスと笑

う。その際扇子の文字が『吃驚仰天』と書かれていたのはご愛嬌だろう。

「で？その生徒会長様が一介の男子学生に、一体何の用だ？」

「二介：ね。代表候補生の筆頭であるセシリアちゃんと互角以上に戦える人は、一介とは言わないとお姉さん思うけどなあ。」

口元を扇子で隠しながらも一夏に詰め寄る楯無。一夏の情報は、その殆どが秘匿されているため疑うのは仕方が無いだろう。

「それはどうでも良いだろう。で？何の用件で？」

「政府から貴方の護衛を任されたの、と言っても必要無さそうだけど一応ね。」

「護衛…：ねえ。」

政府、と言ったらこの場合は日本政府だろう。

本来なら護衛される筋合いなど無いと言うのだが、生憎と表向きにはただの男子学生であるためにそれは出来ない。

「まあ、正式な挨拶は後日するわ。また会いましょう？織斑一夏君♪」

そう言って、男子更衣室を出て行った。

残るはその後ろ姿を睨むように見つめる一夏だけだった。

—————△—————

「だから何度も言ってるじゃないですか、その要求は呑めませんわ。」

『そこを何とか、貴女のような優秀な方が来てくだされば我が国も安泰なんです！』

6限が終わり、2クラス分の女子を詰め込んだロッカールームの端。そこでセシリアは、もう何度目か分からない勧誘の電話に対して断りを入れていた。

「私の所属国家は今までも、そしてこれからもイギリスですわ。ですからどんな好条件だとしても、移籍するつもりは毛頭ありません。残念ですが、この話はおしまいですわね。」

『ま、待ってくださいセシリア嬢！私共としても新たな—————』

その続きを聞くまでも無く、セシリアは通話を切った。そして携帯を粒子変換で収納

した。

「はあ…全くしつこいですわね。もうこれで何回目でしょう…色々な国から掛かってきますわね。そろそろ嫌になりますわ…」

「あれ？セシリア、どうかしたの？」

「ああ、いえ。何でも…些細なことですし、何でもありませんわ。」

深い溜息を吐いたセシリアに声を掛けてきたのはシャルロットだった。既に I S スーツから制服に着替え、汗を吸った髪を拭いている。

「さて。溜息ばかりついていても仕方ありませんわね。デュノアさん、少々気分転換にお茶しませんこと？この時間帯でしたらちようど学食カフェも空いていると思いますし。」

「そうだね、気分を上げるにも良いし。」

話題転換の為に、セシリアはシャルロットに提案する。自身の娯楽も含まれているが、ただ純粋に気分転換という理由も大きい。

「あ、じゃあさ…鈴とラウラも誘って行こうよ。皆で女子会しよう？」

「良いですわね、そうしましょう。」

気持ちを切り替えて、セシリアは自身のロッカーを閉じる。そしてその軽やかな足取りで、カフェへと向かった。

—————△—————

翌日。

S H Rと1限の半分を丸々使い、全校集会が開かれた。内容は近々行われる学園祭についてである。

「それでは生徒会長から、説明を頂きたいと思えます。」

そう静かに告げた生徒会役員の言葉に、ざわつきが前からスーツと引いていく。

そして壇上に上がったのは、昨日一夏の前に現れた謎の人物。

「やあ皆、おはよう。今年は色々と立て込んでて正式な挨拶はまだだったね。私は更識楯無、君たち生徒の長である生徒会長よ。以後よろしく。」

にっこりと微笑みを浮かべながら言う楯無は、同性でさえも魅了するらしい。列のあちらこちらから熱っぽい溜息が零れていた。

「さて、今月の一大イベントの学園祭だけど…今年も今までと同じなんてつまらないでしょう？だから今回は特別ルールを導入するわ、その名も！」

閉じた扇子を慣れた手つきで横へスライドさせ、それに応えるように空間投影ディスプレイにとある文字が浮かび上がる。

「名付けて…『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」

「What?」

その浮かび上がった文字を見て、英語が出てしまう程に一夏は混乱していた。

だが周囲の女子はそれ以上だったらしい、殆どが固まっている。だが…

「「ええええく!!!」」

割れんばかりの叫び声に、比喻では無くホールの窓硝子が悲鳴を上げた。

そして視線は一気に一夏へと向く。

「はい静かに。…学園祭では毎年、各部毎に催し物を出してそれに対する投票を行う。そして上位組は部費に対して、特別な助成金が出るしくみだったね。でも今回はそれじゃあつまらないと思って……」

ビシツと、最前列に居た一夏を扇子で指し。

「1位を取った部活に織斑一夏を強制入部させようと思いますよ。」

「うおおお!!」

「いよつしやあ!!会長、一生着いていきます!」

その場の勢いは凄まじく、結果として強制入部が決まってしまったのであった。

「俺の意見は全面的に無視かよ……」



その日の放課後に設けられた特別HR。

クラス毎の催し物を決めるため、盛り上がっていた。

そしてクラスから出た意見、それを纏める役目がクラス代表である一夏にある。そして出た意見の内容が『織斑一夏のホストクラブ』『織斑一夏とツイスター』『織斑一夏とポッキーゲーム』『織斑一夏と王様ゲーム』等々。

一夏の意向は半ば無視された意見が多い。故に：

「全て却下。」

「「「ええええー!!」「」」」

「阿呆か、誰が嬉しいんだこんなもん。」

大音量でブーイングが響き渡る。

出された意見を全て却下すれば、ブーイングも起きるだろう。だが一夏からすれば、自身の利になるような意見では無い為却下して当然だろう。

「私は嬉しいわ！断言する。」

「織斑一夏は共有財産である！」

その提案の弁護を助長するように言う女子数名。だが：

バキッ

2列目の後ろから3番目の席。

そこから何かを無理矢理へし折った音が聞こえ、周囲は途端に静かになった。

その音の出所はセシリアの右手に握られていた、1本のシャーペンが半分になっていた。

「あー…真面目にやりましょうか。」

「そ、そうよね。真面目にやりましょう。」

セシリアから放たれる絶対零度の雰囲気、周囲全員が固まる程に緊張が溢れる。

セシリアと一夏が付き合っている事は1組の共通認識である（筈以外）のだが、からかいすぎた模様である。

「ではメイド喫茶はどうだ？」

そう言うラウラの発言により、クラス全員が惚けてしまう。

「客受けは良いはずだ。それに飲食店は経費回収が容易だ。確か招待券で外部からの集客も見込めるだろう？ それなら休憩所としての需要もあるはずだ。それにこのクラスにはただ一人の男子が居るのだし、執事と言うのも良いではないか。」

普段言わないラウラらしからぬ発言に、理解するのに時間を要した。そして次の発言により再度空気が変わる。

「それにメイド服を着て接客というのも楽しいものぞぞ。」

「それ着たいだけだよね!？」

シャルロットが堪らず突っ込みを入れた。

確実に先月働いた時のメイド喫茶で味を占めた為の提案だと分かったからだ。

「では1組の催し物はメイド喫茶。異存は無いな?。」

「「はい!!」」

こうして1年1組はメイド喫茶に決まったのだ。

第二話

「やあ。」

一夏が担任の千冬にクラス会議の報告を終え、職員室を出たところに1人の女子が壁に身を預けて待っていた。

「何か用ですか？更識楯無生徒会長サマ？」

「あれれ、何か警戒してる？言葉に棘があるよ。」

「本人の了承も得ずにあんなことをすれば、誰だつて警戒すると思いますがねえ。」

「そう言いながら一夏はアリーナに向けて歩き出す。そこに極々自然な流れで楯無が横に並ぶ。」

「で、本当に何の用です？俺も常に暇って訳でも無いのですがね。」

「んー…そうねえ。昨日言ったじゃない？正式な挨拶はまた後日って、だからー」
楯無が話を続けようと一夏の顔を見た途端、前方から竹刀を振り上げ粉塵を撒き散らしながら走ってくる女子生徒が目に入った。

「覚悟おお!!」

位置的に楯無と女生徒の間に立つ一夏は、走ってくる女生徒の勢いを利用して投げ飛ばした。

「あら、お見事。」

「どう…もー」

そして倒れた女子生徒の首筋に一撃を入れ、気絶させるとそのまま寝かせる。

寝かせた直後窓ガラスが割れ、明らかに一夏と楯無の顔を狙うように矢が飛んでくる。文字通り矢であり、先端は潰されていない危険なものだ。

それを一夏は首を傾げて避け、楯無は扇子で叩き落とした。

「少し借りるわよ。」

そして楯無は一夏が気絶させた女子生徒の竹刀を取り投擲、窓の外に居た射手の眉間を射抜くように当たりその意識を奪った。

「もらったあ!!」

パンツと、掃除用具入れに潜んでいた3人目の女子生徒が両手に付けたボクシンググローブで楯無に襲いかかる。

「はい残念♪」

飛び出してきた女子生徒は首に打撃を受けて気絶し、そのまま楯無によって入っていた掃除用具入れにゴールした。

「で、これはどう言う状況?」

「えー、何も分からず迎撃したの? 一夏君って案外酷い?」

クスクスと笑うその口元を扇子で隠す。そしてパサツと開いた扇子には、『冷酷無比』と書かれている。

「まあ簡単に説明するとだね、この学園は最強たるものが生徒会長なのさ。そしてそれ

を打倒すればその者が生徒会長になる。謂わば実力主義だね。君もどう？」

「遠慮しておく。」

「あら残念。」

話は終わったかのように一夏は歩き出す。

そしてさも当然のように楯無も着いてくる。

「では本来の目的を果たそうかな。今日の放課後、生徒会室に来てちようだい。そこで改めて挨拶しましょう。織斑一夏君♪」

「はあ……了解。」

今度こそ別れ、一夏はアリーナに向けて歩き出すのであった。

—————△—————

そして時刻は放課後。

一夏は生徒会室にて楯無と向かい合って座っていた。

「さて、じゃあ改めて自己紹介をしましょう。私の名前は更識楯無、この学園の生徒会長をしています。あ、こっちは秘書の布のほとけうつほ仏虚。君のクラスに居る布ほ仏本音ちゃんの実姉ね。」

「布仏虚です。お嬢様にお仕えする…所謂メイドみたいなものですね。」

そう答えたのは虚。

眼鏡を付け、三つ編みを引つ提げた如何にもな人。

「ダメよ、虚ちゃん。ここでお嬢様はやめてよ。」

「すいません、つい癖で。」

そんな名家特有のやり取りを、一夏は敢えて見ていないことにした。

「で？本題は何です？まさか自己紹介をするためだけに呼び付けた訳では無いでしょう？」

「あら、少し気が早いわよ？。まあ、その方が好感は持てるけど。」

楯無は口元に扇子を当てながら笑う。

そして咳払いをすると、要点だけを話し始める。

「正直言つて回りくどいのは好きじゃないから単刀直入に言うわね？ 織斑君が部活動に入ってくれないから苦情が殺到してるのよ。だから生徒会としては君を何処かの部に入部させないと色々つまずいのよ。」

「それで学園祭で俺が商品ですか…あまりそう言うのは好きじゃないんだがな…」
はあつと溜息を付く一夏。

明らかに面倒事なうえに回避不可能だからだ。

「じゃあ交換条件はどう？ これから私が後ろ盾になつてあげる。だからー」

「お断りします。」

楯無の提案を最後まで聞くこと無く、バツサリと斬り捨てる一夏。

そうして人差し指を立てながら続ける。

「そう言う勧誘は俺の経歴を全て調べ上げる事が出来てからお願ひしようか。対暗部用暗部、更識家当主『17代目楯無』サマ？」

「ッ!？」

突然の一夏の発言によりバツツと席を立つ楯無。そして従者である虚も動揺を隠せ

ない。

とある名家であるという情報は出回っているが、裏の情報までは深く調べなければ出てこないのだ。

「ど、何処でそれを…」

「ああ、割と簡単だったぜ？ま、詳しいことは答えになるから省くがな。」
そう言うで一夏は席を立ち、扉に手を掛けた。

「じゃあな、会長さん。」

残ったのは唾然としながら一夏を見送る楯無と虚だけだった。



ガチャ。

一夏が1日を終え、自室へと帰ってくる。

一夏にとつて今日は面倒事が重なった激動の1日だった為、ドアを開ける手にも力が入り勢いをつけて開ける。

すると：

「お帰りなさいアイン。お風呂もご飯も準備が出来ますわ、どちらになさいますか？」

一夏を出迎えたのは制服の上から蒼のエプロンを着けたセシリアだった。

だがそれよりも一夏は気になる事があった。

「それよりだな、セシル。あの…後ろの糞虫はなんだ？」

そう、部屋の中央に天井から吊され藻掻いているものがあつた。だが僅かにピクピクと震えているところを見るに、失神しているのだろうか。

「ああ、あの人ですか。アインの部屋に勝手に入った挙げ句、水着の上からエプロンなんというマニアックな事をしていましたので少々。」

「何をされたのか非常に気になるが…取り敢えず降ろしてやれ。あの状況は、流石に見てられない。」

「わかりましたわ。」

そう言うのとセシリアはナイフを取り出し、天井へと続いているロープを強引に切った。

となれば吊っているものが落ちるのは必然、それは音を立てて落下した。

「グヘッ！」

潰れた蛙のような悲鳴を挙げ、床に叩き付けられて目を覚ました。

そして自身の状況を把握しようと体を動かすが、それが出来ない知り慌て始めた。

「え？ちよつ待つて、何これ!?なんで私縛られてる訳!？」

青髪を乱し、その紅い眼を驚愕で見開いている女生徒。その威厳は欠片も無く、唯々慌てふためく一人の少女……

「はあ……何をしているんだか……会長さん?」

「あ、一夏君!この子可笑しいのよ!目が合った途端私を気絶させて、あまつさえ縛り上げたのよ!挙げ句の果てに専用機まで強奪したのよ!」

そう。

糞虫となっていたのは楯無であった。

一夏の部屋でセシリアとバツタリ会ったのだろう。だが今やこの部屋に一夏の先導無しで入れるのは、合鍵を持つセシリアとマスターキーを持つ寮監の千冬だけだ。千冬は滅多なことでは部屋に來ない為、実質セシリアだけ。

故に楯無は不法侵入したとみなされるのだ。

「そりゃあ裸にも近しいそんな格好で人の部屋に入ってればな、誰だつて通報か捕縛かのどちらかを選ぶと思うぞ。」

「それに鍵穴に傷が付いてましたので、ピッキングしたのはバレバレです。捕縛されて当然だと思いませんか？」

「うっ……」

セシリアと一夏、2人に論破され押し黙る楯無。言われた事が事実なだけに何も言えないのだ。

「あ、そうですわアイン。これ面白いですわよ。」

そう言つて取り出したのは扇子だった。

それをセシリアが開くと、また違った文字が書かれている。『意味不明』と書かれています。

た。

「ほらアイン、考えた事が簡略化されて文字になりますわ。」

「本当だな。どうなってんだ？これ。」

そう言つて2人して楯無の私物である扇子を弄くりだす。

生徒会長の私物を、その本人を縛り上げて玩ぶ。そんな愚行は正直舐めているにも程があるのだが、その生徒会長が不法侵入をしていた為にそんな注意すらも出来ずに居た。

「も、もう私が悪かったから！謝るから許してえ！」

一夏とセシリアの態度に耐えきれず決壊し、涙を流しながらそう叫んだのだった。

――△――

「はあ……落ち着きましたか？」

「エグっ！グスツ…うん。」

楯無が落ち着き、涙を止めるまで30分も既に掛かっていた。だが現在も扇子を抱きしめるかのように握りしめている、泣き止んだ直後の子供のよう。それほどまで強烈に楯無の心を抉ったのだらう、今もなお涙目であった。

生徒会長は学園最強と謳っていたが、既に形無しである。

「それで？何故俺の部屋にそんな格好で居たのか教えて貰えますか？」

「グスツ…うん。」

明らかに幼児退行しているようにしか見えないが、本人が大丈夫なら良いのだろう。

楯無は一夏に言われるがまま口を開いた。

「えっとね…一夏君に後ろ盾の件を断られたから、まずは仲良くなろうと思ったの…」

「それとその格好…何の関係が？」

「男の子はこうやると喜ぶって雑誌に書いてあったから…」

その言葉に、一夏もセシリアも同時にため息を吐いた。上級生…しかも生徒会長ともあろう人が雑誌の情報に躍らされていたのだから。

「はあ……見ず知らずの人間に対しては逆効果ですわよ？特にアインなら尚更ですわ。」
「そうだな。まずハニートラップを疑うわな。」

2人の毒舌染みた正論に、再び目を潤ませる楯無。一度決壊しているため、かなり涙腺が緩い。その為かなり涙目状態であり、何時号泣してもおかしくなかった。

「まああれですわね、次は普通に来てください。忍び込んだりしなければ、普通に持て成しますので。」

「セシル……一応、家主は俺……な？」

「あら？鍵を渡したのはアインですわよ？だから問題無いですわ。」

楯無が眼前に居るにも関わらずいちやつきだす2人。

実際セシリアは一夏の部屋の鍵を持っている、そして部屋の私物……その大体の場所も把握している。一応セシリアの部屋も別にあり一夏同様個室なのだが……実際ほぼ全ての時間を一夏の部屋で過ごしており、大半の私物もここにある。

半ば同室状態である。

だがそれを悟る人間は疎か、注意する人も居ない。稀に千冬が来るが、程々にしろよとしか言わない為黙認されている。

そもそも付き合っている者同士のため問題は起こらず、まず文句は出ない。そして必

ず気配を殺してから来るため、誰もその存在を知覚出来ないのだ。

そうとは知らずに入った楯無にしてみれば災難を通り越す事件にも等しい程心に刻まれている、その当事者がいちやついているのを見れば当然……

「……もう帰る！」

頬を膨らませ、顔を紅くした楯無は逃げるように去って行った。

見かけによらずこの生徒会長、以外と初心なのである。

明らかに痴女にしか見えない格好をしていたにも関わらずだ。

それが滑稽に映り、一夏もセシリアも同時に笑い出したのであった。

第三話

「はあ……」

現在箒は、束に言われた言葉が頭の中を巡り思考が行ったり来たりしていた。

束の言葉だけではこうならない為に一番の原因はやはり、一夏に負けたことであろう。

素人目に見ても箒が一夏に負けるのは至極当然であるのだが、箒はそう思っただけで無かったためかなり堪えたのだ。結果、束の言う『誰よりも弱い』と言うものを自覚してしまいが落ち込んでいた。

そしてフラフラと、彷徨い歩いていた。

「……ん、あれは……一夏と……」

偶然箒は、第10アリーナへとやって来ていた。

—————△—————

時は遡り、翌日の朝早く。

一夏はこの学園で唯一生身での活動を前提に作られた第10アリーナへ、セシリアを連れてやって来ていた。

何処から嗅ぎ付けたか分からないが、客席は満席。シャルロットや鈴、ラウラの姿も有り、早朝の癖に人気である事が窺える。

そんな人気の2人がこのアリーナへとやって来た目的は、長期休み明け最初のスパーリングである。最近まともにやっていないと言うのが主な理由ではあるが1番大きいのが、ここでなら周りに迷惑を掛けず全力で出来るためだ。

「さて、ではルールの確認をしますわよ？刃物は無し、銃弾はゴム弾であること。それ以外は何でも有り、宜しいですわね？アイン。」

「ああ、問題ない。」

ジャコンツと、一夏は自身の手に持つ2挺のM1911コルト・ガバメントにマガジンを入れつつ答える。

旧式ではあるものかなりの安定性を保ち、人気のこの銃。一夏は音を立てても良い場合は大抵この銃を使う。それほどお気に入り一品だ。

一方のセシリアが使うのはS&WM39。

目立った特徴が無い為扱いやすく、セシリアが時々使い捨てたりするため、1番数多く持っている銃でもある。

主にセシリアの手にフィットするため多用されている。

「さあ、行きますわよ。覚悟は宜しくて？」

「ハッ、そつちこそ。痣が出来る覚悟は良いか？」

そう言うのと、どちらからともなく動き出した。

「はあ!!」

「ツゼや!!」

セシリアが繰り出す右ストレート。

それと同時に弾丸が飛び出し、一夏の顔面を捉えようとする。それを一夏の左スト

レートが弾き返し、セシリアの耳元で止まる。

片手だけが…見る人が見れば分かるだろう。

『ガン⇨カタ』と。

そして一夏の空いている右足の回し蹴りが炸裂するが、セシリアは避けて距離を取る。

この間10秒。

その後も攻撃は止まず、セシリアが牽制に一発撃つが、一夏はその拳銃に向けて回し蹴りをぶちかます。その結果、セシリアの手から吹き飛んだ拳銃は明後日の方向へと落ちた。

だがそのまま呆けるセシリアではない。瞬時に把握し、一夏の拳銃を同様に蹴り飛ばした。

「ツチ、精密射撃を封じても結局これか…」

「ふふ。アインばかり有利だとは思わないでくださいいな。」

セシリアが2発撃つただけで銃同士の戦いが終了した。案外呆気ないのだが、この2人が銃を飛ばされたからと言って終わる筈も無く。

「はあ!!」

「ツらあ!!」

セシリアの全体重が乗った拳を受け流し、隙が出来たその体に手刀を叩き込む。その手刀を凌いで、その手刀の腕に掴み掛かる。その刹那…

「ツ!!」

何かに気が付いたセシリアが突然に距離を取った。その何かは、一夏が左手に持っていたM1911。コルト・ガバメント。それが放った銃弾が通り過ぎていた。

何てことは無い。

一夏は最初から2挺持っていただけである。

一夏のスタイルは常に2挺の銃を所持し、戦闘中に吹き飛ばされた場合時間差で取り出して相手の油断を誘うタイプだ。それ故いくらセシリアが一夏と戦い慣れている、銃を飛ばしたら丸腰にしか見えない為、油断してしまう事が多いのだ。

「クツ…やはり厄介ですわね、そのスタイル。」

「でもまあ、これで今まで割と生き残ってきたから辞められないぞ?」

「そうですわね、その点には感謝ですわッ!」

銃があり一夏が優勢、そう素人目には見える。

だがこの2人の場合、たかが拳銃1挺如きでは有利にも不利にも傾かない。その点は一夏も承知している為、自らの地の利を捨てた。

「はあ!!」

「ぜあッ!!」

結局銃を捨て、両者ともに無手で掴み合うのだった。

—————△—————

「そうか……まともに訓練していない私が1番弱いのは当たり前なのだ。どうして……今まで気が付かなかったのだろうな。」

アリーナの外。

通用口から出てすぐの廊下に備え付けてある大型ディスプレイの前で、箒は物思いに

耽つていた。

東が言つた言葉、一夏が行っている訓練。

そして一夏が示した力の本質。

その全てを見たわけでは無い。だがその末端に触れた箒は、己の過去…今までの言動、行動を振り返つていた。

自身が起こした過去は消えることは無い。

故に箒の心に、後悔となつて刻み込まれるのだ。

「これなら、愛想尽きても仕方ない…な。」

実際箒は、一夏がセシリアと付き合つていることに薄々気付いていた。

見せ付ける事はしていなくても、常に一緒に居るために推測は容易い。

だが…それでも、と諦めきれなかったのだ。

幼少の頃から今までずっと想い続けていたのだから、その想いはかなり強かつた。だがその想いの強さが裏目に出た。

自分だけを見て欲しい。

そう思い気を引くことは悪い事ではないが、箒の場合度が過ぎていた。

一緒に居たい一心で一夏を連れ回し、用事も都合も考えず自身の都合に無理矢理付き

合わせた。子供だからと言えば聞こえは良いが、交友関係を広げて遊びたい盛り少年にとつてみればただひたすらに嫌なことだ。

自身の思いが空回りし、唯々一夏に嫌な思い出を刷り込んでしまったのだ。嫌われる要素はあれど、好きになる要素等何処にも無い。

そしてこの学園に入ってから、度々一夏に突つかかっている。いくら想いが強くとも好きになる筈が無いのだ。

ふと自身の後ろを見る。

準備室も兼ねているその廊下には、鍵付きのロッカーに入った多数の武器が備え付けられている。そのロッカーは一定以上の技量の持ち主には申告無しでパスワードが教えられ、それ以外の生徒も真つ当な理由や所属の部活によっては教えられるのだ。

筈が所属する剣道部も、剣術に使用する真剣の都合上教えられていた。真剣を所有する筈も例外では無く、刃物を納めるロッカーのパスワードは知っていた。

故に筈は徐にそのロッカーのテンキーを打ち、開くと迷わず短刀を手を取った。

そして……自身の象徴とも言うべきポニーテール。かなり小さい頃……それこそ一夏と初めて出会った頃。まだ擦れていなかった頃に一夏に貰った思い出のリボンで結わ

えた髪。

自身の心に抱く一夏への感情。

今までの自分。

それを象徴するその髪を…箒は未練を断つかの如く…

躊躇無く切り落としたのだった。

—————△—————

放課後。

一夏とセシリアは呼び出しを受け、生徒会室へと足を運んでいた。

昨日の今日で何をするのかと警戒していたが、楯無の顔が昨日より80%増しで真剣そのものだったために、その警戒を解く。

「さて、忙しいなか来て貰ってごめんね？」

「いえ、先輩の方が忙しいのではないですか？そちらの山を見れば……」

そうセシリアが言った先には、机の上にこれでもかと思っている書類の山だ。

50cm近くの山が見える範囲に4つある。

紙の薄さはかなり薄いために、何枚あるかなんて見当も付かないし数えたくも無い。

「ま、まあ仕方ないのよ。生徒会はかなり忙しいのに人員が足りないし。ま、良いわ。それより2人を呼んだ理由はね……学園祭で、生徒会が主催する演し物に出て欲しいのよ。」

「何故です？」

一夏が何故と即答する。

正直出る理由が無いのだ。

一夏もセシリアもクラスの催し物に出るため、そんな時間は無いと考える。だが……

「ファントム・タスク
「亡国企業。」

「ッ!？」

「それが学園祭に現れると言ってもダメかしら？」

「詳しく聞かせて貰おうか。」

その名が出た途端に、一夏は掌を返した。

亡国企業と言えば、裏ではかなり有名な組織だ。実態は不明だが、世界のあらゆる国に支部を持っているらしい。

今のところ把握出来ているのは自称実働部隊の構成員の顔と名前くらいだ。

「当日は招待券で外部の人が沢山この学園に来るけど……十中八九亡国企業も紛れ込んでくると思うのよね。」

「その情報の信憑性は？」

「そうね。首を落としたら人が死ぬ位？」

「つまり100%なのですかね？」

その問いに楯無は首を縦に振って肯定した。

一夏はため息を吐きながらも口を開く。

「で？俺達に何をやらせようと言うんだ？」

「観客参加型の劇って所かしらね。一夏君は世界でただ一人の男性操縦者だし、ネームバリユーはバッチリ。ならちよつとした隙を見せれば……」

「餌に食い付くと。用は囷か。」

そゆことつと、楯無は笑みを浮かべる。

一夏は文字通り世界でただ一人の男性操縦者。

専用機もそれ専用であり、機体やパーソナルデータ等も世界を探してもただ一つだけである。

「そう。どうせ入ってくるのだし、分かり易い所に誘き寄せた方が楽でしょ？それに一夏君割と強いんだし。」

「まあ、そうだが……なんか納得いかねえ。」

一夏的には、囷と言うのが気に入らなかった。

囷というのは自ら隙を晒す必要があり、面倒だからだ。

「あれ、乗り気じゃない？じゃあお姉さんが一つ報酬をあげよう。今も半分そんな感じだけ……学園祭が終わったら同室にしてあげよう。どう？」

「やりますわ！絶対やりますわ！良いですわねアイン？」

「ああ。少々面倒だが、完遂するさ。」

かなり興奮したセシリアと、ため息を吐きながらも承諾する一夏。

ため息を吐いてはいるが、その顔は笑みが浮かんでいた。

つとそこに、突然ドアが開く。

「お姉ちゃん、色々と調べたの持ってきたよ……って、タイミング悪かった？」

「いやナイスタイミングだよ、簪ちゃん。」

簪と呼ばれた少女は、手に大きな箱を持ちながら入ってくる。

青髪で紅眼。楯無と共通する所が多々あり、唯一の違いは眼鏡型ディスプレイの有無だろう。

「まず紹介するわね。私の自慢の妹、簪ちゃんよ。」

そう言われた簪は、手に持った箱を近場の机に置いて一夏とセシリアの方へと向き直る。

「更識簪です。この残念な姉が何時も何時もお世話になっっているようで。大変ご迷惑を。」

「セシリア・オルコットですわ。：お姉さんには大変楽しませて貰ってますので、あまり気にしなくてもよろしいですわよ？」

何処の挨拶なのか最早分からない自己紹介を終え、今度は一夏へと向き直る。

「知ってるかもしれないが、織斑一夏だ。」

「知ってる。2人共凄く有名で、教室でも噂になってる。」

そう簪が語り出した噂は、どれもこれも的を得ていた。

曰く織斑一夏は学園に来てから負け無しであるとか。

曰くセシリア・オルコットは他には誰にも出来ないことを平然とやってのけて主席まで上り詰めたとか。

どれも真実であるため、苦笑を隠せなかった。

「：じゃあ本題に入るわよ？取り敢えず今日は劇から誘き出すポイントについて教えておくわね。まずは：」

結局この作戦会議は2時間以上続いた。

第四話

「一夏：…今まですまなかつた！」

「えつと…何事？」

一夏が会議を終え、部屋へと戻つて来て数分後。ドアをノックする音が聞こえた為開けてみれば、そこには短髪になった箒が見事なDOG E Z Aをしていた。

「私のせいで今まで色々と迷惑をかけた！許してくれなんて虫が良い事は今更言わない。ただ謝りたいのだ！」

未だ廊下でおでこを叩き付けんばかりの土下座をかます箒に、一夏はどうしたら良いか分からなかつた。

今までポニーテールだったクラスメイトが、ドアを開けたら短髪になって土下座をしてるのだ。驚愕しない方が可笑いだろう。

だが…

「私は変わる、変わってみせる。それを伝えたかったのだ。では、私は行く!」

「あ、おい!」

言いたいことだけ言って立ち去った箒を見て、根っからの性格までは難しいと思つた一夏だった。

—————△—————

学園祭の準備は各クラス、各部毎に進められた。

そろそろ準備も終盤に差し掛かって来ているため、提供する料理の試作等に取りかかっていた。

料理好きなシャルロットやセシリア、一夏等が主導して試作品を作りテーブルに広げていた。

「んー！このショートケーキ美味しい!!」

「このモンブランも絶品！」

「最高だよおー！これならお店に出せるよー！」

等々。

かなり好評であった。

他にも、一夏が作った『マカロンと紅茶のセット』や、セシリアが作った『林檎のタルト』等。どれもこれも出来が良すぎる程で、大人気であった。

そんな中……

「おりむく、準備できたよ。」

「待ってたぞ布仏さん。」

「ささ、早く着替えるのだ。」

紙袋を片手に。パタパタと小走りで行って来た本音は、半ば強引に仮の更衣室となっている教室の隅へと紙袋と共に一夏を押し込む。

「はいこれ。なるべく早く着替えるのだ。」

「はいはい。わかったからそう急かすな。」

一夏は苦笑いを浮かべながらも、仕切りとなつてゐるカーテンを閉める。

その瞬間、大多数の目がカーテンへと集中した。理由は簡単、期待しすぎるあまり今か今かと出て来るのを待っているのだ。

そして、一夏が入ってから5分後。

そのカーテンが開かれた。

「ふむ、サイズもぴったり。やはり良い仕事をしますね、後でお菓子の1つや2つ差し上げましょう。」

「やった、流石おりむくのなあ。」

カーテンから出てきたのは、両手に白い手袋をはめた執事。その執事は、手袋を直しながら歩き出す。

テーブルを靡かせ、銀時計が付いた鎖を揺らすその姿は…完璧な執事そのものだった。

「……格好いい／＼」

全員が固まっているなか、そう誰かが呟いた。

其程までに型にはまった姿であり、誰も一夏から視線を外そうとしない。そんな中…

「アイン、こちらをお忘れですわよ？」

セシリアが一夏へと近付き、銀色の丸い物と細長い物を渡す。総じてシルバーであり、よくこれほどの物を揃えられたと関心するほどだ。

そしてそのナイフを全て懐に仕舞うと、トレーを左手に持ち替えて立つ。

「これで完璧ですわね。ではアイン、使用人のなんたるかをご教授して差し上げなさい。」

「御意のままに、お嬢様。」

片膝を着き礼をするその姿に一層見惚れてしまい、誰もが見とれていた。だが…

「さて、何を見とれているのです？ 貴女方もメイド服を着て接客をするのですから、お客

様に対して恥じのないよう徹底的に覚えて貰いますよ？もう学園祭まであまり時間は無いのですから。」

両手を叩きながら言う一夏の言葉に、全員ハツとして現実へと戻ってきた。

「ここは当日、メイド喫茶になります。そして貴女方はメイド……つまり使用人です。そしてやって来るお客様は総じて主人です。使用人たる者、主人に粗相があつてはなりません。これから急拵えではありますが作法を教えますので、皆様早急に覚えてください。よろしいですね？」

『はい!!』

「結構。では始めますよ。」

結局、準備の終盤は全て1組メイド隊の育成に費やされたのだった。

「あ、そうだシャルロット。シャルロットは執事服な。」

「なんで!?!なんでなのラウラ!?!」

因みにだがラウラの提案は、衣装の都合上却下された。

—————△—————

いよいよもって学園祭。

その日I S学園は大賑わい。普段入れない女だけの花園に入れると、妹から招待券を貰った兄も居れば。来年入学する為の見学と意気込む女子中学生も多々居た。

そんな中ただ1人の男子が居る為1番の賑わいを見せる1年1組はというと。

『お帰りなさいませ、お嬢様。』

「…え?」

入ってきた女子中学生が入り口にいる4人のメイドに困惑していた。

そもそもとして、一夏が日本発祥のメイド喫茶を知っている筈が無いのだ。

身近にそう言う知識を持った友達は何もなく、幼少期から既にイギリスに居たのだ。サブカルチャーを教え込まれたラウラとは違うのだ。

一夏が知っているメイドと言えば、オルコット家に居るメイド以外知らない。つまり本業の人しか見たこと無いのだ。

そしてメイド喫茶にも行ったことが無いため、どういう場所でどういうことをするのか全く分からないのだ。

その為、メイドと喫茶店が曖昧な形で繋がった事になる。

故にこの場所はメイド喫茶ではない。

一夏指導の元育成されたメイド隊が給仕に回り、時折一夏自身も応対する。

カフェ風にテイストされている室内は純白のテーブルクロスがかけられた丸テーブルがいくつか並び、それを取り囲む形で8つのイスが並んでいる。掲示物も黒板すらもなく、レンガの壁で覆われている。元が教室等とは思えないほどだ。

そんな中一夏が困惑している女子中学生に近付く。

「お帰りなさいませ、お嬢様。そして、ようこそ『ISガーデン』へ。」

カフェテリアISガーデン。

元々の案はメイド喫茶だったのだが、メイド喫茶を知らない一夏が企画を主導した為に、貴族がやるような本格的な御茶会の会場風になった。これには提案したラウラも首を傾げていたが、メイド服が着られるので気にしないらしい。

「それではお嬢様、お席へご案内いたします。」

「は、はいー！」

この学園唯一の男子生徒であり、誰が見てもイケメンと答えるであろう一夏。そんな一夏が格式の高そうな執事服を身に着けて話し掛けられれば、年頃の少女等簡単に頬を紅く染めてしまう。

「ではお掛けください。」

「はい。」

少々落ち着きを取り戻した少女を、一夏はイスを引いて誘導する。

そして座つたのを確認すると…

「ではお嬢様、こちらメニューになります。決まりましたらお申し付けください。それからもうまもなく、本日のメインイベントが始まりますので、お楽しみください。それでは。」

そう言うで一夏は、普段は窓際となつている場所へと移動する。そこには大きなグラ

ンドピアノ、そしてその脇にバイオリンを持つて佇むセシリアが居た。セシリアは他のクラスメイトとは違い、蒼のドレスを着ていた。その様が、舞踏会に着たお嬢様に見える。てしまう。

そして一夏がイスに座り、セシリアに目配せをする。そして微笑み合うと、演奏が始まった。

ピアノとバイオリンの二重奏デュエットが始まり、教室中の視線を釘付けにする。

部屋の雰囲気 matches した曲が流れ、心を癒すかのように微笑む人が出て来る。

たった一曲限り。学園祭は一日だけなので、この一曲が最初で最後の大イベントである。

主席代表候補生であるセシリアの奏でるバイオリンと、世界唯一の男性操縦者である一夏が奏でるピアノ。

そして一夏が立ち上がると、セシリアと共に一礼。

大きな拍手で、その演奏は締めくくられた。



一夏とセシリアが丁度同タイミングで休憩時間となり、着替えもせずそのまま並んで廊下を歩いていった。そしてちょうど人通りが少ない場所に差し掛かった時：

「ちよつといいですか？ 私こういう者なのですが…」

ふと声を掛けられ振り向くと、スーツ姿の女性がそこに立っていた。その女性は胸ポケットから手早く名刺を取り出すと、一夏へと渡してくる。

「I S 装備開発企業… 『ミツルギ』 渉外担当……まきがみれいこ 巻紙礼子さんですか。」

「はい。織斑さんに、ぜひ我が社の装備を使って頂けないかと思ひまして。声を掛けた次第です。」

その話を聞いて、一夏はため息を吐いた。

実際一夏は世界唯一の男性操縦者であるので、そんな一夏に後付け装備を使って貰おうと言う企業は後を立たない。使って貰えればハクが付き、良い広告になるのが主な理由だ。

だが一夏の専用機『ユリ』には後付け装備を付ける余裕はあれど、その好みが合わない。

自我意識が表に出たAIであるコア人格が拒絶するからだ。

いちいち好みの有無を検証するのも至極面倒な事であるため、現在の装備だけで十分なのだ。

それに新しい装備というのは、それだけでなれるまで時間が掛かる。実戦で不慣れた装備を使って負けたなんてことになりたくないからこそ、今持っている信頼できる装備だけあれば良いのだ。

「残念ですが、こう言う話は学園を通してからお願ひします。今人を待たせていますので、今日はこの辺で失礼します。」

「あ、ちよつと……」

割と強引に話を切り、その場から急いで離れる。ある程度離れた所で……

「アイン。今の方、かなり怪しいですわよ?」

「ああ。事前に情報も無く、俺に直接来る企業は今まで居なかった。それに……」

1度区切った一夏は、1番確信めいた言葉を口にする。

「ミツルギは…一番最初に来た筈の企業だしな。」

—————△—————

「ふ。ふはははは。遂にやって来たぞ！IS学園!!」

IS学園の正面ゲート前でチケットを握り締めながら、堪えきれない笑いを漏らす男子が1人居た。紅い長髪にバンダナを巻きにやけるその姿は、色々と残念な人だった。

浮いた服ではないよう気を付けているつもりではあるようだが、生憎とここは女子の花園であるので男子というだけで目立っていた。

「あそこの男子…誰かの彼氏かな？」

「案外イケメンじゃない？」

視線を感じながらきやいきやいと騒ぐ女子を見て、件の青年の心臓はバクバクしていた。

「その貴方。」

「はいっ！」

突然後ろから声を掛けられて、ビクツと背筋を伸ばして振り向く。そこには眼鏡を掛けファイルケースを持った布仏虚がそこに居た。

「貴方、誰かの招待を受けてここに？規則だから一応、チケットを確認させて貰えないかしらっ？」

「はいっ」

青年はあたふたとしながら握り締めてぐしゃぐしゃになったチケットを差し出す。

「配付者は、えつと…：風鈴音。ああ、風さんね。はいありがとうございます、返すわね。」

「…はい」

顔をほんのり紅くした青年は、手渡されたチケットを受け取る。そしてなんとか喋ろうとしているのだろうか…緊張のせいかわくわくさせるだけだった。

その結果、無情にも虚は立ち去ってしまい……青年は膝から崩れ落ちた。

——△——

「何してんの？弾。」

「……鈴か。俺にはセンスが無いみたいだ……」

「今更でしよう？」

鈴の言葉にグハツと再度崩れ落ちる弾と呼ばれた青年。彼の名は五反田弾。鈴が送ってきた招待券によってここに来た、現在高校1年生の男子である。

「ほら起きる！一夏を紹介したいんだから。」

「その一夏とやらは、えつと……」

「そう、私の初恋だった人よ。」

鈴は迷い無くそう言った。

もう過去のことと、割り切ったようだ。

「さて、行くわよ！学園祭は今日しか無いんだから。」
「おうよ。」

—————△—————

現在、一夏は待ち合わせ場所にセシリアと向かっていた。
待ち合わせ時刻から5分ほど過ぎているのだが、2人は気にせずに歩いていた。
そして待ち合わせ場所に差し掛かった所で：

「ギャハハハハハ、見てよキャロリン。1番高そうなのが落ちたぞ。」
「おめでとうございます、主任。」

待ち合わせ場所から少し離れた場所で、暢気に射的をやっている待ち人が居た。

それもいい歳した大人が射的で1等と書かれた札を落として大はしゃぎしている、割と好奇心な目で見られているが気にしていなかった。

「はあ…何やつてるんですか、主任。」

「ん?…おおセリンじゃん、3年振りだが結構成長したなあ、見違えたぞ。」

主任と呼ばれた男性が振り返り、セシリアを見付けると嬉しそうに笑いながら近付いてくる。

そしてある程度近付いた所で…

「ん?…ん?!アインじゃん!なんぞその格好?」

「うちのクラスの演し物の制服みたいなものですよ。」

二度見をした主任と2く3言葉を交わし、今度はキャロリンと呼ばれた女性へと向き直る。

「お久しぶりですね、2人とも。最初に拾った時はあんなに小さかったのに…今ではここまで立派になるとは…」

「うんうん。おじさん嬉しいよ。グスつ。」

明らかに嘘泣きと分かるキャロルと、それに乗る主任。

「さて、休憩時間も残り少ないですし案内しますよ。」

「そりゃ助かる。実はさつき来たばかりで射的しかやってないんだよね。ギャハハハハハ。」

「はあ……」

随分とテンションが高い主任を見て同時にため息を吐く一夏とセシリア。だがその顔は笑みが浮かんでいた。

第五話

『昔々。あるところに一国の姫君である王女セシルと、たった一人で全てを取り仕切る執事：アインの2人が居ました。彼らは唯一この国に残る王族とその召使い、故に持っている情報もまた唯一無二の希少価値のあるものでした。それを知った各国のお偉いさんは、舞踏会と称して女スパイを多数送り込みました。さあて絶体絶命の大ピンチ！背中を合わせ息を呑む2人は、今宵の武闘会を生き残れるのか！』

もの凄くノリノリで読み上げる楯無の声に、舞台中央に立つ一夏とセシリアはため息を吐いた。



「ごめんね2人共、台本用意出来なかったから、全部アドリブで良いかしら?」
「用意しなかったの間違いではなくて?」

開演目前に迫り、台本すら存在しない点を疑問に思うセシリア。そのセシリアに対して確信的な笑顔を浮かべる楯無に、セシリアは白い目を向ける。

確かに台本を用意しない方が面白そう、と言う目である。故に一夏も弁護するつもりは無く。

「たくつ。台本無しでどうやってやれっというんだよ…」

「あー大丈夫大丈夫。基本的にこちらからアナウンスするから、2人はその通りにアドリブでお話を進めていけば良いから。」

「そうは言ってもだな…」

いまいち納得出来ない一夏は、不満を漏らしながらも最終確認をする。身嗜みを整え、左手の白手袋をスツと上げる。そして随所に忍ばせた銀のナイフを確認し、銀トレーを左手に持つ。

そして一方のセシリアも、蒼いドレスを身に纏い太股にホルスターを装着する。そし

てホルスターに付いているポーチ2つにマガジンを仕舞うと、手に持っていた最後のマガジンを反対の手に持つS & W M 3 9へと詰め込んだ。

「全てゴム弾、故に当たっても問題ないですわね。もの凄く痛いですが……」

「まあ、良いじゃねえか。」

準備を終え舞台袖へと歩く2人。

その後ろ姿はかなり様になっている、お嬢様と執事。素材が良いと本物と見間違っただ。

「さあ、幕開けよー！」

そう楯無が言い、舞台上が上がっていく。

—————△—————

「はあああ!!!貰ったあ!!!」

「残念ですが、当たる訳にはいきませんので。失礼。」

青龍刀を片手に突っ込んで来る鈴を、勢いそのままに首を掴んで自身の後ろへと流す。

流された鈴は足を詰まらせ、そのまま倒れ込む。

そして倒れた鈴へと、一夏はナイフを投げる。

その数10本。

それは全て正確に鈴の服と床を縫い付け、その場から動けなくなる。

「な!？」

「その場しのぎかと思いますが、少々そこで大人しくしててください。では。」

驚愕で固まる鈴を尻目に、一夏は歩き出す。

と、何かを感じてトレレーを構える。

その刹那：ガキンツとトレレーに強烈な振動を与えながら跳ね返る金属音が響く。

「あ、外した。」

その正体は、両手でアサルトライフルを構え、背中に別のアサルトライフルを持つシャルロットが放った銃弾だった。

弾かれた事を冷静に判断したシャルロットは、次弾を装填された銃口を更に一夏へと

向ける。

そして躊躇無くその引き金を引いた。

最初とは違いその射撃は、1マガジン撃ちきるまで続いた。だが：

「ふっ。何処を狙っているのです？」

「ッ!？」

マズルフラッシュシユによつて若干焼き付き、視界が狭まっていたシャルロットだが、それでも対象は見失う事無く見続けていた。その筈なのにどうして：

「ど、どうして隣に…」

「私の動きを封じたいのでしたら、面で攻撃して頂かないと。アサルトライフル如きの制圧射撃では、精々が点攻撃の範囲が広がっただけです。」

シャルロットの隣。50cm程隙間を空けて立っていた一夏はそう答える。点で1カ所しか狙わない銃撃等、簡単に避けられると。

実際はそんな事無いのだが、一夏は射撃が始まった直後はまだ射線上に居た。だが当たる直前に走り、トレーを置き去りにしてシャルロットの隣まで来ていた。事実、トレーには数多くの凹みが見られた。

「クッ!!」

振り向きざまに銃口を一夏へと再度向けようとするシャルロットだが、一夏がそういう度にも攻撃を許すはずが無い。

飛んできたナイフが銃口へと刺さるのを見て手を止めた。

「抵抗は無駄ですよ?ここからならナイフの方が早いです。それに……」

「残念だけど、僕には話を聴いている余裕は無いんだよね!」

銃を一夏へと投げ捨て、走り出すシャルロット。ただ走るだけではなく、ある物を置き土産にすることを忘れない。

丸く円筒状のそれは、床を転がりながら強烈な光と音を放つ。

「クッ、閃光弾とは厄介な。」

両目を腕で隠し、瞑りながらもシャルロットの気配を追おうと試みるが大音響の中集中出来るはずも無く見失ってしまう。

「逃しましたか……なかなかどうして、骨がありますね。」

チラリと横を見るとシャルロットだけで無く、縫い付けた筈の鈴も共に何処かへと行っていた。

「全く…骨が折れる。」

ため息を吐きながらも、一夏は歩き出した。

――△――

ガウンッ

大口徑ライフルの銃声がある場に轟き、セシリアが隠れている柱の一部を削り取る。様子を見ようと身を乗り出す寸前だったセシリアは、即座に身を屈める。

「ツチ。銃声からしてヘカートⅡ…全く、こんな物を用意するなんて何を考えているのですか…」

ヘカートⅡ。

明らかに対人には威力があり過ぎるそれは、分類上は対物ライフルに分類される。

装甲すらもぶち抜ける弾薬を発射する程の火薬量だ、いくらゴム弾とは言え容易にコンクリートを穿つ程の火力が出る。

それを人に向ける等、安全に配慮している筈の学園祭でぶっ放す物では無いのだ。

「全く…誰ですの？用意したのは…」

愚痴を溢しながらも出る機会を伺うセシリアだった。

――△――

「ツチ、外したか。」

ラウラはコツキングレバーを動かし排莢して、レバーを戻す。

スコープから目を離さずに、次弾を装填されたその銃口をセシリアへと向ける。その

刹那…

バキツと銃から異音が響き、慌ててその場所を覗き込む。

そこにはスコープの鏡面、そこに突き刺さるゴム弾があった。

「なっ!?この距離で正確に…それもハンドガンで狙撃を行うとは…流石セシリアだ。」
スコープを潰されたヘカートIIをその場に置き、セシリアから距離を取るべく走り出す。

ラウラにはライフル以外に狙撃をする術が無い、対してセシリアは種別を選ばず1kmの狙撃が可能である。圧倒的不利な状況な為、そそくさと逃げることを選択した。

「ラウラ!」

「シャルロットか。その様子だと失敗のようだな。」

「そっちもね。」

アサルトライフルを片手に走ってきたシャルロットに、ラウラは手を挙げて答える。

2人は失敗したら合流する作戦を立て、今合流したと言うことは失敗だ。しかも2人共主武装を失った状態で。

そこに銃声が1発分響きわたる。

その発生源はセシリアが隠れて居る柱、そして狙いはシャルロットである。

素早く隠れようとしたシャルロットだが軽い金属音がしたため、ふと視線を下に落とす。

そこにあつたのは手榴弾のピン。

それが指し示すのは…

「…ッ!?しまった!!ラウラ!」

逃げてと言う暇も無く、シャルロットの懷で閃光弾が炸裂。
近くに居たラウラ諸共至近距離で喰らうこととなった。

「ふふ、2人撃破ですわね。」

そう言うセシリアの声が、響いていた。

—————△—————

『さあ、ただいまからフリーエントリー組の参加を開始します。2人が持つ国家機密、もとい銀時計を見事奪い取った方には!何と何と、豪華賞品が待ってます!皆さん!賞品目指して頑張つてね!』

「クソ!フリーエントリーってこう言うことかよ!」

執事になりきっていた一夏も、流石の状況転換に素に戻って悪態を付く。

ドレスを着た生徒、制服のままの生徒等。

たくさん生徒が文字通り群れをなして一夏へと殺到する。

「織斑君！時計を渡して！」

「豪華賞品は私の物よ！」

若干殺気を纏った少女たちに、さしもの一夏も逃げる選択肢を取る。

「どうぞこちらへ。」

「あ、はい。」

突然手を引かれて舞台裏へと連れて行かれる一夏。その顔は、困惑では無かった。

――△――

一夏が誘導されるがままセットの下をくぐり抜け、男子更衣室へとやってきていた。

「着きました、ここなら誰も来ないでしょう。」

「まあ、誰も来ないでしょうね。ここは男子更衣室ですし。ところで、貴女は何の用で？
巻紙礼子さん？」

そこに居たのはニコニコと笑みを浮かべる女性、一夏が昼間出会った巻紙礼子だった。

「ええ、良い機会ですし貴方の専用機…白式を頂こうかと思ひまして。」

ニコニコした顔とは裏腹に、ゾツとするような低い声でそう告げる。

だが彼女は一つ誤算があった。

一夏は確かに企業から白式を貰っており、表向きは専用機として登録されている。

だが実際にはかなり前に白式は一夏の手を離れており、この場所には存在しないのだ。

だからこそその勘違いを、一夏は利用しようとした。

したのだが…

「ほう…これは先回りしていた甲斐があったな。」

そこに響く声に、2人とも動きを止め警戒をする。

コツコツとヒールの音を響かせながら、暗がりから出て来たのは……

「なっ!? ブリュンヒルデ!」

二振りの抜き身の刀を持った織斑千冬がそこに居た。

「この学園で私の弟が、私の生徒が。不貞の輩によって害されそうになっているのを、この私が見逃すと思ったか? 残念だがありえない、私は教師であるが故。1人の人間として、1人の姉として。ここに居る故に……つな!!」

両手に持った刀を振りかぶり、常人では追えない速度で走り出す。

それを見て礼子は専用機：『アラクネ』を展開し、蜘蛛にも似たその爪で迎撃する。

だが……

「遅い!」

スパツと千冬が振るった刀により、2本切り落とされる。そしてそのまま流れるように、喉へとその刀の切っ先を突き刺す。

絶対防御に守られているとは言え、その衝撃はダイレクトに喉へ殺到する。

「ゲホツゲホツ!! ツテメえ……!」

「絶対防御があるから大丈夫等と過信しているからそうなる。衝撃までは殺せないのだ、鎧通しなど使われたら死ぬぞ?」

かなり軽く言う千冬に、礼子は咽せながら睨むしか無い。人体の急所である喉を、世界最強の力で突き刺されたのだ。その衝撃は凄まじい。

「ツチ。よりにもよってブリュンヒルデかよ……たかだか餓鬼1人だつて言うから気楽に来たのに、とんだ災難だぜ全く。」

「ふっ。なら、今この場に居る自分を恨むことだなー!」

そう言いながら、千冬は礼子に向けて最速で突っ込む。

その振るわれた刀が礼子の纏う専用機の装甲に当たる直前、その装甲と肩の間に2本程爪を滑り込ませて距離を取る礼子。

だが滑り込ませた爪はその僅かな間に両断されており、第2関節より下が欠損していた。

これで4本。

半分の爪を失い、一気に劣勢となった礼子。

目の前にはI S操縦者が束になっても勝てないであろう世界最強の存在、ブリュンヒルデ。

生身とはいえその強さの前では1対1ではまず勝ち目は無い。故に：

「ツチ・クソが!!こんなところで捕まって堪るかよ!!」

パシユつと圧縮空気の音を響かせながら、機体から離れる。

その刹那、機体が光を上げて大爆発を起こした。

「ツチ、逃がしたか。危機管理能力と逃げ足だけは無駄に良い奴だ。」

「せっかく計画通り追い詰めたのだが？横から割り込んできて、逃がした言い訳は何を言うつもりだ？」

「あ、いや……そのだな一夏。えつと……ごめんなさい。」

はあつとため息を吐いた一夏。

手を頭に当て、本当に呆れていた。

—————△—————

「クソ！クソ！クソ!!何が簡単な仕事だ！ふざけやがってあの餓鬼！」

IS学園から少し離れた場所。

現在人が居ないモノレール駅傍の公園にて、全ての仮面を落とした礼子：否、オータムは毒付いてていた。

オータムの頭に浮かび上がるのは、何時でも他人を見下すような目をしている少女。

それはオータムと同じ組織に所属し、今回の作戦を立案した張本人でもある。

気が立っており、帰ったらどうしてやろうと考え出すが……

「初めましてになりますね、こんにちは。ファントム・タスク亡国企業の実働隊員の1人、オータムさん？」

突然後ろから聞こえてきたその声に、オータムはすぐさま距離を取ってその存在を確認する。

そこに居たのは蒼いドレスを身に纏い、優雅に佇むセシリアだった。

「ツテメエ……何者だ？」

「私が何者かなどは、貴女にはどうでも良いことです。貴女はどうせ、ここで脱落ですか

ら。」

そうセシリアが言い切った途端、大爆発が起きたと錯覚するほどの爆音が周囲に響き渡った。

咄嗟に耳を守るように塞いだオータムだが、突然前へと倒れた事により状況把握が出来なくなった。

そして何が起きたか認識するより早く、それはやって来る。

「ツ!!つがあああああ!!」

想像を絶する痛みへのたうち回り、血を撒き散らしながら転がる。

そう。

オータムの膝から下が、両足共に無くなっていたのだ。

「はあ…煩いですわね、それに汚れますし。こんなゴミ…早く廃棄したいですわ…」

『それはわかるけどダメだよ？セシリン。アインから言われた通りにしてるんだし。殺さなければ何しても良いって言われたから足を吹き飛ばすまでに留めたんだしさ。ギヤハハハ。』

そんなセシリアの独り言に答えたのは、無線越しに嗤いながら話す主任だった。

オータムの足が無いのは、主任が行った砲撃とも言える狙撃によるものだったのだ。相手は重要な情報源。戦闘によって逃げられては、それを失うことになる。

だからこそ、セシリアへと注意を向けさせているうちに、足を奪うと言う作戦を実行したのだ。

「まあ、そうですけど…」

そう言いながら、セシリアは未だ出血してるその足に、部分展開したBITのレーザーを容赦なくぶち込んだ。

「ぐっぎやああ!!!」

レーザーの特性はその熱量。

一瞬で通過したとは言え、その温度は数千度にも昇る。そんな高温であれば、一瞬で傷口が焼き塞がるのは当然である。

まあ、その際に激痛を伴うのだが。

「さて。無力化致しましたし、戻りましょうか。私達も報告がありますし。」

『ギャハハハ、了解隊長。』

「直属の上司が何を言ってるのですか……」

そんな軽口を叩きながらも、縛り上げられたオータムをゴミを扱うかの如く引きずりながらセシリアは学園へと歩いて行つた。

公園の陰から見ている、かなり怯えた少女を置き去りにして。

第六話

「ご苦労だった、そいつはこちらで預かろう。」

「セシリアが主任を連れてほぼ作戦会議室と化していた生徒会室へと入ると、一夏と千冬、楯無に加えてキャロルも居た。」

「そんななかセシリアは、絶賛引きずってきたそれをゴミのように部屋の中央へと投げた。」

「また随分と派手にやったねえ、これ。もう2度と歩けないんじゃない?」

「まあ、その辺はどうでも良いんじゃないの?別に。2人にも俺にも、関係ない事だし。」
楯無と主任が目の前に転がる『ゴミ』を見ながら、そう言う。

膝から下を両足共に切り落とされ、後ろ手に縛られ転がされている様はまさにゴミのようだった。まあ、正確には切り落とすではなく撃ち落とされているのだが。

「まあ、良いだろう。こいつのことは学園に任せてあるし、問題は他だ。」
「そう言う一夏は主任とキャロルへと向き直り、その口を開く。」

「2人がまだ残っている事が、俺にとっては今一番の疑問だ。」

「まあ、そうですね。主任にはゴミ掃除を手伝って貰いましたけど……」

「ハッキリとゴミと言い放ったセシリアに、千冬と楯無は苦い顔をしていたが、疑問は最もなので頷く。」

「そうですね。私達は2人に重要事項を伝える為に、こうして残っているのです。主任。」

「ん？ああ、そうそう。アインとセシリンに上からの指令を伝えなきゃな。」

「そう言うどぶざけてる態度から一変、俗に言うマジモードとなった主任。
佇まいを直し、口を開いた。」

「サー・アインザック・リステンバーグ、セシリア・オルコット。通達だ。2人には本日
より、Strayed隊を再編し原隊復帰して貰う。」

「了解!!」

その時の2人の流れるような敬礼が、楯無と千冬は忘れることが出来ないでいる。

—————△—————

翌日の朝。

HRにて。

「諸君、学園祭ご苦労だった。私は去年も1年の担任だったが、去年と比べてもかなり盛況であったのは確実だ。まあ、今年は唯一の男子生徒が居たのが主な理由だと思うがな。」

教卓へと立った千冬が朝の挨拶、並びに今日の予定などを言う。そして昨日の学園祭に出ていたクラス全員を労う。

そんななか…

「せんせえくそのおりむくが居ませくん。」

「あ。よく見たらセシリアも居ないじゃん。」

1番前の席に座っている一夏と、割と後ろの方に座っているセシリア。

2人が居ないために、クラスも疑問に思いざわつき出す。

「あー…そうだな。織斑もオルコットも急に入った用事で3日程学園を離れる。昨日の時点で出立したから…明後日には帰ってくるだろう。だが、帰ってきてても詰め寄らないように。」

「「はーいー」」

「よろしい、では授業を始める。」

そう言いながらも、千冬はその時のことを思い返していた。



「具体的には本国イギリスで説明するから、荷物まとめてね。」

「……それは今すぐでないといけない事なのですか？」

疑問に思つた楯無が、そう聞く。

楯無としては一夏とセシリアに聞きたい事があつたため、どうしても今日でないといけないのかと。だが……

「当たり前です。この2人はかなり重要な立ち位置に居るのです、2人が居ないと何も始まらないのですから。」

「あ。話終わつた？」

「主任。重要なとき以外もシャキツとしてくださいと、いつも言っている筈ですが。」

キャロルがそうツツコミを入れる。

呆れ顔では無いため、一種のお約束と化したやりとりである。

「んじや、そう言うわけで。出発は20時だ、準備していてね？」

「了解ですわ、それでは失礼します。」

そう言うのと、セシリアは生徒会室を後にした。

その去り行く背中を目で追いながら……

「じゃ、そういう訳で会長さん。聞きたい事もあるだろうが、続きは帰ってからお願いします。」

楯無へそう告げた一夏は主任へと向き直り、敬礼をしてセシリアと同じように生徒会室を後にした。

—————△—————

翌日。

一夏とセシリア。主任とキャロルは、イギリスへと到着していた。

4人が空港の専用口：所謂裏口から出ると、そこにはリムジンとそこに立つ1人の男性が居た。

「お疲れさまです、主任！指示通り回しておきました！」

「あ……」苦勞さん。」

男性が主任へ敬礼をして、主任は軽く流す。

普通の会社のような上下関係ならかなり失礼な事だが、主任はこう言う性格だと知れ渡っているため誰も気にしない。

「では2人共、これより本部へと参ります。まあ今更言う必要は無いかもしれませんが、主任と同じような立場の人間が多数居ますので失礼の無いよう。」

そのキャロルの言葉に頷き、2人はリムジンへと乗り込んでいく。

その様子を後ろから眺める主任とキャロルは…

「あの小さかった餓鬼共が、今じゃ軍部の中核とは……時間が経つのも早いな。」

「ええ、そうですね。拾った時が懐かしいです。」

そうしみじみと呟きながらも、リムジンへと乗って行った。

——△——

「サー・アインザック・リステンバーグ、出頭致しました！」

「セシリア・オルコット、出頭致しました！」

本部へとやって来た2人は、案内された作戦会議室に居た。

そして2人の視線の先には、イギリス軍部を統括する立場の人間……主任の上司がそこに居た。

「まずは急な呼び出しを謝ろう。」

さて、主任から聞いていると思うが2人には復帰して貰う。新たな部隊ではなく、Strayed隊の再編。当然君達2人が隊長だ。それに伴い、凍結していた君達の階級も解冻する。サー・アインザック・リステンバーグ中佐、セシリア・オルコット中佐。君達の帰還を歓迎する。」

「はっ!! ありがとうございます、アラン・ラングレー元帥!」

一夏とセシリアが同時に口を開き、敬礼をする。一夏とセシリアの前に居る初老の男性。

年齢60にして現役の軍人である。イギリス軍部全体の指揮管理及び、作戦立案を統括する実質的なトップに君臨する元帥の位を持った、一夏にもセシリアにとっても恩人で

ある。

「良い、まだ正式な部隊員も決まっていんだからな。遅くても2〜3ヶ月後には優秀な隊員を選抜しておく。そこから誰を引き抜くかは、お前達2人に任せる。今日は以上だ。新たな階級証は後日送らせて貰う、後は旧宿舎にでも行つてこい。あそこを綺麗にして、再編したStrayed隊を置くからな。」

「了解しました。では、私達は失礼させて頂きます。」

そう言うのとセシリアと一夏は再度元帥へと向き直りこう言った。

「これからまた、お世話になります!!」

—————△—————

一夏とセシリアは、かつてStrayed隊が宿舎として使っていた第23区野営地へと来ていた。

野営地と言っても軍内部の施設である為当然建物はある。

2人はその建物の1階ロビーに立っていた。

「1年……いえ、もう2年前ですか。彼等が居たこの場所を、もう一度使う事になるなんて。」

「だがこれも巡り合わせだろうな。あいつらも喜ぶだろう、俺らが復帰してまた前線へと戻る。鍛えた部下達を見せて、俺らはもう餓鬼じゃない。1人前の……1人の兵士だと、あいつらに見せれば少しは安心して眠れるだろうさ。」

「そう……ですわね。死んでいった仲間達の為にも、私達は立ち止まる訳にはいきませんからね。」

しみじみと、この場所への思いを……想いを語る2人。

Strayed隊が解散して以来踏み入れていなかった自らの帰る場所ホムに、感慨深いものを感じる。

「俺達はこうして家に帰ってきた。そしてじきに新しい新家族隊員も増える。ならばこそ、俺達の全てを教えよう。今度こそ誰も死なせない為に。」

「ええ。第三次世界大戦とも言えるあの大規模な経済戦争は終わりましたが、未だISという戦争の火種は残っていますから……何時燃え上がるのか、分からないですから

ね。」

今でこそアラスカ条約によりISの軍事利用は禁止されている。だがそれを律儀に守っている国など、日本以外には存在しない。

当時経済戦争に参加した国は、例外なくISを戦場に投入していた。

ISを数多く持つていない小国と強国。

ISを全く持つていない国も戦場には居た。

だがどちらにしろ、ISが戦場に出たのは事実。

イギリスも一夏とセシリアという2人の専用機持ちを戦場に出しているのだから。

故にまた戦争が始まらないという確証は無いのだ。

「さて、まずは片付けるかな。時間もないし。」

「そうですね、明日には帰りますし…今日を逃すとまた2ヶ月以上は開いてしまいますからね。」

そう言つて、各々に振り分けられるであろう部屋を掃除するところから始めた。



一方その頃、I S学園では。

「失礼します。」

楯無は学園長室の、その重厚な扉を開けて中へと入る。

「ああ、楯無くん。待ってましたよ。」

厚いドアを開けそこに居たのは、穏やかな顔をした初老の男性であった。

女尊男卑であるため表向きはこの男性の妻が学園長をしているが、実際の学園長はこの男性である。

白髪で顔には相応のシワがあるが、柔軟さを感じさせるその人柄に『学園の良心』などと呼ばれている。

普段は用務員として働いているこの男性『くつわぎじゅうぞう轡木十蔵』こそがこのI S学園のトップである。

「では、報告お願いしますね。」

「はい。まず織斑一夏くんに関してですが……正直驚きました。私が想像していたものが軽くなる位、ビックネームな場所に所属していました。まさかイギリス軍だとは……」
榎無は何時もの調子を一切出さず、真面目な顔でそう言った。

「あの卓越した技術、技量、経験。どれをとつても凄いものでした。一緒に居るセシリアちゃんも……正直手玉に取られるとは思いませんでした。」

「ほう。榎無くんをして、そこまで言わせる程ですか。」

「ええ、気が付いたら縛られていました。織斑くんの実力も、恐らくセシリアちゃんと拮抗しているので……正直私では荷が重いかと。」

自身の意見を述べ、再度口を開く。

「次に亡国企業についてですが……少なくとも2機以上は機体を持つているでしょう。うち1機は……まあ、操縦者ごと捕まえているので問題は無いかと。ただ……両足共に膝から下がありませんが……」

「それは……織斑くんですか?」

「いえ、2人の上司にあたる方が引き起こしました。なんでも、高火力な対戦車ライフルを使ったみたいで……」

「それは……まあ。」

流石の学園長も、それには苦笑いを隠せない。

「以上で報告を終わります。」

「ありがとうございます。取り敢えずですが、もう少し警備を上げなければいけませんね。」

「そうですね、今回は簡単に侵入されてしまいましたから。」

その途端、張り詰めていた緊張が解ける。

「ではお茶にしましょうか、良いお菓子が先日手に入ったんですよ。君のお口に合えば良いのですが。」

「いえいえ。十蔵さんが選ぶお菓子は外れはありませんから、毎回楽しみにしてるんですよ。あ、そうでした。私だけというのもあれですし、今日はお茶を持ってきたんですよ。」

「おお、それはまさか虚くんの……彼女のお茶は美味しいですからね、これはいいお茶会になりそうですね。」

年甲斐も無くはしやぐその姿は、70近い男性とは思えない。それに釣られるように

楯無も笑う。もしこの場面を第三者が見ていても、祖父と笑う孫という風にしか見えな
いだらう。

まさかこの2人が学園のそれぞれの長だとは…

—————△—————

「離して！離してちょうだいエム！オータムが、オータムがあ!!」

「止めろスコール!!今行つてどうなる！主戦力が集結しているな！行つてもただの自殺
行為だ！」

今にも飛び出しそうなスコールと呼ばれた女性を、必死に抑えるエム。

地に着いている足は少しずつ動いており、体格も相まってかなりの力を消費させる。

「それにあいつらは見る限り敵対者に容赦が無い、情報を引き出す為生かされているで
あろうオータムも…迂闊に浸入すれば殺されるぞ！」

「ツク!!」

スコールは泣き腫らしグシャグシャになった顔でエムを睨むと、自身の部屋へと戻っていく。

本来ならこう言う場面では捕まった隊員は切り捨てるか、迅速に救出するかを選ぶのだろうか。

だが敵対してどうなるか。実際オータムの身に起きた全てを目の前で見ていたエムにとつて、再度学園へ行くなど恐怖しか無かった。

事前通告も無し。

ただ情報を聞き出す必要がある為に逃がすわけにはいかない。

そのためだけに両足を消し飛ばす場面を見ていたのだ、自身も捕まれば同じ目かそれ以上の目に遭う事となる。

エムにとつてそんなものはご免だった。

「それにあれはティーズ型プロトタイプ操縦者……イギリスの叡智の結晶が詰まった、謂わば切り札^{ジョーカー}。それを十全以上に乗りこなす相手など……ふっ。今の私では到底勝てる筈が無い。」

以前失敗した福音回収任務時に見たその機体を思い浮かべ、自身との技量差を痛感するエム。

「だが……この『サイレント・ゼフィルス』で、必ず……」

紫色に輝くそれを握り締め、エムはホテルから何百kmと離れた場所にあるI S学園を睨み付けた。

第六章 第一話

学園祭も終わり9月になり、I S 学園も新たな行事に染まっていた。

『キャノンボール・ファスト』

I S を用いた妨害有りのレースである。

主に専用機持ちが競い合い、今の時期は練習が盛んとなる。それは専用機を持たない非代表候補生も同様に、参加者は全員で模擬レースなどをする。

そんな中一夏とセシリアは、通例となる生徒会室へと来ていた。

「あ、そうそう。2人は今回のキャノンボール・ファストだけど、裏方に回って貰うからね？」

「はあっ？」

若干驚きを孕むその声に、楯無は一瞬ビクツとする。だが気を取り直して、再度口を開く。

「正直言つてね？ 貴方達2人の専用機のスペックから見ると、ほぼ無理ゲーなのよね。ただでさえ素のスピードが高いのに、どうせ高機動パッケージもあるんでしょ？」

「ええ、まあ。」

「専用のがあるが……」

その言葉に楯無は、ため息を吐いた。

一夏の専用機『ユリ』

セシリアの専用機『ブルー・ティアーズ』

どちらも元々戦場を蹂躪するため、かなりの高水準のスペックを持っている。

それは勿論スピードに関しても例外では無く、最高速度は通常のISの2倍近くを叩き出せる。

普段は学園の規定に合わせるために出力制限を掛けているが、真剣勝負となれば状況に応じて解除するだろう。

ましてレースならば尚更である。

ただでさえ速い機体に高機動パッケージを装着すれば、誰にも手に負えない速度を叩き出す事となるのだ。

「他の専用機組も…ましてや訓練機で参加する生徒も居るのよ、貴方達が出たら確実にぶつちぎるだけじゃない。」

そのもつともな意見に、2人は押し黙る。

実力が確かで何年も乗ってる2人は、訓練機を扱う初心者であるクラスメイト達とは技量が泥雲の差である。専用機組も訓練機組も別れて行う事になるのだが、どちらにしてもずば抜けた技量故に厳しいだろう。

一夏達が訓練機で挑んだところで、元々の技量故に封殺されてしまう。

故にこの2人が出てしまうと、ただの負け試合となってしまうのだ。

負けると確定していて本気で競う人間は居ないため、本気で争わなくなる。

それでは本人の技量は何も成長しない。

だからこそこの2人を出場させない、という措置を取ったのだ。

「あ、簪ちゃんも裏方に回るからよろしくね？色々私の代わりに取り仕切って貰ってるし。」

「あら？日本代表候補生ですわよね？簪さんは。専用機は貰っていると聞いていますが……」

「あー、それねえ。実を言うと簪ちゃんの専用機、まだ完成していないのよね。」

そう言った楯無の言う通り、日本代表候補生である更識簪の専用機は完成していない。

受け持ちは倉持技研なのだが、放置され簪の手に未完成のまま渡っている。

その原因として、一夏へと贈られた白式。

その開発元が倉持技研、と言えば分かるだろう。白式の開発に人手を割きすぎて、簪の専用機開発に人員が居なかつたのである。

それを簪は自ら開発するために引き取つたのだが……

「開発中は代表候補生の仕事はしなくて良い！って、簪ちゃん本気で喜んでたのよね……」
「それってつまり……」

「そう……開発中としておけば代表候補生の仕事は来ない。しかも時間を掛けなれば完成しないんだから、自身の趣味に充てる時間を増やしても問題ない！らしいわ。実際本当に難航しているから、上も何とも言えないみたいだし。」

流石のセシリアも言葉が出なかつた。

完成していない事から、何かしら問題があったのかと考察したのだ。だが意図的に開発していないように聞こえたため、何とも言えなかった。

「簪ちゃんが言うには、専用機作るよりアニメ観たいそうよ……」

「それは代表候補生としてどうなのでしょう……」

「ま、まあ。趣味趣向は人それぞれだし……」

流石に苦笑いを隠せない2人。

それに対し楯無も乾いた笑いを浮かべる。

代表候補生でもある実の妹が、自身の専用機開発よりも趣味を優先してしまっているのだから。何とも言えない気分になるのは当然であった。

「ま、まあ。裏方の件、よろしくね？」

「了解だ。」

「ええ、お任せください。」

そう言って2人は、軽く頭を下げたのだった。

—————△—————

IS学園第2アリーナ、地下射撃場。

生徒会室から出た2人は、そのままの足でここに来ていた。

「全く…（ズドンッ！）少々期待していましたが、あんまりですわ…（ズドンッ！）」
「まあ仕方ないだろう？俺らは…（ズドンッ！）専用機に乗って、もう3年以上経つんだしな。」

カウンターより30m先に出現するのを、ライフルで撃ちながら答える。

2人共に使っているのはボルトアクションの為、手で排莖している。

そして排莖したボルトを元に戻し、肩越しに構える。

そしてスコープが付いてない…アイアンサイトを見て、照準を合わせると引き金を引いた。

放たれた弾は、寸分の狂いも無くの頭部へと命中する。

「はあ…でも裏方と言っても、何をするのでしょうか。」

「審判が無難だとは思うが…準備も含まれるのか？」

「準備…ですか。面倒ですわねえ。」

2人同時にため息を吐いた。

正直2人共、裏方などやらずにレースに参加したかったのだ。

今までやってきたイベント。

タッグマッチ、臨海学校、文化祭。

全て何かしらのイレギュラーの対処により、まともに楽しめていないのだから。

今までと違った方式のイベント故に、かなり楽しみにしていたのだ。

それが出来なくなったのだ、気落ち以外の何物でも無い。

「まあ、決まった事は仕方ないか…流石に覆せないし。」

「そうですわね…」



「はい。では皆さん、今日の授業は高速機動についてです。」

第六アリーナにて、真耶の声が響き渡る

「中央タワーと繋がっているこの第六アリーナは、高速機動実習が出来る事は先週言いました。ではまず、専用機持ちのこの2人に実演して貰いましょう。」

そう言つて真耶が視線を向ける先には、既にスタンバイ状態の一夏とセシリアが居た。

「まずは高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん。」

通常時にフィン状になつている4機のB I T、そして腰部のミサイルB I Tも全てスラストーとして推進力に回しているのが本来の『ストライク・ガンナー』なのだ。

だがこれにも魔改造が入っている。

セシリアが所有している予備のB I T 8機。

ミサイルB I Tも含めて全14機のB I Tを、全てスラストーとして推進力を得ている。

それぞれの砲口を全て封印し連結することで、更なるハイスピードを実現させている。

その様は、まるで翼のように広がった蒼だった。

「そして純白の羽根を模した『白き百合』を装備した織斑君。この2人に1周してきて貰いましょう。」

対する一夏の機体には、3機1対のスラスターが取り付けられていた。

主任が巫山戯て言った言葉が原因で制作が決まったこれは、元々は砲撃武器だった。別名天使砲と呼ばれていたそれは、主任が目を付けるまでは埃を被っていたのだ。

それを見た主任は…

『どうせならこれ使おうぜ？その方が面白いよ』と言った事で開発が決定した。

『ねえアイン。何故私達は、出場しないのに練習しているのかしら。』

「それは俺も思っていたところだ。」

授業開始30分も前からスタンバイしていた2人は、その疑問に頭を悩ませる。

因みにだがこの2人、高速機動用補助バイザーなるものは装備していない。

元々がどんな場所でも活動する為の訓練をしていたため、逆にあると邪魔なのだ。

「では行きますよ！…3・2・1・Go！」

真耶のフラッグで、一夏とセシリアは一気に飛翔し加速した。

2人共に通常では出し得ない速度を出し、もう既にカーブに差し掛かっていた。

中央タワーを折り返すまでに数秒しか掛からない。その為楯無が何故出場をさせないのかがよく分かる。

速すぎるのだ。

タワーを折り返してから数十秒後、2人は並走しながら地表へと戻ってきた。

「はい、2人共ありがとうございます。」

正直速過ぎて初心者への参考にはならなかったのだが、真耶は純粹に労う。

2人が出ないことは知っていた為、そんな2人が授業前から準備してくれていた事に申し訳なさを感じた故でもある。

「いいか。今年は異例だが、1年生も参加できる。やる以上は各自手を抜かないように、そして胸を借りる気持ちで先輩達と走ってこい。キャンノンボール・ファストでの経験は、必ず生きてくる。分からない事があればそこに居る2人も含めて、私達に聞くと良い。さて、では訓練機組の選出を行う。各自、割り振られた機体に乗れ込め！」

その言葉に、ワラワラと列が出来てくる。

毎年の恒例行事であるキャンボンボール・ファストだが、本来は2年生からのイベントだ。

だが今年は予期せぬ事態が多発したため、1年生も参加することとなった。

「よし！勝つぞ〜！」

「お姉様に、良い所見せなきゃ。」

「勝つたらデザート無料…負けるわけには…」

例によって賞品が出るため、出場者も出場予定者も全員熱意が入っている。

それに触発され、教師2人にも指導に熱意が入っている。

「織斑君、さっきの実演ありがとうございました。ですが、バイザーは使わなくても平気なのですか？」

「はい。正直バイザーが無い方が楽ですね、あの鮮明に見える感覚がどうにも慣れなくて。」

「あ、分かります。私も最初は、バイザーの感覚が駄目でした。どれだけ速度を上げても鮮明に見えてしまつて…どうしても酔ってしまふんですね。」

「あの感覚がどうしても嫌で、バイザー無しで飛べるように散々訓練しましたけどね。」

若干笑いながら言う一夏。

だが、本来ならそれがどれ程のことか分かっていない。

音速近くまで加速する事が出来るISは、操縦者の反射神経も動体視力も何もかも追いつかない。

だからこそバイザーを使つて、それを補っているのだ。

バイザー越しならば見える景色も鮮明に、更に操縦者が見やすいように少しだけ遅く映るのだ。

バイザーが無い方が楽と言えるほど慣れてしまったと言うことは、裸眼での動体視力や反射速度がかなり可笑しいことになっている訳でもある。

「アイン！ちよつと手伝つて下さい。つて、待つて下さい、何でこうなつたんですの？」

「ぼ、僕だつて知らないよ！だつてーわああ!？」

「ちよつと待つてシャルロット！こつちはーのわああ!？」

かなりパニック状態になっているシャルロットが、慌てながら機体を元に戻そうとする。

だが奇しくもその努力は実らず、ラウラへと向かつて行き…

ガツシャン！と、盛大な音が響き渡る。

その音にその場に居た全員が、音の場所へと視線を向ける。そこには呆れているセシリアと、目を回しているシャルロット。そしてシャルロットの下敷きになっているラウラが居た。

「何というか……まあ、有り体に言えば何時ものことだが……」

「あははは……どうしてあんなだったんでしょう。」

その光景を見ていた一夏も真耶も、苦笑いを隠せない。

代表候補生であるラウラとシャルロットが、何をしたらこんなことになるのか見当が付かないでいた。

「はあ……セシル、これは一体何があったんだ？」

「アイン……何でも、デュノアさんの操縦ミスらしいのですが……ラウラさん目掛けて墜落致しましたわね。」

「はあ。何が起きてそうだったんだか、全く。」

流石の一夏も、これには溜息を隠せない。

眼前には、シャルロットの下敷きとなっているラウラ。両者共にI Sを装備している為怪我は無いのだが、シャルロットが目を回している為ラウラは動けないでいた。

そこに見かねた千冬がやってくる。

「全く。何がどうなったらこうなるんだ。ボーデヴィツヒ、事情はわかるか？」

「は、はい。シャルロットの機体から発せられたエラーによって、パニツクになったのが原因かと。恐らくは接続を急いでいた為、誤配線していると思われる。」

「つまり致命的なミスではなく、更に怪我も無い訳か…なら良い。織斑、オルコット。少々手伝ってやれ。」

そう言つて千冬は、自分の持ち場に戻つて行つた。

千冬の傍には常に何人かの生徒が居り、代わる代わる質問の嵐が起きていた。

それを千冬は、嫌な顔せず。

むしろ嬉しそうに答えていく。

そんな千冬を視界の端に入れながら、一夏はまずシャルロットを機体毎起こす。

そうすることでラウラが立ち上がれるようになり、あとは目を回しているシャルロットだけである。

「ほへえくらうらあ。」

「これはダメだな。そうそう起きないだろう。」

「起きてくれないと困るのだが…」

本当に目を回して意識が無いシャルロットを前に、3人共に溜息を漏らす。

正直何故こうなったのかなど、この際どうでも良くなっていた。

「うへへえくらうらあ。」

「それにしても、随分とラウラさんにご執着のようですね。数ヶ月でよくぞここまで…」
「流石ラウラの手腕、同性にも余念が無いな。」

カーッと、ラウラの頬が無言のまま染まっていく。羞恥プレイ以外の何物でも無いだろう。

そこにシャルロットが、これまた器用に体を振らせる。

未だ意識が無い為、何か夢を見ているのだろうか…

「らうらあ…そこは、ダメだよお。」

「…これは。」

「あらあら。これは何をしたのでしようねえ。」

ラウラへと、とても良い笑顔で詰め寄るセシリア。

そこでラウラが限界を迎え、その真っ赤に染まった頬で叫んだ。

「私が悪かった！だからそれ以上からかわないでくれ！！」
羞恥の限界を突破したラウラが、しやがみ込みながらそう叫んだ。

第二話

遂にキャノンボール・ファスト当日。

会場となつているアリーナでは、割れんばかりの歓声が響いている。

ほぼ全ての生徒もアリーナへと移動し、寮内は閑散としている。

そんな中、一夏とセシリアは未だ終わらぬ事前準備を一夏の自室で半ば焦りながら行っていた。

生徒会長である楯無から言われた裏方の仕事であるが、正直な話がアリーナの警備であつた。

ISを持つてただ歩き回るのが警備ではなく、怪しい者が居た場合の捕縛など。

様々にやることはある。

捕縛に使用する道具等も必要なため、現在はしまった場所を探して四苦八苦していた。

捕縛の為殺す装備ではないけない。

非殺傷装備でなければならぬため、普段使わないその装備を探すので手間取っていた。

「結束バンド60本…えーつと無線の感度は良好…あとは…あ、そうですわ！アイン！
テザーガンとカートリッジ、何処に仕舞ったか知りません？」

「テザー…テザー…あーつと、右の戸棚。上から3番目だ。それとスタンロッド
は何処にあるか知らないか？」

「それならお風呂場ですわ。」

そんなような会話が飛び交い、準備が進められていく。随分と物騒な部屋であるが、
基本的に隠されているのは非殺傷装備である。

そんななか…

コンコンつと、ノックの音が響き渡る。

「…はぐ。」

若干警戒しながら開けると、そこには一夏が知らぬ女生徒が立っていた。

「あ、あの…お、織斑君！こ、これ！ぎよ、業者の人が織斑君に渡してくれて。そ、それじゃあ、私はこれで！」

「あ、ああ。」

謎の女生徒は小さい小包を一夏に押し付けるように手渡すと、小走りで行った。

「アイン、誰でしたの？」

「いや、俺も知らないが。なんでもこれを渡すように頼まれたと…待て、この音…」

耳を澄ませると聞こえてくる、カチカチツという音。

それは時計の音のような…

だがここは日本が莫大な資金をかけて作り上げた人工島、ISに関する教育を施す最新の設備がここには集約されている。

衛星監視で学園内の様子は確認できる、その衛星を経由して時刻を調整する事も可能。時間を無駄なく正確に把握するため時刻については、常に最新の物に更新されて誤差をコンマ単位にまで絞っている。

また、最近の若者は円盤型時計の時刻確認に時間をかける、つまり読めない事があるので学生寮の時計は基本全てデジタル時計に統一されている。

最初からアナログ時計など存在しないのだ。

そんな場所に業者がアナログ時計などを届ける筈も無い。

何より四角い長方形のアナログ時計など、今時存在していない。

つまりこの爆弾のカウントダウンのような音は…

「ツ!!セシル!爆破防御姿勢!」

被害を少しでも少なくするためドアへと投げたそれは、容赦の無い爆発を起こし……

2人を、その爆風で包み込んだ。

—————△—————

轟音と共に建物が揺れ、爆風と爆音が周囲に響き渡った。

幸いなことは大半の生徒がアリーナに集合していたことだろう。

だが、中には例外も居る。

この学園の長を自称し、実際権限をもつその人。

「……な？」

生徒会長である更識楯無が、その例外であつた。

警備担当でもあつた楯無は、一夏とセシリアと共に警備に付く。

そのために2人を待つていたところで、この爆発音である。

楯無は直ぐに、自身の居た生徒会室を飛び出す。

そこには……

視界の端、廊下の先。

黒煙が上がり、勢いを増す炎。

至る所が焦げた部屋が見えた。

その部屋は、楯無が2人にと報酬で与えた部屋。

やたらと機密が多い2人が気兼ねなく会議、また上官を呼べるように配慮された。生徒会室に限りなく近い位置にある。

その部屋が、ドアは吹き飛び：周囲の壁をもぶち抜いていた。

左右の壁2枚。

物置として使っていたその部屋すらも、もはや繋がった大部屋となつていた。

「そんな…2人共…」

目の前の光景に絶句する楯無。

気を抜いていた訳では無いのに、爆発するまで気が付かなかつたからだ。自身が居た生徒会室から、30m程度しか離れていないというのに。

『……お嬢様!!急いでアリーナに!緊急事態です!』

突然オープンチャンネルが回線を拾う。

宛先はどうかやらそのまま自分だったが、この目の前の光景が…

『急いでください!亡国企業です!!』
ファントムタスク

「…ッ!?わかつたわ!」

虚がそう言った途端、その重要度を理解した楯無は走り出した。後ろ指引かれる思いで、その場を後にする。

「2人共、無事で居て!」



少し時は戻り。

現在会場は1年生のレースが始まろうとしていた。まず最初に行われるのは、異例中の異例である専用機、訓練機混合レースである。

現在第一レースである。

スタート地点に並んでいるのは、無理を言っただけで専用チューンされた打鉄を装備した筈。

武装がそもそも完成していない故に、全エネルギー配分をスラスターへと回している打鉄式を装備した筈。

高速機動用。パッケージを装備した甲龍を纏った鈴。

3機の増設スラスターを装備したラウラとシャルロットの5人が第一走者であった。

「一夏とセシリアが出ないから、優勝はあたしが貰うわ!」

「ふん、それはこちらと同じ事だ。訓練機だとはいえ、負けるつもりは毛頭無い。」
偶然ながら隣同士となった筈と鈴は、互いに睨み合つて火花を散らしている。

「私も、負けない!」

「ああ、戦いとは全体の流れを征した者が勝つ。この戦い、私が勝つ!」

「まあ、みんな全力で頑張ろうね。」

面倒くさがりで負けず嫌いの簪は、目に炎を浮かばせて拳を握る。

ラウラは闘志を滾らせつつもいつも通りで、シャルロットは普段と変わらなかつた。
ただ自信はあるようで、2人共活き活きとしている。

「みなさーん、準備は良いですか? スタート地点に移動しますよー」

真耶の若干間延びした声が響き、各々誘導マーカーに従つて位置につく。

『それでは皆さん、1年生の部。混合レースを開催します。』

各自準備を終え、位置についてスラスターを点火した。

全員がバイザーを降ろしたのを確認したと同時に、スタートのブザーが鳴り響いた。

急激な加速により周囲にソニックムーブを展開、砂埃が舞いエネルギーを全振りした簪がトツプに躍り出た。

次いで鈴と箒。シャルロットとラウラが走る。

「クツ速いわね、でもあんたには負けないわよ！」

「それは私の台詞だ！」

早々に鈴と箒が睨み合いながら、互いを牽制する。

その後ろに居るシャルロットとラウラは、期を窺うようにしていた。

その期が訪れるとすれば、それは…

「ふふん、お先！」

「ふっ、甘い！」

鈴の加速の真後ろをピツタリと、スリップストリームを利用していたラウラが鈴を抜き去る。

慌てて衝撃砲を向けるものの、飛んできた銃弾をその砲口へと喰らいその衝撃でコースを外してしまう。

何とか持ち直しながらラウラを見ると、その背に乗っているシャルロットが見えた。

「な!？」

「ごめんね鈴。先に行かせてもらおうよ。」

「すまん、これも戦いだ。」

最初からシャルロットが乗ることを前提にしたスラスター位置。

最初から合同で、走ることを決めていたのだ。

ラウラとシャルロットの機体を繋ぐジョイントが軋む音を立てながらも、その機体同士を強固に繋ぐ。

そしてラウラのスラスターとシャルロットのスラスターが同時に火を噴く。

たった3機のスラスターでも、機体を十分に加速させる。

例え動かす機体が増えようと、少しスピードが落ちる程度である。

それが6機のスラスターがあるのだ、加速力は通常とは段違いだ。

専用チューンしたとは言え訓練機の筈では、流石に加速力が違いすぎた。

容易に抜き去り、シャルロットとラウラは簪の後ろについた。

そこで、上空から飛来した機体がトップを走っていたシャルロット、ラウラ、そして簪を撃ち抜く。

なんとかぎりぎり回避、それを見る。
そこには藍色の機体…

「サイレント……ゼフィルス…」

突然の乱入者は、ニヤリと口を歪めたのだった。

—————△—————

「3人共大丈夫！」

「ああ、問題は無い。問題は無いが…」

「流石にこの状況は厳しいよ…」

「死ぬかと思った…」

普段とあまり変わらないラウラとシャルロットとは違い、武装の類いを何一つ積んでいない簪は、避けることが出来てホツとしていた。

そしてすぐさま後ろから追いつき、駆け寄った鈴。

その後ろから箒も追いつき、侵入者を睨み付ける。

「あれは…」

「あれはサイレント・ゼフィールス、林間学校の時に現れた亡国企業よ。」

「あれがそうなのか！」

次の瞬間、BTライフルの攻撃が降り注いだ。

その攻撃に反応したシャルロットが、盾を構え防ぐ。

最初からラウラとの並走を想定していたため、降ろした武装は何も無い。

そもそもがラウラの背に乗る事が前提の為、スラストターの増設時に負担は一切無い。降ろす必要のある武装は、何一つ無いのだ。

「…くっ…キツイ！」

だがシャルロットの盾は、実弾を防ぐことを想定している。

実弾防御用の盾では、完全に…安全にレーザーを防ぐことは厳しいのだ。

大盾の為なんとか防げているが、徐々に挟まれていつている。

貫通するのも時間の問題である。

「一夏もセシリアも居ない今、これを凌ぎきる自信は僕にはないよ！」

「もう少しだけ耐えてくれシャルロット、この騒ぎだ、必ず2人が応援に来る。」
 シャルロットの盾に手を重ね、自身の武装である『アクティフ・イナシャル キャンセラA I C』を盾の表面上に展開する。

だがA I Cは、そもそもが実弾防御用の非実体フィールドなのだ。
 エネルギー体であるレーザーを止める為には出来ていない。
 かなり防御力は落ちるが、完全に無いよりはましだ。

「シャルロット、ラウラ！あたしが突っ込むわ！援護は任せたー！」

「ああ、任せろ！今日の私は…一味違うぞー！」

そう言っつてシャルロットの盾から少し外れたラウラは、その両肩に2つの装備を展開する。

普段ならその肩に展開されるのは大口径の砲撃武器、大型レールカノンだ。
 だが今回展開されたのは、2門の大型のガトリングだった。

「我がM61バルカンは、今日は血に飢えているぞ!!」

回転するその砲身から、20ミリの弾丸が高速発射される。

M61バルカン。

毎分6000発を誇るその銃は、対空機関砲としても有用性がある20×102ミリ弾を使用する。

そしてその弾丸を高速発射すると言うことは、その威力は桁違いだ。

「くっ！少しはやるようだが、無駄だ！」

直撃する瞬間ビームの傘が開き、その攻撃を溶かした。

ビームの持つその熱量により、金属であるその銃弾は容易に溶かされる。

「タッチ！やはりシールドビット、凰！」

「おーけ！」

鈴が連結した青龍刀を投げ、残った一門の衝撃砲をぶちかました。

「ふっ、茶番だな。」

飛来するその全ての攻撃が、シールドビットにより弾かれた。

「亡国企業！貴様、何が目的だ！」

「言っただろう、茶番だと。だが貴様達もよくやる。」

「………何？」

サイレントゼフィルスの操縦者、Mは口を開いた。

そして信じがたい事を…彼女達5人には到底信じる事が出来ない事を口に出した。

「今頃、お前らが期待しているやつらは肉片になっているだろうな。」

「……え？」

Mが口にした言葉に、5人共に啞然とする。

人間は、認識したくない事を認識するのは脳の思考回路が少し遅れる。

「分からないか？織斑一夏とセシリアオルコットは今頃、届けさせた爆弾で肉片になっているだろうさ。」

「嘘だ。嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!!」

「シャルロット！落ち着け、信じるんじゃない!!」

Mの語る事が真実だろうと偽りだろうと、その言葉はシャルロットの心の拠り所を振り取った。

「シャルロット!」

「嘘だあああああ
!!!!!!」

そこに響いたのは、シャルロットの悲痛な叫びだけだった。

第三話

「…痛ッ!？」

全身を強打した痛みで目を覚ましたセシリア。

爆弾で吹き飛び背中から叩き付けられた為、その痛みは半端では無かった。だが、頬を伝うその水滴に意識が向く。

自身に覆い被さるように倒れている一夏が、セシリアの目に入った。

「ゴフツ……気が…付いた、か…セシル。」

「アイン!？そ、その怪我!」

その紅い水滴は、一夏が口から垂らしている血だった。

そしてセシリアは、妙に腹部が濡れている事に気付く。

徐に視線を動かすと、一夏の腹部を貫いている鉄筋から血が滴り落ちて水溜まりを

作っていた。

「アイン！今すぐに手当てをー！」

「セシル…はあ…はあ…傷を焼き塞ぐ…その金庫から…バーナーと鉄棒を…ッ！」

「ですが！」

「早く！迷ってる…暇は無いッ。」

その鬼気迫る状況に、セシリアは一夏の下から慎重に退き金庫を開ける。爆発するまえから金庫内に物を仕舞っていたため、鍵は掛かっていない。

故に早急にそれを出す。

バーナーで加熱し始めたそれを見て、一夏も無理矢理動き始める。

未だ血が出るその体を仰向けにし、自身の腹部を貫いているその鉄筋を握り締める。

「ユリ。こいつを…抜いたら…生体再生…ツ機能を、フル稼働…させろ。」

『OK, 了解 but しかし… まだ in た this す wound の it, で s は time 時…』

「焼いて…ツ塞ぐ！セシルッ！」

「はい！アイン、何時でも。」

その言葉を聞いた一夏は、持てる力の全てを使ってその棒を引き抜いた。

形容し難い激痛が襲い、その身から温もりが流れ出す。

「やれッ！」

刹那、そこから肉の焼けた匂いと血が蒸発する音が響く。

200度を超えた鉄棒を、無理矢理体に…しかも傷口に押し当ててるのだ。当然計り知れない激痛が駆け巡る。

「ツ!?ぐつうううッ!!」

傷口とその周辺を焼きながら、それは塞がる。

だがそれは、かなり血を失っている一夏の体には途轍もないダメージになる。

「アイン！終わりました、これで止血は何とかできました。」

「はあ…はあ…ああ…ッありがとうセシル。」

腹部を押さえて、一夏はそう答える。

あくまで塞いだだけのため、痛みは消えていない。

「くツ、セシル。多分だが…アリーナの方で騒ぎが起こっている筈だ…」

「それって…ファントムタスク…亡国企業!?!」

「ああ、この…爆発も恐らくはな。」

こんな大規模な爆発を起こせる爆弾を調達できる組織など限られてくる、まして軍部だとしても爆発物を取り扱うのには相当な決まりがあるのだ。

こう安々と使えるとなれば、テロ組織位しか無い。

「俺も後から追いつく、セシルはあいつらの援護に向かってくれ。恐らく、林間学校の時に見たあいつが居るはずだ。」

「…!?サイレント・ゼフィルス!」

「あの機体は、あんな奴が使った良いモノじゃない。だから、頼む。」

「ええ。ですが、アイン?」

セシリアはちょうど良い感じに吹き抜けとなったその壁に向かって立ち、『ブルー・ティアーズ』を展開する。

「絶対安静ですからね?」

「ああ、今は治すさ。」

その返答を聞き、セシリアはアリーナへと飛び去った。

『Master. Please be at rest for at least

t 15 minutes. 《マスター。最低でも15分は安静にしてください。》
「ああ。流石に分かってるよ。」

—————△—————

「流石はエムね。あれだけの人数を相手取って、陽動すら完璧に熟すなんて。」
サングラス越しにエムを眺めながら、金髪の女性は楽しそうに目を細めた。

「しかし、本当にたいしたことないわね。これなら簡単に—————」
「簡単にオータムを探せる?」

「っ!?!」

突然の声に、女性は咄嗟に振り向く。
そこに居たのは…

「更識…楯無！」

「はああい。フアントム・タスク亡国企業の土砂降りさん。」

I S 学園生徒会長。

ロシア代表更識楯無。

学園のトップ、生徒全員を統括する立場にある。

「さっきの言葉はどういう意味かしら？」

「あら、わからないのね。まあ良いわ、どつちにしろオータムは地下の特別監察室に居るのだし。」

「…どういうつもり？ 私に教えるなんて。」

楯無の意図を図る事が出来ず、スコールは聞き返す。

その言葉に楯無は、苦笑いを浮かべながら口を開いた。

「別に深い意図はないわ。そこにオータムが居るのは事実だし。だけどーーー」

スコールはそのまま、楯無の言葉を聞かずに走りだした。

その続く言葉を、あと一秒待てば聞けたと言うのに。

「オータムが生きている保証も、貴女が無事辿り着ける保証も無いのだけれどね。何せ

あそこには……………」

狂人が居るのだから。

————△————

「くっ！ 嵐！ 援護してくれ！」

「おけえ！ 任せて。」

たった1つの依り代を砕かれ、戦意も自我も何もかも崩壊したシャルロット。

そのシャルロットを守るように展開された盾に力を入れながら、全力でA I Cを展開するラウラ。

囁言のように呟くシャルロットと、エネルギーを全振りした簪。

戦えない2人を庇いながらの戦闘により、ラウラも鈴も余裕が無い。

訓練機である簪も、打鉄に搭載された盾をラウラの周囲に展開している。

だが2人の盾は実弾防御用の物であり、現在受けている攻撃はレーザー。つまりエネ

ルギー防御が高くなければいけない。

そのため、段々と盾を削られていつている。

「ハッ！その盾ももう保つまい。役立たず等捨て置けば良いものを、何時までも庇っているからそうなるのだ。」

「黙れ！例えこの身が朽ちようとも、友を…戦友を見捨てる選択肢等、この私にありはしないっ!!」

「…フン。その言葉を、貴様の遺言にしてやろう。」

エムの持つ狙撃銃『スターブレイカー』から、収束されたレーザーが発射される。

先程まで受けていたものより強力な光線は、盾に当たれば容易に溶解させてしまうだろう。

だが…

『よく言いましたわ、それでこそラウラさんですわね。』

「っ!?この声は!」

次の瞬間、ラウラへと迫るレーザーを呑み込みながら強力な光線がエムへと向かった。

「ツチ！貴様、何故生きている！」

「セシリア!!」

アリーナのシールドに空いた大きな穴から、現在もチャージを続ける砲身を構えるセシリアがそこに居た。

『さあ舞い踊れブルーティアーズ。この学園に攻め入った事、骨の髄まで後悔させてあげましょう。』

セシリアの掛け声と共に、全12機のB I Tが一斉にサイレント・ゼフィルスを取り囲む。

そして、途切れる事の無い偏向射撃がエムを襲う。

何処へ逃げようとも必ず全方位から来るレーザーに、エムは攻撃を止め回避に専念せざるを得ない。

そんななかセシリアは…

『シャルロット・デュノア!!』

「っ!!」

『私はこの通り生きてここに居ます。ですが、貴女は何をしているのです?』
かなり低めの声で、シャルロットへと呼び掛けた。

見つめるその目は期待を含んでおり、絶対出来るという意思を訴えていた。

『立ちなさい!シャルロット・デユノア、貴女はそんなことでへこたれる人では無い筈です。目の前に敵が居るのに、貴女はそうやって塞ぎ込むつもりですか!』

「……………違う!!僕は……………こんなところで立ち止まったりしない!こんなところで…負けるもんか!!!」

再び燃え上がった炎をその眼に宿し、シャルロットは力強く立ち上がった。

「援護するよラウラ!」

「ああ、待つていたぞシャルロット!」

ラウラと並んだシャルロットは、新たに盾を展開して地面に突き刺す。

そしてその盾から砲身だけを出し、ラウラは

対空砲火を開始する。

セシリアの無限に続く偏向射撃、そしてラウラの地上からの対空砲火。

レーザーと実弾が入り乱れながら、エムに襲い掛かる。

「ツチ！厄介な。こちらエム、スコール応答しろ。」

『……………』

「スコール？」

避けることに専念している為攻撃は出来ないが、通話する余裕はあった。

だが、回線に入ってくるのは雑音だけだった。

その事に疑問に思い、少しだけ耳を澄ませる。

そして聞こえてきたものに、エムは驚愕した。

『……………ギヤハハハハ、どうした！その程度か？亡国企業う！！』

フロントム・タスク

『……………くっ！クソ、なんて力…』

何せ、スコールが向かったところだから聞こえるはずのない戦闘音が、微かに聞こえてきたのだから。

……………△……………

楯無の前から去ったスコールは、大急ぎで地下5階特別監察室へと向かっていた。電子警備の類は多々あったのだが、警備員は誰一人として居なかった。それ故スコールが止まるのは、電子ロックが掛かったドアの前だけであった。スコールに掛ければ電子ロック等、1分少々で解錠出来る。故に然したる障害では無く、スコールが進む速度は変わらなかった。

そして1つの扉の前へと辿り着く。

特別監察室と名が入った、重厚な扉。

電子ロック、そして2つの鍵穴が付いている。

スコールにとってみれば、簡単すぎる程の鍵である。

ものの数分で解錠すると、その分厚い扉を開ける。

すると長い廊下が目に入る。

目標までもう間もなく、スコールは息が切れるのもお構いなしに走った。

そして……

—————△—————

「主任、こちらを。篠ノ之束監修、完全オリジナルのIS『ハングドマン』^{品された男}です。バトルライフルとショットガンを装備、背中にはお望み通りマスブレードを搭載しています。ジェネレーターには熱反射式水素プラズマ電池を使用、各部に取り付けてあるブースターも、既存の物とは大幅に性能アップを図りました。」

「良いねえ、最高だよキャロリン！」

IS学園地下に設けられた特別監察室。

その部屋の前のただただ広い空間にて、キャロルと主任は居た。

特別監察室と名は付いているが要は牢屋であるその部屋を、2人は守護するように立っていた。

「それにしても、あの兎も良い仕事するね。俺の注文通りの物を作れるとは。」

「そこは賞賛に値するかと。ですがあまり褒めすぎないよう、ああいうタイプは褒める

と付け上がりますから。」

「ま、人格破綻者だし仕方ないよねギャハハハハ。」

お前がそれを言うか、と言わんばかりの台詞を言う主任。

その主任の隣には、I S が置かれている。

種別としては重量二脚。

現在世にあるI S とは一線を期す、全身装甲であつた。

そもそもとして、I S には2種類ある。

一部を守る部分装甲と、名の通り全身装甲。

その明確な違いはコストという面もあるが、一番の理由は守る必要が無い為である。

I S には必ずS E と絶対防御と言う物が存在する。

装甲の部分が破損するが生身の部分は、当たればS E を消費するだけである。

そしてS E が尽きれば、絶対防御が発動する。

つまりこの2つがあるため、生身に損傷などあり得ないのだ。

故に全身装甲などの機体でも採用されていない。

そんな機体が、この部屋にはあつた。

そんな中、そこに息を切らしながら入ってきた1人の金髪の女性。

中央に立っていた2人を見て、ただただ驚愕を露わにする。

「な!?!お前達はっ!」

その女性を見て主任は狂ったように笑みを浮かべ、手を広げながらISを展開するとこう言い放った。

「さあ亡国企業、見せてみな——」

お前達の力をさ。